

目次

序章 問題の所在.....	1
1. 問題関心と研究目的	
2. 移民研究の課題：トランスナショナル・アイデンティティ論を中心に	
3. 資料と論文の構成	
第1章 近代移民としてのハワイ移民.....	20
1. 前史：20世紀転換期の朝鮮とアメリカ	
2. 移民制度の成立と移民労働者	
3. 移民制度の廃止とその後の渡航制限	
第2章 「コリアン」の誕生：アイデンティティ形成と集団編成.....	44
1. 「コリアン」キャンプからの出発	
2. ハワイ労働市場の変革の中で	
3. 集団再編：キリスト教会の奨励	
第3章 ナショナル・アイデンティティの発展：祖国独立運動の発展と凋落.....	67
1. 1910年以前：サンフランシスコの祖国独立運動	
2. ハワイにおける祖国独立運動の発展と凋落	
第4章 トランスナショナル・アイデンティティの発展：祖国とアメリカの狭間を超えて.....	90
1. 出稼ぎ移民から定住移民へ(1)：砂糖プランテーションから洗濯屋へ	
2. 出稼ぎ移民から定住移民へ(2)：写真花嫁と子供の教育問題	
3. 民族間関係の変化とアイデンティティの再構築	
第5章 「アメリカ人」としてのアイデンティティへ：第二次大戦とアメリカ国民化.....	132
1. ハワイ戒厳令下で「日本人／敵性外国人」に分類されて	
2. アメリカ国民化とエスニック集団化	
終章 結論	147
1. ハワイ・コリア系移民のアイデンティティ形成過程〈1903-1945〉	
2. 移民研究の課題と可能性：トランスナショナル・アイデンティティ論からの問題提起	
補論 戦後の移民史をめぐる集合的記憶：コリアン・ディアスポラの歴史として	160
文献目録	169

表／写真一覧

表 1	非熟練労働／専門職の占める割合(抜粋).....	93
表 2	コリア系移民の居住地と都市部が占める割合(1930年).....	94
表 3	コリア系移民の年齢構成比(男／女).....	106
表 4	語学学校の推移と増加率(コリア系・中国系・日系).....	110
表 5	学生数の推移(1906-1934年).....	112
写真 1	大韓国民軍団がホノルルで行った軍事行進.....	75
写真 2	戦中のコリア系移民が「日本人」と間違われないよう着用したバッジ.....	137
写真 3	「オリジナル移民」という形で旧移民の存在がアピールされた時のパンフレットの一部分.....	161
写真 4	100周年移民記念祭パレードの様子.....	165
写真 5	韓国独立文化院.....	166

博士論文

ハワイ・コリア系移民のアイデンティティに関する
歴史社会学的研究〈1903-1945〉
—トランスナショナル・アイデンティティの構築—

李 里花

一橋大学大学院社会学研究科
SD0028

NATIONAL AND TRANSNATIONAL IDENTITY
OF KOREANS IN HAWAII, 1903-1945

LEE, Rika Rihwa

Doctoral Dissertation
Graduate School of Social Sciences
Hitotsubashi University

序章 問題の所在

1. 問題関心と研究目的¹

アメリカ合衆国の移民は、定住化とアメリカ化を通して、「アメリカ人」および「〇〇系アメリカ人」になっていく。そのため移民のアイデンティティに関する研究は、「アメリカ人」としてのナショナルなアイデンティティを獲得していく過程か、「〇〇系」としてのエスニックなアイデンティティを獲得していく過程が主流となってきた。しかしこうした研究が中心となってしまったが故に、「アメリカ人」としてのアイデンティティを形成しながら、同時に祖国のナショナル・アイデンティティを活発化させていく移民や、ディアスポラの志向をもった移民など、アメリカのナショナルな枠組みを超えた志向性をあわせもつもの、すなわちトランスナショナル・アイデンティティへの視点が抜け落ちることが多かった。それでは移民のアイデンティティは、どのようにしてトランスナショナルな様相を呈するに至り、それはナショナルな枠組とどのような関係にあるのだろうか。本論文は、20世紀前半に朝鮮半島から出稼ぎ移民としてハワイに渡ったコリア系移民の集団編成とアイデンティティ形成に注目し、そのアイデンティティがナショナル／トランスナショナルな様相を呈していく過程を検討する。

本論文が事例とするコリア系移民は、ウェイン・パターソン（2000年）が「東アジアを含め様々な地域からアメリカにやってきた移民に関する記述は多く、中でも日系と中国系移民の研究は多く進められてきたが、コリアン移民については何が起こったのか体系的な研究が一つもない」と指摘したように、これまで研究がほとんど行われてこなかった研究領域である²。先行研究が少ない理由は二つある。一つは、人口が少なく、その存在が広く知られていないためである。コリア系移民は、現在120万人を超え、アジア系移民の中でも4番目に人口が多い集団である（2000年センサス）。しかし戦前は日系が28万人、中国系が10万人を上回っていたのに対して、コリア系移民は1万人にも満たなかった³。また移民の80%がハワイに居住していたことからアメリカ本土で可視化される存在ではなく、ハワイにおいても

37.9%を日系が、6.8%を中国系が占めていたのに対して、 코리아系は 1.6%を構成するに過ぎなかった⁴。

もう一つは、 코리아系移民が「きわめて例外的な集団」であると認識されてきたため、研究対象としてこれまでほとんど取り上げられてこなかったからである⁵。戦前、「オリエントのアイリッシュ」といわれるほど激しい祖国独立運動を展開したことで知られる 코리아系移民は、他の移民と異なり、アメリカ志向ではなく、祖国志向が強い集団だと思われていた⁶。アメリカニゼーションのパラダイムが席卷した当時、ポーランド系移民研究でトーマスとヅナイエニツキー（1918年）が示した通り、アメリカニゼーションは移民のアメリカ文化や価値を取り入れる段階と自分たちの伝統や規範を捨てる段階によって達成されるものだと考えられ、このプロセスは移民にとって必然的で進歩的なプロセスであると理解されていた⁷。そのため移民の祖国志向は、アメリカニゼーションの流れと逆行するものだと見なされた⁸。

さらに場所がハワイだったことも、 코리아系が例外的な集団であるという認識を増長させることとなった。当時ハワイは「太平洋のメルティング・ポット」と呼ばれた地域であった。シカゴ学派のロバート・E・パーク（1926年）は、ハワイを人種民族研究の「フロンティア」と呼び、「ハワイ諸島では、太平洋のあらゆる人種がどこよりも自由な形で出会い交じり合っている。そして新しい人々が生まれた」と述べたように、アメリカニゼーションによる同化がもっとも進んだ地域として注目されていた⁹。そのためシカゴ学派でハワイ研究の第一人者となったロマンズ・C・アダムス（1937年）が「古い国へのナショナルな感情」を抱いている集団は「ハワイにおいては 코리아系移民にしか見るできないだろう」と述べたように、 코리아系移民のアイデンティティは否定的に捉えられ、その内実が明らかにされることがほとんどなかったのである¹⁰。

この 코리아系に対する「例外的な集団」という見方は、戦後のエスニシティ研究においても続いた¹¹。戦後の移民史研究が進められたエスニシティ研究では、アメリカが複数の文化によって構成される多元社会であるという考えの下、移民は一元的な文化に同化していくのではなく、個別文化をもったエスニック集団の成員であると考えられるようになった。これにより、移民の帰属意識はエスニック・アイデ

ンティティという枠組で記述／分析されることになったが、戦前のコリアン移民が示した祖国志向は、エスニック・アイデンティティという枠組では捉えきれないナショナリズムの様相を呈したものであり、さらにそれはアメリカのナショナルなものとは一線を画すものであった。そのため近年になってウェイン・パターソン(2000年)がコリア系移民の祖国独立運動が移民社会のすべてを物語るものではないけれどもそれが移民社会の中心にあったと指摘し、ハワイ大学のヨンホ・チェ(2007年)はそうした運動に傾倒していったことが20世紀前半のコリア系移民を「特殊」な状況に追い込むことになったと論じたものの、アメリカ外部に向かった志向についてはほとんど言及されず、それが移民の意識にどう影響したのか／しなかったのかについてはこれまで十分に検討されてこなかった¹²。

しかし近年になって、ハワイのコリア系移民の歴史は、全く異なる文脈の中で注目を浴びるようになった。ハワイのコリア系移民は、2003年に移民100周年を迎えたが、これを記念して開催された一連の記念式典で次のような語りを展開した。「1903年1月13日はすべてのコリアンにとって象徴的な日である。(略)この日はコリアンがグローバル・コミュニティの一員として誕生した日を印す」¹³。またこの時出席した韓国政府の代表者も「我々の祖先を高く評価する日がやってきた。今日、世界中に300万人の誇り高きコリアンたちが存在する」¹⁴と、コリアンをルーツとする韓国および世界のコリアン移民の「コリアン・アイデンティティ」を高らかに謳った。すなわちハワイのコリアン移民の歴史は、ハワイというローカルな地域にとどまらず、世界に広がるコリアン・ディアスポラの歴史として新たな息吹が吹き込まれたのだった。

但し、ここで語られた歴史物語の蓋を開けてみると、そこには二つの物語が存在した。一つは、「最初にアメリカの地を踏んだ」開拓者の歴史であり、そのパイオニア精神を称える歴史物語である。この「開拓者」の歴史を賞賛する物語の語り口は、祖先がたどってきた歴史を話し合い、共通の公式の記憶を創りだすときにたびたび登場する移民の論理であり、「移民国家」アメリカを支える語り口である¹⁵。もう一つは、祖国解放と独立に捧げた愛国者の歴史と、その愛国心を称えた語りである。この語りは、ハワイで盛り上がった祖国独立運動の歴史を強調するもので、コリア

系移民も「韓国人」と同じように祖国解放を願った人々であり、かれらは韓国のナショナル・ヒストリーの一部であることを強く印象づけるものとなった。すなわち100周年祭を機にコリアン・ディアスポラという新たなアイデンティティが提示されたが、その内実は韓国とアメリカの二つのナショナルな論理に一体化した二つの物語によって構成されていたのである。

このようなコリア系移民史をめぐる状況—韓国とアメリカという二つのナショナル・ヒストリーの延長線上でコリアン・ディアスポラの物語が語られる一方で、その歴史についての実証的研究がこれまでほとんど行われていない状況—を踏まえ、本論文はコリア系移民に関する歴史社会学的研究を行う¹⁶。特に、移民のアイデンティティについて、それがアメリカというナショナルな様相を呈していく過程のみならず、アメリカ外部にも向かったトランスナショナルな様相を呈していく過程にも注目する。そしてこの成果にもとづき、コリア系移民史研究とその背景にあるアメリカの移民研究の問題を提示し、移民をめぐるナショナルな枠組の問題と、ナショナルな枠組に条件づけられた近代という時代が抱えた課題を検討する。

2. 移民研究の課題：トランスナショナル・アイデンティティ論を中心に¹⁷

グローバリゼーションによるヒトやモノの流動化が加速し、既存の国民国家体制が前提としてきた国民や国家の枠組みが崩れ¹⁸、「ポストナショナルな時代」¹⁹の到来が叫ばれる現在、社会科学の分野では戦後の学術的研究を支えてきた次の考え方が問題化した²⁰。それは人を一つの国家と一つのナショナル・アイデンティティに結びつけてきた一国主義的観点にもとづくナショナリズム概念である²¹。そしてこれに対する批判は、例えば歴史研究の分野では歴史的記述がナショナル・ヒストリーという通史的叙述と化してきたことへの批判として高まったように、ナショナルな境界線にもとづいてこれまで研究を進めてきた社会科学的研究の問題を浮き彫りにするものとなった²²。

そして既存のナショナルな境界を相対化する研究として、移民研究の分野では国際的移動を繰り返す移民のアイデンティティに関する研究が発展していった²³。特に最初に注目が集まったのが、アイワ・オング（1999年）のフレキシブル・シティ

ズンシップ論である²⁴。オングの議論は、デイビッド・ハーベイ（1989年）の「フレキシブルな蓄積体制」論にもとづいている²⁵。ハーベイは、旧来のフォード式大量生産・大量消費を前提とした資本主義体制が1970年代の景気後退と1980年代初のデフレーションによって再編されていく中で、フレキシビリティとモビリティを基盤とした新しい資本主義体制（＝後期資本主義）が形成されていることを指摘した。ここでいうフレキシビリティとは、例えば「先進資本主義諸国から新興の産業化する諸国への移行や、あるいは熟練製造業から熟練を要さないサービス業への急速な移行などによって」引き起こされた労働市場、生産物、消費パターンの変化などに象徴される「フレキシブルな蓄積体制」のことをいう²⁶。オングは、このハーベイの後期資本主義体制の議論をもとに、その中で人々がどのような文化的意味合いを見出しているのかという点に注目した。そして中国系アメリカ人がアメリカと香港の二つのパスポートをもって両国の間を往来している事例から、移動を繰り返す中で移民が単純に市民権を使い分けるだけではなく、複数のアイデンティティをもつようになったことを指摘し、フレキシブル・シティズンシップ論を展開した。

しかし物理的な移動が行われない状況においても、移民のアイデンティティがトランスナショナルな様相を呈していることを指摘した研究も発表されるようになった。それが遠隔地ナショナリズム論である。遠隔地ナショナリズム論は、移民が移住後も「祖国(homeland)」という「想像上の故郷（イマージンド・ハイマート）」の政治活動に遠隔地から参加していることと、その背景に移民の「祖国のアイデンティティを基にした政治活動に関わりたい」と志向性があることを指摘した²⁷。そしてこうした移民の志向性を、シラーとフーロン（2001年）は、『故郷(home)』を訪問することがなくても自分の祖先の地とのつながりを頭の中で持ち続け（略）祖国が世界の中で国としてきちんと存続していることを確認することはナショナリズムの一つである」と位置づけた²⁸。すなわち遠隔地ナショナリズムの議論は、アンダーソン(1993年)が「どんな人でもある国に生涯居住すれば、その国を祖国あるいは母国と思い、国民感情を自然に抱くようになるのが当たり前という古い考えを根底からくつがえしてきたとあってよい」と述べたように、移民をホスト国との関係に限定して考えてきた移民研究の問題を指摘するものとなった（以下、遠隔地ナ

ショナリズムの議論を含め祖国志向のナショナリズムを「祖国ナショナリズム」という) 29。

これらの議論が示す重要な問いは、祖国というトランスナショナルなアイデンティティについてなぜ考えなければならないのか、ということである。この点をアンダーソンは、次のように説明している。ドイツのギリシア外国人労働者が、ルフトハンザのパルテノンのポスターを飾っているのは、現実の記憶を見るためではなく、「故国『ギリシア』を思い起こし、シュトゥットガルトで惨めな生活をおくることによって始めて感じる事の出来た、ギリシア人としての「エスニシティ」を、シュトゥットガルトで維持し続けるため」である³⁰。すなわち移民が祖国を想起するという営為は、過去の「出身地域の記憶」を想起するだけではなく、現在のアイデンティティを構築／再構築する営為である³¹。そのため日系移民研究の東栄一郎（2007年）が、移民研究の課題を「どのように二つの国民国家の支配力と交渉し、またどのように二国間の狭間で自らの二重性と同時的所属の正当性を主張したかを理解すること」³²と述べたように、ホスト国か祖国かという二項対立的な視点ではなく、ホスト国と祖国という二つのナショナリズムを見据えた視座が求められている（尚、東はトランスナショナリズムをナショナリズムの二重性という意味に限定するため「間・国家パラダイム」とこれと呼んでいる）³³。

このように移民のトランスナショナルなアイデンティティをめぐる議論は、ナショナリズムの二重性に関する議論として発展してきた／いるが、これに対し祖上にのぼらない議論も存在する。それは移民のアイデンティティが、ホスト国の外部に向かっているが、それが必ずしも祖国に向かっているわけではない、というケースをどう扱うかという議論である（本論文はこの祖国以外に向かった非ナショナルなトランスナショナルな志向を「超国家」という。祖国に向かった志向については、前例にならない「間国家」という）。

こうした事例をこれまで多く扱ってきたのが、ディアスポラ研究である。ディアスポラとは、元々、ユダヤ系の人々の亡命という経験や記憶によって紡ぎ出される集団意識、並びにネットワークを意味していたが、90年代のカルチュラル・スタディーズの発展とともに、国境を超えて離散する民族集団や転地(displacement)とい

う経験が集団の志向性やアイデンティティを指す鍵概念となった。転地について、ジェームス・クリフォード（1997年）は「<ディアスポラ>という用語は、トランスナショナリティや移動を表すだけでなく、ローカルなものを、転地という歴史的な文脈のなかで、ほかとは区別されるコミュニティとして定義しようとする政治闘争の記号である」と説明している。そのためディアスポラは戦争や帝国主義などによって祖国を追われることになった人々の経験を指すこともあるが、祖国を離れた理由とは別に、人々の移住先での「ホスト国の時間／空間の外部に歴史的根源と運命をもつ<民族（ピープル）>であるという感覚」を示すものとなった³⁴。すなわちディアスポラとは、国境を越えた移動の中で獲得された新たな主体性や、ホスト国だけではないところに歴史的な根源と運命の探求を志向する人々の意識やアイデンティティを示す概念となった。だが、移民研究にとって重要な点は、祖国に限定しない形での移民のトランスナショナルな（＝超国家的）志向もまた存在することが示されたことである。

それでは、祖国に向けられた間国家的トランスナショナルな志向と、祖国以外に向けられた超国家的トランスナショナルな志向は、どのような条件の下で生成され、それはアメリカのナショナルな志向とどう連動した／しなかったのだろうか。本論文では、この課題についてコリア系移民を事例に検証する。コリア系移民は、祖国独立運動の発展によって祖国志向を強めた集団であるが、実は祖国運動が凋落した後に「国がない」という超国家的トランスナショナルなアイデンティティも構築し、その後第二次大戦のアメリカ国民化の流れの中で、アメリカのナショナルな枠組に包摂されていった集団である。すなわち、それは移民国家アメリカへの包摂の不可避性を前提にしつつ、ナショナルなものと矛盾するものと思われるトランスナショナルな志向性が、どのような論理で、アメリカのナショナル・アイデンティティと接合したのかを検証することを可能とする事例である。

尚、本論文では次の二つの視点に留意して研究を行う。一つは、祖国とホスト国を二項対立的に捉えたり一方のナショナルな枠組を優先視したりすることを回避する視点である。これまでの移民研究では、祖国よりもホスト国の枠組が優先視されてきたという問題を抱えてきた。この点についてガブリエル・シェファー（2003

年)はホスト国以外のナショナルなものを取り上げることが「好まれなかった」風潮があったこと、そしてこの背景には、移民の祖国を扱った研究が移民先を扱った研究よりも「深く検討し、きちんと調査する価値がないものとして扱われてきた」という学問的問題もあったが、「20世紀後半まで、(略)移民集団の成員たちはそのエスノナショナルな起源を隠す努力をしてきた」という当事者間における問題もあると指摘している³⁵。本論文では、これら研究者並びに移民当事者の間にそれぞれ内包された／ている問題に囚われないように論考する。

もう一つは、アメリカと接触する境界領域に注目することによって、アメリカにおける移民の位相を明らかにする、という境界領域の「歴史経験」に重点を置いた視点である。米比関係の境界領域を生きる人々の群像から「アメリカ帝国」像を描き出した中野聡(2007年)が、アメリカ帝国に対する理解がこれまで「中心性の理解」に集中し、思想の歴史性や固有性を抽出することに集中してしまったために、自国中心主義や国民国家イデオロギーに回収されてしまった問題を指摘したように、研究を行う上で問われているのは、国民国家の相対化をいかなる方法で行うかということである³⁶。本論文はアメリカ外部に広がるトランスナショナルなアイデンティティに注目することによって、それが投影するアメリカというナショナルな枠組の問題群を浮き彫りにすることを課題とする。

以上の視点を踏まえて、本論文では、コリア系移民史研究のみならず、移民研究の領域と、その背景にあるアメリカにおけるエスニシティ研究や移民研究の問題、移民と国家の関係を研究課題として位置づけ、戦前のコリア系移民の集団編成とアイデンティティ形成に関する研究を進める。

3. 資料と論文の構成³⁷

戦前のコリア系移民についての実証的研究がこれまで十分に行われてこなかったことは先述の通りだが、中でもアイデンティティに関する研究は—それがナショナル／トランスナショナルな文脈に言及したものであるか否かに関わらず—管見の限りではほとんどない³⁸。この背景には資料的問題もある。最近になるまで戦前のコリア系移民に関する多くの資料は、独立運動の前後に発行された新聞や、独立運動

家や団体が残した手記、書簡、議事録など独立運動に関する資料であった³⁹。この他にハワイ砂糖耕主組合（HSPA）やメソジスト教団などのキリスト教会の史料もあるが、新聞や機関紙などの1次史料はほとんど残っていないのが現状だった。そのため多くの研究は、バーニス・B・H・キム（1937年）の修士論文「ハワイのコリアン(The Koreans in Hawaii)」を参考にしてきた⁴⁰。この論文は、コリア系移民二世が、1932年から1936年まで行った移民60人（50家族）へのインタビュー調査をもとに書いた論文である。

こうした中で、パターソン（2000年）はハワイ大学のロマンズ・アダムス社会調査研究所コレクション（RASRL）に残されたハワイ大学の社会学部の学生が書いたペーパー（Student Paper）を発見した⁴¹。ハワイ大学の社会学部は、シカゴ大学の社会学教室をモデルに設立された学部で、シカゴ大学が学生にエスノグラフィーを多く書かせたように、ハワイ大学も学生に自分の民族集団についてのエスノグラフィーを書かせた。その結果コリア系移民については、日系や中国系に比べると遥かに少ない量であるが、コリア系移民の第二世代が第一世代にインタビューして書いたペーパーが残されることとなった（1940年代前後はハワイ大学全体で100人前後が在籍していた）。パターソンは、この資料をもとに集団内の世代間格差や対立を描きだすことに成功した。

だがパターソンの研究が発表されてから、さらに多くの資料が発見されたことで状況が一変する。きっかけとなったのは、2003年に開催された移民100周年祭だった⁴²。移民100周年祭の実行委員会はコリア系移民の歴史を広く知らせる事業に力をいれ、ビデオ教材やドキュメンタリー映画を製作し、写真集や資料集を出版した。この時実行委員会はコリア系移民に資料提供を呼びかけ、これに答える形で個人や団体が当時の写真やパスポート、新聞の切り抜き、機関紙などを寄贈したため、これまで入手困難であったさまざまな資料が集められることとなった。現在これらの資料は、ハワイ大学コリアン研究センターおよび当時の移民100周年記念祭副委員長ドゥッキー・L・ムラバヤシが所蔵している（これら資料を使ったムラバヤシの報告書（ハワイ大学所蔵／未刊行）は2次文献として貴重な情報を提供している）⁴³。

また 100 周年祭の前後、コリア系 2 世へのインタビュー調査も多く行われた。中でも、ロバータ・W・S・チャンのビデオインタビューは、コリア系二世のオーラル・ヒストリーを長時間かけて丁寧に行ったもので、当時の移民社会の事情だけではなく、民族間関係やアイデンティティについての貴重な情報を含むものとなった（52 人へのインタビュー、ビデオテープ 23 本）⁴⁴。このビデオテープは、テープ起こし等が行われることなく、ハワイ大学コリアン研究センターに保管されてきた。また デイジー・チュン・ロードスによる移民二世のオーラル・ヒストリーは、移住過程や職業、家族関係や教会活動等の移民社会の動きについて内在的に迫ることができる多くの貴重な資料を含む（34 人へのインタビュー、カセットテープ 31 本）⁴⁵。インタビューの一部は本として出版されているが、本に掲載されなかった多くの口頭データが、カセットテープとしてハワイ大学に保管されている⁴⁶。

本論文では、近年入手可能となったこれらの資料 - 特にインタビュー記録 - を活用し、論ずるものである。この他に、（これまで参照されることがなかった）コリア系 2 世の学生組織の機関紙や卒業文集をハワイ大学で発見することができた。また不足箇所については、自身の留学（2002 年～2004 年）およびその後のフィールドワーク（2006 年～2010 年）中に、ワヒアワやホノルル地区のコリア教会や福祉施設等でコリア系 2 世に聞いた話を以て補った。また移民制度と独立運動については、既存の研究で使われてきた資料の他に、外務省外交資料館の日本語文書資料（統監府外交文書および書簡、在米日本領事館書簡、総督府刑務局・朝鮮情報委員会・外務省亜細亜局調査報告書）も使用することができた。これらの資料を活用することで、ハワイの独立運動の盛衰を、アメリカ本土を含めた他の在外朝鮮人社会と比べながら探ることが可能となった。以上の資料に加え、移民 100 周年祭前後に韓国で発行された李承晩やハワイの独立運動に関する資料集、移民の回顧録や自伝的小説などの 2 次文献も利用し、移民の歴史経験という視点から移民史を記述／分析する。

また戦時期については、ハワイ大学の特別コレクションに所蔵されているコリア系移民の新聞やパンフレット、インタビュー記録（Romanzo Adams Social Research Laboratory, Confidential Research Files）の他に、ハワイ大学社会学研究所の戦時調査研究所（War Research Laboratory）や士気高揚委員会（Morale

Committee)の調査報告書などの資料を利用する。また移民のアイデンティティについてはコリア系移民の新聞とローリエル・E・ユーバンクの論文を主に参照する⁴⁷。ユーバンクの論文は、開戦直後にコリア系移民にインタビューしたもので、当時の移民のナラティブを記録した資料としても価値の高い論文である。

本論文は序章、1章から5章、終章、補論で構成される。序章では本論文の問題関心と研究目的を明らかにした上で、本論文の課題に対する先行研究の位置づけと意義を確認する。次に、第1章ではコリア系移民を条件づける制度的・国際関係的文脈を概観する。そして第2章から第5章では、コリア系移民の戦前から戦中のアイデンティティ形成過程を検証する。そして最後に終章では本論文からの考察と結論を論じる。尚、本論文の課題とは別に、ハワイのコリア系移民の歴史がコリアン・ディアスポラの歴史として語られるようになった経緯を明らかにするために、補論で戦後の移民史をめぐる集合的記憶を取り上げる。

第1章から第5章までのコリア系移民のアイデンティティ形成過程についての主な内容は、次の通りである。第1章では、朝鮮におけるハワイの移民制度の成立／廃止過程を考察し、コリア系移民を条件づけた制度的・国際関係的文脈を検討する。ハワイへの移民は、国民国家体制の下で行われた朝鮮で最初の近代移民である。そのため朝鮮で歴史的に行われてきた前近代の出稼ぎ移民と異なり、国境管理や渡航許可制度、渡航証明書携帯といった近代的移民制度の下で行われた。しかしハワイへの移民制度は、日露戦争直前の冷え切った米朝関係の中で、一人の米国公使が秘密裏にハワイの砂糖産業と画策して成立させた制度であるだけでなく、当時のアメリカで違法とされていた制度であった。この章では、違法な移民制度がどのような経緯で成立し、それがコリア系移民をどう条件づけたのかを明らかにした上で、移民制度が廃止された理由と廃止後に朝鮮—ハワイ間の国境を越える移動がどのように制限されたのかを検証する。

第2章では、移民直後（1900年代）のコリア系移民が自らを「コリアン」と認識するようになったアイデンティティ形成と集団編成の過程を考察する。20世紀初頭のハワイの砂糖プランテーションは、出身地を示すカテゴリーが他のどのカテゴリーよりも優先される場所だった。これは集団間の競争意識を芽生えさせ、生産性

を高めようとした経営者の意図によってつくられたものであるが、これによって移民労働者は生活も仕事も民族ごとに振り分けられることになった。このハワイの社会経済的環境の中で、まずコリア系移民が「自分たちはコリアンである」という認識を持つようになった過程を考察する。次に「コリアン」と分類された人々がどのように同族意識を形成したのか、集団編成過程を考察する。特にコリア系移民は、キリスト教を中心とする集団を形成したことで知られる。この理由について、これまでの先行研究はコリア系移民の多くが移民以前からキリスト教徒だったためだと説明してきた⁴⁸。しかしこれらの研究は、日系や中国系移民と異なりコリア系移民がなぜキリスト教を中心とした集団を形成したのかについては説明してきたものの、何が契機となってコリア系移民が移民当初形成していた洞会組織(朝鮮の伝統的「ムラ」社会)からキリスト教会へと移行したのかについてはほとんど触れてこなかった。そのためこの章では、コリア系移民の内部的状況のみならず外部的状況—キリスト教活動を奨励しスト破りとしてコリア系移民を農場に引き止めようとした主流社会からの働きかけ—にも注目し、コリア系移民がキリスト教を中心とした集団を編成していく過程を検証する。

第3章では、自らを「コリアン」と認識するようになったコリア系移民が、ローカルな次元の「コリアン」という意識を、どのようにしてナショナルな次元の「コリアン」という意識に結びつけていったのか、移民のアイデンティティがナショナル化していく過程を考察する。「オリエントのアイリッシュ」と言われたハワイのコリア系移民は、祖国ナショナリズムが強い集団として知られた。そのためコリア系移民は、移民直後から祖国独立運動を活発に展開した集団だと思われる傾向がある。しかしハワイでは1910年代になるまで祖国独立運動はまったく盛り上がりせず、ナショナリズム(祖国ナショナリズム)も高まることがほとんどなかった。当時、運動家と一般の移民の間には、出身階層という面でもナショナリズムという面でも大きな差があった。独立運動家は朝鮮で教育を受け、「朝鮮人／韓国人」⁴⁹としての意識を強くもっていたのに対し、一般の移民は朝鮮の近代国民国家としての体制が整っていない時代に移民したため、朝鮮で教育を受ける機会に恵まれず、移民以前にナショナリズムに晒されることもなかった。しかし1910年代にハワイで祖

国独立運動が展開し、二人のナショナリストが運動の指導者としてハワイに招聘されると、コリア系移民の間で一気に祖国ナショナリズムが高まり、コリア系移民のアイデンティティはナショナルな様相を帯びていった。この章では、ハワイの独立運動が運動家らが主体となった「上」からの運動であったことと、運動家らが啓蒙する形でコリア系移民のアイデンティティをナショナル化していった状況を明らかにし、コリア系移民が独立運動を契機に、近代的発想—アイデンティティをナショナルな次元で捉える—方法を獲得していったことを論じる。

第4章では、祖国独立運動が凋落し、滞在が長期化していく中で移民のアイデンティティがどのように変化したのかに注目し、この時期のコリア系移民のアイデンティティがトランスナショナルな様相を呈するようになった過程を考察する。これまでの先行研究は、祖国独立運動に対する関心が失われた1920年代から1930年代にかけて移民の世代交代とアメリカ化が進んだことから、コリア系移民のアイデンティティが「コリアン」から「アメリカ人」へと転じたものとして捉えてきた⁵⁰。しかしこの時代に構築されたアイデンティティは、アメリカという一つのナショナルな枠組に収束せず、コリアとアメリカという二つのナショナルなアイデンティティ（間国家的トランスナショナル・アイデンティティ）を内包しながら、ナショナルな枠組を超えた超国家的トランスナショナル・アイデンティティの様相も帯びていた。それでは具体的にそのアイデンティティとはどのような考え方によって構成されていたのだろうか。まず1910年代から1930年代までのコリア系移民の経済社会的条件の変化と定住化志向の広がりを検討し、コリア系移民が移民労働者から定住移民へと転じていった過程を検証する。その上で世代交代と民族間関係の変化の中で新たなアイデンティティが希求されていく状況を描き出し、新たに構築されたアイデンティティがいかなるナショナル／トランスナショナルな世界観を内包したのかを検討する。

第5章では、第二次大戦中のアメリカ国民化の流れが、コリア系移民のアイデンティティをどう変えたのかを考察し、コリア系のアイデンティティが「アメリカ人」という一つのナショナルなアイデンティティに収斂されていく過程を明らかにする。真珠湾攻撃を受けて戒厳令が敷かれたハワイでは、「日本人」移民が「敵性外国人」

に分類されたが、ここでいう「日本人」移民の中には、朝鮮半島出身者も含まれたことから、コリア系移民も敵性外国人に範疇化されることとなった。これに対し、コリア系移民は祖国朝鮮のことを語ることによって「日本人」ではないことを主張し、自分たちが「敵性外国人」ではなく「友好的外国人」であると訴えた。しかし祖国を強調した語り口が、戦時下の戦時協力と民族調和に反する語り口だとみなされてしまい、コリア系移民の語りは「アメリカ人」としての誇りと愛国心を強調する語りへと転換せざるを得なくなった。それではコリア系としての集団の独自性をどのように訴えていったのだろうか。アメリカ国民化の流れの中で、コリア系移民のコリア系移民のナショナルな次元のアイデンティティが「アメリカ人」というアイデンティティに収斂していき、「コリアン」としてのアイデンティティはエスニック（下位集団）な次元のものへと転じていく過程を検証する。

-
- 1 本論文は、英語でいうところの「Korean Immigrants」を対象にするものであるが、「Korean Immigrants」の日本語訳として、本論文では「コリア系移民」と表記し、使用する。他の訳語として「韓国系移民」や「在米コリアン」が使われることもあるが、前者が大韓民国出身の移民に限定しかねない問題を孕み、後者が「在～」という一時的な移動を意味することから、本論文では使用しない。また、特別な場合を除き、アメリカ合衆国については「アメリカ」あるいは「米国」、朝鮮王朝(大韓帝国期含む)については「朝鮮王朝」あるいは「李氏朝鮮」、大韓民国については「韓国」、朝鮮民主主義人民共和国については「北朝鮮」などの通称を用いた。また朝鮮半島の地域や人(民族含む)としての「Korea」や「Korean」については、日本の慣例に従い、「朝鮮」と「朝鮮人」と表記した。尚、独立運動の中で使われた「韓国人／朝鮮人」をめぐる呼称の使い分けと本論文の表記については注 50 を参照。朝鮮王朝の呼称については第1章注1を参照。
 - 2 Wayne Patterson, *The Ilse: First-Generation Korean Immigrants in Hawai'i 1903-1973* (Honolulu: University of Hawai'i Press and Center for Korean Studies, University of Hawai'i, 2000), ix.
 - 3 1940年の人口。日系は285,115人、中国系は106,334人、コリア系は8,568人。Bill Ong Hing, *Making and Remaking Asian America Through Immigration Policy, 1850-1990* (Stanford: Stanford University Press, 1993), 48, 54, 66.
 - 4 1940年の人口。日系は157,905人、中国系28,774人、コリア系6,851人。Eleanor C. Nordyke, *The Peopling of Hawai'i* (Honolulu: University of Hawaii Press, 1989), 178-179.
 - 5 Romanzo C. Adams, *Interracial Marriage in Hawaii* (Monclair New Jersey: Patterson Smith, 1937), 186.
 - 6 Bernice B. H. Kim, "The Koreans in Hawaii" (MA thesis, University of Hawaii, 1937), 126.
 - 7 Emory S. Bogardus, "The Sociology of William I. Thomas", *Sociology and Social Research* 34, no. 1 (1949), 36; Thomas, William I. and Florian Znaniecki. *The Polish Peasant in Europe and America*. Reprint. Urbana: University of Chicago Press, 1984 [1918].
 - 8 ここでいう「アメリカニゼーション」とは、シカゴ学派の移民研究における同化過程のことをいう。当時のアメリカは、近代化と工業化が進められ、各地で新興工業都市が急速な発展を遂げる一方で、新たな労働力として投入された南東欧系の新移民や南部の黒人が都市部でゲットー化し、国内の移民排斥運動や人種偏見が急速に高まった時代だった。こうした時代に、社会改良主義という立場から移民の同化を論じ、移民への理解を深めたのがシカゴ大学の社会学(「シカゴ学派」)である。シカゴ学派については、次の文献を参考にした。秋元律朗『現代都市とエスニシティ:シカゴ社会学をめぐる』(早稲田大学出版部、2002年)、18-21。
 - 9 Robert E. Park, "Our Racial Frontier on the Pacific", *Survey Graphic: East by West-Our Windows on the Pacific* IX no.2, (May, 1926), 196.
 - 10 Romanzo C. Adams, *Interracial Marriage in Hawaii*, 323.
 - 11 しかし一方で、世代交代とアメリカ化が進み、1970年には世帯別収入がもっとも高いエスニック集団の一つに数えられるほど社会上昇も果たした。そのため戦後のエスニシティ研究では、コリア系移民は、日系や中国系と同じように、苦難に道を歩みながらもアメリカ化と社会上昇を成し遂げた一エスニック集団の歴史の一つとして語られるようになった。
 - 12 Patterson, *The Ilse*, 100; Yöng-Ho Ch'oe (ed.), *From the Land of Hibiscus: Koreans in Hawai'i*. (Honolulu: University of Hawai'i Press, 2007), 2.
 - 13 Donald Kim, Chair, "The Centennial of Korean Immigration Banquet Program", Centennial Committee of Korean Immigrations to the United States, Honolulu,

Hawaii, January 13, 2003, 1.

- 14 Jong Chan Lee, Korea Chair, “The Centennial of Korean Immigration Banquet Program”, 4.
- 15 ジョン・E・ボドナー(野村達郎他訳)『鎮魂と祝祭のアメリカ:歴史の記憶と愛国主義』(青木書店, 1997), 66-129.
- 16 本論文は移民の歴史に焦点を置き、そこで浮き彫りとなった歴史性をもとに概念的・理論的問題を提示する。歴史社会学の発展とその論点については次を参照した。Theda Skocpol (ed.) *Visions and Method in Historical Sociology* (Cambridge: Cambridge University Press, 1984); 南川文里『<日系アメリカ人>の歴史社会学: エスニシティ・人種・ナショナリズム』(彩流社, 2007年); Arpad Szakolczai, *Reflexive Historical Sociology* (London and New York: Routledge, 2009).
- 17 本論文はアイデンティティを固定的、永続的、確定的、統一的、安定的、本質主義的、普遍的、原理主義的に捉えるものではなく、流動的、重複的、断片的、多元的なものとして捉えるものである。
- 18 そしてナショナリズム研究では「国民国家の解体」論や「トランスネーション」論などの議論が高まった。Linda Basch, Nina Glick Schiller and Christina Szanton Blanc, *Nations Unbound: Transnational Projects, Postcolonial Predicaments, and Deterritorialized Nation-states* (Amsterdam: Gordon and Breach, 1994).
- 19 アルジュン・アパデュライ(門田健一、吉見俊哉訳)『さまよえる近代:グローバル化の文化研究』(平凡社, 2004 [1996]), 307-308.しかしカルホーン(2007年)は、ナショナリズムがグローバル化時代においても重要な位置を占め続けことを主張しこれに反論している。Craig Calhoun, *Nations Matter: Culture, History, and the Cosmopolitan Dream* (New York: Routledge, 2007).
- 20 このナショナリズム概念をめぐる問題は「方法論的ナショナリズム」の問題として提起された。Andreas Wimmer and Nina Glick Schiller, “Methodological Nationalism, the Social Sciences, and the Study of Migration: An Essay in Historical Epistemology. *International Migration Review* 37, no.3 (Fall 2003), 592-594; 大井由紀「トランスナショナリズムにおける移民と国家」『社会学評論』157, 1 (2006年) 143-156.
- 21 ナショナリズムは、日本語で、「国民性」「国家主義」「民族主義」「愛国主義」と訳されるように、その意味は多義にわたる。しかし本稿では、国家(state)が、政治体・行政単位・領土を示すのに対して、ネーション(nation)は、「国民」を示すものとし、ここでいう「国民」とは、具体的な実体ではなく、ベネディクト・アンダーソンが述べたように、近代において形成された「イメージとして心に描かれた想像の政治共同体」として捉えるものである。すなわちナショナリズムとは、ネーションを創造するための営為と、それに方向づけられた様々な現象のことを意味するものとする。ベネディクト・アンダーソン(白石さや・白石隆訳)『想像の共同体:ナショナリズムの起源と流行』(NTT出版, 1998[1991]), 24.

しかし同時に、現代のナショナリズムは、日常的な社会生活における現実の実体として扱われる傾向にある。実体としてのナショナリズムは、社会的・政治的分析のためのカテゴリーとは異なり、社会的・政治的実践のためのカテゴリーとして存在する。本論文では、実体としてのナショナリズムと分析概念としてのナショナリズムを対立的に捉えるのではなく、実体として扱われるナショナリズムを、社会的・政治的な場で使用される「実践的カテゴリー」として捉え分析するものである。Rogers Brubaker, *Nationalism Reframed: Nationhood and the National Question in the New Europe* (New York and Cambridge: Cambridge University Press, 2004), 31.

さらにナショナリズムを扱う上で、民族概念が問題となるが、本論文では、民族をナショナリズムの核に据え実体や本質的なものとして捉えるのではなく、本稿は、ナショナリズムの過程で形づくられる「実践的カテゴリー」として捉えるものである。

また、アメリカのナショナリズムは、(日本国の日本民族のように)国家の本来的・神話的基盤とされる集団が存在するのではなく、「移民国家」を前提とし、「自由」「平等」を共同体の理念として掲げる国民国家を前提にしたナショナリズムである。また歴史的に、南北戦争の連邦政府崩壊危機にもとづく連邦と州の分権や、移民や黒人などの公民権運動を背景とするメルティング・ポット神話の崩壊など、「自由」「平等」の理念は、個人を中心とする集合的一体性を示唆するのではなく、個人、州、エスニック・グループの「自由」「平等」を前提に発展している点が、アメリカのナショナリズムの特徴としてあげられる。Liah Greenfield, *Nationalism: Five Roads to Modernity*. (Cambridge: Harvard University Press, 1992).

- 22 Prasenjit Duara, “Transnationalism and the Challenge to National Histories”, Thomas Bender (ed.) *Rethinking American History in a Global Age* (Berkeley: University of California Press, 2002), 25.
- 23 従来までの移民のアイデンティティ研究について「移動した人々を特定の場所に結びつけることを、自明のことと考え、アイデンティティと、その変化を問うてきた」と指摘された。伊豫谷登士翁「方法としての移民: 移動から場をとらえる」『移動から場所を問う: 現代移民研究の課題』(有信堂、2007年)、8.
- 24 Aihwa Ong, *Flexible Citizenship: The Cultural Logics of Transnationality* (Durham: Duke University Press, 1999).
- 25 David Harvey. *The Condition of Postmodernity* (Oxford: Basil Blackwell, 1989).
- 26 デイヴィッド・ハーヴェイ(加藤・水内訳)「都市空間形成を通じてのフレキシブルな蓄積: アメリカ都市における「ポスト・モダニズム」に関する省察」『空間・社会・地理思想』2 (1997年), 19.
- 27 ベネディクト・アンダーソン(関根政美訳)「<遠隔地ナショナリズム>の出現」『世界』1993年9月号, 189
- 28 Nina Glick Schiller and Georges Eugene Fournon, *Georges Woke Up Laughing: Long-Distance Nationalism and the Search for Home* (Durham/London: Duke University Press, 2001), 3.
- 29 ベネディクト・アンダーソン(関根政美訳)「<遠隔地ナショナリズム>の出現」『世界』1993年9月号, 189.
- 30 アンダーソン, 「<遠隔地ナショナリズム>の出現」, 186-187.
- 31 アンダーソン, 「<遠隔地ナショナリズム>の出現」, 186-187. 但し、「遠隔地ナショナリト」は母国のナショナリストと異なり、「市民権なき参加」のため「どうしても無責任なものとなりかねない」とも指摘している。
- 32 東一郎「トランスナショナル・アジア系アメリカ人史:<間・国家パラダイム>の可能性」『アメリカ史研究』30(2007年), 52.
- 33 移民史研究とトランスナショナル/トランスナショナリズムについては、次の文献を参考にした。貴堂嘉之「アメリカ移民史研究の現在」『歴史評論』625(2002年5月)17-30; 菅(七戸)美弥「人の移動をめぐるトランスナショナル・ヒストリー(越境史): 日本における研究動向」『アメリカ史研究』30(2007年)35-47. 村井忠政「アメリカ合衆国における移民研究の新動向: トランスナショナリズムをめぐる論争を中心に」『トランスナショナル・アイデンティティと多文化共生: グローバル時代の日系人』(明石書店、2007年)17-41.
- 34 ジェイムズ・クリフォード(毛利他訳)『ルーツ: 20世紀後期の旅と翻訳』(月曜社、2002[1997]), 285, 289.
- 35 Gabriel Sheffer, *Diaspora Politics: At Home Politics* (Cambridge: Cambridge University Press, 2003), 1-2.
- 36 中野聡『歴史経験としてのアメリカ帝国: 米比関係史の群像』(岩波書店、2007年), 18.
- 37 一次史料の旧字体の漢字は、原則として、人名を含めて通行の字体に改めた。
- 38 例外的にユー(2010年)が、ハワイおよびアメリカ本土のコリア系移民のアイデンティティに

触れているが、ハワイのコリア系移民のアイデンティティについて実証的研究を行っているわけではなく、アイデンティティへの言及も独立運動期の宗教的アイデンティティという限定したものであるため、ここでは例外として紹介するが、内容には詳しく触れない。しかしユークが、コリア系移民のアイデンティティに関する考察から、コリア系移民研究に「故郷喪失者」というディアスポラ／トランスナショナル移民の視点を投じていることは新しい。この点については終章で言及した。終章の2を参照。David K. Yoo *Contentious Spirits: Religion in Korean American History, 1903-1945* (Stanford: Stanford University Press, 2010).

- 39 そのためハワイの独立運動に関する研究は運動団体に関する研究が多い。アメリカにおけるハワイの独立運動に関する研究については以下を参照した。また韓国で行われているハワイの独立運動をめぐる研究については終章で論じた(終章の本文および注を参照)。学術論文: Kyu, Kingsley, K. “Korean Nationalistic Activities in Hawaii and the Continental United States). 1900-1945,” *amerasia journal* 4-1 (1977); Hyung-chan Kim (ed), *The Korean Diaspora: Historical and Sociological Studies of Korean Immigration and Assimilation in North America* (Santa Barbara; ABC-Clio, Inc., 1977); Seoug Hyong Lee, *Koreans in North America: New Perspectives*. (Seoul: Kyungnam University Press, 1988); Yun Yō-Jun “Early History of Korean Emigration to America(I)” *Korea Journal* 14, no.6 (June 1974), 21-26; “Early History of Korean Emigration to America (II)” *Korea Journal* 14, no.7 (July, 1974), 40-45; Lee Houchins and Chan-su Houchins. “The Korean Experience in America, 1903-1924” *Pacific Historical Review*. 43, no.4, (November, 1974), 548-575; Eun Sik Yang, “Korean Women of America: From Subordination to Partnership, 1903-1930,” *amerasia journal* 11, no.2 (1984): 1-28.博士論文: Hung June Moon, “The Korean Immigrants in America: The Quest for Identity in the Formative Years, 1903-1918” (Ph.D. diss., University of Nevada Reno, 1976); Yong Ho Son, “From Plantation Laborers to Ardent Nationalists: Koreans’ Experiences in America and Their Search for Ethnic Identity, 1903-1924”. (Ph.D. diss., Louisiana State University and Agricultural and Mechanical College, 1989).
- 40 Bernice B. H. Kim, “The Koreans in Hawaii” (MA thesis, University of Hawaii, 1937).
- 41 Patterson, *The Ilse*, 2000.
- 42 移民 100 周年祭を契機に韓国でもハワイのコリア系移民の歴史への関心も高まったが、それは主に 1910 年代に李承晩を中心に発展した祖国独立運動への関心である。また近年、李承晩が独裁政治の象徴としてではなく国家建設の功労者として再評価され、李承晩に関する多くの資料や論文も発行されるようになったことから、ハワイのコリア系移民に関する資料も李承晩研究の一貫として多く発表されるようになった。
- 43 Duk Hee Lee Murabayashi (unpublished papers) “Education of Koreans in Hawaii: 1903-1932”, “The Korean Press in Hawai’i: 1904-1970”, “Korean Women’s Activities in Hawaii: 1903-1950”. “Korean contributions to the Hawaii Methodist Mission: 1903-1952”.
- 44 The Roberta W. S. Chang Video Collection at the Center for Korean Studies, University of Hawai’i (RCVC).
- 45 Korean Oral History Project by Daisy Chun Rhodes (KOHP).
- 46 Daisy Chun Rhodes, *Passages to Paradise: Early Korean Immigrant Narratives from Hawai’i* (Los Angeles: Academia Koreana, Keimyung University Press, 1998).
- 47 Lauriel E. Eubank, “The Effects of the First Six Months of World War II on the Attitudes of Koreans and Filipinos toward the Japanese in Hawaii” (M.A.

thesis, University of Hawaii, 1943).

⁴⁸ Bong-Youn Choy, *Koreans in America* (Chicago: Nelson-Hall, 1979), 100; Kim, “The Koreans in Hawaii”, 137; Warren Y. Kim. *Koreans in America* (『在美韓人50年史』(2004)) (Seoul: Po Chin Chai Printing Company, 1971), 28; Patterson, *The Korean Frontier in America*, 103; Mahn-Yol Yi, “Korean Immigration to Hawai’i and the Korean Protestant Church”, Yöng-Ho Ch’oe (ed.), *From the Land of Hibiscus: Koreans in Hawai’i*. (Honolulu: University of Hawai’i Press, 2007), 49.

⁴⁹ 李承晩をはじめとするアメリカの独立運動家は、「朝鮮」よりも「韓国」を好んで使った。朝鮮王朝は1897年の帝制実施により国号を「朝鮮」から「大韓帝国(韓国)」に改称したが、1910年の韓国併合後、日本は「大韓帝国」という名称を「朝鮮」とした。そのため運動家らは日本への抵抗を示すために、「朝鮮」よりも「大韓帝国(韓国)」を使った。しかし本論文では、英語の「コリア」という表現が当時「韓国」と「朝鮮」の違いを明示しない形で使われたことから、一次史料(漢字あるいはハングル文字)で「韓国」と表記されていない限り(また1919年に成立した「大韓民国臨時政府」や1909年に成立した「大韓国民会」などのように名称を使った固有名詞でない限り)、「朝鮮」に統一し、使用した。

⁵⁰ Kim, “The Koreans in Hawaii”, 206-207; Patterson, *The Ilse*, 149-150.

第1章 近代移民としてのハワイ移民

ハワイへの移民は、国民国家体制の下で行われた朝鮮で最初の近代移民である。そのため朝鮮で歴史的に行われてきた前近代の出稼ぎ移民とは異なり、国境管理や渡航許可制度、渡航証明書携帯といった近代的移民制度の下で行われた。しかしハワイへの移民制度は、日露戦争直前の冷え切った米朝関係の中で、一人の米国公使が秘密裏にハワイの砂糖産業と画策して成立させた制度であるだけでなく、当時のアメリカで違法とされていた制度であった。なぜこのような特殊な事情を抱えた移民制度が成立し、それは移民をどう条件づけたのだろうか。

本章では、移民制度の成立に奔走したホーレス・アレン (Horace N. Allen) の動きに注目するが、アレンの朝鮮における特殊な立場を理解するために、まず 20 世紀転換期の朝鮮半島情勢に注目する。次に、アレンとハワイの砂糖産業が出稼ぎ労働者を朝鮮から誘致しようとした背景に注目し、なぜかれらが違法な移民制度を導入したのかについて検討する。その上で、移民の募集がどのように行われ、実際に移民した人々はいかなる人々であったのかを明確にする。最後に移民制度が僅か 2 年半後に廃止された背景を明らかにし、移民制度廃止後に朝鮮—ハワイ間の国境を越える移動が厳しく制限されていた状況を検討する。

1. 前史：20 世紀転換期の朝鮮とアメリカ

朝鮮の開国：東洋の帝国の間で

ハワイへの移民制度は、日露戦争直前の冷え切った米朝関係の中で、一人の米国公使が秘密裏にハワイの砂糖産業と画策して成立させた制度である。その米国公使とは、李氏朝鮮第 26 代国王の高宗から絶大な信頼を得たホーレス・アレン (Horace N. Allen) である。アレンは、アメリカ政府が朝鮮不介入の方針を示していたにも関わらず、高宗にアメリカの介入を期待し続けるよう説得した人物である。彼は、ハワイへの移民制度をアメリカとの関係を深める方策として高宗に説得し実現させた。それではアレンの朝鮮における立場はどのようなものだったのだろうか。またその背景にはどのような米朝関係があったのだ

ろうか。アレンの特殊な立場を理解するために、ここではまず 20 世紀転換期の朝鮮半島情勢を概観する。

李成桂（太祖）を初代王とする朝鮮王朝は、1392 年から 500 年以上続いた王朝である（国号を朝鮮とし、国都を漢陽とした。但し漢陽という都市名は 1395 年に「漢城」に改称する）¹。朝鮮王朝の特徴は、清を宗主国とし、毎年使節を送り貢物をもって敬意を表する「事大の礼」をとりながら鎖国体制を布いていたことである。

「黒船」の来航により日本の鎖国体制が終焉を迎えたように、朝鮮の鎖国政策も外国船によって幕を閉じた。最初に朝鮮に「開国」を求めたのは、1832 年のイギリス商船であった。当時イギリスは阿片戦争で清を打ち破り、南京条約によって香港の割譲や上海等の開港を実現し、清に対する支配力を強めていた。結果的には朝鮮の開国を迫るだけの勢力とはならなかったが、これ以降ロシアやフランスの船が開国を求めて朝鮮にやってくるようになった。このように列強が朝鮮に開国を迫る中、最初に開国を成功させたのは、日本だった。江華島事件（1875 年）を端に、朝鮮王朝は 1876 年に「日朝修好条規」（「大日本国大朝鮮国修好条規」並びに「江華島条約」ともいう）を締結した。この時に朝鮮が日本と締結した条約は、朝鮮の開港、居留地の設定、日本通貨の使用、治外法権、商品への無課税が盛り込まれた「不平等」条約であった。

ところが朝鮮の開国をめぐり、一つの問題が発生した。朝鮮は清を宗主国とする朝貢体制をとっていたため、完全な独立国ではなかった。だが日本は、朝鮮と修好通商条約を結ぶにあたって、朝鮮が独立国であることを謳った。日本は、朝鮮を足がかりに満州への進出を狙っていたが、朝鮮の覇権を握るためには朝鮮が清の従属国ではなく自主独立の国でなければならなかったため、日米修好条規の中で朝鮮を「自主の邦」と謳ったのである²。清はこれに異論を唱え、1882 年、朝鮮に親清派の閔妃と閔氏一派を中心とする親清政権を誕生させた。

しかしその 2 年後、開化党（または独立党といわれる）のクーデタによって親清政権は崩壊し、親日政権が誕生した。開化党とは、日本の力を借りて朝鮮を独立国として立て直し、さらに西欧文明をとり入れ維新を成し遂げようとした勢力である。金玉均、朴泳植、徐載弼（後にアメリカに亡命）、尹到昊といった開化党の指導者たちは、日本公使の竹添信一郎を通して、日本から武器と資金を調達した。そして政権を握っていた閔氏一派の 6 人を殺傷し、新政権を樹立したのだった。

だが、これに対する清の対応も速かった。袁世凱率いる清国軍が新政権を打倒し、親清

派に政権を戻したのである。この一連の出来事を甲申政変（1884年）というが、これを機に日本と清の対立は一触即発となった。朝鮮の政治経済的改革も親日派と親清派という二つの勢力の中で進められた。

両者の対立は、1894年に朝鮮で勃発した甲午農民戦争を通してさらに高まった。甲午農民戦争とは、全羅道古阜で地方官僚の不正を糾弾する農民一揆（1893年）をきっかけに、全国に広がった民衆蜂起のことをいう。この動乱は「東学の乱」とも言われるが、このように称される理由は、官吏の不法な課税や地主・土豪の搾取の中で貧しさと飢えに苦しめられていた農民の間で「人及天の思想」を掲げた東学の思想が普及していたことによる。しかし甲午農民軍（東学軍）は、国内の不正だけでなく、「斥洋斥倭、輔国安民（西洋と日本を排斥し、国をたすけて民をやすんずる）」というスローガンを掲げ、朝鮮における清と日本の勢力を排斥しようとしたため、日本や清からも敵対視されるようになった。清は朝鮮の出兵要請を受ける形で1894年6月18日に朝鮮に派兵し、日本は在韓邦人保護を名目に6月28日にソウルに進軍した。しかし両国の軍隊は甲午農民戦争終結後も国内に駐留し、朝鮮をめぐる権力闘争は遂に日清戦争という形で戦火の火蓋が切られることになった。最終的に日本が勝利したことによって、1895年4月の下関条約で清は朝鮮が独立国であることを認め、朝鮮半島の勢力争いから撤退した。こうして朝鮮は二つの東洋の帝国の対立の中で一つの独立国としての地位を得ることになった³。

帝国の勢力争いから植民地へ

しかし清にかわる勢力がすぐに現れた。それは当時極東地域で南下政策を推し進めていたロシアである。ロシアの台頭により、朝鮮国内も親露派が急速に勢力を伸ばした。反日派や元親清派だった人々は親露派へと転じ、朝鮮の政権を掌握していた閔妃派も1895年7月にロシア公使のウェーバーとロシア軍の軍事力を借り、親露派政権である第3次金弘集内閣として返り咲いた。しかし親日派も、閔妃殺害（同年10月）をきっかけに第4次金弘集内閣を結成し、巻き返しを図った。そんな中で露館播遷事件（1896年2月）が起こった⁴。高宗が親露派とアメリカ公使の力を借りてロシア公使館に逃れたのである。高宗は公使館で政務を執り行うという状態を1年余続けた。この間に親露派政権（朴定陽内閣）が再び成立した⁵。

ロシアも朝鮮における存在感を高めるために、1896年からは朝鮮軍隊の教練を、そして翌年高宗が宮殿に戻ると宮殿警備を担うようになった。さらに財務部顧問にロシア人アレ

クセーフを着任させ、朝鮮政府の財政面においても指導的立場を築こうとした。また出足は遅れたものの、欧米列強の鉱業特許権や森林伐採権をはじめとする「対朝鮮利権獲得権競争」においても利権を急速に拡大していった⁶。

このロシアの勢いを牽制しようと日本はロシアとの対話を求め、1896年の第一次日露議定書（小村・ウェーバー覚書）ではロシアの朝鮮における駐兵権を、同年の第二次日露議定書（山県・ロバノフ協定）ではロシアの利権拡大を認める議定書を結んだが、巨大な軍事力を背景とするロシアの勢いを止めることができなかった。さらに日本とロシアは、遼東半島や満州地域でも一触即発の状態にあった。ロシアは1900年に義和団事変の收拾を理由に中国東北部を占領していた。日本は日英同盟（1902年）を結ぶことによってロシアに対抗したが、ロシアの勢いを止めることができず、遂に日本は1904年2月に国交断絶を宣言し、日露戦争へと突入した。

当時、ロシアは世界最強の軍事力を保有していたといわれていたが、日本軍の健闘に伴い、戦争は激化した。日露戦争の戦地となった中国の東北部や遼東半島、朝鮮の鴨緑江岸（現在の中国と北朝鮮の国境）や仁川沖は、両軍の戦死者で溢れた。双方互いに譲らず戦闘は熾烈を極めたが、日本が日本海海戦で制海権を得たことを契機に、戦局は日本へと傾いた。両軍死力を尽くした戦いは1905年10月、アメリカの仲介で締結されたポーツマス条約によって講和が成り、日本は朝鮮における権益を獲得した。

こうして外国勢力を排斥した日本は、1905年11月17日に朝鮮と第二次日韓協約（「乙巳保護条約」とも「日韓保護条約」とも言われる）を締結し、朝鮮（大韓帝国）を保護国とした。そして1906年2月、朝鮮に日本の統監府（初代統監伊藤博文）を設置し、電信・通信機関をはじめとする通信や船舶の往来、森林伐採などの利権を移行し、警察権の代行や集会の禁止、鉄道および軍用地の占領といった治安の統制も行った⁷。そして韓国保護国化から5年後の1910年、遂に日本は朝鮮を併合し、植民地とした。

「特殊」な朝米関係

この一連の流れの中でアメリカはどのような立場をとったのだろうか。話は「開国」前の朝鮮に戻るが、朝鮮史において最初にアメリカが登場するのは、朝鮮がまだ鎖国体制をとっていた頃である。欧米列強がアジアに進出する中、朝鮮においてシャーマン号事件（1866年）といわれる奇怪な出来事が発生した。シャーマン号事件とは、李氏朝鮮に通商を求めて平議を目指したアメリカ商船シャーマン号が焼き討ちに遭った事件である。シャ

ーマン号は大砲 2 門など軍装備した米国商船で、大同江入り口の退去命令を無視して平議を目指した。そして大同江沿岸住民に対し発砲や略奪、暴行をした上、官警を拉致監禁した。しかし拉致者の釈放をめぐる李氏朝鮮との交渉が決裂に終わったことによって住民らの火攻めに遭い、シャーマン号は撃沈させられることとなった。この事件は、奇怪な事件として外交史に残されることとなった⁸。

アメリカの外交史上、朝鮮が初めて登場するのは、1878 年の米国議会である。1878 年 4 月 8 日、上院議員サージェント (Aaron A. Sargent) は、米朝の通商関係を成立させるために朝鮮へ使節を派遣する決議案を議会に提出した⁹。そして 1878 年 12 月 7 日、アジア・アフリカ地域の未開港を開くべくアメリカを出航したシュフェルト提督 (Robert W. Shufeldt) は、その 1 年後に長崎港に現れ、朝鮮に開国を求めた¹⁰。しかしこの時シュフェルト提督は、日本の後ろ盾を得て朝鮮の開国を実現させようとし、在朝鮮日本公使の「可能な限りあらゆる助力」をするという約束を取りつけたものの、当時の外務卿井上馨が日朝関係の複雑化を懸念し要請を拒否したことから交渉は失敗に終わってしまった¹¹。

ここで清の李鴻章がシュフェルトの窮地を救った。李鴻章はアメリカが清の力を借りて朝鮮と条約を結ぶようになれば、国際社会における清の宗主国としての威信を広くアピールすることができる考えた。そのため清は、朝米修好通商条約の中に清が朝鮮の宗主国である文言を盛り込むよう求めた。当初アメリカがこれを拒んだことによって事態は複雑化した。最終的にアメリカが別の書簡で朝鮮の宗主国が清であることを認めることで決着を見た¹²。

こうしてアメリカは 1882 年 5 月 23 日、朝鮮と修好通商条約を締結した。しかし米朝間の国交は開けたものの、米朝関係は活発化することなく、きわめて冷ややかで「特殊」な状態が続いた¹³。ここでいう特殊な状態とは、アメリカが条約を締結しながらも朝鮮情勢に不介入の方針を掲げたことと、このアメリカの冷ややかな態度にも関わらず、朝鮮は他国からの内政干渉の問題を抱えるたびにアメリカに助力を求めたことを指す。この背景には、二つの事情がある。

一つは、米朝修好通商条約第 1 条「周旋条項 (Good Offices Clause)」をめぐる両国の解釈の違いである¹⁴。周旋条項は両国の友好関係を掲げた条項で、文言は次の通りである。

「米合衆国大統領と朝鮮国王、および各政府の公民と巨民間に永遠の平和と友好が存ずるものとする。他国が一方の政府を不当にまたは抑圧的に扱う時には、他方の政府は、事態の通知をうけた時に円満な妥結をもたらすよう周旋を尽くして、その友誼を示すものであ

る」¹⁵。しかしここでいう「周旋」の意味について、朝鮮は緊急時にアメリカの協力を得られるものとして解釈していたのに対し、アメリカは一般的な友好関係を示すものにすぎないと解釈した。この解釈の違いが両国に対する期待感の違いとして現われた。特に条約締結時の朝鮮は、朝鮮が自主独立国であると主張する日本と宗主国としての面目を復活させようとする清の争いの真只中にいたことから、この窮地を脱する役割をアメリカに期待していたのだった¹⁶。そのため条約締結の翌年 1883 年 5 月、初代駐朝米国公使（初代のみ特命全権公使）フート（Lucius H. Foote）が朝鮮にやって来たとき、高宗は「踊って喜んだ」といわれるほどアメリカの一行を歓迎した¹⁷。

もう一つは、アメリカ政府の方針と相反するかのような言動を繰り返したアメリカ人公使の言動である¹⁸。中でもアレン（Horace N. Allen）は王の高宗と親密な関係を築き、朝鮮に対する「同情的」な言動を繰り返したことで知られる。もともとアレンはアメリカン・ボード（Board of Foreign Mission of the Presbyterian Church in the USA）の医療使節団として中国南京に滞在していた宣教師／医師だった。そして 1884 年 9 月に朝鮮に渡ったアレンは、甲申政変（1884 年）時に致命傷を負った政府要人の治療にあたったのをきっかけに王である高宗と急速に近づき、朝鮮王朝から絶大な信頼を寄せられるようになっていった¹⁹。そして 1887 年に朝鮮王朝の米朝関係指南役に着任し、在任中はアレンが随行して 2 度目の報聘使の米国訪問を行い、グローバー・クリーブランド米国大統領との会談を実現させ、ワシントン DC に在米朝鮮公使館を設置させることに成功させた（第 1 回目は初代公使ルシアス・H・フートの進言によって 1883 年に実現した。この時訪問団はニューヨークでアーサー米国大統領（Chester A. Arthur）に接見した）²⁰。その結果、1890 年に王の後ろ盾を得る形でアメリカ公使に就任した。

公使に就任したアレンは、朝鮮におけるアメリカの利権拡大にも貢献した。アレンは、朝鮮におけるアメリカの経済的利権を拡大させることでアメリカ政府の朝鮮に対する関心を引き寄せようとしたのである²¹。そして米国企業の利権獲得に奔走し、1896 年に鉱山採掘権と鉄道敷設権を、1898 年にソウルの電車、電灯、水道経営権を獲得させた。またピーク時の 1903 年には 19,585,169 ドル（前年 15,691,109 ドル）の利益をもたらすなど貿易にも力を入れた²²。

しかしアメリカはモンロー・ドクトリン以来の対外不介入政策をとっていたため、本国から地理的に遠く離れているばかりでなく、日露の利害が激しく対立している朝鮮に介入する意志はほとんどなかった²³。そもそも 1882 年の米朝間の条約締結の目的も、中国との

貿易取引が増え、黄海を通るアメリカ船の安全を確保する必要があったため締結した条約であった²⁴。そのため1904年に日露戦争が勃発すると、アメリカは開戦翌日の2月11日に厳正中立遵守を宣言し、朝鮮問題から完全に手を引いた。さらに日露のポーツマス条約締結直前の1905年7月29日、陸軍長官タフト（William H. Taft）は日本の桂太郎と「タフト・桂協定」（当時は密約）を結び、フィリピン問題に日本が介入しないかわりに日本の朝鮮支配をアメリカが認める約束を交わした。

このアメリカ政府の朝鮮不介入の方針に抗議を重ねたのがアレンだった。アレンは朝鮮の独立を実現するために日本の勢力を朝鮮から一掃しなければならないが、そのためにはアメリカの介入が必要であると考えていた。アメリカ政府に朝鮮介入を訴え続けたアレンは、アメリカ政府と立場を異にしているにも関わらず、1903年9月30日にルーズベルト大統領と面会し、日本の勢力後退を促す措置を直訴するに至った。しかし結果的にこのアレンの言動はアメリカ政府の不信を買うこととなり、ついには1905年4月25日後任のモーガン公使（Minister Edwin V. Morgan）から「いつでも都合がいい時に（朝鮮を）離れること」と通告されてしまう²⁵。

アレンが去った後のアメリカは、1905年11月17日に第二次日韓協約が調印され日本の保護国化が決定すると、他のどの国よりも早く公使館を撤収させ、朝鮮との「特殊な関係」を終わらせた²⁶。

以上、概観してきたが、20世紀転換期の米朝関係は悪化の一途を辿っていく反面、冷え切った米朝関係と相反するかのような制度がこの時期に成立している。それが1903年のハワイへの移民制度である（ハワイは1900年にアメリカに併合された）。この移民制度が成立した背景には、米朝関係の水面下で移民制度の実現に奔走したアレンとハワイ砂糖産業の画策があった。それではアレンらはハワイ移民制度をいかにして実現させたのだろうか。まず始めに、ハワイの砂糖産業がなぜ朝鮮から出稼ぎ労働者を誘致しようとしたのかについて言及する。

2. 移民制度の誕生と移民労働者

ハワイ事情：廉価な労働力とスト破りを探して

20世紀初頭のハワイは、深刻な労働者不足に陥っていた。ハワイでは1835年に始まっ

た砂糖産業が米国・ハワイ互惠条約によって急速な発展を遂げ、1898年のハワイ・米国合併条約締結時（1900年に併合）には大資本によるサトウキビ農場の吸収・合併が進み、5大財閥による巨大な砂糖プランテーションが誕生していた²⁷。砂糖産業は、当初ネイティブ・ハワイアンを労働者として雇用していたが、労働者不足が深刻化していく中で海外からの移民労働者を投入するようになっていった²⁸。1852年の中国からの移民労働者を契機に、ポリネシア、ポルトガル、ドイツ、スウェーデンなどの国々から次々と移民労働者を誘致していった。そして1885年からは日本から大規模な移民労働者の受け入れを始めた²⁹。

こうした流れの中行われた1900年のアメリカによるハワイ併合は、一層ハワイにおける労働者不足を深刻化させた。アメリカによる併合によってハワイの砂糖産業は次の三つの問題を抱えるようになった。第一に、アメリカの中国人移民禁止法（1882年）がハワイにも適用されたため、中国からの移民がすべて打ち切られた問題である。すでにこの頃のハワイでは、移民労働者の中心は中国から日本へと移行していたが、全面的な禁止は砂糖産業にとって大きな痛手となった。

第二に、アメリカ本土への移動が自由になったため、移民労働者が次々とハワイを離れてしまった問題である。ハワイと同じように労働力不足が深刻化していた西海岸の農場や企業は、ハワイ併合とともに労働者の募集をハワイで始めるようになった。そして西海岸の方がハワイよりもはるかに労働条件が良かったことから、ハワイにいた移民労働者は、アメリカ本土への移動が制限される1907年まで次々とハワイを離れるようになっていった。

第三に、それまでハワイの砂糖産業が移民労働者を呼び寄せるために使ってきた契約移民制度が、アメリカの移民法によって禁じられてしまった問題である。契約移民制度とは、渡航費を砂糖農場主が負担するかわりに（渡航後に給与から天引きされる形で返済することが多かった）、移住労働者が渡航前に砂糖農場主と雇用条件や雇用期間を定めた「契約」を交わす移民制度のことをいう。ハワイでは、廉価な移民労働者を大量に投入する手段として、また移民労働者を同じプランテーションに一定期間拘束しておく手段として、早くからこの制度が採用されてきた。しかしアメリカの奴隷貿易打ち切りを目的に成立した「外国人契約労働者禁止令（1895年）」の下、雇用主による労働者の渡航費代理負担と渡航前に労働者が雇用契約を交わすことが禁じられ、契約移民制度が違法となったのだった。

さらに契約移民制度の廃止とともに新たな問題も発生した。それはストライキが頻発するようになったことである。特に労働者の大半を占める日系移民は、ハワイの全人口の40%を占めるほど数が増えたが、1900年以前は契約移民制度の下で劣悪な生活空間や労

働条件を強いられてきた³⁰。そのためこれらの人々の間で、契約移民制度の廃止とともに労働条件の改善と賃上げを求める声が高まり、大規模なストライキが頻発するようになった。ハワイ砂糖耕主組合（以下「HSPA」と略す）は、日本以外の地域から廉価な労働力を投入することでこの事態を收拾しようとした。

ここで急浮上したのが朝鮮からの移民労働者の導入であった。これを提案したのは、砂糖産業の五大財閥の一つであるハックフィールド・アンド・カンパニー社（Hackfield and Company）である。当時ハックフィールド社は、砂糖プランテーションを経営しながら日本航路の汽船会社パシフィック・メール・スチーム・カンパニー社（Pacific Mail Steamship Company）の代理業務も行っていたため、朝鮮から移民労働者を呼び寄せることによって日本航路の利益増も目論んだのだった³¹。

このハックフィールド社の提案はハワイですぐに承認された。当時 HSPA は、「移住労働者の募集と輸送に係る費用が白人労働者一人につき 250 ドルかかるのに対してアジア人は 70 ドルで済む」³²という理由から、新規の移住労働者をアジアで開拓しようとしていた³³。またハワイ労働局も、日系移民のストライキを阻止するために、同じアジア人をスト破りに投入しなければならないと考えていたため、朝鮮人労働者の受け入れ案に次のように賛同の意を示した。「砂糖産業の損失を補うために、まず砂糖プランテーションの経営者をもっとオリエントから移民を採用し受け入れる必要がある。そしてコリアンを受け入れることによって、日本人の結束を弱めなければならない」³⁴。

移民制度の実現に向けて：HSPA とホーレス・アレン

朝鮮人移民労働者の獲得に向けて、HSPA はまず朝鮮に進出しているアメリカ企業に接触した。そして雲山金鉱（平北）の採掘権を獲得していたアメリカ人企業家のハント（Leigh Hunt）を通して仁川のアメリカン・トレーディング・カンパニー（American Trading Company）のタウンズエンド（Walter D. Townsend）にヒアリングを行った。その結果、朝鮮にはハワイの労働力不足を解消するだけの労働者の数と、農村の疲弊や飢饉によって都市部に溢れ出た余剰労働者が存在することを確認した。

次にホーレス・アレンに接触した。この時アレンはちょうど故郷のオハイオ州で休暇を過ごし、朝鮮に戻る帰路にあった。アレンの日程を朝鮮の雲山金鉱採掘に従事していたハント（Leigh Hunt）と共同経営者であり下院議員であるファセット（Jacob Sloat Fassett）から聞いていた HSPA のアーヴィン（William G. Irwin）は、1902 年 2 月、アレンをサ

ンフランシスコで待ちうけた。そしてアレンの乗った船がハワイ港に接岸すると、HSPA はアレンを船まで出迎え、会談にドール属領知事 (Sanford B. Dole) も駆けつけるなどして歓迎し、アレンの協力を取り付けた。

しかし朝鮮人労働者の受け入れにあたって一つの問題が生じた。それは労働者の渡航費を誰が負担するかということであった。契約移民制度の下では、渡航費を HSPA が労働者に貸与する形をとってきた。だがこれに変わる方策がなかったため、HSPA とアレンは契約移民制度をそのまま流用することにした。この時、移民労働者を「契約 (contract)」移民ではなく「合意 (agreement)」移民と呼ぶことによってその違法性を隠蔽しようとした³⁵。

朝鮮に戻ったアレンは、さっそく高宗と面会した。アレンは高宗に次のように移民制度のメリットを訴えた。「中国は労働者を送りたくても中国人移民禁止法 (1882 年) で移民を送ることはできないけれど、朝鮮は違う。朝鮮はアメリカに人を送ることができる」³⁶。近代国家としての国づくりを推し進めていた高宗は、これを聞きハワイへの出稼ぎ移民を快諾したといわれている³⁷。

ところでこの時の高宗との面会について、アレンはファセット下院議員を通してハワイの HSPA に連絡した。ファセット下院議員を介して連絡を取った理由は、違法な移民制度導入にあたって慎重を期すためであった。しかし慎重を期したのは 1 回限りで、その後の連絡は直接行われるようになった³⁸。

アレンの連絡を受け、HSPA は移民制度を実現させるためにビショップ (E. Faxon Bishop) を朝鮮に送った。ビショップは朝鮮に向かう途上で次の二つのことを行った。一つは、日本政府が 1894 年に公布した移民保護規則の原文を入手することであった。当時の朝鮮には移民制度がなかったため、日本のものを雛型にしようとしたのである。移民保護規則の文言は以下の通りである³⁹

第1条 本例に於て移民と称するは永住すると否とを問はず労働を目的として外国に渡航する者を言う

第2条 本例に於て移民取扱人と称するは何等の名義を以てするに拘らず移民を募集又は移民の渡航を周旋する者を言う

第3条 移民は旅券を携帯するにあらざれば外国に渡航することを得ず (後略)

もう一つは、日本の港から出航している太平洋路線に朝鮮人を乗船させる許可を得ることであった。移民労働者を朝鮮からハワイへ直接向かわせなかった理由は、日本を経由することによって非合法である「合意移民」の存在を目立たなくさせるためであった⁴⁰。

1902年10月初旬に朝鮮に到着したビショップは、まずデシュラー (David W. Deshler) に労働者の募集と斡旋を取り仕切る会社を設立させた。この時デシュラーはビショップと三つの約束を交わした。第一に、HSPAは最初の移民労働者の斡旋と渡航に対しては責任を持つが、それ以降の移民労働者の斡旋と渡航についてはデシュラーが責任をもつこと。第二に、移民労働者を恒常的に送り出すこと。そして第三に、移民労働者が「契約移民」であることを知られないために、移民局で移民労働者に必ず通訳をつけ、通訳にその点を十分に理解させておくことであった。

そしてデシュラーに東西開発会社 (East-West Development Company) と銀行を立ち上げさせた⁴¹。東西開発会社は移民の募集と斡旋を行う会社である。銀行は、HSPAの2万5千ドルの出資によって成立したが、当時朝鮮からハワイまで片道100ドルかかる渡航費を労働者に「融資」することを目的に設立された。この銀行で渡航費を借り受けた移民労働者は、1年から3年以内に渡航費を給与から返済する約束を交わした⁴²。

朝鮮人出稼ぎ労働者を送り出す準備が整うと、アレンは再び高宗に面会した。そしてハワイへ移民を送り出すメリットを高宗に次のように進言した。それは中国には禁じられている移民の送り出しができること、移民の送り出しが労働市場の開拓や飢饉、貧困の解決になり国益にもつながること、そして米朝関係の絆を深める機会になることであった⁴³。高宗はハワイへ移民を送り出すことに高い関心を示した。

こうしてアレンとHSPAの話し合いがもたれてから約9ヵ月後、ハワイへの移民制度が朝鮮で成立した。1902年11月15日の宮内府の勅令により、11月16日に渡航手続きを行なう移民機関 (綏民院)も開設され、閔泳煥 (閔妃と姻戚関係にあり、駐英公使を勤めるとともに米国滞在1年の経験を持つ高宗に近い人物の1人) が代表に就任し、移民の実質的な業務が始まった。また移民労働者の仲介斡旋の許可がデシュラーに与えられ、デシュラーの東西開発会社は国内7箇所を設置した事務所で移民労働者の募集を開始した⁴⁴。

この一連の移民制度の成立についてアレンは、自らの関与については一切触れない形でアメリカ政府に報告すると、移民制度成立の事実関係だけが伝えられたアメリカ政府は、朝鮮からハワイへ向かう移民労働者が、法的に問題があるようには見受けられないという旨の財務長官の手紙をアレンに返し、移民制度の成立を承認した⁴⁵。アレンは移民制度実

現の喜びをハワイのドール知事 (Stanford B. Dole) に宛てた書簡で次のように表している。

朝鮮政府が発行した近年の韓国人の海外移民に関する勅令の写しを、私の特権でああなたの手元に届けよう……朝鮮人は忍耐強く、勤勉で、従順な人種である。そして長い服従の歴史から支配することは容易だろう……もし朝鮮人がハワイへ行くこととなったら、彼らは神の御言葉として受け止め、そして彼らはよき労働者として尽くすだろう⁴⁶

移民労働者の構成

それでは実際にハワイに渡った人々はどのような人々だったのだろうか。もともと朝鮮では、出稼ぎを目的とした移動が日常的に行われていた⁴⁷。農作不良や飢饉、政治的動乱などによって朝鮮を脱出した人々は、南部や北部、朝鮮半島の対岸にある山東半島に流れ着いた。20世紀転換期には、現在の中国東北部とロシア国境地帯に多くの農民が流出し、現地で人々は（例えば19世紀末にウラジオストックにいた約2万3千人の朝鮮人がロシアの鉄道建設などの建築現場で働いていたように）出稼ぎ移民として働いていた⁴⁸。

しかしハワイへ出稼ぎを希望する人はまったく現れなかった。ハワイの移民局は、移民労働者の誘致にあたって、ハワイでは賃金だけではなく住宅や医療も無償で提供され、教育の機会もあることをアピールした次の募集広告を出していた。「ハワイは常夏の国で……公立学校は整備されすべての人に教育を受ける機会が提供されている上、英語による授業は無償である。農業労働者の募集は1年中ある……労働者は法律によって保護される……住居、燃料、水、医療も無償で提供される」⁴⁹。またデシュラーの東西開発会社も次のような広告を新聞に掲載した。「(ハワイに行けば) 仕事について、商売も、産業も、農業も学ぶことができる」⁵⁰。しかし希望者は集まらなかった。現地の情報がほとんど入らない時代に、3週間もの船旅の末に辿り着く太平洋の孤島に、わざわざ働きにいかうとする者は現われなかった。

ここで助け舟を出したのが、アメリカ人牧師ジョーンズ (George Heber Jones) である。ジョーンズ牧師は、仁川のメソジスト教会の牧師でアメリカ人公使アレンとも旧知の間柄だった。ジョーンズ牧師は教会信者に、ハワイが天候にも景色にも恵まれたところで、向こうに行けば信仰生活を思う存分に遂行できるだろうと説いた⁵¹。その結果、50人の男女

(子供含む)がハワイに行くことを決意した。この数は、最初にハワイに渡った移民 102 人(男 56 人、女 21 人、未成年 13 人、幼児 12 人)の約半分を占めた⁵²。出発にあたってジョーンズ牧師は信者の信仰心を称え、ハワイメソジスト教団への紹介状と数冊の本を手渡した⁵³。こうして 1902 年の 12 月末、仁川から最初のハワイ移民が出発した。

一旦移民が始まると、移民希望者はすぐに集まるようになった。最初の移民船で見られたような家族やキリスト教信者は減り、10 代後半から 30 代の出稼ぎを目的とした未婚男性が多くを占めるようになった。但し、キリスト教信者が占める割合は減ったものの、教会と何らかの接点をもつ者は多かった。ある移民はキリスト教会との関わりを次のように語っている。「仕事を探しに釜山に出たけれど、仕事も泊まる場所も見つからずに困っていた。そんな時に教会が寝床を提供してくれた……一週間で過ぎる頃、その教会の人がハワイという太平洋に浮かんだ島で砂糖プランテーションの作業員を募集していることを教えてくれた。現地には教会の代表者もいるらしく、その人たちが私たちのことを見守り、新しい環境に順応できるようにしてくれるという話だった。給料もいいし、人もたくさん応募していた」⁵⁴。

移民当初は、都市部の労働者が移民の多くを占めた。この中にはもともと農民だった者も含まれる。当時の朝鮮では政治的動乱や重税、度重なる飢饉によって農村が疲弊し、人々は生活の糧を求めて都市や国外に流れ出していた。国外に働きに出るようになった経緯をある人は次のように語っている。「私は 10 人兄弟の 9 番目に生まれた。村の人たちは大概息子をロシアや満州に働きに出していた。貧しい家は家族全員が働きに出ざるをえなかった。出稼ぎから戻った人がいつも村の外の話をしてくれたから小さい時から外の世界のことを聞いて育った……(ウラジオストックで働くことになり)鉄道建設の現場で働いた。でも 1902 年頃だったか 1903 年頃だったか日本とロシアが戦争に突入し、身の危険を感じて帰国した……でも帰国しても行くあてがなかった(そのためハワイに移民した)」⁵⁵。出稼ぎ労働は、朝鮮の人々にとって生活戦略の一つであった。

さらに次の語りで見られるように、経済的理由のみならず政治社会的理由から農村を離れた人たちも多かった。「日清戦争の時、私たちが住んでいた忠清道で日本軍と清軍の衝突があった。身の回りの物だけ持って仁川の叔母のところへ逃げた(その後仁川でハワイの移民労働者募集を知り移民した)」⁵⁶。「1905 年のある日、日本人兵士が家にやってきて立ち退きを命じた。家が兵舎に使われることになったのだ……私たちに残された選択肢は、その日のうちに家を出るか家で兵士の世話をするかのどちらかであった……家を出て仁川

に向かった。仁川は一番近くの港町で、そこで仕事をみつけようとした……仁川に行くと 2 隻の船が泊まっていた。それらはハワイの砂糖プランテーションに向かう船だということを知った。ハワイに行けば朝から晩まで働いて 1 日 50 セントは貰えると聞いた父は、すぐにハワイ行きを決めた。こうして私たちは 1905 年 5 月 8 日に SS シベリア号でハワイに足を踏み入れることになった」⁵⁷。

やがて都市部だけではなく農村部からもハワイ移民の希望者は現れるようになった。ハワイ移民の噂が広まり、例えば平壤に近い朝鮮北部の村では、ハワイに行けば生活が豊かになるだけでなく、教育を無償で受けられるという話が瞬く間に広がったという⁵⁸。当時、朝鮮北部は洪水と天候不順によって毎年のように飢饉が発生し、農村部も都市部も生活に困窮する人で溢れていた⁵⁹。

移民の中には、出稼ぎ以外の目的をもった移民もいた⁶⁰。自分の母が移民した理由について、ある移民は次のように語っている。「私の母は、17 歳の兄と一緒にハワイに移民した。ハワイ行きを決めたら父親に『家事しかできないのに、お前は どうやって向こうで食べていくんだ』と笑われたという。でもさとうきび畑で働くことになっても父親の元を去ろうと母は決意していた。母は閉鎖的な社会に辟易していた……当時の朝鮮には自由がなかった。でもハワイには自由があって誰もが幸せに生きていくことができるのだと教えられた。だから母はハワイ行きを決心した」⁶¹。

1903 年から 1905 年まで、朝鮮人移民労働者を乗せた船は 65 回太平洋を越えていった。そして約 7,800 人の移民労働者とその家族がハワイに渡った(男性 6,717 人、女性 677 人、子供 465 人だった)⁶²。これらの人々は「合意移民」として、渡航費を借りるかわりにハワイの砂糖プランテーションで 3 年間働くことを約束して移民していった。

3. 移民制度の廃止とその後の渡航制限

移民制度の廃止

しかし 1905 年 4 月 1 日、朝鮮政府は移民制度の廃止を突然宣言した。移民制度の成立から僅か 2 年半後のことだった。引き金となったのは、1 度だけ行われたメキシコへの出稼ぎ移民が、現地で過酷な待遇を受け、その惨劇が王の耳に入ったことである⁶³。メキシコ移民は、ハワイへの移民が始まってから約 1 年後に 1 度だけ行われた移民である。これ

は移民労働者の募集斡旋業務を専門とするメキシコ国籍のイギリス人マイヤーズ (John G. Myers) が行った事業だった⁶⁴。マイヤーズは、1904年8月に朝鮮に渡り、10月に移民労働者の事務所を開設し、日本の大陸殖民合資会社 (東京府下移民取扱人会社) の韓国移民総代理店長の大庭貫とその従業員を使ってメキシコへの移民の募集を始めた⁶⁵。以下は、マイヤーズが新聞に掲載した募集広告である。

北米墨西哥国は合衆国と隣接する著名の文明なる富国にして風土極めて佳良にして悪疫なり世界の楽土として世人の良くしるところなり 其国富者タメ貧者少ないの工人甚だ貴きて以に日本及び清国人が単身或は家族ヲ供と渡墨し利益を収むる者多く韓国人も同地に居住すれば安全と利益を得べく韓国墨國間に条約の締結なきも最恵国にて悉く利益を均露するふら得全家の往来は任意にして毫も且得なり大に優遇せらし勤勞すれば必ず厚利を得べきなり⁶⁶

そしてメキシコに向けて1906年3月6日に仁川港を出発したイルフォード号は、1,033名 (うち男702名、女135名、小児196名) の移民労働者を乗せてユカタン州のメリダ市に到着した。しかし20数箇所のヘネケ麻プランテーションに分かれて働くことになったこれらの人々は、過酷な労働条件と劣悪な環境の中で奴隷のように働かされ拘束された⁶⁷。病に倒れる者がいたが、手当でも受けられずに死亡していった。このメキシコの惨状を耳にした高宗はすぐに移民制度の廃止を決定した⁶⁸。

しかし高宗が、メキシコ移民を禁止せずに、移民制度そのものを廃止した理由は他にもあった。それは移民制度の廃止を求める日本の圧力である⁶⁹。それではなぜ日本政府は移民廃止を望んだのだろうか。

日本政府は、当初からハワイ移民に対して強い懸念を示していた。1903年に最初の朝鮮人労働者が朝鮮を出発した時の様子を在韓臨時代理公使の萩原守次は、外務大臣小村壽太郎に次のように報告している。

昨年12月22日、当港 (仁川) 出帆の玄海丸にて、布哇出稼の韓国人97名 (内男子54名、女21名、小児22名) 出発せり。この韓国人 (の) 布哇出稼の嚆矢とす米領各地に於ける労働の供給不十分なるにも拘わらず、支那人労働者の移住は法律によりて禁止せらし、日系移民の移住には種々の制限を付せらるが為、彼の地

(ハワイの) 資本家は遂に労働の供給を韓国より得ることを試しんとするに至り
がるものに思わる⁷⁰

移民制度が始まった当初、日本政府は、農村出身の日系移民に比べて朝鮮人移民は都市部出身であるため砂糖プランテーションの過酷な労働についていけないだろうと見ていた。在韓日本公使館には、次のような記述が残されている。「一得一失あるは勿論なるも之の要するに韓国人労働能力が日系移民に比して遥かに劣れることは強れど（中略）其の労働効果が到底日系移民に比べくもあらざるを悟るに至らしめ」⁷¹。

だがこのような予測に反し、やがてハワイの日本人会は朝鮮人移民労働者の出国禁止を求める要望書を日本政府に求めるようになった。当時ハワイでは、砂糖プランテーションの労働者の66%が日本人によって構成されていたが、朝鮮人が10%を占めるようになり、中国人の9%を上回るようになっていた⁷²。危機感を抱いた日本人会は、日本政府に次のように訴えた。

韓国移民は、布哇に於て我移民と競争の勢を来し、其数の漸加するに随ひ、次第に勁敵たらんとせるを以て、我移民会は韓国労働者の布哇渡航を禁止せしめんと欲し運動する⁷³。

さらに日本の移民斡旋業者も朝鮮人移民労働者の廃止を求める嘆願書を外務大臣に提出した。斡旋業者たちは、朝鮮人移民労働者が、ハワイの日本人の利害に反するだけでなく、日本政府に著しい損失をもたらしていることを次のように述べた。

韓国は我帝国政府御指導の下に立ち居候事故此際本邦移民御保護の為めかん國移民を布哇へ渡航することを斷して防遏相成候様御詮議相蒙申度國威發場千歳一遇の好期に際し国家に及ぼす利害重大なりと確信仕候。

海外移民事業の国家に対する公益を増進するは今更爰に陳辯を要せず政府に於かせられ候……近来布哇に於ける我移民事業に対し最も恐るべき障碍を来せしは韓国移民に之れあり今にして之か防遏の方法を講せされは近き将来に於て我帝国移民は全く杜絶せらるへきの悲境に陥り容易ならざるの結果を見るに至らんと深く

痛心仕候に付左に事情を具申し以て適當のご処置を仰き候……⁷⁴

また当時の日本は、アメリカの西海岸で高まった排日運動の責任の一端が、ハワイの朝鮮人移民労働者の流入にあると考えていた。外務大臣小村壽太郎は、ハワイに朝鮮人移民労働者が流れ込んだことによってハワイでの日系移民の賃上げ交渉が失敗し、それが理由となって日系移民がハワイから西海岸へと移り住むようになったと考えていた⁷⁵。

そして日本政府は、朝鮮の移民制度廃止に向けて高宗に圧力をかけていった。天然痘の発症を理由に、朝鮮人の乗船を拒否するよう次のように命じた。「仁川に移民を連れてる船中、天然痘を蒙し密かに仁川に上陸せんとしたる事件は右件禁止の動機となり（朝鮮人の渡航）禁止の必要を主張せり」⁷⁶。また移民制度の問題を指摘し、メキシコ移民労働者の惨劇を救えなかった朝鮮の非を次のように非難した。「移民の許可に関し、韓国官吏の不都合あり。また出先に於て、彼等を保護する官警なき為め、移民社の困難を蒙むる者多きに付、今後移民に関する完全なる規則を制定し、且其保護の途付ける」⁷⁷。

そして1905年4月、高宗が移民制度の廃止を宣言した。この時、外部大臣李夏榮が「移民制度の廃止は朝鮮政府の名のもとで出されたけれど、朝鮮人の移住は、行き先がどこであれ、禁止するよう駐朝鮮日本公使から助言と同意があった」⁷⁸と発言したように、廃止の背景に日本政府の圧力があったことは明らかであった。しかしデシュラーとハワイのHSPAは廃止を突然知ることとなり、これに対処する術をもたなかった。また移民制度の成立に尽力したアレンも、アメリカ公使の職を数日前に解かれていたため何の措置も講じることができなかった⁷⁹。

渡航制限と旅券管理

移民制度の廃止から7ヵ月後の1905年11月17日、第二次日韓協約（乙巳保護条約）が締結された。これにより朝鮮人の国境を越える移動は日本の管理下に入り、移民は1906年6月29日に公布された移民保護法の下に規定されることとなった。そして同法が、移民を「労働に従事する目的で外国に行く者およびその家族」と定義し、その渡航をめぐって「外国関係がゆるする故に日本国統監の同意を得なければならない」と定めたため、1905年以降、朝鮮人移民は日本政府の許可を受けなければ移民できないこととなった。

また同法の下で渡航先も制限された。同法第7条には次のような文言がある。「移民處辦人はその代理人又は代表者が在留していない地に移民することができない」⁸⁰。つまり

朝鮮人移民は日本人の代理人がいる地域以外に渡航することができなくなった（ハワイには日本人の代理人がいるため、農商工部大臣の許可を受けることさえできれば法律上は渡航や渡航斡旋が可能だった）⁸¹。

この時代、旅券発行も制限されていた。1906年9月11日、日本政府は統監府令第34号の「韓国人外国旅券規則告知」において朝鮮人の「韓国巨民専用外国旅券」の取得を義務づけた⁸²。しかし同時に、統監府令第9条において「統監又は理事官が必要だと認める境遇にある場合、旅券の発券あるいは査証を拒絶することがある」と定めていたため、旅券の発券は国家の管理下で厳しく行われたのだった⁸³。また当時は、旅券を帰国と同時に返却する義務もあった。但し、朝鮮と隣接する「清国 盛京省・吉林省及黒竜江省」と「露領 薩哈連島・沿海州及黒竜州」地域については、1908年4月14日の統監府第65号において「同一旅券で外国を数次往復できる地域」に変更されたため、旅券返還の義務から除外された⁸⁴。さらに渡航先によって旅券の有効期限なども複雑に決められていた。例えばロシアの場合、有効期限が1ヶ月の旅券を発給したが、その期間を延長して滞在するためには「露國居住権」を取得し、居住権の交付にあたって「旅券税」を統監府に支払う義務があった⁸⁵。

それではハワイおよびアメリカ方面の渡航はどのように規定されたのだろうか。1907年4月、「学術研究の目的を以て米国へ渡航せんとする韓国人」⁸⁶は「邦人」と同じように渡航することができるが、それ以外の目的を持った者は「旅券発給制限ニ対スル理由照会ノ件（咸發大2061号、1907年6月18日）」において「北米合衆国・南米各国及英領殖民地渡航者に就ては何等かの制限を設けあるやに相見へ候得共右に關しては未だ別段の御通達に接せず」⁸⁷と通告し、1907年年9月3日の「外国旅券下付方に関する件（統發第5357号）」において、次の条件を提示した⁸⁸。

甲 合衆国本土

左の標準に従ひ旅券を下付すること

1. 商業を目的とする者は左の条件を具ふるものたるへし
 - (1) 現に商業に従事し若しくは商業上の経歴あるもの
 - (2) 旅券の外商業資金又は資金と商品にて相当の額を携帯するもの
2. 学術修行を目的とするものは左の条件具ふるものたるへし
 - (1) 中学校生徒若くは之と同等の学力を有すと認へき者

(2) 旅費の外相当の学資を備ふるか又は有資の親族等に於て之を補助する約束あるもの名を学生に假り實際労働を目的とするの疑ある者を拒絶せんとするの主意にして實際學術修行の目的たること疑なきものに対しては本項は左迄厳密なるを要せず幾分寛大の計らひあるへし

3. 商工農業等の視察を目的とするものは左の条件を具ふるものたるへし

其目的とする視察事業に就て相当の學歷を有するもの又は多年従事したる実歴あるもの(但普通の工農者又は雇人として従事したるものを除く)

(注意) 彼国の工農場に雇役せられ実地視察又は研究せんとするものは採用すへからず

4. 左記の類は事情斟酌許可差支なし

(1) 商業事務員等にして本社支店又は協議其外の団体より派遣せらるる者

(注意) 専ら商業事務に従事するものにて労力を供する使丁僕婢等を含蓄せず

(2) 商業上相当の學歷又は經驗を有し且つ英語に通達したる者にして確實なる目的を以テ彼地へ赴き事務員等として商社商店其外に雇はれんとするもの

(3) 工農漁又は鉱業等に就き相当の學歷又は經驗を有し且つ英語に通達したる者にして確實なる目的を以テ彼地へ赴き技術者として雇はれんとするもの

(4) 医師伝道師は本邦に於て其資格を具へたる者

(5) 在北米移民にして帝国領事の発給せる自己の在留證明書を有する者扨に其妻子(子は丁年未滿に限る)に限り相当の費用を携帯するもの

(6) 所轄帝国領事館に於て相当と認むる店舗を有し商業を経む者より其商業上の監督又は店員として呼寄せんとするときは其兄弟姉妹(其兄弟姉妹夫妻を含む)にして相当の携帯金を有する者

(備考) 移民は右第 5 号に該当するものの外当分一切禁止中なり

又契約労働者渡航につき他人の幫助を受くる者及上陸後公共費負担となるの虞あるもの(相当の携帯金なきものは米国移民検査官より凡て凭る認定を受くるを常とす)は米国移民法により上陸を拒絶せらるへきにより右に抵觸せざる者たるを要す

乙 布哇

移民は移民取扱人の周旋に係るものの外渡航の許可を興へざること但再渡航者又は布哇在留者の父子兄弟姉妹及び其配偶者にして布哇渡航後就業上差支なきものと地方官警に於て認定したるときは移民取扱人の取扱を要せず地方庁より直接旅券を交付ふることすなわち渡航が許可されたのは、商業視察、現地商社商店の事務員や監督、工農漁や鉱

業の技術者、医師や宣教師といった職業に就く人々だった。但し、ハワイの場合、これら人々に加え、「再渡航者」および「在留者の父子兄弟姉妹及び其配偶者」が許可された⁸⁹。しかし1907年12月28日の「韓国人の排日運動も有之旁此際嚴重の取締を要し候」という旨の通達により、商人や学生にまぎれた亡命者たちは取り締まりの対象となった⁹⁰。

以上の渡航と旅券をめぐる規制により、朝鮮からハワイへの渡航は1905年の移民制度廃止以後、きわめて難しいものとなった。さらに1908年になると、日米紳士協定という日米間の事情によって渡航がさらに難しくなった。日米紳士協定とは、日本とアメリカが1907年11月から1908年2月の間に7度にわたる協議の末、日本が自主的（紳士的）にアメリカへの移民を制限することを約束した協定である⁹¹。これによって1908年以降、朝鮮だけではなく日本からの移民も少なくなったが、家族移民の渡航は制限されなかったため家族や女性の移民は続いた。特に写真を交換して結婚を決めた「写真花嫁」といわれる女性移民がこの時から始まり、韓国併合後は朝鮮人も「写真花嫁」としてハワイやアメリカに渡っていった（アメリカの移民法改正により家族移民も1924年で終了した）。ハワイに渡った朝鮮人「写真花嫁」の数は、951人に上った（詳細は第4章参照）。

1924年以降、朝鮮からハワイおよびアメリカに渡った人は、学生と正式な旅券を持たない者だけとなった。正式な旅券を持たない者については公的な記録が残っていないため実態を把握することができないが、渡航方法については1922年の日本の総督府資料に次のような記録が残っている。「上海に一カ年以上在留し支那人名に変名して支那に入籍し支那政府より旅券を得たる者」、「日本船舶以外の外国船に抛り上海又は香港より学生の名義にて来り」。また中には日本に入港するときは「支那に変装」し、米国に入国するときに「韓人国民会の保証に抛り入国を許可せらるると云ふ」という「特殊の取扱」で入国した者もいた⁹²。また学生の場合も、日本政府が発行したパスポートをもって渡航した学生は300人いたが、その他に中国やヨーロッパを經由してアメリカに向かった者が500人存在した（学生のほとんどはハワイではなくアメリカ本土へ向かった）⁹³。

こうしてコリア系移民は、一時はハワイで日系移民に次ぐ集団になると目されるほどの勢いでその数を増やしたものの、移民制度が僅か2年半で廃止されたため移民者が激減し、最終的にハワイで1万人にも満たない小規模な集団を形成することとなった。そして移民制度廃止後も、渡航が厳しく制限されたことにより、祖国との往来がほとんど行われないう形に移民社会を形成していくこととなった。

- 1 朝鮮王朝は1897年の帝制実施により国号を「朝鮮」から「大韓帝国」に改称したが、特別の場合を除き、本論文は朝鮮王朝時代(大韓帝国期を含む)を「朝鮮王朝」あるいは「李氏朝鮮」と表記した(朝鮮半島の地域や人をめぐる呼称の使い分けについては序章の注1を参照)。
- 2 Henry Chung, *The Oriental Policy of the United States* (New York: Fleming H. Revell Company, 1919), 1.
- 3 アンドレ・シュミット(糟谷憲一訳)『帝国のはざままで:朝鮮近代とナショナリズム』(名古屋大学出版会、2007年)、8.
- 4 朝鮮に新たに日本公使として赴任した三浦梧楼と、第2次金弘集内閣の時に編成された訓練隊の禹範善大隊長が、閔妃の政敵である大院君を擁立し、殺害計画を企てたといわれるが、その真実は明らかではない。
- 5 宮廷に戻った高宗は、1897年8月に革新の詔を發布した。年号を光武に改元し、王を皇帝に改称、即位式を挙げた。同年10月には、国号を「大韓帝国」と改め、国旗を大極旗と制定した。
- 6 佐々木春隆『朝鮮戦争前史としての韓国独立運動の研究』(国書刊行会、1985)、29-30.
- 7 朴殷植(姜徳相訳注)『朝鮮独立運動の血史』(平凡社、1972年)、24.
- 8 しかし当時の朝鮮では自国の力で外国船を追い払った事件として大きくとりあげられた。
- 9 Jong-suk Chay, *Diplomacy of Asymmetry: Korean-American Relations to 1910* (Honolulu: University of Hawaii Press, 1990), 39.
- 10 Chay, *Diplomacy of Asymmetry: Korean-American Relations to 1910*, 41.
- 11 Chay, *Diplomacy of Asymmetry: Korean-American Relations to 1910*, 40.
- 12 長田『セオドア・ルーズベルトと韓国』, 12.
- 13 Chay, *Diplomacy of Asymmetry: Korean-American Relations to 1910*, 1.
- 14 長田彰文『日本の朝鮮統治と国際関係:朝鮮独立運動とアメリカ 1910-1922』(2006年、平凡社)、30; Yur-Bok Lee, “A Korean View of Korean-American Relations, 1882-1910” Yur-Bok Lee and Wayne Patterson (eds.) *Korean-American Relations 1866-1997*. Albany: State University of New York Press, 1999), 11, 18.
- 15 長田彰文『セオドア・ルーズベルトと韓国:韓国保護国化と米国』(1992年、未来社)、225-226.
- 16 Chay, *Diplomacy of Asymmetry: Korean-American Relations to 1910*, 68.
- 17 Lee, “A Korean View of Korean-American Relations, 1882-1910”, 13.
- 18 Fred Harvey Harrington, *God, Mammon, and the Japanese: Dr. Horace N. Allen and Korean-American Relations, 1884-1905* (Madison, Wisconsin: The University of Wisconsin Press, 1944; reprint, New York: Arno Press, 1980) 46; 長田『セオドア・ルーズベルトと韓国』, 18.
- 19 李省展『アメリカ人宣教師と朝鮮の近代:ミッションスクールの生成と植民地下の葛藤』(社会評論社、2006年)、15.
- 20 ワシントン DC に到着した一行は、まず清の公使館を訪問することになっていた。この背景には、アメリカ訪問に反対していた清に対する配慮と、内外に朝鮮との宗主関係を示そうとした清の思惑があった。しかしアレンは米国大統領との接見を優先させた。
- 21 Patterson, *The Korean Frontier in America*, 19.
- 22 Report on the Commerce and Industries of Korea: Covering 1903 and the first six months of 1904, Volume 2 January, 1899 – July 5, 1906, *Despatches from United States Consuls in Seoul 1886-1906* (National Archives, Washington, 1949), File Microcopies, No. 77, Roll 109.
- 23 米国議会は1884年7月に駐朝鮮公使職を「特命全権公使」から「弁理公使」へと降格した。
- 24 Yur-Bok Lee, “A Korean View of Korean-American Relations, 1882-1910”, 17; 長田『セオドア・ルーズベルトと韓国』, 21; Chay, *Diplomacy of Asymmetry: Korean-American Relations to 1910*, 17.

-
- 25 Acting Secretary Alvey A. Adee to H.N. Allen. Esq., April 25, 1905. *Diplomatic Instructions of the Department of State 1801-1906, Korea* (National Archives, Washington, 1949) Volume 2 December 1 1900 - December 4, 1905, File Microcopies, No. 77, Roll 109.
- 26 調印直前まで、朝鮮はアメリカの助力を求めた。王の高宗は、11月10日に日韓保護条約締結のためにソウルにやってきた伊藤博文特使と接見したにも関わらず、その直後にルーズベルト米大統領に書簡を送ろうとした。しかし書簡の伝達を米国公使モーガンに拒まれたため、ハルバート(Homer B. Hulbert)を密使に送ることとなった。11月15日に高宗の手紙を携えたハルバートが國務省にあらわれたが、その返答に数日待つ間の11月17日、第二次日韓協約が調印され、朝鮮の外交権は日本へと移行することとなった。
- 27 「ビッグ・ファイブ」とも言われる5大財閥は、J.F. Hackfield and Company, C. Brewer and Company, Alexander and Baldwin Company, Davids Company, and Castle and Cook Companyである。
- 28 ハワイ王国が樹立した時には約15万人から25万人のネイティブ・ハワイアンが存在したが、その数は百年後に約4万人に激減した。原因は、欧米諸国から持ち込まれた伝染病だと言われている。
- 29 契約移民とは、移民会社の仲介でサトウキビ農場と2～3年の労働契約した移民のことをいう。但し、契約移民の中には、1885年以降の官約移民と、1894年の私約移民が含まれる。契約移民は、1900年のアメリカ併合とともに禁止された。
- 30 1890年には全人口89,990人のうち中国人が16,752人、日系移民が12,610人を占め、白人の人口(6,220人)の4倍以上、全人口の3割程度を占めていたのだが、1900年になると、全人口(154,001人)のうち中国人が25,767人、日系移民が61,111人を構成し、白人人口の10倍、全人口の5割以上を占めるようになった(ハワイ報知社『アロハ年鑑:ハワイのすべて』(ハワイ報知社, 2002年), 56)。
- 31 Bong-Youn Choy, *Koreans in America* (Chicago: Nelson-Hall, 1979), 81.
- 32 Choy, *Koreans in America*, 92.
- 33 コリア系移民が投入される直前には、ポルトガルからの出稼ぎ移民が1900年12月から1901年10月まで受け入れられた。U.S. Department of Labor, *Report of the Commissioner of Labor on Hawaii, 1905* (Washington, D.C.: Government Printing Office, 1906), 102.
- 34 U.S. Department of Labor, *Report of the Commissioner of the Labor Statistics on Hawaii 1915* (Washington D.C.: Government Printing Office, 1916), 102; Bernice Kim, “The Koreans in Hawaii” (MA Thesis, University of Hawaii, 1937), 97.
- 35 Patterson, *The Korean Frontier in America*, 177-178.
- 36 Patterson, *The Korean Frontier in America*, 26.
- 37 Patterson, *The Korean Frontier in America*, 30.
- 38 その後の連絡は直接行なわれた(Patterson, *The Korean Frontier in America*, 125)。
- 39 「移民保護法(1894年3月1日勅令第42号)」『移民保護法制定並改正一件付同上施行細則』(1)(外務省外交史料館)。
- 40 Patterson, *The Korean Frontier in America*, 33.
- 41 Patterson, *The Korean Frontier in America*, 47.
- 42 しかし移民制度の違法性や東西開発会社とのトラブルから全額を返済した移民は多くなかった。Choy, *Koreans in America*, 93-94.
- 43 Patterson, *The Korean Frontier in America*, 43.
- 44 事務所は義州、平壤、ソウル、元山、仁川、木浦、釜山に開設された。
- 45 Patterson, *The Korean Frontier in America*, 46.
- 46 Yur-Bok Lee and Wayne Patterson, *Korean-American Relations 1866-1997*. (Albany: State University of New York Press, 1974), 85-86.
- 47 出稼ぎのみならず、歴史的に人の移動も広く行われてきた。「火田民」といわれる焼畑農民は、

-
- 朝鮮北部から現在の中国東北地方やシベリアまでの広い範囲を移動してきた(原尻英樹「東アジアのグローバリゼーション再考:朝鮮半島からの移動」『アジア遊学』81(2005), 85)。
- 48 Wayne Patterson, *The Korean Frontier in America: Immigration to Hawaii, 1896-1910* (Honolulu: University of Hawaii Press, 1988), 2.
- 49 Theo F. Lansing, Commissioner of Immigration and Advertising Agent for the Territory of Hawaii, *Notice, August 6th, 1903*, (Honolulu: University of Hawaii, Center for Korean Studies).
- 50 Houchins Lee and Chan-su Houchins, “The Korean Experience in America, 1903-1924”, *Pacific Historical Review* (November 1974), 552.
- 51 Patterson, *The Korean Frontier in America*, 49.
- 52 Houchins Lee and Chan-su Houchins, “The Korean Experience in America, 1903-1924”, 552-553.
- 53 Patterson, *The Korean Frontier in America*, 49.
- 54 Ellen Soo Sun Song Kang, *Stepping Stones*. (Elizabeth, N.J. and Seoul: Hollym, 2003), 69-70.
- 55 Morris Pang, “A Korean Immigrant”, University of Hawai‘i Student Papers and Journals (UHSPJ).
- 56 Lila K. Lee, “The Way Migrations Have Played a Role in My Family”, UHSPJ.
- 57 Mary Paik Lee, *Quiet Odyssey: A Pioneer Korean Woman in America* (Seattle: University of Washington Press, 1990), 6-7.
- 58 Arinaga Esther Kwon, “Contributions of Korean Immigrant Women”, Yong, Nancy Foon and Judy R. Parrish (eds). *Montage: An Ethnic History of Women in Hawaii*. (Honolulu: University of Hawaii, College of Education, General Assistance Center for the Pacific and Hawaii State Commission on the Status of Women, 1977), 73.
- 59 Kim, “The Koreans in Hawaii”, 78.
- 60 Choy, *Koreans in America*, 77.
- 61 Arinaga Esther Kwon, “Contributions of Korean Immigrant Women”, 72-81.
- 62 *Report of Commissioner of Labor Statistics on Hawaii 1915*, 64。正確な移民者数は不明である。それは労働局と移民局によって記録が異なるためである。この他に、移民百周年祭でムラバヤシ氏(Dukhee Lee Murabayashi)が1903年から1905年までの乗船リストをもとに作成した朝鮮人乗客者のリストがある。これによれば朝鮮人乗客者数は7,291人である。
- 63 Patterson, *The Korean Frontier in America*, 160-161.
- 64 チョン・キョンゴ『メキシコ・キューバ韓人移民史』(ソウル:韓国外国語大学校出版部, 2002), 6-8.
- 65 日本政府は大庭貫一の動きも把握していた。当時の在木浦領事若松兎三郎は、「大庭貫一なる者大陸殖民会社韓国移民総代理店長と称し、社員一名を従へ来港別紙広告を韓人間に配布し移民募集に着手せしが大庭に約十日間にして釜山に向け当地を發し(略)」と日本政府に報告している(1905(明治38)年3月20日『朝鮮移民に関する件(機密大18号)』(外務省外交史料館))。
- 66 1905(明治38)年3月20日『朝鮮移民と墨西哥の件(機密大13号)』(外務省外交史料館)。
- 67 チョン『メキシコ・キューバ韓人移民史』, 6-8.
- 68 Kim, “The Koreans in Hawaii”, 84-85.
- 69 Yǒng-ho Ch’oe, “The Early Korean Immigration: An Overview” Yǒng-ho Ch’oe (ed.), *From the Land of Hibiscus: Koreans in Hawaii* (Honolulu: University of Hawaii Press, 2007). 16; Myong Sup Shin and Daniel B. Lee (eds.) *Korean Immigrants in Hawaii: A Symposium on Their Background History, Acculturation and Public Policy Issues* (Honolulu: Korean Immigrant Welfare Association of Hawaii and Operation Manong, College of Education, University of Hawaii, 1978).
- 70 『韓國人ノ布哇出稼ノ件』(外務省外交史料館), 1.
- 71 同, 3-5.

-
- 72 Patterson, *The Korean Frontier in America*, 124.
- 73 「布哇國へ韓人出稼一件」『韓國政府布哇及墨西哥行韓國移民禁止一件(附・保護委託勸告ノ件)』(外務省外交史料館).
- 74 1903(明治 38)年 4 月外務大臣小村壽太郎宛移民取扱人森岡真、日向輝武、富藤忠太郎、山口熊野書簡「韓國移民布哇渡航防遏ノ件ニ付」『韓國政府布哇及墨西哥行韓國移民禁止一件(附・保護委託勸告ノ件)』(外務省外交史料館).
- 75 Patterson, *The Ilse*, 3.
- 76 1905(明治 38)年 4 月 5 日付外務大臣小村壽太郎宛駐朝鮮公使電報「日本外務省記録」『韓國政府布哇及墨西哥行韓國移民禁止一件(附・保護委託勸告ノ件)』(外務省外交史料館).
- 77 同.
- 78 D. W. Deshler to Huntington Wilson Esquire, Charge de Affaires, American Legation, Tokyo, Japan, September 16, 1905, The Hon. Terutake Hinata, Tokyo.Letter『韓國政府布哇及墨西哥行韓國移民禁止一件(附・保護委託勸告ノ件)』(外務省外交史料館).
- 79 Francis B. Loomis Acting Secretary to Erwin V. Morgan, Esq., April 4, 1905, *Diplomatic Instructions of the Department of State 1801-1906 Korea, Volume 2 December 1 1900-December 4, 1905, Microfilm* (National Archives, Washington, 1946), No. 77, Roll 109.
- 80 「移民保護法の改正の件(1908年4月14日)」朴志泰『大韓帝國期政策史資料集』(ソウル:先人文化社, 1999).
- 81 朴志泰『大韓帝國期政策史資料集』, 335-337.
- 82 韓国官吏と一般「巨民」の間で手続きが異なったが、1907年5月1日統監府令第16号「外国旅券規則」によって統一されることとなった。
- 83 朴志泰『大韓帝國期政策史資料集』, 340-341.
- 84 朴志泰『大韓帝國期政策史資料集』, 348.
- 85 「朴志泰『大韓帝國期政策史資料集』, 342-346.
- 86 「學術研究ノ目的ヲ以テ米國ニ渡航セントスル韓人ニ對シ海外旅行券下付ニ關スル件稟請(1907年4月25日京第147号)」および「韓國人外国旅券發券の件(1907年4月26日統發第2061号)」国史編纂委員會『統監府文書』9(韓國京畿道:政府刊行物, 1999), 3.
- 87 同.
- 88 「外国旅行券交付に關する件(1907年8月27日別紙甲号密第109号)」国史編纂委員會『統監府文書』9(韓國京畿道:政府刊行物, 1999), 5-7.
- 89 「在米韓人妻ニ對スル外国旅券下付ニ關スル件(1909年6月13日機密統發第1067号)」国史編纂委員會『統監府文書』9(韓國京畿道:政府刊行物, 1999), 14.
- 90 「米國行き外国旅券下付の件(1907年12月28日)」国史編纂委員會『統監府文書』9, 9.
- 91 東栄一郎「日系アメリカ人史概略」『アメリカ大陸日系移民百科事典』(明石書店, 2002年), 376.
- 92 朝鮮總督府警務局『米國ニ於ケル獨立運動ニ關する調査報告書(大正十年九月)』(外務省外交史料館), 296-297.
- 93 Choy, *Koreans in America*, 78.

第2章 「コリアン」の誕生：アイデンティティ形成と集団編成

ハワイの砂糖プランテーションで働き始めた朝鮮人移民労働者は、「コリアン」と呼ばれ、「コリアン」と名乗る毎日の生活の中で、「自分たちはコリアンである」という認識をもつようになっていった。それでは人々が自らを「コリアン」というカテゴリーに自己同一化していった環境条件とは、どのようなものだったのだろうか。また「コリアン」と分類された人々の間で、いかなる同族意識が芽生えたのだろうか。

またコリア系移民は、キリスト教を中心とする集団を形成したことで知られる。この理由について、これまでの先行研究はコリア系移民の中に移民以前からキリスト教徒だった者が含まれるだけでなく、朝鮮のキリスト教会が移民を後押ししたためだと説明してきた¹。しかしこれらの研究は、コリア系移民がなぜ日系や中国系移民とは異なるキリスト教を中心とした集団を形成したのか、という問いについては説明してきたものの、何が契機となって、コリア系移民が移民当初形成していた洞会組織（伝統的な「ムラ」社会）からキリスト教組織（キリスト教会）へと移行したのかについては、ほとんど触れてこなかった。そのため本章では、コリア系移民の内部的状況のみならず、外部的状況—キリスト教活動を奨励し、スト破りとしてコリア系移民を農場に引き止めようとした主流社会の働きかけ—を明らかにしながら、コリア系移民がキリスト教を中心とした集団へと変貌を遂げていった過程を検討する。

尚、本章では移民の口述史資料（ナラティブ）を参照して、考察をすることとする。ただし、本章で参照する口述史資料は、第二世代が1930年代と1940年代に第一世代の聞き取り調査を行って記録したもの（60人にインタビュー調査を行ったバーニス・B・H・キムの論文やハワイ大学ロマンズ・アダムス社会調査研究所に残されたハワイ大学学生のペーパー等）や、第二世代が後年（1990年代および2000年代）に語った口述記録であるために、その内容については資料の性格に即した限定と注意が必要である。また後半部のストライキや労働環境史的状况については、当時発行されたハワイ労働局の報告書および従前の労働史的研究を主に参照する。

1. 「コリアン」キャンプからの出発

砂糖プランテーションでの仕事

20世紀初頭のハワイの砂糖プランテーションは、出身地を示すカテゴリーが他のどのカテゴリーよりも優先される場所だった。これは集団間の競争意識を芽生えさせ、生産性を高めようとした経営者の意図によってつくられたものであるが、これによって移民労働者は生活も仕事も民族ごとに振り分けられることになった。また賃金も、コリア系が移民した頃は、まだ個人の能力や経験ではなく民族で決められた。この状況の中でコリア系移民も、すぐに自分たちが「コリアン」というカテゴリーに分類される人々であることを自覚するようになった。それでは民族ごとに振り分けられた生活とは具体的にどのようなものだったのだろうか。

プランテーションの仕事は、日の出とともに始まり、日の入りとともに終わった。そのため移民労働者は朝5時に起床し、5時半に現場に向かうトラックや小型の機関車に乗った。そして昼の30分の休憩以外、夕方4時半から5時頃まで働いた。

1日の作業内容は「ルナ(luna)」という現場監督が言い渡した。ルナは、労働者の間で競争意識を芽生えさせるため、仕事の早い者を先頭に全員を一列に並ばせ作業を進めたり、仕事の効率が悪い者や手を休めたり座り込んだりする者には罰を与えたりした。一人のルナの下で約250人の労働者が働いた²。

ルナには、ポルトガル系移民が多かった。この理由は「アメリカ人」経営者と同じ「白人」であったためである。「アメリカ人」経営者もポルトガル系移民も、労働者の大半を占めるアジア系移民から見ると同じ「白人」だった。そのためポルトガル系のルナは、労働者の不満や反感が経営者に向かわないための緩衝材のような役割を果たした。但し、コリア系移民がハワイに到着する頃には、ポルトガル系以外の移民もルナになっていた。この頃になると労働者と異なる民族であることが、ルナとして任用する際の条件になることが多かった。例えばコリア系移民にはドイツ系やプエルトリコ系がルナになり、逆にポルトガル系、プエルトリコ系、フィリピン系移民には、中国系や日系（のちにコリアン系）移民がルナとなった³。

しかしルナとの関係は必ずしも良好でなかった。ルナの酷い仕打ちによって、1903年にはハワイ島のプランテーションで、コリア系移民が逃げ出す事件が起きた。また1904年には、腹痛を訴えたコリア系移民が、かかりつけの医師から腹部を蹴られ死亡したことに

抗議して、医師らを襲撃する事件も発生した。そして 1905 年には、移民 80 人がルナを襲う事件や、その際にコリア系移民が解雇されたことに対する抗議のストライキが起こった⁴。また当時、コリア系移民の働く場所に通訳がつくこともあったが、通訳の仕事は言葉の伝達だけでなく、移民の仕事ぶりを監視する役割もあった⁵。このルナや通訳との関係について、インタビュー調査を行ったチョイ(1979 年)は、移民の語りを次のように紹介している。

動物のように扱われたよ。住むところも納屋みたいなところだったし。でもこの非人間的扱いを私たちは抗議できなかつたんだ。なぜなら言葉ができなかつたからだ。そして仕事を失う心配もあった。通訳もルナも高い給料をもらっているから、プランテーションの経営者側の立場を擁護していたしね。白人男性社会の中で、どうすることもできなかつた⁶。

このように朝鮮人移民労働者は、「同じコリアンだから」という理由で同じ仕事に就くことになったが、そこでかれらは名前のかわりに「コリアンの〇〇番」といったように、出身地と番号で呼ばれる毎日を送った。そのため仕事を始めたその日から、朝鮮人移民労働者たちは自分たちが「コリアン」と呼ばれる人々であることを自覚させられることとなったのである。但し、ここでは出身地が違ふことが重要であつて、どの国の国民であるかは重要ではない。そのため朝鮮人移民労働者が名づけられた「コリアン」というカテゴリーは、ナショナルやエスニックな意味はなく、単純に出身地を示すカテゴリーとして使用された。

砂糖プランテーションでの生活

砂糖プランテーションの移民労働者たちは、農場に付設された長屋式住居 (long houses) で生活した。長屋式住居も、やはり出身国別に割り当てられた空間だった。新しい移民がやってくるたびに住居は建て増しされ、古参の移民が新たに建てられた長屋に移り、後から来た移民がそれまで使われていた長屋に入った。コリア系移民が住んだ長屋は「コリアン・キャンプ」と呼ばれた。当時、コリア系移民の人口が最も多かつたエヴァ農場(Ewa)では、コリアン・キャンプに男性 349 人と女性 100 人が暮らしていたが、それ以外の場所では一般に 60 名程度 (女性 2,3 人を含める) であつた⁷。但し、ハワイに 65 のプランテーションがあるのに対して、コリアン系移民は 7800 人程度に過ぎなかつたため、小さなプ

ランテーションでは他の移民と住居を共有し、「ミックス・キャンプ」といわれる多様な国の人々が暮らすキャンプで共に生活することもあった。

長屋の中は、寝具があるわけでもなく、食事をするための机や椅子があったわけでもなかった。長屋は、寝床と食事のための場所が与えられた大きな箱のような建物だった。中には、床に日系移民が作った「ござ」のようなものがあったが、人々は乾いた干草を集め、手持ちの（あるいはプランテーション内に設置された売店で購入した）厚めの生地を使ってマットレスをつくり、寝床を用意した。枕は布団と同じ要領でつくる者もいたが、木材を四角形や円形に切り取って「木枕」（朝鮮の枕）をつくる者もいた⁸。

移民当初は、一つの大きな建物にマットレスが敷かれた粗末な長屋ばかりであったが、やがて建物の中をいくつかの部屋に仕切った長屋や、食堂のスペースが設けられた長屋が登場するようになった。一つの長屋には約 20 人が暮らし、家族移民は長屋の中に設置された小部屋か、長屋の外に建てられた小屋に住んだ。

食堂は、長屋のそば（あるいは中）にあった。食堂の料理は移民が初めて口にするものばかりであったが、ここをおいて他に食事を取れる場所はなかった⁹。住居費は無料だったが、食費（6 ドル）は給料から天引きされた。コリア系移民の数が多い農場では、コリア系移民がコックとして雇われることもあった。コックは毎日 3 時に起き、朝食と昼食を用意し、夕方に夕食を用意した。コックの食費は無料だった。

一方、小屋を与えられた家族移民は自炊する者が多かった。煮炊きに必要な道具や家具も、すべて自分たちで揃えなければならなかった。当時の様子について、ある移民は次のように回想している。

（ハワイに住み始めるようになってから数年後）私は父に聞いてみた。ハワイに来て私たちがバナナを食べたことがあるかと。そうしたら父は、5～6本のバナナがたったの 5 セントで売っていたけれど、買うお金がなかったと言った。着替えと寝具を僅かばかり持ってハワイに来たから、バナナを買うお金もなかったと父が教えてくれた。そして干草でできた粗末な小屋に住み、地べたで寝、家事や家具を一から調達しなければならなかった当時の状態を教えてもらった¹⁰。

またプランテーションで共同生活を送るうちに、コリアン女性たちの中からコリアン男性のために、朝鮮料理や洗濯の仕事始める者がでてきた。数人から十数人のコリアン男

性と毎月契約をし、彼らの食事や洗濯を引き受けた。食費は6ドル前後、洗濯代は1ドル程度だった。

プランテーションの給料は、月16ドル程度だった(1905年5月以降は18ドル程度に)。給料の中から、食費6ドルと洗濯1ドルを差し引くと、手元に9ドル残るはずであるが、キャンプ内の売店で購入した品物の代金を差し引くと、大抵の人は僅かのお金しか残らなかった。売店は大概キャンプ内に一店舗しかなく、売られている商品の値段は割高に設定されていた。当時、米などの日系や中国系が常食にしている食料品は、かれらから安く買うことができたが、生活必需品や煙草、酒といった嗜好品を調達するためには、この売店を利用する以外に方法がなかった¹¹。当時の生活状況を調べたパターンソン(2000年)は、生活の窮状ぶりを嘆く移民の言葉を次のように紹介している。

(売店で毎月12ドル55セントも払い)もう希望がなくなってしまった。こんな生活なら学校で勉強したくてもお金がないし、朝鮮に戻りたくても船代さえないんだから。¹²

また収穫期は別として、日曜と祝日が休日とされた。朝鮮語しかできなかつた移民の多くはキャンプで一日を過ごした。休日の様子について、当時プランテーションにいた移民にインタビューを行ったキム(1937年)は、その言葉を次のように紹介している。

最初の数年間のコリアン・コミュニティは、炭鉱の飯場みたいだった。騒々しくて、楽天的で、酒とギャンブルが好きで、仲間同士義理堅いけれど、どこかいい加減な感じだった¹³。

仕事も生活も共にする毎日の中で、朝鮮人移民労働者の間では親近感も生まれていった。アラアア(Alaa)プランテーションの様子について、あるコリア系移民はインタビュー調査の中で次のように語っている。

アラアア・プランテーションが働き先となった。ここでは他の移民と離されたところにコリア系移民が住んだ。だから自然とコリア系移民はかたまって暮らすようになった。朝鮮語以外の言葉をしゃべることができない外国人(Aliens)だったしね。

だからお互いを助け合う気持ちが自然と生まれた。ここでは皆が皆お互いを知っているし、毎日顔を合わす仲なんだ。他の国の人たちと接触することはほとんどなかった。接触するときは、何か必要に迫られた時だけだったしね¹⁴。

他の移民労働者との関係はどうだったのだろうか。コリア系移民は、隔絶した空間に暮らしていたわけではなく、日系や中国系、ポルトガル系、プエルトリコ系などの移民と隣り合って暮らしていた。あるコリア系移民は、プランテーションで暮らし始めて、箸とスプーンを使って食事をする自分たちに対して、箸だけで食事をする日系、中国系にも、手で食べるポルトガル系やプエルトリコ系にも驚いたことを記憶している¹⁵。但し、隣り合って暮らしていても、何らかの交流やつながりが生まれることはなかった¹⁶。

しかし争いやトラブルは発生した。その原因の多くは、日常生活のトラブルではなく、仕事や報酬をめぐる立場の違いだった。当時、同じ仕事をしていても出身国によって報酬が異なっていた。例えば、1905年マウイ島のラハイナ農場で1500人の日系移民がストライキを計画した時、コリア系移民は日系移民との待遇の違いからストライキの参加を拒否した。その結果、コリア系移民と日系移民の関係は、プランテーションの警備員がコリアン・キャンプとジャパニーズ・キャンプのまわりをガードしなければならない程の対立へと発展していった。さらに日系によるストライキが頻発するようになると、非日系のコリア系移民はスト破りとして高い賃金で農場主から雇われたため、対立感情は高まっていった¹⁷。

また日系移民との関係は、一時的に祖国情勢に左右されて悪化した。1905年、朝鮮の保護国化によって、一部のコリア系移民が日系移民に敵対心を向けるようになる一方で、一部の日系移民がコリア系移民を見下すような態度を示すようになったためである¹⁸。この時、日本領事館は日系移民にコリア系移民との接触を回避するよう呼びかけた¹⁹。しかし両者の緊張関係は深刻化したわけではない。その理由は、コリア系移民にとっても日系移民にとっても、ルナや経営者との関係が主要な関心事だったためである²⁰。

洞会組織と民族内関係

キャンプ生活は、法律も規則もない生活であったため、風紀の乱れが問題となった²¹。酒や賭博から生じるトラブル。数少ない女性たちの身の危険などの問題である。こうした問題を解決するために自治組織「洞会」が各地のコリアン・キャンプで結成された。ここでいう「洞」とは、朝鮮の「村」や「町」を意味する言葉である。朝鮮は、朝鮮王朝時代

から八つの道（八道）に分けられ、各道は「郡→面→里」あるいは「市→洞」の行政区画に区切られた²²。そのため「洞」とは、日本でいう「字」または「町」に相当する。朝鮮の伝統的な町会組織がプランテーションで形成されたのである。

洞会の代表者は投票で選び、選ばれた者は「洞長（동장）」と言われた。洞長は、比較的年齢の高い人から選ばれることが多かったが、必ずしも年齢の高いことが条件ではなく、素行善良、誠実さ、学歴などが考慮された²³。洞長は、キャンプ内で起こるトラブルや口論を調停する裁判官のような役割を担った。公正な判断をもとにトラブルを解決し、洞会がつくった規則や罰則を皆が守るよう目を配ることも求められた。

また洞会は、「査察」も選出した²⁴。150人を超える大規模なコリアン・キャンプでは査察が二人選出された。査察は、キャンプ内の警察のような役割を担った。規則に違反した者を洞長に報告し、違反者から罰金を徴収し、夜9時以降にコリアン・キャンプから抜け出して酒や賭博に興じている者を、キャンプに連れ帰る役割を負った。

罰金は、キャンプごとに異なったが、一般に酒を飲みすぎて酩酊状態になった者には1ドル、酔った上に喧嘩までした者には5ドルが課せられた。また日系や中国系の賭博場に出入りした者には5ドルの罰金が課せられた。同じ罪を三度犯すと、キャンプから追放された。この他に、女性問題では女性が3ドルの罰金を払い、それが夫婦に関わる問題であった場合は夫婦のいずれか、あるいは両方がキャンプを去らなければならなかった。

洞会の規則は、毎月の集会で決められた。集会では、会費も徴収された。会費は年3ドルから5ドルだった。集まったお金は、祝日の祝い事や子どもための教育、病床にある人のための食事などに使われた。

当時、通訳をしていたコリア系移民は、オーラル・ヒストリーで洞会の役割を次のように語っている。「(洞会組織のおかげで) コリアン村のモラルが徐々に改善された。そして洞会がプランテーションで次々に組織化すると、プランテーションを渡り歩く放浪者も減った」²⁵。

さらに洞会は、「祭り」も執り行った。朝鮮やアメリカの祝日にあたる日に特別の料理を準備し、酒を用意した。人々は歌や踊りを披露しこの日を楽しんだが、この日のために1ドルの「税金」も払った（全員が支払う義務があったため当時「税金」と言われた）²⁶。

こうして「コリアン・キャンプ」という生活空間の中で、生活共同体としての「ムラ」社会が形成されていった。但し、朝鮮の伝統的な「ムラ」社会が同姓の父系血縁集団「門中」（あるいは父方母方全体を含んだ親族関係）を中心に形成されていたのに対し、ハワイ

の「ムラ」社会は、血縁や地縁関係がほとんどない中で形成された²⁷。もともとコリア系移民は単身の男性が多く、地域的な偏りがあるわけではないので血縁・地縁関係が薄い、友人や親戚同士でハワイに来た者も、家族移民以外はその関係が考慮されず、別々のプランテーションで働くことになったため、血縁・地縁関係はほとんどない状態で洞会を組織した²⁸。

しかし朝鮮の伝統的な「ムラ」社会に類似した面は多い。例えば、朝鮮の伝統社会では、同じ「門中」（あるいは親族関係）の間でも貧富の差や、教育の有無、生業の違いなどがあるため、人の評価を行うときは、血縁関係のみならず人柄や職業、年齢、富などが考慮される²⁹。これと同じようにハワイの洞会でも洞長を選ぶ時に、年齢だけでなく人柄や教育面も考慮された。

また人々の関係も、朝鮮の「ムラ」社会と同じように形成されていった。若い人は年上を「兄」と呼び、子どもたちは大人を「おじ」と呼んだ。さらに朝鮮において、例えば済州島では、「ケンダン」といわれる父方・母方の親戚関係の他に、「親睦会」といわれる同世代・同年齢集団が重要視され、親睦会のメンバーが互いを親族用語で呼び合い、擬似的な親族関係を形成しているように、移民は「義兄弟の契り (sworn brothers)」を交わし、擬似的な親族関係を形成していった³⁰。「義兄弟」の関係は、例えば他のプランテーションに移る時も、義兄弟の「つて」を頼って行けば新しい仕事先のキャンプで温かく迎えられといった親戚関係のような人間関係をつくりだした。コリア系移民の中には、義兄弟の関係を示すために、腕に刺青する者も現れるようになった³¹。こうしてコリア系移民は、洞会という朝鮮の伝統的「ムラ」社会を築き、擬似的親族関係にもとづいた同族意識を形成していったのである。

2. ハワイ労働市場の変革の中で

ハワイ労働事情

1900年代のコリア系移民を取り巻く状況は大きく変わりつつあった。特に顕著だったのは、アメリカによるハワイ併合とともにアメリカ本土への移動が自由化され、労働者の大半を占める日系移民が、次々とハワイの砂糖プランテーションを離れるようになっていったことである。西海岸に向かった日系移民の数は、1902年に約1千人、1904年に約6千

人、1905年に約1万人に上り、1907年には4万2千人を上回った（1907年にアメリカ本土への移住が禁止）³²。

日系移民がアメリカ本土へ移住した理由は二つある。一つは、労働賃金がハワイよりも高かったためである。1900年になると、カリフォルニア州をはじめとする西海岸の地域の大規模農場や工場から、仲介斡旋業者がハワイにやってきて、求人活動を始めた。日系移民の新聞には、移住を促すような広告が毎日のように紙面を飾った。例えば1905年3月22日のハワイアン・ジャパニーズ・クロニクルでは、「苺やトマト摘みやビート植えの仕事、炭鉱や家事手伝いの仕事など多数。今こそ申し込みを！日給は1.50ドル！」と掲載された³³。この報酬は、日系人にとって二倍の収入を約束するものだった³⁴。

当時コリア系移民の求人活動も行われた³⁵。コリア系移民の雇用においては、アメリカ本土の二つの鉄道会社（Great Northern と Northern Pacific Rail Road）が、コリア系のホテルで事務所を開いた。その報酬は、1905年2月時点では1.10ドルだったが、3月に1.20ドルへ、4月に1.30ドルへ、5月には1.50ドルへと瞬く間に上昇していった。またカリフォルニアの果樹園の仲介斡旋者は、収穫期の日給1.50ドルを保証し、労働者を紹介した者にも1人につき10ドルの仲介料を払うことを約束した。その結果、1907年まで721人（うち男性653人、女性40人、子ども28人）のコリア系移民がハワイを旅立った³⁶。この数はコリア系移民の10人に1人が西海岸に向かったことを意味するが、移民して日が浅いコリア系移民にとって船賃28ドルを捻出することは容易ではなかったため、アメリカ本土に再移住する移民はこれ以上増えることなく終わった³⁷。

日系移民がアメリカ本土へ移住していったもう一つの理由は、ハワイにおける日系移民の労働環境が、なかなか改善されなかったからである。1900年以前に移民した日系移民の多くは、「契約移民」としてハワイにやってきた。契約移民は、先述の通り、渡航前に農場主と契約を結び、渡航費を農場側から提供されるかわりに数年間（3年が多かった）は特定の農場で働く「契約」を交わした移民のことをいうが、農場主に拘束され、厳しい労働条件と粗末な衛生医療事情の中で暮らした。また契約移民制度が廃止される前は、脱走や不服従に対する牢獄送りを含む罰則も受けた。

こうした労働環境に対して、日系移民はストライキを行い、改善を求めた。規模の大きいものだけをここで取り上げると、1890年に400人が過重労働に対するスト、1891年に150人が不払いの給料に対するスト、1892年に200人がルナ（現場監督）の解雇を求めるスト、1893年に250人が、暴行をめぐってルナの裁判の出廷を求めるスト、1894年に

は数箇所、100 人を越える移民によるルナからの虐待に抗議するストが起こっている。さらに 1896 年になると、日系の代表者が不当な規則の撤廃を求める集会を開き、1897 年には日系移民が逮捕されたことに対する 200 人の抗議運動も起こった³⁸。しかし契約移民制度の下で仕事を休むこと自体、罰金や牢獄送りという厳しい処分が下されていた中で、日系人のストライキはことごとく潰され、失敗に終わらざるを得なかった。

しかし 1900 年にハワイがアメリカに併合され、連邦法の「外国人契約労働者禁止令 (1895 年)」が適用されると、ハワイの「契約移民」制度が禁止され、移民労働者は「奴隷」ではなく「働くことを拒否する権利」をもつ労働者となった。これにより労働条件の改善を求めたストライキも、労働者の権利として認められるようになった³⁹。日系移民のストライキは、1900 年の一年だけで 20 件以上起こり、7,806 人の移民がストライキに参加した⁴⁰。その後 1902 年から 1905 年まで起こったストライキについて、ハワイ労働局が「すべてが日系人労働者によって行われたストライキ」と述べたように、ストライキは移民労働者の人口が最も多い日系移民を中心に起こっていった。

但し、ストライキの成果はすぐに現れなかった。むしろ 1904 年になると、ストライキが次々と失敗に終わってしまうようになる⁴¹。

(1) 1903/6/12 カフクにて (Kahuku, Oahu)

労働組合によるストライキで有るか否か：否 ストライキ日数：1

ストライキ前の従業員数：800 人 / ストライキに参加した従業員数：510 人

目的：放火罪で逮捕された従業員の釈放 / 結果：成功

(2) 1903/9/25 アイラにて (Aila, Oahu)

労働組合によるストライキで有るか否か：否 ストライキ日数：2

ストライキ前の従業員数：1909 人 / ストライキに参加した従業員数：450 人

目的：賃金の値上げ / 結果：部分的に成功

(3) 1904/3/4 オカラにて (Okala, Oahu)

労働組合によるストライキで有るか否か：否 ストライキ日数：2

ストライキ前の従業員数：620 人 / ストライキに参加した従業員数：459 人

目的：監督官の解雇 / 結果：成功

(4) 1904/5/2 ワイパフにて (Waipahu, Oahu)

労働組合によるストライキで有るか否か：否 ストライキ日数：4

ストライキ前の従業員数：2,400人 / ストライキに参加した従業員数：1,390人

目的：監督官の解雇 / 結果：成功

(5) 1904/5/31 エヴァにて (Ewa, Oahu)

労働組合によるストライキで有るか否か：否 ストライキ日数：3

ストライキ前の従業員数：2,469人 / ストライキに参加した従業員数：1,949人

目的：監督官の解雇 / 結果：失敗

(6) 1904/7/20 ワイパフにて (Waipahu, Oahu)

労働組合によるストライキで有るか否か：否 ストライキ日数：5

ストライキ前の従業員数：2,400人 / ストライキに参加した従業員数：1,400人

目的：日系移民担当の監督官の解雇 / 結果：部分的に成功

(7) 1904/12/8 ワイアルアにて (Waiialua, Oahu)

労働組合によるストライキで有るか否か：否 ストライキ日数：4

ストライキ前の従業員数：2,543人 / ストライキに参加した従業員数：1,196人

目的：月16ドルに相当する単価請負価格の価格改定 / 結果：失敗

(8) 1905/4/4 カフクにて (Kahuku, Oahu)

労働組合によるストライキで有るか否か：否 ストライキ日数：3

ストライキ前の従業員数：870人 / ストライキに参加した従業員数：166人

目的：サトウキビ裁断担当者の月給18ドルを保証する / 結果：失敗

(9) 1905/4/26 ワイルクにて (Wailuku, Maui)

労働組合によるストライキで有るか否か：有 ストライキ日数：1

ストライキ前の従業員数：886人 / ストライキに参加した従業員数：178人

目的：監督官の解雇 / 結果：成功

(10) 1905/5/13 ワイパフにて (Waipahu, Oahu)

労働組合によるストライキで有るか否か：不明 ストライキ日数：4

ストライキ前の従業員数：2,600人 / ストライキに参加した従業員数：316人

目的：1トン当りの単価請負価格の2セントの値上げと残業代の支給 / 結果：失敗

(11) 1905/5/15 ラハイナにて (Lahaina, Maui)

労働組合によるストライキで有るか否か：有 ストライキ日数：7

ストライキ前の従業員数：2,228人 / ストライキに参加した従業員数：1,589人

目的：監督官の解雇 / 結果：部分的に成功

(12) 1905/5/15 ワイルクにて (Wailuku, Maui)

労働組合によるストライキで有るか否か：有 ストライキ日数：8

ストライキ前の従業員数：898人 / ストライキに参加した従業員数：562人

目的：賃上げ、燃料の無償化、医療サービスの提供、キャンプ内の衛生管理の向上

結果：部分的に成功

なぜストライキは失敗に終わってしまったのだろうか。ハワイ労働局はこの理由について、ストライキの目的が明確でなかったからという見解を示している。ハワイ労働局は当時の日系移民労働者に対して、「故国よりも経済状態が良い土地に来ているためストライキの目的は賃金の値上げではない」「階級意識がまだ築かれていない」「経済的な要求を行う権利があるという意識がない」と発言したように、労働者としての意識がまだ確立していないと考えていた⁴²。そのため日系人のストライキは「雇用主や資本家に対する敵意はなく」「(敵意や暴力を)他の国からやってきた労働者に向けることもほとんどない」ものと考え、日系移民のストライキを「何を求めているのかいつもわかっているわけではない」と結論づけたのだ⁴³。

このように見做された日系移民のストライキが失敗に終わった背景には、労働者の連帯を疎外するハワイ独特の労働事情があった。当時の移民労働者は、先にも述べたように賃金が経験や能力ではなく、出身地によって決まっていたため、出身地を超えた連帯が難しい状況にあった。さらに日系移民のストライキが頻発したこの頃、中国系やコリア系、ハ

ワイアン、ポルトガル系などの非日系が日系の2倍の給料（1日1.5ドル）を得ていたため、連帯はますます難しくなっていた⁴⁴。ストライキが次々と失敗に終わる中、砂糖プランテーションの労働者の大半を占める日系移民は、ハワイからアメリカ本土へ移ることを選択していった。

大ストライキと賃金格差の撤廃

しかしこうした中、日系移民のアメリカ本土への人口流出を食い止め、ハワイの労働市場のあり方を大幅に転換させる出来事が起きた。1907年4月の大統領令589と、1908年の日米紳士協定の締結である⁴⁵。大統領令589はアメリカ本土への渡航を禁ずるもので、日米紳士協定は日本からの出稼ぎ移民を、日本政府が「自主的に」制限することを取り決めた協定である（移民労働者が対象であって家族移民や学生、旅行者はここに含まれない）⁴⁶。これにより、日系移民はアメリカ本土への再移住ができなくなり、ハワイの砂糖産業は日本からの移民労働者を新たに獲得することができなくなった。

日系移民労働史研究のオキヒロ（Gary Y. Okihiro）は、日米紳士協定以後のハワイの労働市場を「地元労働市場依存期（Years of Dependency）」と呼んでいる⁴⁷。先述の通り、ハワイの砂糖産業は、広大な土地所有を基に大規模工場生産化された単一作物の大量栽培方式で農場を経営し、安価な労働力によって経営を飛躍的に発展させてきた産業である。最初はネイティブ・ハワイアンを使って労働力を確保してきたが、産業の発展とともに労働力が不足するようになると、外国から新たに労働者を呼び寄せることで労働力を補うようになっていた⁴⁸。そして労働力の主力を中国と日本に依存する一方、新たな移民労働者を他の国から次々に投入し、中国系や日系に代わる労働力も獲得しようとしてきた。しかし1900年のアメリカによるハワイ併合とともに適用された中国人移民禁止法と、1908年の日米紳士協定によって、中国からも日本からも労働力を確保できなくなり、ハワイの砂糖産業は深刻な労働者不足に直面することとなった。その結果、ハワイの砂糖産業はこの時期に「経営者は労働力の供給をローカルの労働市場に頼るほかないという現実と直面し」、これまでのように労働者を「使い捨て」にできない時代を向かえたのだった⁴⁹。

このような中で、1909年の「大ストライキ(Great Strike)」が起きた。「大ストライキ」とは、オアフ島全土で一斉に繰り広げられた日系移民のストライキのことをいう。最初のストライキは、1909年5月9日、アイエア(Aiea)農場（オアフ島）で始まった。そして次々

に日系移民がストライキに参加する形で、ストライキがオアフ島全土に広がった。二日後にはアイエア農場に程近いワイパフ(Waipahu)農場で、19日にワイアルア農場(Waialua)で、22日にカフク農場(Kahuku)で、23日にワイアナエ農場(Waianae)で、24日にエヴァ農場(Ewa)で、26日にワイマナロ農場(Waimanalo)で起こっていった。最終的にストライキに参加した日系移民の数は、7千人に上った⁵⁰。

大ストライキの背景には、急速に高まった日系移民の連帯があった。前年の12月、日系移民は「増給期成会(Higher Wages Association)」を結成した。この組織は、日系人リーダー42人とYMCA日本人会、日系人社会の広い層の代表者が集まって結成した組織である⁵¹。結成後、1908年12月12日に集会を開き、増給期成会は「<クーリー>のような給与体系を見直すこと」をスローガンに掲げた。この時、ホノルルのアサヒ劇場には1700人の日系人が集まった。

翌年の1月、増給期成会は、「ハワイ砂糖耕主組合(HSPA)」に給料を現在の18ドルから22.5ドルへ一律に引き上げることを要求した。しかしこの交渉は決裂に終わり、増給期成会は大規模なストライキに突入することを決める。増給期成会がまず取り組んだことは、ストライキの参加を求めると各プランテーションを組織化するためのリーダーを選出することであった⁵²。そしてより広い支持を得るために、日系新聞に記事を掲載し、ビラを撒き、支援を求める手紙やチラシを送った。このような増給期成会の活動は、「ホノルルエリアにあるエヴァ農場に遊説に回ろうとしたとき、プランテーション警察官全員が銃をもち、一步でもプランテーションに足を踏み入れた侵入者は撃つぞ」と嫌がらせを受けることもあったが、徐々に日系移民の支持を集め、地盤を固めていった。

そして増給期成会はホノルルのヤマシロホテルに本部を設置し、オアフ島の日系人にストライキを呼びかける一方で、オアフ島以外の島(マウイ島、カウアイ島、ハワイ島)の日系人には仕事を続けるように説得した。これは他の島の住民が経済的な支援を行うことによって、オアフ島のストライキを成功させようとしたためである。また砂糖プランテーション以外の日系移民社会にも支持を訴え、在ホノルル日本領事や布哇新報、「ホノルル商工協会(Merchants Association)」からの支持は得られなかったものの、その他の多くの団体(「公衆風呂経営協会(Public Bath and Inn Association)」、「大工協会(Carpenters Association)」、「日系ホテル・宿屋協会(Japanese Hotel and Inn Association)」、「ホノルル床屋協会(Barbers Association, Honolulu)」、「小売商協会(Retail Merchants Association)」)からは支持を得ることに成功した。

そして増給期成会は、再度 HSPA と交渉に入り、次の条件を提示した。第一に、賃金の値上げを検討すること。第二に、出身国別賃金格差を廃止すること。第三に、物価指数にあわせた賃金体系に修正すること。第四に、家族移民のための住環境を改善することである。この中で特に日系人が強調したのは、国の違いにもとづく賃金と待遇の違いをなくすことであった。先述の通り、この頃のハワイでは同じ仕事をしていても、出身国によって報酬額も待遇も異なった。ポルトガル系やプエルトリコ系移民は月 22.5 ドルの報酬と優遇された住環境（例えば家族にはコテージ風の家屋）を得ることができたのに対し、日系移民は月 18 ドルと「豚小屋のような家屋」しか得ることができなかった⁵³。

また日系移民は、自分たちの要求が日系移民という特定の移民集団だけではなく、ハワイ社会全体にとっても有益であることを主張した。日系移民の労働条件の改善は日系移民のアメリカニゼーションを進めるため、それによってハワイ社会の一体感が増すことを強調したのである。また労働者の権利が認められることによって、「搾取される」という意識をもった労働者から、「中流階級」の意識をもった市民へ生まれ変わることができるため、ハワイの「資本家 vs.労働者」や「白人 vs.アジア人」の対立を超えることができると主張し、人々の支援を求めたのだった⁵⁴。

しかし 5 月上旬になっても、HSPA はストライキによって生じた経済的な損失を強調するばかりで、要求をまったく聞き入れなかった。そして 5 月 27 日に、HSPA がストライキ中の労働者の立ち退きを要求し、これに反感を募らせた 5 千人以上の日系移民が 6 月下旬にプランテーションをあとにするという事態が発生した。その後もストライキは Honolulu で続いたが、「ストライキを煽動している罪」で日系人リーダーの牧野金三郎、根来源之、田坂善吉、相賀安太郎、および日系新聞の『日布時事』の編集者と記者が逮捕され、演説の禁止や州兵の派遣も行われる等、嫌がらせが続いた。

また HSPA は、日系移民を孤立させるために心理的なプレッシャーも与えた。日系移民の代替はいくらでもいることをアピールし、中国系、ネイティブ・ハワイアン、ポルトガル系、コリア系などの非日系の移民労働者を大量にスト破りとして動員し、かれらに通常の日給の二倍以上の日給を払った。また新規労働者をフィリピンやロシアから呼び寄せる予定であることを繰り返し述べ、すでに何百人ものフィリピンからの移民労働者がハワイに向かっていると発表し、フィリピンからの新規労働者には最初の三年間の所得税を、HSPA が肩代わりするつもりであることも打ち出した（実際に HSPA はマニラに HSPA の事務所を開設し、ハワイまでの片道切符を払う約束をして移民の募集を始めた）⁵⁵。

ストライキは、4ヶ月に及んだ。この間、日系移民の多くが炊き出しや寄付などを行ってストライキを支持し、一時は「大和魂」⁵⁶が叫ばれ、日系移民の間で一体感も増していたが、経済的・物質的蓄えが尽きると、ストライキを中止せざるを得なくなった⁵⁷。8月5日、ヌアヌ通りの日本人学校に集まった日系移民の代表者たちは、ストライキの終了を宣言した。日系移民の敗北感は強かったが、3ヵ月後に事態は好転した。

11月29日、HSPAは日系人労働者の賃上げ要求を受け入れ、22ドルの報酬を払う発表をした。さらに国別に設けていた賃金格差を廃止することを約束した。これにより、「ハオリ（白人）」より低く設定されていたアジア系労働者の賃金はあがり、それまで優遇されていたポルトガル系やプエルト系、ヨーロッパからの移民の賃金は、僅かであるが下がることとなった。こうして1909年の日系移民による大ストライキは成功を収め、ハワイの砂糖プランテーションの出身地別賃金体系は、撤廃されることになった。

一方、ストライキの終了とともにスト破りの存在価値もなくなったため、コリア系移民がプランテーションからそれまで受けていたスト破りとしての優遇措置—キリスト教活動に対する経済的支援—は打ち切られることとなった。それではプランテーションが行ったコリア系移民のキリスト教活動に対する支援とは、どのようなものだったのだろうか。またそれはコリア系移民をどう変えたのだろうか。大ストライキまでのコリア系移民をめぐる状況を次に概観する。

3. 集団再編：キリスト教会の奨励

ストライキが起こるたびに、非日系を高給で雇っていたプランテーションの経営者は、非日系移民の定着率を高めるためのさまざまな措置を講じた。そしてそれは、例えば会社から雇われたルナ（監督官）の下で働くことを拒んだことに対して同じ国のルナを配置するなど、非日系の待遇を優遇することを意味した⁵⁸。こうした中、プランテーションの経営者は、コリア系移民を引き止める方策として、かれらのキリスト教活動を支援することにした。それではなぜ他の活動ではなく、キリスト教だったのだろうか。

もともとハワイは砂糖産業のみならず、各方面で宣教師団が活躍し、キリスト教が広められ、キリスト教活動に対する支援が広く行われてきた場所である。イギリスの探検家ジェームス・クックがハワイを「発見」した1778年から約40年後の1820年、最初の宣教

師団がハワイにやってきた。宣教師団は、宣教師のみならず教師、機械技術者、印刷技術者、農業技術者などによって構成されていたため、近代化を推し進めていたハワイ王国の各界で活躍するようになった⁵⁹。また当時疫病患者の治療に、宣教師団が医師としてあつたため、地元住民から広い支持を得るようになっていった。さらにハワイ王国のカメハメハ一世（在位 1795 年～1819 年）の妻であり、1825 年に即位したカメハメハ三世（在位 1825 年～1854 年）の摂生として実権を握ったカアフマヌがキリスト教に改宗すると、ハワイの法律や教育の場にも宣教師団は影響を及ぼすようになっていった⁶⁰。1836 年には、ボストン宣教師団のウィリアム・チャールズ牧師がハワイ王朝政府の西歐的政治の指導を行うなど、政治の中枢に立つようになった⁶¹。そして 1842 年には、宣教師団の医師として 1828 年からハワイに滞在していたジェリット・ジュットがハワイ政府の財務や行政に関与し、内務大臣に就任した⁶²。

このように政治社会的影響力をもった宣教師団やその近親者は、1840 年代に行われた土地制度改革を通して広大な土地を手に入れ、砂糖プランテーションを始めた。アレクサンダース(Alexanders)、ボールドウィンズ (Baldwins)、キャッスルズ (Castles)、クック (Cooks)、ライセズ (Rices)、ウィルコックス (Wilcoxes) は、宣教師あるいはその息子が始めたプランテーションである⁶³。そして二人の宣教師が始めたアレクサンダースとボールドウィンズが合併したアレクサンダー・アンド・ボールドウィン社（現在、CALIF）と、宣教師の息子が始めたキャッスルズとクックが合併したキャッスル・アンド・クック社（現在はドール・フード社）は、ハワイの「ビッグ・ファイブ」（五大財閥）に仲間入りし、ハワイの財政、市場、流通を操るほどの絶大な権力を握るようになった。また、砂糖産業以外にも、「パイナップル王」として知られたジェームズ・ドラモンド・ドールは、ハワイ共和国大統領を務めたことや、叔父のサンフォード・バラード・ドールが併合後のハワイ領知事に就任したことでよく知られているが、彼はユニテリアン派の神父の息子だった⁶⁴。更にこれらのプランテーションの中には、例えばコハラ農場が 1862 年に労働者の毎週日曜の礼拝と週一回（平日）の祈祷会への参加を義務づけたように、プランテーションでキリスト教を奨励したところもあった⁶⁵。

こうしたキリスト教的地盤が強いハワイの砂糖プランテーションで、コリア系移民のキリスト教活動は経営者から好意的に見られた。エヴァ農場の経営陣は、「労働者であるのに神を強く信じているところは自分よりも優るかもしれない」と述べ、750 ドルの寄付もしている⁶⁶。

しかし同時に、コリア系移民が「農場主は私たちがストライキに入らないように教会を立てた」と語ったように、経営者は労働者を農場に引き止める方策としてキリスト教活動を支援した⁶⁷。この背景には、コリア系移民のキリスト教活動に通じていたメソジスト教団の働きかけがあった。

1904年からメソジスト教団の日系移民とコリア系移民を担当していたワッドマン牧師 (Reverend John W. Wadman) は、プランテーション経営者に次のように呼びかけた。コリア系移民は、キッチンの片隅で日曜日の礼拝を行っている、敬虔なキリスト教徒である。そのためコリア系移民の信仰を支えれば、彼らは感謝して、他の農場へ移っていくことがないだろう。また信仰活動が支えられればコリア系移民は勤勉に働くだろうし、それによって大きな経済的見返りを得ることができるだろう、と⁶⁸。

このワッドマン牧師の働きかけに、プランテーション側も応えた。寄付や教会建設という形で支援する農場が多かったが、中には牧師の給料まで支払った農場もあった⁶⁹。砂糖産業もワッドマン牧師が代表に就任した「コリアン相互扶助組合 (Korean Benevolent Association)」に寄付する形で、コリア系移民のキリスト教活動を支援した⁷⁰。

一定の協力が得られるようになると、ワッドマン牧師はコリア系移民のキリスト教活動を拡大させるために、次の二つのことに着手した。一つは、前任のピアソン牧師の下、1903年に始まったホノルルのコリアン・メソジスト教会を、「正式に」ハワイ・メソジスト教団 (以下、「メソジスト教団」と略す) の傘下に入れることであった。コリア系に対する経済的支援をメソジスト教団が直接行えるようにするためである。それ故 1905年にメソジスト教団の下でコリアン・メソジスト教会 (以下、「メソジスト教会」という) を設置し、新しい教会をホノルルに建設した。メソジスト教会の最初のコリア系牧師に任命されたミン・チャンホ (閔燦鎬) は、それまで信者が自宅で行っていた日曜礼拝と日曜学校を教会に移し、朝鮮語のニュースレター「コリアン・クリスチャン・アドヴォケート (Korean Christian Advocate)」をプランテーションにいる信者に向けて発行した⁷¹。

もう一つは、コリア系移民の牧師を養成することであった。ワッドマン牧師は、移民が多い農場に専任の牧師を配置するだけでなく、移民が少ない農場にもその地域一帯を巡回する牧師を配置しようとした⁷²。そのために移民の中から牧師を育てた。あるコリア系移民は、父親が巡回牧師になった経緯について次のように語っている。「父は宣教師になるためのトレーニングを (朝鮮で) 受けていたから、島の巡回牧師として働いてくれないかと頼まれた。それから一年くらい父は教会のボード (board) から給料をもらいながら牧師とし

で働いた」⁷³。「ウッドソン牧師とユン牧師（Yun Pyung Koo）がカフク・プランテーションにいた私のところに来て一緒に布教活動をしなかと誘われた。私も長い間そのことを考えてはいたので、「イエス」と答え、カフクの仕事を辞めることにした」⁷⁴。ウッドソン牧師が着任してから二年間で17の教会が建てられ、1,600人のコリア系移民の男女が教会に通うようになった⁷⁵。

この一連の流れの中でコリア系移民のキリスト教活動は活発化した。もともとコリア系移民は、移民以前からキリスト教信者が多く含まれる集団だった。その背景には、前述の通り、ハワイの出稼ぎ移民が募集された際、朝鮮のアメリカ人牧師が信者にハワイ行きを勧めたという経緯があった。しかしこの他にも移民後のコリア系移民のキリスト教活動を活発化させる事情があった。それは通訳の多くが牧師だったことである⁷⁶。当時の朝鮮で英語を話すことのできた者の多くは、アメリカ人牧師を介して英語を身につけた牧師であった⁷⁷。中には、信者の新天地での生活を見届けるために通訳になった者もいた。コリア系移民は、移民以前にキリスト教に接することがなくても、3週間の船旅の中で、あるいは現地の生活の中で、牧師と接するようになっていった。

また通訳を兼任した牧師は、移民とプランテーション経営者をつなぐ窓口になるだけでなく、相互の言い分を聞く調停役になることが多く、生活や仕事の場面で移民の指導的者立場に立つことが多かった。また牧師の多くは、読み書きのできる知識人でもあった。そのため牧師は大人に英語を教え、子どもに朝鮮語を教えた。多くのプランテーションで人々が平日の夜や日曜日に教会に通うようになった。

こうしてコリア系移民は、擬似的親族関係を基盤とした集団からキリスト教会を中心とした集団へと変貌を遂げていった。そしてその契機となったのは、これまでの先行研究で明らかにされてきたように、コリア系移民がキリスト教による影響を移民以前から受けていた集団内の事情—移民以前からキリスト教信者が多く含まれていたことや通訳が牧師だったことなど—もあったが、それ以外に二つのコリア系移民をめぐる特殊な事情もあった。それは第一に、ある移民が「農場主は私たちがストライキに入らないように教会を立てた」と語ったように、コリア系移民をスト破りとして農場に引き止めておくためにプランテーション経営者がキリスト教会活動を経済的に支援したことである⁷⁸。そして第二に、コリア系移民のキリスト教活動を支援するメリット—コリア系移民の信仰を支えれば、彼らはそれを感謝して他の農場へ移らずに勤勉に働くようになるため経済的見返りも大きい—をプランテーション経営者に説得しながら、教会の建設や牧師の育成などに努め、キリスト

教活動を活発化させる等、キリスト教団のコリア系移民に対する活動が精力的だったことである。

但し、コリア系移民に対する農場からの支援は、1909年の大ストライキによって打ち切られることとなった⁷⁹。この背景には先述したように、ハワイの労働市場をめぐる二つの変化がある。一つは、大ストライキの結果、国の違いにもとづく賃金格差が廃止されたことである。もう一つは、フィリピンからの移民労働者が新たな労働力として大量にやってくる見込みがたったことだった。すなわちコリア系移民を農場に引き止める理由がなくなったのである。ウッドマン牧師は、この支援打ち切りの責任を取り、1914年に辞任した。

しかしすでにこの頃のコリア系移民社会はキリスト教化が進み、キリスト教会を中心とした集団が形成されていた。この頃の様子について、メソジスト教団には次のような記録が残っている。「ハワイの島々にいる 6,000 人強のコリアンたちは、キリスト教を歓迎するこの島にやってきてから 8 年間、キリスト教礼讓の心で完全に我々の監護の対象となった」⁸⁰。そのためキリスト教会活動に対する支援が打ち切られたあとも、コリア系移民社会はキリスト教会を中心とする集団を形成していった。ある移民はこの状況をわかりやすく次のように語っている。「教会に行っていない人はコリアンではない」⁸¹。

- 1 Choy, *Koreans in America*, 100; Kim, “The Koreans in Hawaii”, 137; Kim, *Koreans in America*(『在美韓人 50 年史』), 28; Patterson, *The Korean Frontier in America*, 103; Mahn-Yol Yi, “Korean Immigration to Hawai’i and the Korean Protestant Church”, 49.
- 2 Choy, *Koreans in America*, 94.
- 3 Choy, *Koreans in America*, 94.
- 4 John E. Reinecke, “Labor Disturbances in Hawaii, 1890-1925: A Summary”, Honolulu: The Author, 1966. (Honolulu: Hawaii State Library, 2010, photocopied).
- 5 労働者の賃金が月 16ドルから 18ドルだったのに対して、通訳は既婚者なら 30ドル、独身者なら 25ドル程度もらえた。中にはルナと同じ金額(50ドル～75ドル)の報酬が通訳に支払われるケースもあった(Patterson, *The Ilse*, 21)。
- 6 Choy, *Koreans in America*, 296 (Yang Chu-en interview)
- 7 Kim, “The Koreans in Hawaii”, 103.
- 8 Kim, “The Koreans in Hawaii”, 115.
- 9 Kim, “The Koreans in Hawaii”, 113.
- 10 Mary Paik Lee, *Quiet Odyssey: A Pioneer Woman in America*. (Seattle: University of Washington Press, 1990), 9.
11. Choy, *Koreans in America*, 94.
- 12 Patterson, *The Ilse*, 14.
- 13 Kim, “The Koreans in Hawaii”, 115.
- 14 Lila K. Lee, “The Way Migrations Have Played a Role in My Family”, UHSPJ.
- 15 Kim, “The Koreans in Hawaii”, 105.
- 16 Patterson, *The Ilse*, 16.
- 17 Patterson, *The Ilse*, 23.
- 18 Patterson, *The Ilse*, 47.
- 19 Choy, *Koreans in America*, 296.(Chu-en Yang interview).
- 20 Patterson, *The Ilse*, 16-17)
- 21 Choy, *Koreans in America*, 94.
- 22 大阪外国語大学朝鮮語研究室(編)『朝鮮語大辞典(上巻)』(角川書店, 1986). 686-687.
- 23 Kim, “The Koreans in Hawaii”, 108.
- 24 「洞長」も「査察」も朝鮮で使われている名称である。
- 25 Sonia Shinn Sunoo, *Korean Kaleidoscope: Oral Histories. Vol.1 Early Korean Pioneers in USA: 1903-1905*.(Davis, California: Korean Oral History Projects, 1982), 63-64.
- 26 Kim, “The Koreans in Hawaii”, 115.
- 27 中根千枝(編)『韓国農村の家族と祭儀』(東京大学出版会, 1973 年), iv.
- 28 Kim, “The Koreans in Hawaii”, 100.
- 29 Vincent S.R. Brandt, *A Korean Village: Between Farm and Sea*, 1971, Harvard University Press, pp.92-93.
- 30 原尻英樹「ケンダン・父系・『地縁』-『民族』の再構築プロセス」吉原和男・鈴木正崇・末成道男(編)『血縁の再構築: 東アジアにおける父系出自と同姓結合』(風響社, 2000 年), 158-160.
- 31 Kim, “The Koreans in Hawaii”, 108.
- 32 U.S. Department of Labor, *Report of the Commissioner of Labor on Hawaii, 1901* (Washington, D.C.: Government Printing Office, 1907), 15.
- 33 Ronald Takaki, *Pau Hana: Plantation Life and Labor in Hawaii, 1835-1920*. (Honolulu, University of Hawai’i Press, 1983), 141-142.
- 34 Gary Y. Okihiro. *Can Fires: The anti-Japanese Movement in Hawaii, 1865-1945*. (Philadelphia: Temple University Press, 1991), 36.
- 35 Patterson, *The Ilse*, 26.
- 36 U.S. Department of Labor, *Report of the Commissioner of Labor on Hawaii, 1901*, 15.

-
- 37 Patterson, *The Ilse*, 27.
- 38 Okihiro, *Cane Fires*, 43-44.
- 39 Okihiro, *Cane Fires*, 42.
- 40 Okihiro, *Cane Fires*, 23-23.
- 41 U.S. Department of Labor, *Report of the Commissioner of Labor on Hawaii, 1905* (Washington, D.C.: Government Printing Office, 1906), 144.
- 42 U.S. Department of Labor, *Report of the Commissioner of Labor on Hawaii, 1905*, 136.
- 43 U.S. Department of Labor, *Report of the Commissioner of Labor on Hawaii, 1905*, 137.
- 44 Takaki, *Pau Hana*, 161-182.
- 45 どちらもアメリカ西海岸で高まった日系人排斥運動の中で日系移民の人口増加を抑えようとした排日運動家らの圧力によって成立したものである。
- 46 この時「写真花嫁」と言われる人々が誕生した。写真花嫁とは、写真の交換によって結婚の約束を取り交わした女性のことである。日系移民の写真花嫁の数は、1908年に755人、1909年に436人、1910年に658人、1911年に865人、1912年に1,285人、1913年に1,572人と増え続け、その数はアメリカの移民法で移民が全面的に禁止される1924年まで約2万人に上った(1908年から1924年にハワイに渡航した日系移民の約三分の一にあたる)。韓国併合後は、朝鮮人も「日本人」写真花嫁としてハワイに渡った(詳細は第4章参照)。
- 47 Okihiro, *Cane Fires*, 39.(尚、「依存期」以前の1865年から1909年を「移民労働期(The Period of Migrant Labor)」と呼んでいる)。
- 48 18世紀中ごろには15万人から25万人だった人口が、19世紀中頃には4万円へと激減した(ハワイ報知社『アロハ年鑑:ハワイのすべて』(ハワイ報知社:2002年), 31.
- 49 Okihiro, *Cane Fires*, 39.
- 50 Takaki, *Pau Hana*, 153.
- 51 Takaki, *Pau Hana*, 153-154; Okihiro, *Cane Fires*, 47.
- 52 Okihiro, *Cane Fires*, 47.
- 53 Takaki, *Pau Hana*, 156.
- 54 Takaki, *Pau Hana*, 158-159.
- 55 Sheila Forman, “Hawaii’s Immigrants from the Philippines”, McDermott J., W Tseng and T Maretzki (eds) *People and Cultures of Hawaii: Psychocultural Profile*. (Honolulu: University of Hawaii Press, 1980), 163; Takaki, *Pau Hana*, 162-163.
- 56 最初は「日本人」の結束力を高めるために「大和魂」という言葉が取り上げられたが、ストライキの目的が日系のみならず労働者全体の利益にあることから、その定義が「目的を実現するために我々が一体となってベストを尽くすこと」に変えられた。
- 57 Takaki, *Pau Hana*, 159.
- 58 Okihiro, *Cane Fires*, 52.
- 59 中嶋弓子『ハワイ・さまよえる楽園:民族と国家の衝突』(東京書籍, 1993年), 32-33.
- 60 矢口祐人『ハワイの歴史と文化:悲劇と誇りのモザイクの中で』(中公新書, 2002年), 18-20; 中嶋『ハワイ・さまよえる楽園』, 34-35.
- 61 ハワイ報知社『アロハ年鑑』, 13.
- 62 中嶋『ハワイ・さまよえる楽園』, 38.
- 63 Okihiro, *Cane Fires*, 39.
- 64 中嶋『ハワイ・さまよえる楽園』, 250-251.
- 65 Takaki, *Pau Hana*, 40.
- 66 Sarah Lee Yang, “75 Years of Progress for the Koreans of Hawaii”, 17.
- 67 Esther Lim Ome, Video, The Roberta W. S. Chang Video Collection at the Center for Korean Studies, University of Hawai’i (RCVC).
- 68 Patterson, *The Ilse*, 56.
- 69 エヴァ農場は、1904年の時点で450人いたコリア系移民のうち110人が教会に通うなど移民当

初からキリスト教信者が占める割合が高い場所だった (Sarah Lee Yang, “75 Years of Progress for the Koreans of Hawaii”, 17)。

⁷⁰ Patterson, *The Ilse*, 62.

⁷¹ Patterson, *The Ilse*, 57.

⁷² Patterson, *The Ilse*, 57-58.

⁷³ Patterson, *The Ilse*, 58.

⁷⁴ Ibid.

⁷⁵ Patterson, *The Ilse*, 57.

⁷⁶ 通訳とキリスト教会の関係については次を参照。Yi, “Korean Immigration to Hawai‘i and the Korean Protestant Church”, 45-46.

⁷⁷ Ibid.

⁷⁸ Esther Lim Ome, Video, The Roberta W. S. Chang Video Collection at the Center for Korean Studies, University of Hawai‘i (RCVC).

⁷⁹ Patterson, *The Ilse*, 64.

⁸⁰ Official Minutes, 7th Session of the Hawaiian Mission of the Methodist Episcopal Church, Honolulu, Territory of Hawaii, March 23-25, 1912.

⁸¹ Nam Young Chung, Video, RCVC.

第3章 ナショナル・アイデンティティの発展：

祖国独立運動の発展と凋落

ハワイの砂糖プランテーションの中で、自らを「コリアン」であると認識するようになったコリア系移民は、ローカルな次元の「コリアン」という意識を、どのようにしてナショナルな次元の「コリアン」という意識に結びつけていったのだろうか。

「オリエントのアイリッシュ」と言われたハワイのコリア系移民は、祖国ナショナリズムが強い集団として知られた¹。そのためコリア系移民は、移民直後から祖国独立運動を活発に展開した集団だと思われる傾向が強い。しかしハワイでは 1910 年代になるまで祖国独立運動はまったく盛り上がりせず、祖国ナショナリズムもほとんど高まらなかった。本章ではまず始めに、1910 年以前の独立運動が、ハワイではなくサンフランシスコで始まったことに着目し、論ずる。特にサンフランシスコで盛り上がった祖国独立運動が、一般の移民ではなく、「韓民族独立の父」と顕彰される安昌浩を中心とする運動家らが主体となって広がった運動であることに注目し、アメリカにおける独立運動の展開を検討する。

次に、1910 年代にハワイで祖国独立運動が発展していった過程を明らかにする。移民の祖国独立運動への関心は、祖国の喪失という移民の経験によって高まったが、独立運動を発展させる契機となったのは、二人のナショナリストが運動の指導者としてハワイに招聘されたことだった。当時、運動家と一般の移民の間には、出身階層という面でもナショナリズムという面でも大きな差があった。独立運動家は朝鮮で教育を受け、「朝鮮人／韓国人」²としての意識を強くもっていたのに対し、一般の移民は近代国民国家としての体制が整っていない朝鮮において、教育を受ける機会がなかったため、移民以前にナショナリズムに晒されることがなく、アイデンティティをナショナルな次元で捉えるような発想方法をもっていなかった。そのため本章では独立運動をめぐる集団の階層差に注目しながら、ハワイの祖国独立運動が「上」から広まっていく過程を明らかにする。

尚、本章の前半部では、日本政府の在米朝鮮人の独立運動をめぐる報告書を主に参照する。この報告書を利用する利点は、全米各地の日本領事館が行った調査報告書が含まれているため、サンフランシスコ以外の地で独立運動が、どの程度発展していたのかを比較検討できる点にある。また後半部では、移民の口述史資料（ナラティブ）を多く参照する。この資料を利用する理由は、当時の資料の大半が運動家や運動団体の記録（新聞記事を含

む)であり、一般の移民が残した資料がほとんどないためである。ただしこれら資料は、移民第二世代が後年(1990年代および2000年代)に語った口述記録であるために、その内容については資料の性格に即した限定と注意が必要である。

又、本論文では移民第一世代を「1世」と呼び、第二世代を「2世」と呼ぶ。当時のアメリカでは、アジア系移民を「帰化不能外国人」に分類していたため、外国生まれの1世は、アメリカ国籍を取得することができない「外国人」であったが、アメリカ生まれの2世は、出生地主義にもとづいてアメリカ国籍をもつ「アメリカ人」であった。

1. 1910年以前：サンフランシスコの祖国独立運動

1910年以前の祖国独立運動

アメリカでコリア系移民の人口が最も多い地域はハワイであるが、アメリカにおける朝鮮独立運動は、ハワイではなくサンフランシスコで始まった。当時サンフランシスコには、韓国において今日、「韓民族独立の父」として顕彰される安昌浩がいた。それではサンフランシスコで始まった独立運動は、どのように発展し、いつどのような形でハワイの独立運動と関わっていったのだろうか。尚、本章では独立運動の階層差に特に注目していることから、朝鮮で独立運動に参加し、政治的な理由でアメリカに移民／亡命した移民のことを「在米朝鮮人」、あるいは「運動家」と呼び、一般の移民と区別する。

アメリカで最初に勢力を拡大した独立運動団体は、安昌浩が結成した「共立協会」である。安昌浩は、(後にハワイで活躍する李承晩や朴容萬と同じように)朝鮮で独立協会の愛国啓蒙運動に関わっていたが、独立協会の弾圧(1898年)を逃れ渡米していた³。そして滞在先のカリフォルニアで、1903年に「親睦会」(1905年に「共立協会」へ改名)を結成し、亡命者やハワイから移住してきたコリア系移民たちの支持を得ながら独立運動を展開していた⁴。

安昌浩は、「支配か、然らずんば滅亡か」というスローガンを掲げ、朝鮮民族が自力で独立を勝ち取ることを目指して運動を展開していたことで知られるように、共立協会においても、祖国朝鮮の「民族意識と国権回復」を基盤にした抗日運動を展開した⁵。共立協会は機関紙「共立新報」で、日本の朝鮮支配を「朝鮮奴隷化」と批判し、次のように述べている。「全国人民の生命財産は日本人の魚肉となり残忍なる虐待を受く。之を考れば共に天を

戴かざるの難なり」⁶。また三年の内に日米間で戦争が勃発するだろうと説き、カリフォルニアに移住した移民に独立運動への協力を次のように呼びかけた。「日米戦争は今後恐らく三年を待たざるへし是れ実に韓国の独立を回復する一大機会なりと云はざる可らず……此時に当り我等二千万の同胞が合心奮起して一度正義の旗を翻さへ祖国に於て我等を慝遂して怨難を報すること」⁷。

当時、このサンフランシスコで勢力を拡大する在米朝鮮人の独立運動に、日本政府も警戒感を強めていた。運動団体の活動を、日本政府は次のように見ていた。「団体の目的は在米韓人の利益を増進するに在りと称すれとも日韓協約の実行以来彼等は熱心なる排日黨と化し日本は韓国の滅亡を計るものとし愛国の美名を標榜し盛に排日思想を鼓舞す新聞は漢文週刊にして発行数は三千五百及至四千枚に達し読者の多数は本国及布哇に在る」⁸。

こうした中、在米朝鮮人の名を世界に知らしめる事件がサンフランシスコで起きた。それが「スチーブンス暗殺事件」である⁹。1908年3月23日、日本によって韓国の外交顧問になり、親日派として知られていたダラム・ホワイト・スチーブンス（Durham White Stevens）は、日米関係の悪化を懸念した伊藤博文の意向を受け、アメリカ社会に日本の功績を称揚するために海を渡った。サンフランシスコに到着したスチーブンスは、さっそくアメリカのメディアに日本政府の「功績」をアピールした。現地の新聞に「韓国の王室が徳を失すること甚しく政党は頑固で人民の財産を奪取するばかりであり、国民は愚昧で独立する資格がないから、もし日本に帰属しなければロシアに占領されるであろう」とコメントを寄せ、「伊藤が韓国を治め韓国に益をもたらしたので、韓国人は歓迎すること篤いものがある」と発言した¹⁰。

このスチーブンスの発言に対して、サンフランシスコの在米朝鮮人の反感が高まる中、在米朝鮮人の田明雲が、ワシントンに向けて汽車に乗り込もうとしたスチーブンスを襲い、発砲する事件が起きた。しかし田明雲が撃った弾丸は、スチーブンスに命中しなかった。二人は揉み合いになったが、そこに新たに二発の弾丸が飛んできた。一つはスチーブンスに当たり、もう一つは田明雲に当たった。結果、銃弾に倒れたスチーブンスは死亡したが、田明雲は重症を負ったものの一命をとりとめた。この時スチーブンスを狙撃したのは、在米朝鮮人の張仁煥であった。田明雲と張仁煥はスチーブンス殺害を共謀したわけではなかったが、同じ目的をもった者が同じ場所に居合わせるといふ偶然が重なった¹¹。その後の裁判で張仁煥は、心神喪失を主張したが、25年の懲役刑が言い渡された（服役中に減刑され1930年に出獄した）¹²。田明雲は、彼の犯行を裏づける証人や証言が見つからないとい

う理由から起訴が延び、その間にニューヨークに逃れたため、結局不起訴処分となった¹³。

こうして在米朝鮮人の祖国独立運動が、一気に世界中（特に日本政府）に知られるところとなった。しかしここで重要なのは、この時期の独立運動が、サンフランシスコという限定された場所で発展したことである。スチーブンス事件をきっかけに、日本政府の指示の下、全米各地の日本領事館が、在米朝鮮人の独立運動に関する調査を行ったが、その報告書によれば、コリア系移民の80%が暮らすハワイにおいても、当時は独立運動がほとんど発展していない。各地の状況についてこの調査は次のように報告している¹⁴。

シアトル¹⁵

シアトル在住の朝鮮人について、在シアトル領事の田中都吉は、鉄道労働に従事していた朝鮮人が数十名いたものの今はほとんどいないと報告したが、その後「昨年末布哇より『シアトル』へ渡航せし者略は三百名に達し一時鉄道に就働したれとも其後殆んど加州地方へ赴き」と訂正し、人口が一時300名に上ったが、その後68名に減ったと報告した。そして独立運動については、「当地方に於ける韓人は皆日本人又は支那人と自称し居り韓人なりと云ふもの頗る少なき為め本件調査上困難に候」とその実態を把握することができないと一度は報告したが、その後「排日的言動をなすか如きものは殆んど無き様に候」と改め、独立運動が行われているようなことはないと報告した¹⁶。

シカゴ¹⁷

在シカゴ領事館も、朝鮮人の人口が少なく、生活状況を把握することが難しいことから、「当地方には韓人にして店舗等を構へ何等営業に従事し又は相当生活を営めるものは之を發見し難き」と伝えた。そして「韓人の在留清人間に出没したる」事実もあったが、朝鮮人の存在を確認することが難しく、反日的活動は耳にしないと報告した。

東海岸¹⁸

ニューヨーク、ボストン、フィラデルフィアの朝鮮人人口や生活実態について、在ニューヨーク総理事の水野幸吉は、「韓人等にして我在留民と交際往復致候者殆んど皆無の有様なるに如」と述べ、その実態を把握することが難しいと報告した。そしてニューヨークに在米朝鮮人の「総数約三十二達したる」が、日本人と称して暮らしていることを、次のように述べている。「公然日本人の指名を冒し又は日本人と称する者も多き如し而して当館にて

其の氏名原籍を確め得たる者に就て之を見るに京城（ソウル）及び其の付近の者多きか如し」。

ハワイ¹⁹

ハワイは、コリア系移民の80%以上が暮らす場所である。しかし在ホノルル総領事の上野専一は、ハワイのコリア系移民は経済力が低く、生活も豊かではないことから、次のように述べた。「殆んど全部農業労働者にして貯蓄あるもの至て少なく其生活状態は推して貧乏なる者に有之候」。そしてそれら人々の間で、独立運動はほとんど見られないという見解を示した。

ハワイの祖国独立運動

ハワイにおける祖国独立運動は1910年代に急速に発展した運動であるが、それ以前にハワイで独立運動を掲げた団体が存在しなかったわけではなかった。チェ（2003年）は、1903年から1908年まで、政治活動を目的とした団体がハワイに14あったと指摘している²⁰。しかしこれら団体は、いずれも規模や組織力が小さく、実質的には相互扶助的な活動を行っていることが多かった²¹。

但し、規模は小さいものの、政治的色彩が強い団体が一つだけあった。それは1903年8月7日にホン・スンガが結成した新民会である。新民会は、相互扶助を目的に結成された団体であるが、1903年12月にカウアイ島で最初の事務所を開設すると、その目的を「本国と海外にいる人々の手で祖国コリアを救う」と改め、政治色を強めた²²。しかしメソジスト派（メソジスト教団のピアソン牧師と親しかったメソジスト教会の牧師とその信者）と非メソジスト派（エピスコパル教会の信者を中心に）の間で対立が発生し、各派閥はそれぞれの機関紙（前者は月刊紙「布哇韓人教報」[1904年11月から1905年1月まで]、後者は隔週紙「シンジョー・シンミン」[1904年3月から1905年4月まで]）を発行したものの、内部対立の激化から、主だった活動はほとんど行われなかった²³。しかしながらこの新民会は、ハワイで最初に朝鮮語の新聞を発行したことで名が知られるようになった。1905年に機関紙「シンジョー・シンミン」を「時事新報（The Times）」に改名し、朝鮮語の新聞を月二回発行した²⁴。この新聞は、ハワイで唯一かつ最初の朝鮮語新聞になったため、移民の間で広く読まれるようになった。当時、新聞を読むためのハングル文字の勉

強会も各地で開かれた²⁵。

こうした中、ハワイのコリア系移民は、すべての団体を統合し、一つの団体を結成した。1907年9月2日に結成した「韓人合成協会 (United Korean Federation)」である。ホノルルの本部を頂点に、ハワイ各地に47の支部を置いたこの団体は、会員約1000人を擁する規模としては、ハワイで最初の団体となった²⁶。韓人合成協会は、会員から年間\$2.25の会費を徴収していたため財源が豊かだった。また、当時はまだめずらしいハングルのタイプライターを購入し、週刊新聞「合成新報 (United Korean News)」を発行した²⁷。

ハワイのコリア系移民の組織力は、韓人合成協会を通して強められていった。そして1908年11月30日、韓人合成協会は共立協会を含めたカリフォルニアの運動団体と協議を重ね、ハワイとアメリカ本土の団体を統一し、アメリカ地域を代表する朝鮮人組織を立ち上げることを決めた。そして1909年2月1日、ハワイとサンフランシスコで安昌浩を代表とする「国民会 (Korean National Association)」が結成された²⁸。この組織はアメリカ以外の地域の独立運動とも連携し、1912年11月8日には、世界の在外コリアンの代表者会議をサンフランシスコで開くまでに、規模を拡大させた（この時国民会は、シベリアとメキシコを入れた4つの地域から編成された組織へと改編し、「大韓人国民会」に改名した）²⁹。

国民会の結成により生じた最も大きな変化は、アメリカにおける祖国独立運動の拠点が、サンフランシスコからハワイへと移っていったことである³⁰。運動拠点が移った理由は、会員の大半がハワイに住んでいたため、組織力を強化するためにも、運動資金を得るためにも、ハワイの住民を取り込む必要があったためである（発足時に会員は2,351人いたが、そのうちハワイの会員は約2,000人を占めた）³¹。特に、国民会は韓国併合(1910年)後に、「国家」としての一切の業務を代行することを宣言する。朝鮮の国籍を失った移民を国民会に「国民登録」し、登録者から「税金」という名の下で入会費と会費を集めたため、ハワイの国民会には膨大な資金が集まった。また寄付金も集め、1909年から1920年まで国民会ハワイ地方総会は、3億ドル以上の資金を集めた³²。当時はまだ一家が一月30ドルで暮らせた時代である。このハワイで集められた資金は、国民会を通して朝鮮内外の運動家の活動を支え、1919年の上海臨時政府樹立のときには、その経済基盤を支えるほどになった。国民会の資金の流れについては、当時の日本政府も次のように警戒感を示している。「義捐金募集中なりし由なるか其募集に就ては両義士合博なる印刷物を各地に配布し集金なしつつありし趣にて京城より米国へ送金したるは一千五百円にして」³³。

2. ハワイにおける祖国独立運動の発展と凋落

二人の指導者

一般の移民と運動家の間には、大きな差があった。一般の移民はナショナリズムに晒されたことがなかったため、祖国独立に対する知識や経験がまったくなかった。一方、運動家は朝鮮で教育を受けることができた両班階級出身であったため、世紀転換期の朝鮮において、一部の知識人の間で萌芽しつつあったナショナリズムに触れていた。すなわち独立運動家は近代化の洗礼を受け、ナショナリズムの中で形成された「朝鮮人」としての帰属意識をもっていたのに対して、一般の移民はそうした近代的な発想方法をもっていなかったのである。

ゆえに国民会の活動は、一般の移民に祖国愛国の精神を教え、独立運動に人々を動員することが中心となった。この国民会の活動を監視していた日本政府も、その活動を「一般労働者ニ在リテハ知識ノ程度非常ニ低キト共ニ全然故国ノ事情ニ通曉スルノ機ナキカ故ニ容易ク扇動者ノ言ニ騙ラレ愛國ノ美名ニ魅ヒラレ日二月ニ排日ノ学ヲ望ミ」³⁴と報告している。しかしハワイでは、それを遂行できる指導者がいなかった。そこで二人の運動家がハワイに招聘された。それが李承晩と朴容萬である。

最初にハワイにやってきたのは、朴容萬であった。朴容萬は、安昌浩と同じように渡米以前から民族主義的ナショナリズムと国権回復を唱え、「独立協会」の活動に加わっていた人物である。独立協会の活動によって投獄されたが、朝鮮人牧師とアメリカ人宣教師の手によって脱獄し、1904年にアメリカに渡った。渡米後は、鉄道工事の人夫として働いていた時期もあったが、1908年にネブラスカ州のヘースティングス陸軍士官学校（Hastings Military Academy）に入学し、ネブラスカ大学の学士と修士の学位を取得した。

ハワイの国民会は、朴容萬を国民会の新聞、「国民報」の主筆に招聘した³⁵。国民会は、1909年2月12日から「新韓國報(The United Korean News)」を発行し、それを1913年8月13日号から「国民報(The Korean National Herald)」に改名し、サンフランシスコおよびハワイで発行していた。この新聞は、ハワイやアメリカ以外にも、「間島」（現在の中国吉林省東部の延辺朝鮮族自治州一帯）などに住む国外朝鮮人にも配布された新聞で、朝鮮国内では1910年代に「治安妨害」として、たびたび発行が禁止された新聞である³⁶。

1912年12月からハワイで活動を始めた朴容萬は、ハワイのコリア系移民社会に李承晩を招請することを提案した。李承晩と朴容萬は、朝鮮で同じ「独立協会」の活動に参加し、

投獄された経験をもっていた。また朴容萬は、李承晩が獄中で書いた『独立精神』をひそかに国外に持ち出し、サンフランシスコで出版させることに成功していた³⁷。二人は獄中の同志であったが、それ以外にも共通点があった。それは二人がキリスト教徒であり、キリスト教会の後ろ盾によって渡米を実現させたことである。

李承晩は、20世紀転換期の朝鮮で、独立協会の活動により投獄され、終身刑を受けたが、6年後の1904年に突然解放され、渡米していた。1907年にジョージ・ワシントン大学を卒業し、1908年にハーバード大学の修士号を、1910年にプリンストン大学の博士号を取得した。プリンストン大学修了後、もともと大学を卒業した時点で朝鮮に牧師として戻ることを求めている監督教の後押しもあり、1910年に京城YMCAの職に就くために朝鮮に戻った。しかし1912年4月に国際監督教の代表会議に出席するため再び渡米し、そのまま帰国せずアメリカに残った。帰国しなかった理由は、韓国のキリスト教会が日本の教会の監督下に入ることに反対したため、李承晩の身に危険が差し迫ったからである。アメリカでの滞在が半年を過ぎる頃、李承晩は朴容萬から招きを受けると、ハワイに渡ることを決意する。こうして1913年2月、李承晩はメソジスト教団本部のコリアン・メソジスト教会付属の学校「韓人中央学院」の校長職を引き受ける形でハワイの地を踏んだ。

しかし朴容萬と李承晩は、独立運動に対する方法論がまったく異なっていた。朴容萬は祖国独立を実現するためには武力も辞さないと考えていた。ヘースティングス陸軍士官学校在学中、朴容萬は「韓人青年兵学校」を開講し、1910年まで27人のコリアンの軍事訓練を行った経験があった³⁸。ハワイでも「大韓国民軍団」という軍隊組織を結成し、軍事訓練を行った。学校は、オアフ島北東部アフイマヌに建てられ、軍事訓練はプランテーションでの仕事が終わった平日夜や週末に行われた³⁹。

一方、李承晩は外交努力によって一特にアメリカの支援を得て一祖国独立を実現させようと考えていた。李承晩は、ジョージ・ワシントン大学に在籍していた頃から朝鮮の独立を求める活動を展開していた。また陳情書を手し、1905年には第26代セオドア・ルーズベルト米国大統領との会談も実現させた。プリンストン大学時代には、総長ウッドロー・ウィルソン（後の第28代アメリカ大統領）をはじめ、多くの「アメリカ人」有識者、神学者、政治家らと親交を深め、朝鮮独立に向けた外交努力を重ねていた。

コリア系移民の間では、朴容萬を支持する者もいれば、李承晩を支持する者もいた。武装化を進める朴容萬は、熱狂的な支持も受けたが、同時に多くの批判も受けた人物だった。特に1914年、約300人の学生と旧軍人（朝鮮で軍人だった移民）を引き連れてホノルル

市を軍事行進してからは、朴容萬の武装路線に対して、在ホノルル日本領事館やハワイの主流社会からも批判を受けるようになった（写真1参照）。これによって朴容萬の軍事訓練は、農場経営者の退去勧告によって、人の目がつきにくい場所へと演習場を移さざるをえなくなった⁴⁰。そして朴容萬の活動は資金的に行き詰まるようになり、兵学校は資金難に陥った。一時はカフク（Kahuku）でパイナップルを栽培しながら軍事訓練を行なったが、1917年に解散に追い込まれた。

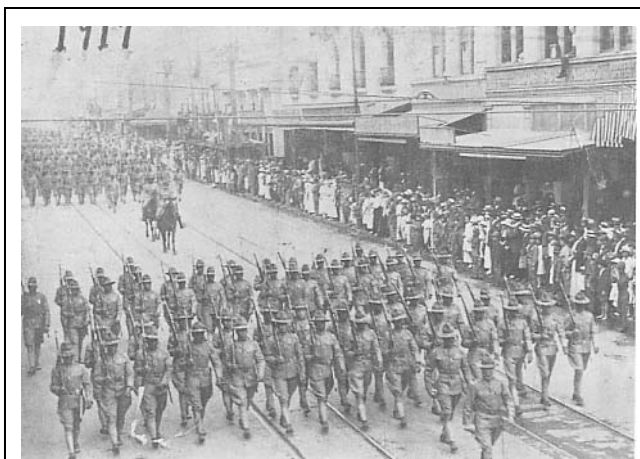


写真1 大韓国民軍団がホノルルで行った軍事行進

出典：“A procession of soldiers from the Korean Liberation Army, Honolulu”, Committee on the 90th Anniversary Celebration of Korean Immigration to Hawaii. *Their Footsteps: A Pictorial History of Koreans in Hawaii Since 1903* (Seoul: Ye Sun Co., Ltd), 208. 【同委員会の許可を得て掲載】

一方、李承晩は移民社会からも、ハワイの主流社会からも熱烈な歓迎を受けた。1913年に李承晩がハワイに到着すると、国民会はホノルル市のロイヤル・ハワイアン・オペラ・ハウス（現在のハワイ州最高裁がある場所）で盛大な歓迎会を開いたが、李を歓迎したのはコリア系移民だけではなく、ハワイの政治家やメソジスト教団の幹部も顔を出したのである⁴¹。この時の様子を、ハワイのメディアは次のように伝えている⁴²。「李承晩博士ほど今日のコリアにおける偉大な宗教的リーダーはいない。メソジスト教団のコリアンおよび日系人担当・責任者のジョン・D・ウッドマン博士の要請によって李承晩はホノルルに滞在している。李博士は先週の月曜日午前中に到着し、無期限に島に残る予定である」⁴³。

李承晩が歓迎された理由は、他にもあった。それは李承晩がアメリカの政治家と「知り合い」であったことである。ホノルル・スターブルテン紙は、李承晩を次のように紹介した。「李承晩はウィルソン大統領やルーズベルト大統領とも親しい友人である。その他にも多くのアメリカ全土にわたる著名人がこの偉大なる小さな博士と友情を深めてきた」⁴⁴。ウッドロー・ウィルソンは1912年の大統領戦を勝ち、当時の合衆国大統領になっていた。この李承晩の交遊関係は、移民のみならず、ハワイの主流社会の関心を引き寄せた。

またメソジスト教団も李承晩を歓迎した。メソジスト教団は、ハワイに来る以前から李承晩の活動を支えていた。メソジスト教団は、李承晩のアメリカ留学中の学費に対して奨

学金をだしていた。また卒業後のアメリカ本土における独立運動も支えていた⁴⁵。そのためメソジスト教団は、1905年にメソジスト教団本部が1万8千ドルの資金を提供して建てた寄宿学校（後に「韓人中央学院」と言われる）の校長にメソジスト教団が支援し続けた人物が着任することを喜んだのは勿論、その人物が地元メディアから次のように高く評価されたことを望ましい事態として受け止めた。「政治的運動家である李承晩博士は、キリスト教の信仰心によって今度は地元の 코리아系キリスト教寄宿学校の校長になった」⁴⁶。そして日系・ 코리아系担当のジョン・ワッドマン牧師（Rev. John D. Wadman）を中心に、メソジスト教団はハワイでの李承晩の活動も支援一校舎の建て増しや学校の規模拡大などの経済的支援から政治活動への支援まで一したのだった。

코리아系移民も李承晩には特別の関心を示した。ハワイに来る前から「李承晩はウィルソン大統領と知り合いらしい」という噂が飛び交った。また李承晩が来てからも、ある 코리아系の子供が「李承晩が近所に住んでいて、当時はラジオもない時代だったから時間もたっぷりあって、よく彼の話聞きに行った。そこで李承晩がプリンストン大学のことやウィルソン大統領とのことを聞かせてくれた」と話したように、アメリカの政治家と親交があったことに人々は魅了されたのだった⁴⁷。

また 코리아系移民は、李承晩がアメリカの「有名な大学」の学位を持っていたことを、特に好意的に受け止めていた。2世代にわたって 코리아系の運動に関わってきた弁護士の 코리아系移民は、次のように語っている。「人々が李承晩を信頼したのは、まず彼が博士だったから。李承晩のような高学歴の人はそれまでいなかったし、とてもハイレベルな人がやってきたと誰もが思った。そして次に李承晩が英語を流暢に話すことができたから。この頃、 코리아ン・コミュニティにはスポークスマンがいなかったし、当時それをこなすことができる人もいなかった。だから李承晩だけだった」⁴⁸。すなわち 코리아系の人々は、英語を流暢に話せ、アメリカの高等教育を受け、アメリカの政治家と親交があるという理由で李承晩を歓迎したのだった。

また李承晩の外見についても、こんなエピソードが残っている。「李承晩に会った時のことを鮮明に覚えている。李承晩は白の夏スーツをきて、白いパナマ帽をかぶっていた。李承晩に会った時、そのエレガンスさに感動した（略）李承晩はまるで偉大な白人ようだった」⁴⁹。こうしてアメリカの主流社会のつながりをもった李承晩は、 코리아系移民の指導的存在として広く歓迎された。

独立運動の発展：民族教育と教会活動

ハワイで李承晩が移民に訴えたことは、愛国の精神をもつことと、祖国のために何らかの行動を起こすことであった。ある移民は、李承晩が集会で次のような発言を繰り返したことを覚えている。「あなたはコリアンになるか (you be Korean) ならないか、二つに一つしかない」⁵⁰。後年、李承晩の側近となったロバート・T・オリバも、李承晩が在外朝鮮人に向かって、次のように語っていたことを記憶している。「諸君と国家との関係は、ひどく離れていて国を愛し救国のために尽くす理由はないと考えるかもしれない。したがってこの考えに警戒をしなければならない。その一つは、国々を破壊しようとする者であり、一つは希望や責任感を持たず、消極的に傍観するものである」⁵¹。

この李の呼びかけに、コリア系移民も応えた。当時 10 代だったあるコリア系移民は、そのときの様子を次のように語っている。「私たちは、朝鮮の人たちの助けになることは何でもやった。いつも 100 パーセントの力を注いで取り組むように言われた。最終的にほとんどの人が最低 1 ヶ月 1 ドルか 2 ドルの寄付をするようになった。当時 1 日 1 ドル稼ぐ人もいたけれど、この金額はまだまだ高額だった」⁵²。朝鮮の飢饉救済や独立運動の支援など、人々は運動団体の呼びかけに応じ、ことあるごとに寄付をした。また運動や活動のために自宅を提供し、会合や集会に顔を出した。あるコリア系移民は、李承晩がプランテーション・キャンプを訪問した時の両親の様子を、次のように語っている。「李承晩がプランテーション・キャンプを訪問した日、父は李承晩に何もかも提供しようとした。母は子どもたちの食べ物も持ち出してしまう父に嘆いていたし、両親の喧嘩は李承晩が滞在している間中絶えなかった。母は、現実的で家族のことを第一に考えていたけれど、父は理想主義的で、私たち親子は米とキムチさえあれば生きることができはずだ、と言って聞かなかった。父は李承晩の忠実な支援者だったけれど、家族のことを無視してやり過ぎる面もあった」⁵³。

李承晩が特に力をいれた事業がある。それはコリア系移民の師弟に対する民族教育である⁵⁴。李承晩の民族教育は、当時朝鮮で禁じられた民族文化を海外で存続させることと、愛国と独立の精神を育み、独立運動家を育てることであった⁵⁵。李承晩がハワイに来て校長に就任した寄宿学校（後に「韓人中央学院」に改名）は、民族教育の一貫として朝鮮史や地理、漢文を教えるようになった。韓人中央学院は、今でいうホノルルのダウンタウンのパンチボール(Punchbowl)とブレタニア(Beretania)通りの角に建てられたメソジスト教会の学校であり、普通教育も行っていた⁵⁶。

李承晩は女子子弟の教育も始めた。1913年の夏、ハワイ各地のコリアン移民の実態調査に出かけた李承晩は、プランテーションに住む女子子弟が、教育を受ける機会さえも与えられずにいる現実を目の当たりにした。そして各地のプランテーションから女子師弟 14人を引き連れてホノルルに戻ると、彼女らをひとまず女子寄宿舎スザンナ・ウェズリー・ホームに預け、そのうち 5人を韓人中央学院に受け入れた⁵⁷。スザンナ・ウェズリー・ホームは、日系とコリア系の女性と子どもを対象に 1903年にメソジスト教団によって建てられた寮である。預けられた子どもたちは、近くの公立学校に通いながら、同ホームで英語や宗教、道徳を学んだ⁵⁸。女子子弟の数が増えたため（また同ホームが韓人中央学院などの私立校への通学を許可していなかったため）、1914年、李承晩はワイリー(Wyllie)通りとリリハ(Liliha)通りの角に女子寮「韓人女子学院(Korean Girl's Seminary)」を開校し、女子子弟を受け入れ始めた。90人の女子学生が寮に住み、彼女らの多くは公立校に通いながら寮で朝鮮語と朝鮮史を学んだ⁵⁹。

李承晩は、移民の子弟に「コリアン」としての誇りをもち、将来的には独立運動を導いていく指導者になるよう次のように語った⁶⁰。

君たちはアメリカで生まれたため、アメリカ人であるかもしれない。しかし血はコリアンである。いつか君たちの手で新しいコリアを建てる日がやってくるだろう。だから普段からコリアンの人らと付き合ったほうがいい。そして祖国を真に愛しているならば、朝鮮の言葉と歴史を習い、外国人と結婚しないことだ⁶¹。

この民族教育と祖国独立運動に重点を置いた李承晩の教育は、子弟の父母から熱烈な支持を得た。あるコリア系二世は、両親が自分にこのように教え諭したことを覚えている。「両親は私にコリアンとしての意識をきちんとつよように言った。よく母は、朝鮮は歴史的に偉大な国なのだからと口にしていて。そして両親は、私たち兄弟が教育を受けていつか李承晩の独立運動に関わってほしいと願っていた」⁶²。

このように、李承晩を中心とした独立運動家が掲げた祖国独立と祖国愛国の精神は、民族教育や国民会などの政治的活動の場だけでなく、コリア系のキリスト教会でも伝えられた。当時、キリスト教会は信仰生活だけでなく、社会生活の場でもあった。当時の様子について、コリア系の二世らは次のように語っている。「コリアンがコリアンと出会う場所は、当時、教会以外になかった」⁶³「両親は洗濯屋をやっていて忙しかったけれど、生活は

教会中心だったし、両親はいつも教会のことで頭がいっぱいだった」⁶⁴。

中でも男性よりも女性の方が、教会活動に熱心であった。その理由は、コリアン移民二世が、「教会でいろいろ揉め事もあったけれど、女性は教会以外の用事で出歩くことができなかった。特に夜はそうだった。だから結局教会に残ったし、教会がいろいろな活動の中心だった」と語ったように、戦前の長い間、女性が外出できる場所が限られていたためである⁶⁵。

但し、家族そろって教会に通っていたケースは多くなかった。日々の生活に追われ、女性だけが教会に参加することも多かった。また子供だけが通うこともあった。ある子供は、「私の両親は仕事が忙しく、日曜礼拝に参加することがほとんどなかった。母は、週一回の祈祷会にだけときどき顔を出していた。でも両親に教会へ行くよういつも口を酸っぱく言われた」⁶⁶と語っている。

教会の活動は、毎週日曜日の礼拝だけではなく、平日の礼拝（「祈祷会」や「夜間礼拝」「聖書研究会」と呼ばれることが多かった）や、婦人会や子ども会、青年会などに及んだ。その様子のある移民は、「教会は日曜日だけではなく、平日の集まりもあったし、その他いろいろな手伝いがあったりいつも出入りしていた」と語っている⁶⁷。またヒロの韓人基督教教会に通ったある女性は、一週間の生活を次のように説明している。「日曜は礼拝があって、そのあとにいろいろな集会や打ち合わせがあった。水曜日は祈祷会があって、金曜日は聖歌隊の練習があった」⁶⁸。

寄宿学校に在籍していない子供は、教会で朝鮮語学校が開かれたため、学校が終わったあと、ほぼ毎日教会に通った（但し、語学学校が普及していた1920年代頃まで）。子供たちは、平日は毎日1時間から2時間程、語学学校の授業に出席し、日曜日には日曜学校に通った。ある移民はその様子を、次のように語っている。「教会で育ったようなものだった。教会と語学学校に通ったから、一週間に6日間は教会で過ごしていたことになる。当然、そこでコリアン同士が仲良くなった」⁶⁹。

独立運動に関わる人がなかった人も、キリスト教会で日常的に独立運動に触れるようになった。かれらは教会の礼拝や部会、祈祷会で祖国の窮状を知った。婦人会や青年会は募金活動を行い、支援運動を広めるための集会や食事を開催した。やがて政治団体の会合や集会も、教会で行われるようになっていった。例えば、1913年にコリア系移民の女性によって結成された「大韓婦人会」は、事務所を国民会の中に置いたが、結成1周年の式典をメソジスト教会の敷地で行った⁷⁰。こうして信仰活動と政治活動が、渾然一体となっ

てコリア系のキリスト教会で進められていったのだった。キリスト教会の役割について、朴容萬は 1914 年に次のように述べている。「今日の韓国人は、10 年前の韓国人ではない（略）10 年前を振り返ると、（略）当時は教会が何なのか公会が何なのかその分別さえできずにいた。ひどく混沌としていて、あえて言うならば、公会、教会はもちろん、国を知らない人も多く、国をさしおいて、自分の身さえ守る方法を知らなかった。（略）ハワイ在住の韓国人の発展の歴史は、キリスト教会の感懐力と国民会の培養力の成果である」⁷¹。

以上、ハワイのコリア系移民社会で祖国独立運動が発展していく過程を考察してきたが、ここで重要なのは次の二点である。第一に、ハワイの祖国独立運動が、運動家によってもたらされたということである。これは独立運動が一般の移民によって「下」から展開したのではなく、運動家によって「上」から展開したことを意味する。第二に、独立運動を契機に、コリア系移民のアイデンティティがナショナル化したことである。移民は、運動家と異なり、近代化の進んでいない時代の朝鮮から、教育を受ける機会がなくやってきた人々であった。そのため移民以前にナショナリズムに晒されることなく、ナショナル・アイデンティティが希薄だった。しかし独立運動を通してコリア系移民は、ナショナルな次元でものごとを考える近代的発想方法を学び、「コリアン」としてのアイデンティティをナショナル・アイデンティティとして認識するようになった。すなわち移民後に形成された「コリアン」としてのローカルなアイデンティティは、独立運動を契機にナショナルなアイデンティティへと転じていったのである。

独立運動の凋落：移民社会の分裂

だが朴容萬と李承晩がハワイの港に降り立ってから僅か二年後、ハワイの独立運動は急速に勢いを失っていった。その背景には、次のような二つの事情が存在していた。

ひとつは、メソジスト教団から、コリア系移民の教会活動と教会付属の寄宿学校に対する批判的な声が寄せられるようになったことである。メソジスト教団のコリアンと日系移民担当のウィリアム・フライ(William Fry)牧師は、1914 年 1 月から李承晩が校長をしていた韓人中央学院の顧問をしていたが、過激化する独立運動を前にして、教会付属の学校は政治的運動から一線を画すべきであると考えようになっていった⁷²。それ故フライ牧師は、コリア系移民が学校の敷地で政治的活動を行うことを禁止し、李承晩の活動に対する経済的支援も制限するようになっていった。また教団も、教会活動と政治活動が渾然一体となっているコリア系メソジスト教会の活動に疑念を抱くようになっていった。教会で行う運動

団体への募金活動を禁止し、政治集会を制限するよう指導する等、コリア系移民の教会活動を巻き巻く環境に変化が生じたのである。

もう一つは、李承晩派と反李承晩派（朴容萬派）の対立である。先述の通り、李承晩と朴容萬は、独立運動に対する方法論の違い（外交路線と武装化路線）が明確であった。しかし方法論の違いがあっても、祖国独立という共通の目標のもと、李承晩は教育事業と教会活動を進め、朴容萬は言論活動と軍事訓練を進めていたことから、移民はどちら側の支持者であっても、同じ国民会で活動し、同じキリスト教会（多くはメソジスト教会）に通い、同じ民族教育を子供に受けさせていた⁷³。

しかし 1915 年、国民会の資金をめぐる対立が生じた。李承晩は前年に国民会が購入した土地の利用について学校建設案を提出したが、これを朴容萬派だった国民会幹部が退けた。そこで李承晩は、国民会の会長金鐘学と財務係が不正に資金を流用していることを告発し、着服された資金はカフクのパイナップル栽培が不作となり、経済的に行き詰まった朴容萬の兵学校運営に補填されたと人々に訴えた。さらに李承晩は各島をまわり、国民会と朴容萬の不正を訴え、1915 年 4 月に臨時の国民総会を開催し、幹部の罷免を決議した⁷⁴。この時李承晩は、国民会で否決された学校建設案も 38 対 35 で可決させた⁷⁵。優勢にたった李承晩派だったが、今度は国民会を掌握した李承晩派に不正の嫌疑がかけられた。国民会所有の土地建物が、李承晩の個人名義に書き換えられたという嫌疑であった。これによって国民会は混乱を極め、李承晩派と反李承晩派の対立は、キリスト教会や民族教育の場にも持ち込まれるようになった。教会でも学校でも李承晩派と反李承晩派に分かれ、両者は一触即発の状態へと追い込まれていったのだった。

そんな時に暴力事件が発生した。1915 年 5 月、朴容萬は糾弾を逃れるように、一時的にサンフランシスコに滞在していたが、国民会の朴容萬派はホノルルに結集し、対応を審議していた。そこに韓人中央学院の学生二人を含む李承晩派が現れ、朴容萬を「売国奴」「酔っ払い」「好色漢」と誹謗中傷する発言やビラを配り、罷免された国民会元会長の金鐘学を含む朴容萬派四人を襲撃した⁷⁶。双方に負傷者が発生し 19 人が暴行罪で逮捕された⁷⁷。

さらに一般の移民の間でも対立が生じるようになった。きっかけは朴容萬派が権力を掌握し、教団から宗教活動と政治活動に対し一線を画すよう指導されていたメソジスト教会から、李承晩が離脱したことであった。この時李承晩の「コリアンのことはコリアンが決める資格がある」という言葉に賛同した 80 人近くの牧師や信者も、共にメソジスト教会を離れていったのである⁷⁸。そして李承晩と李承晩派は、無宗派の新しい教会「韓人基督

教会 (Korean Christian Church)」を設立し、活動を始めた⁷⁹。この動きは他の地域の 코리아系移民にも影響を及ぼし、韓人基督教会はホノルル以外にも、ワヒアワ (オアフ島)、ヒロ (ハワイ島)、パイア (マウイ島) にも建てられたのだった⁸⁰。

当時、メソジスト教会を離れた信者は、教会を離れた理由を次のように語っている。「母がメソジスト教会を辞めようと言った理由は、私たちのお金が教団に使われるよりは、独立運動に使われた方がいいからという理由だった。母は父にも、韓人基督教会に移れば私たちのお金がコリアンのために使われるようになると説得した」⁸¹。「私はいつも朝鮮の言葉と文化が消えてしまわないことを願っていた。だから朝鮮の独立運動を支持し、募金活動もたくさん行った。でもメソジスト教会の役員から教会としてはそのような活動を支援することができないと告げられた。だから私はメソジスト教会を離れることにした」⁸²。逆にメソジスト教会に残った人々は、残った理由について次のように語った。「キリスト教会は政治の場所になってはならないと思うようになった」⁸³。

さらにそれぞれの教会は、相手に対して次のような批判を展開した。李承晩派の韓人基督教会に対してメソジスト派は、「教会では子供たちが『李承晩博士は我々コリアンの指導者だ』という歌を歌っていた」⁸⁴や、「李承晩がまるで神様のように扱われている」⁸⁵、「李承晩についていった人たちは教育を受けたことがない人たちがほとんどだ」⁸⁶。そして韓人基督教会派はメソジスト教会派に「韓人基督教会にはコリアンの旗があるのに、メソジストはアメリカのメソジスト教団の旗がある。メソジスト教会の人はそのうち白人と混じってしまうだろう」⁸⁷、「本物のコリアンじゃない」⁸⁸と批判した。すなわち独立運動から生じた派閥争いは、誰が正しい「コリアン」、あるいは「キリスト者」であるかという問題に発展したのである。当時、 코리아系移民社会において誹謗中傷する際、最も心理的ダメージを与えた行為は、相手に「日本人」と罵ることであったが、それが互いの教会のメンバーに向けられていたことを、ある移民は次のように語っている。「私はいつも忙しくて教会で起こっていることすべてに首を突っ込んでいたわけではないけれど、どんなに仲良くても『あんたは日本人だね』と言われたら敵同士になった」⁸⁹。

李承晩と李承晩派は、韓人基督教会だけではなく、新たに教会付属の寄宿学校を建設し、民族教育も展開した。李承晩を校長とするその学校は、「韓人基督学院 (Korean Christian Institute)」と呼ばれた (それまでの韓人中央学院は、もともとメソジスト教会付属の学校であったためメソジスト教会に残ったが、韓人女子学院はこの時韓人基督学院に合併された)。この学校は、1917年にワイアレア (Waialea) に移転し、さらに1918年に約3,600

平米のカイムキ (Kaimuki) 地区へ、1921年2月には15万平米のカリヒ (Kalihī) 地区へ移転し、規模を拡大していった⁹⁰。

また李承晩とその支持者は、運動団体「同志会」も新たに結成した。これにより、コリア系移民社会のあらゆる活動が二分化した。李承晩派は、韓人基督教会に通い、同志会のメンバーとなり、子供たちは李承晩派の韓人基督学院に通った。一方、反李承晩派は、メソジスト教会に通い、国民会のメンバーとなり、子供たちは韓人中央学院に通った。

しかしこのようなハワイにおける祖国独立運動は、1919年に新たな局面を迎えた。1919年3月1日、朝鮮で独立示威運動「三一運動」が起こり、同年4月下旬に上海で「大韓民国臨時政府」(以後、「上海臨時政府」という)が樹立されたからである。これに伴い上海臨時政府の國務総理に就任した李承晩は、1920年12月に上海に向かうため、ハワイを離れていった(この時、内務総長に安昌浩が就任し、安昌浩も1919年5月に上海に向かった)⁹¹。また朴容萬も、ハワイで1919年に結成した「独立団(The Korean Independence League)」の代表として臨時政府に参加するため、上海に去っていった⁹²。こうしてハワイの運動家らは、独立運動の新たな拠点となった上海に向け、次々とハワイを去っていったのだった⁹³。

さらに独立運動をめぐる新たな問題も生じた。それはハワイの移民が購入した「独立公債」をめぐる問題である。上海臨時政府が樹立されると、李承晩は韓国が独立した時に高利で償還することを約束し、独立公債の購入を移民に呼びかけ、50万ドル分の公債を発行した⁹⁴。しかしハワイの国民会に集まった資金をめぐり、上海臨時政府と李承晩が対立した。上海臨時政府は、公債の名義が李承晩、および欧米委員部委員長の金奎植の個人名義となっていることを問題視し、資金を李承晩、および李承晩の欧米委員部に送金しないよう求めた。これに対し李承晩は、欧米委員部を通して資金を上海臨時政府へ送金するべきであると主張した。結果的に、李承晩が上海臨時政府の大統領職をすでに辞任していたことと、上海臨時政府の改組によって欧米委員部が廃止されたことが理由となり、資金は李承晩に送られないことで決着をみた⁹⁵。しかし資金を管理していたハワイの国民会も、コリア系移民者会も、この一連の対立に翻弄され、新たな活動拠点となった上海においても運動家らの内部対立が相次ぎ、自分たちの資金的援助がその紛争の種となっていることを知るのだった。

この一連の流れの中で、人々は上海で展開している独立運動への関心を失っていった。それではコリア系移民の関心はどこに向かったのだろうか。ここでコリア系移民の集住地

区であったワヒアワ地区（ホノルル市近郊スコーフールド・バラックス隣接地区）の生活状況から考察する。

ワヒアワ地区は、韓人基督教会とメソジスト教会が、それぞれ目と鼻の先に建てられていた地域である。当時、韓人基督教会は「アップ教会（up-church）」と呼ばれ、メソジスト教会は「ダウン教会（down-church）」と呼ばれた。その様子について、コリア系二世は次のように語っている。「韓人基督教会に所属するコリアンは私たち以外にも多くいた。韓人基督教会の人は、パーム通りとカリフォルニア通り沿いに住んでいる人が多かった。私たちは『アップ・チャーチ』といわれ、向こうは『ダウン・チャーチ』と呼ばれていた。私たちアップ・チャーチは、ダウン・チャーチの家族と付き合いがほとんどなかった。我が家では、近所に住んでいるダウン・チャーチの子どもと遊ぶことは許されたけれど、家にいれることは禁じられていた」⁹⁶。

このような両者の対立は、子供の生活にも影響を与えるほど根深いものとなっていた。子供たちは日系や中国系と遊ぶことはできても、もう一方の教会に通うコリア系の子供とは遊ぶことができなかったのである。次の二世の語りは、二つの教会に属する人々が、互いに関わらない生活を、いかに長く送っていたのかを物語っている。「デートはコリアンじゃない人と行くことが多かった。『ピュアなコリアン』の数が少ないのも事実だし、違う教会のコリアンの子とデートすることは思い浮かばなかった。（違う教会のコリアンとは）話すことはあったけど、仲良くなったことがないから。だから（違う教会のコリアンよりも学校で会う）他の民族の子たちの方がよっぽど近かったしデートすることも多かった」⁹⁷。

そしてこの対立は、祖国独立運動とはまったく別の次元ものとして、人々の生活を左右するようになっていった。あるコリア系二世は次のように語っている。「ワヒアワでは二つの教会が『アップ教会』と『ダウン教会』と呼ばれていた。どうしてそのような名前がついたかわからないけれど、とにかく一つの教会に行ったら、もう一つの教会のメンバーではないことがわかったし、そうやってコリアンの人たちの間も分かれていた。互いに交流することもなかったし、何かを一緒にやったりしたこともない。親もそうしていたし、私たちがそうすることが普通だった」⁹⁸。またホノルルに住む人は、次のようにも語っている。「この人は誰だろうと考える時、この人の教会はどこだろうと考えた」⁹⁹。すなわち人々の関心は、生活を大きく左右した派閥争いや分裂へと移っていったが、この派閥争いに対する関心は、祖国や独立運動とは切り離した問題として人々の生活を形づくったのだった。

こうして独立運動家らが去ったあとのハワイでは、コリア系移民の祖国独立運動に対す

る関心が薄れていった。その様子を在ホノルル日本領事館は、1925年と1933年に次のように報告している。「ハワイ方面の独立運動は次第に衰える傾向」¹⁰⁰。「(ハワイの独立運動)は現在に於いては何ら勢力の認めるべきものはな(い)」¹⁰¹。

以上の独立運動の発展と凋落の過程から、ハワイにおける祖国独立運動について、次の点が明らかとなった。それはハワイにおける祖国独立運動は、運動家らがハワイにやってくる前にはほとんど存在しなかったということと、運動家らが一般の移民を啓蒙する形で発展したということである。これはハワイのコリア系移民の独立運動が、「下」から広がったのではなく、「上」から広がったことを意味する。移民が啓蒙されていく様子について、運動家の朴容萬は次のように述べている。「10年前を振り返ると、(略)当時は教会が何なのか公会が何なのかその分別さえできずにいた。ひどく混沌としていて、あえて言うならば、公会、教会はもちろん、国を知らない人も多く、国をさしおいて、自分の身さえ守る方法を知らなかった」¹⁰²。当時、運動家と一般の移民の間には、出身階層という面でもナショナリズムという面でも大きな差があった。独立運動家は朝鮮で教育を受け、「朝鮮人／韓国人」としての意識を強くもっていたのに対し、一般の移民は近代化が遅滞として進まない朝鮮では教育を受ける機会がなく、ナショナリズムに晒されることもなかったため、ナショナル・アイデンティティが希薄だった。

そして運動家らが移民に広めた愛国の精神によって、コリア系移民のアイデンティティはナショナル化していった。ある移民は、李承晩が集会で繰り返し次のような発言を繰り返したことを覚えている。「あなたはコリアンになるか (you be Korean) ならないか、二つに一つしかない」¹⁰³。すなわち運動家らによって移民は、「コリアン」としてのアイデンティティを、祖国というナショナルな次元で捉える発想方法をもつようになったのである。この流れの中で、出身地を示すカテゴリーから派生した「コリアン」としてのローカルな次元のアイデンティティは、ナショナルな様相を呈していくのだった。

しかしハワイにおける祖国独立運動は、一般の移民が主体となった「下」からの運動ではなく、運動家らがもたらした「上」からの運動であったことから、1919年に運動家らが上海臨時政府に参加するために次々とハワイを去ってしまうと、独立運動は急速に勢いを失っていった。その結果、1910年代初めに盛り上がりを見せたハワイにおける祖国独立運動は、1920年代初め頃には終息し、人々の関心も祖国や独立運動から離れていくようになっていったのである。

- 1 Kim, "The Koreans in Hawaii", 126.
- 2 「韓国」と「朝鮮」という呼称をめぐり、運動家らは「朝鮮」よりも「韓国」を好んで使った。それは李朝末期に国号が「朝鮮」から「韓国(大韓帝国)」に変えられたにも関わらず、日本政府は「朝鮮」と呼んだためである。しかし本論文では、英語の「コリア」という表現が当時「韓国」と「朝鮮」の違いを明示しない形で使われたことから、一時史料で「韓国」と表記されていない限り、「朝鮮」に統一し使用する。
- 3 亡命の経緯については次を参照。李光洙(具末謨訳)『至誠天を動かす大韓民族独立運動の父 島山安昌浩の思想と生涯』(現代書林, 1991年), 211-215.
- 4 他にも大同韓国會(Korean Restorative Association)などいくつかの団体が存在した。
- 5 佐々木『朝鮮戦争前史としての韓国独立運動の研究』, 392.
- 6 「安昌浩ノ海外渡航ニ関スル件(1908年4月30日警秘第1594号1)」別紙「後熙二年三月十一日発行共立新報(米国桑港ニ於テ韓人団体発刊)」国史編纂委員會『統監府文書1』(韓国京畿道:政府刊行物, 1991年).
- 7 「在美韓人動静に関する件(送第127号)」別紙「韓人ノ動静ニ関スル件(1907年9月28日)付属書「米国桑港ニ於テ発行ノ共立新聞九月六日ノ論説」および「日米戦争カ韓国ニ興フル機会」『統監府文書1』, 115-117.
- 8 「在美韓人ノ排日運動に関する件(1908年8月21日機密送第43号)」別紙「韓人朴鳳来ノ新聞発行ニ関シ回答ノ件(1908年5月8日機密第26号)」『統監府文書1』, 115-117.
- 9 当時の資料をもとに「スティーブンス」ではなく「スチーブンス」と表記する。
- 10 國家報勲所(編)『張仁煥・田明雲のサンフランシスコ義挙資料集1(海外の韓国独立運動資料(33)米国編⑨)』.
- 11 趙芝薫(梶村秀樹監訳)『韓国民族運動史』(高麗書林, 1975年), 86.
- 12 「「故スチーブンス」殺害者韓人田明雲所在取調及裁判進行ノ状況報告ノ件(1908年11月20日機密送第4号)」別紙「「故「スチーブンス」殺害者韓人田明雲所在取調及裁判進行ノ状況ニ右ニ関スル新費用支出方承認稟議ノ件(1908年12月11日機密第43号)」国史編纂委員會『統監府文書6』(韓国京畿道:政府刊行物, 1999年).
- 13 「韓人田明雲其他ニ関スル件(1909年11月8日機密送統第70号)」別紙「韓人田明雲其他ニ関スル件(1909年7月30日乙機密第33号)」『統監府文書6』.
- 14 当時日本政府は在米朝鮮人の密偵を雇うなどしてアメリカにおける在米朝鮮人の独立運動の実態解明に取り組んでいた。尚、密偵については次を参照した。「在米韓人ニ関スル件(1909年11月19日機密送統第70号別紙乙機密第33号および機密統発202号)」『統監府文書6』.
- 15 「在米韓人人口ニ生活状態ニ関スル件(1908年12月2日送第147号)」別紙一「在留韓人人口生活状態取調回答(1908年10月27日)」および「在米韓人人口ニ生活状態ニ関スル件(1908年12月2日送第147号)」および別紙二「在留韓人人口等取調方訂正通報之件(1908年11月7日)」『韓国移民関係雑件(明示四十三年)』(外務省外交史料館).
- 16 「在外韓人事項取調ニ関スル件(1910年7月30日機密送第73号)」別紙「在留韓人ニ関スル事項回答ノ件(1910年4月6日機密公第2号)」『韓国移民関係雑件(明治四十三年)』(外務省外交史料館).
- 17 「在米韓人人口ニ生活状態取調ニ関スル件(1908年12月24日送第158号)」別紙「在米韓人人口ニ生活状態取調ニ関スル件(1908年11月25日各第152号)」『韓国移民関係雑件(明治四十三年)』(外務省外交史料館).
- 18 「在米韓人人口ニ生活状態ニ関スル件(1909年2月16日機密統発大99号)」付属書「在留韓人人口ニ生活状態取調報告ノ件(1909年2月27日)」『韓国移民関係雑件(明治四十三年)』(外務省外交史料館).

- 19 「在米韓人人口ニ生活状態ニ関スル件 (1909年1月12日統發第104号)」 付属書「在留韓人人口ニ生活状態取調方ニ関シ回答ノ件 (1908年11月26日公第191号)」『韓国移民関係雑件(明治四十三年)』(外務省外交史料館)。
- 20 チェ・チャンヒ (최창희) 「ハワイ韓人社会の韓人民族運動 1903-1908年 (하와이 한인사회의 민족운동 1903-1908)」『アメリカの韓人社会と韓人民族運動 (미주지역의 한인사회와 한인민족운동)』(ハワイ: ハワイ大学コリアン研究センターシンポジウム報告書、2003年10月16日), 64.
- 21 Kim Han-Kyo, “The Korean Independence Movement in the United States: Syngman Rhee, Ahn Ch’ang-Ho and Pak Yong-Man”, Ilpyong J. Kim, *Korean-Americans: Past, Present and Future*. (Elizabeth NJ: Hollym International Corp, 2004), 63-100.
- 22 Patterson, *The Ilse*, 49; キムウォンニョン 『在美韓人 50年史 (재미한인 50년사)』(ソウル: 図書出版へアン, 2004年), 76-77.
- 23 漢字名称は不明。『シンジョー・シンミン』は現在一つも残っていないが他紙からその存在が明らかとなった。Duk Hee Lee Murabayashi “The Korean Press in Hawaii: 1904-1970” Paper presented at “Korean Immigration to North America” (Yonsei University May 17-19, 2002), 6-7. (同氏の許可を得て引用した)。
- 24 「韓人事報 (Korean Times)」とも呼ばれ 1907年まで発行された。
- 25 Murabayashi, “The Korean Press in Hawaii: 1904-1970”, 6.
- 26 Patterson, *The Ilse*, 53.
- 27 1907年10月から1909年1月まで発行された。
- 28 John K. Hyun “A Condensed History of Kungminhoe: The Korean National Association 1903-1945”(Seoul: The Korean Cultural Research Center, Korea University, 1985), unpublished papers.
- 29 Hyun, “A Condensed History of Kungminhoe: The Korean National Association 1903-1945”, 3.
- 30 「大韓人國民會」に再編されてからも中央総会はサンフランシスコに設置された。ハワイは「国民会ハワイ地方総会(Hawaii Regional Assembly)」という名称で呼ばれた。
- 31 李光奎 『在美韓國人: 總體的接近』(ソウル: 一潮閣, 1989年), 38.
- 32 Hyun, “A Condensed History of Kungminhoe: The Korean National Association 1903-1945”, 18.
- 33 「「スチーブンス」殺害者ニ対スル義捐金募集 (1909年10月6日憲機第1885号)」『統監府文書 6』。
- 34 「韓人田明雲其他ニ関スル件 (1909年11月11日機密送統第70号)」別紙「韓人状況報告ニ其内情探聞方ニ関シ伺出ノ件 (1909年10月2日甲機密第21号)」『統監府文書 6』。
- 35 主筆として朴容萬を呼んだ背景には、ハワイ国民会内部の政治的対立と失脚事件もあった。朴容萬が来る以前、国民報主筆李恒愚の追放運動が前国民報主筆魯在雨によって行われ、1911年末に李恒愚が自殺するという事件が起きた。自殺に追い込んだ魯在雨とその一派および総会長鄭七來の責任が問われ彼らがアメリカ本土へ逃れるという事態が生じていた。
- 36 「治安妨害のため統監府でのハワイ発行新聞新韓國報と布哇韓人教報を禁止(1910年9月6日)」韓国學文献研究所編 『朝鮮總督府官報:1910年』(ソウル: 亜細亜文化社, 1985); 『毎日申報』(1910年9月3日)。
- 37 ロバート・T・オリバ(抽久保虎一郎訳) 『米大学教授がみた人間李承晩』(日本観光株式会社出版部, 1958年), 59.
- 38 Hyun, “A Condensed History of Kungminhoe: The Korean National Association 1903-1945”, 26-27.
- 39 Kim, “The Koreans in Hawaii”, 127-129.
- 40 Ibid.

-
- 41 Hyun, “*A Condensed History of Kungminhoe: The Korean National Association 1903-1945*”, 28.
- 42 Yŏng-Ho Ch’oe “Syngman Rhee in Hawai’i: His Activities in the Early Years, 1913-1915” Yŏng-Ho Ch’oe (ed.) *From the Land of Hibiscus: Koreans in Hawai’i* (Honolulu: University of Hawai’i, 2007), 55-58.
- 43 Honolulu Star-Bulletin, February 8, 1913.
- 44 Ibid.
- 45 佐々木春隆『朝鮮戦争前史としての韓国独立運動の研究』(国書刊行会, 1984年), 378-379.
- 46 The Pacific Commercial Advertiser, September 28, 1913.
- 47, Robert Wong, Video, The Roberta W. S. Chang Video Collection at the Center for Korean Studies, University of Hawai’i (RCVC).
- 48 Edward Kim, Video, RCVC.
- 49 Eun-Ai Cho, Tape, Korean Oral History Project by Daisy Chun Rhodes (KOHP).
- 50 Hazel Pahk Chung, Video, RCVC.
- 51 オリバ『米大学教授がみた人間李承晩』, 63.
- 52 Frances Sup Sut Lee, Tape, KOHP.
- 53 Rachel Sung-Sil, Tape, KOHP.
- 54 朴容萬も民族教育に力を入れたが、軍事訓練を重視していたため民族教育は語学のみを教えればよいと考えていた。しかし李承晩の民族教育が支持され、朴容萬の意見は教育現場に体育の授業を設ける形で一部取り入れられる程度であった。これに不満を抱いた朴容萬は、青年層を対象に語学学校と士官養成学校を開いた (Lyu, “Korean Nationalistic Activities in Hawaii and the Continental United States 1900-1945”, 68) .
- 55 Lyu, “Korean Nationalistic Activities in Hawaii and the Continental United States 1900-1945”, 74-75.
- 56 Ch’oe “Syngman Rhee in Hawai’i: His Activities in the Early Years, 1913-1915”, 61.
- 57 Roberta Chang with Wayne Patterson *The Koreans in Hawai’i: A Pictorial History 1903-2003*. (Honolulu: University of Hawai’i Press, 2003), 85.
- 58 Daisy Chun Rhodes. *Passages to Paradise: Early Korean Immigrant Narratives from Hawaii*. (LA: Academia Koreana, 1998), 192.
- 59 Lyu, “Korean Nationalistic Activities in Hawaii and the Continental United States 1900-1945”, 77.
- 60 Yŏng-ho Ch’oe, “Syngman Rhee in Hawai’i: His Activities in the Early Year, 1913-1915, Yŏng-ho Ch’oe (ed.) *From the Land of Hibiscus: Koreans in Hawai’i* (Honolulu: University of Hawaii Press, 2007), 70.
- 61 Lyu, “Korean Nationalistic Activities in Hawaii and the Continental United States 1900-1945”, 79.
- 62 Inez Pak-Soon Kong, Tape, KOHP.
- 63 Skip Soon Young Hong, Video, RCVC.
- 64 John Myung-Keo Han, Tape, KOHP.
- 65 Edward Kim, Video, RCVC.
- 66 Robert Won Bae Chang, Video, RCVC.
- 67 Mary Moon Han, Video, RCVC.
- 68 Marian Lyu Kim, Video, RCVC.
- 69 Clarence Choi, Video, RCVC.
- 70 Dukhee Lee Murabayashi, “Korean Women’s Activities in Hawaii: 1903-1950”, Conference Paper (Conference of the 80th Commemoration of Chongsan-ri Battle Yanbien, September 20-21, 2000), 9. (著者の許可を得て引用した)
- 71 國民報, 1914年6月17日.
- 72 David K. Yoo, *Contentious Spirits: Religion in Korean American History, 1903-1945*. (Stanford: Stanford University Press, 2010), 70.

-
- 73 Charles Chung with Dr. Won Sik You, Video, RCVC.
- 74 佐々木『朝鮮戦争前史としての韓国独立運動の研究』, 398.
- 75 Kingsley K. Lyu, “Korean Nationalistic Activities in Hawaii and the Continental United States 1900-1945”, *amerasia journal* 4(1977)1, 70.
- 76 Hyun, “A Condensed History of Kungminhoe: The Korean National Association 1903-1945”, 30; Lyu, “Korean Nationalistic Activities in Hawaii and the Continental United States 1900-1945”, 70.
- 77 Hyun, “A Condensed History of Kungminhoe: The Korean National Association 1903-1945”, 30; Lyu, “Korean Nationalistic Activities in Hawaii and the Continental United States 1900-1945”, 71-72.
- 78 Lyu, “Korean Nationalistic Activities in Hawaii and the Continental United States 1900-1945”, 79.
- 79 Mary Moon Han, Tape, KOHP.
- 80 Lyu, “Korean Nationalistic Activities in Hawaii and the Continental United States 1900-1945” 79.
- 81 Mallie Ok-Yun Lee, Tape, KOHP.
- 82 Barbara Kim Yamashita, *Wahiawa Korean Christian Church: History 1919-1987* (unpublished, 1987), 1.
- 83 Hazel Pahk Chung, Tape, KOHP.
- 84 Ibid.
- 85 Mary Hong Park, Tape, KOHP.
- 86 Skip Soon Young Hong, Tape, KOHP.
- 87 Hazel Pahk Chung, Tape, KOHP.
- 88 Frances Sup Sut Lee, Tape, KOHP.
- 89 Ibid.
- 90 資金はカイクキと「韓人女子学院」の土地の売買およびコリア系移民からの1万ドルの寄付から調達された。
- 91 趙芝薰（梶村秀樹監訳、加藤春子訳）『韓国民族運動史』（高麗書林、1975年）133.
- 92 しかし朴容萬は上海臨時政府を離れ、上海で武官学校を設立し、北京および満州の武装闘争に関わっていった（金元容『在美韓人五十年史（在米韓人五十年史）』（図書出版혜안, 2004[1959]), 150-151）。
- 93 李承晩は1920年12月に上海に向かったが、臨時政府の憲法改正にともなう国務院制から大統領制への移行（大統領李承晩、国務総理李東輝）と内紛によって翌年5月には上海を去った。その後李承晩はワシントンDC（上海臨時政府「欧米委員部」を設置）を拠点に活動を展開した。
- 94 佐々木『朝鮮戦争前史としての韓国独立運動の研究』, 253.
- 95 Hyun, “A Condensed History of Kungminhoe: The Korean National Association 1903-1945”, 31.
- 96 Eun-Ai Cho, Tape, KOHP.
- 97 Ruth Lee Mack, Video, RCVC.
- 98 Ibid.
- 99 Charles Chung with Dr. Won Sik You, Video, RCVC.
- 100 在ホノルル帝國総領事館『布哇朝鮮人事情（大正14年12月）』（外務省外交史料館）。
- 101 朝鮮総督府警務局『最近に於ける朝鮮治安状況（米布方面）（昭和8年）』（外務省外交史料館）。
- 102 國民報, 1914年6月17日。
- 103 Hazel Pahk Chung, Video, RCVC.

第4章 トランスナショナル・アイデンティティの発展： 祖国とアメリカの狭間を超えて

コリア系移民のアイデンティティは、祖国独立運動の中でナショナル化していったが、祖国独立運動が終息し、人々の関心も祖国から離れていく中で、このアイデンティティはどのように変化したのだろうか。

これまでの研究では、祖国独立運動に対する関心が失われた 1920 年代から 1930 年代にかけて移民の世代交代とアメリカ化が進んだことから、コリア系移民のアイデンティティは、「コリアン」から「アメリカ人」へと転じたものとして捉えられてきた¹。だがこの時代に構築されたアイデンティティは、祖国寄りでもアメリカ寄りでもなく、だからといって祖国志向やアメリカ志向を排するものでもなく、祖国とアメリカのナショナル・アイデンティティを同時に内包しながら、さらに「国がない」という当時のコリア系移民の状況を反映したトランスナショナルな様相を呈したものだ。それでは具体的に、そのアイデンティティはどのようなものであったのだろうか。また、なぜ「アメリカ人」というナショナル・アイデンティティに収斂することなく、トランスナショナル・アイデンティティという形で、コリア系移民はアイデンティティを形成していったのだろうか。

本章では、まず移民の社会経済的状況の変化にともなう集団の再編について論じる。特にコリア系移民は、砂糖プランテーションを離れてから米軍基地で洗濯屋の仕事に従事する者が多かったが、この背景にはどのような事情があったのかに注目しながら論述することとする。次に滞在の長期化と社会経済的条件の変化の中で定住志向が高まっていく様子について、写真花嫁と子供の教育問題から論考する。そして最後に民族間関係に注目し、その中で新たなアイデンティティが希求されていく過程と、そこで構築されたアイデンティティについて考察を試みる。

尚、本章の前半部では、移民の社会経済的推移や生活状況の変化を見るため、これまで発表されてきた社会学的統計を多く使用するが、暮らしの中で生じた意識の変化や移民の経験については、回顧録やオーラル・ヒストリーを参照する。また後半部のアイデンティティに関する考察では、この分野における先行研究一数は少ないもののアメリカニゼーション研究やエスニシティ研究の一貫として行われてきた研究一が、コリア系移民のアメリカ化に関して行われてきたため、これを参考にするが、これらの研究は、祖国かアメリカ

のいずれか一つのアイデンティティを前提としていることから、「アメリカ人」としてのアイデンティティが新たに形成される面については取り上げるものの、それ以外についてはほとんど触れていないという課題を残している。そこで本章では、従前の研究で言及されなかった領域については、移民の口述史資料（ナラティブ）を参照して、考察をすることとする。ただし、本章で参照する資料は、当時の学生（中学から大学まで）が残したエッセーやスピーチと、当事者が後年（1990年代および2000年代）に語った口述記録であるために、その内容については資料の性格に即した限定と注意が必要であることは言うまでもない。

1. 出稼ぎ移民から定住移民へ(1)：砂糖プランテーションから洗濯屋へ

砂糖プランテーションを離れる

滞在が長期化していく中、コリア系移民の生活はどのように変化したのだろうか。ここに1930年に、米軍が極秘で行った調査がある。そこにはコリア系移民が次のように描写されている。「経済的に成功しているわけではない。プランテーションを離れて都市労働者や小さな洗濯屋などの商売を始めるようになったが、それもビジネス的に成功していない」²。この報告書からも窺えるように、コリア系移民の生活は、出稼ぎ移民としてハワイにやってきてから四半世紀の月日が流れたものの、大きく変わることなく過ぎていった。しかしこの間、移民の生活形態や生活意識は大きく変化した。ここではまず社会学的な見地から、移民の生活がどう変化したのかについて検討する。

1910年代から移民の都市化が急速に進んだ。この理由について、当時ハワイ大学のアダムスは、「(コリア系の) 社会的組織を維持するために必要な人数が都市にしか集まっていないためである」と説明している³。しかしそれだけが全てではない。都市進出を促す次の二つの砂糖プランテーションにおける労働環境の変化が、移民が都市化する背景にあったのである。

第一は、出身国別の賃金格差が撤廃され、それまで非日系であることで優遇されていたコリア系の存在価値が薄まったことである。1909年の日系移民による「大ストライキ」の結果、それまで国別に決められていた賃金体系が見直された。これによってコリア系移民の賃金は、それまで他の集団よりも低く設定されていたため高くなったが、同時にそれま

でスト破りとして受けていた厚遇—スト破りとして2倍の報酬が支払われたことや、定着率を高めるためにキャンプでのキリスト教会活動に資金的援助をもらえたことなど—も打ち切られることになった。

第二の変化は、1910年代に新規移民労働者が大量に流入し、古参の移民労働者の立場が弱くなったことである。ハワイ砂糖耕主組合（HSPA）は、「大ストライキ」の再発防止策として新たに移民労働者をフィリピンから受け入れた。その結果、フィリピン系移民の数は、コリア系移民を上回り、1910年から1920年にかけて2,135人から16,851人に急増すると、1930年には6万人を超え、日系移民に次ぐ大集団となっていった⁴。

古参の移民労働者は、砂糖プランテーションで生き残るためのさまざまな方策を講じた。ルナ（現場監督）になる者や、請負制で仕事を引き受ける者もでてきた。しかし請負制の仕事は個人ではなく集団で行われたため、数が少ないコリア系にはあまり普及しなかった。このような中、プランテーションの技術的な仕事に就く者も現れるようになった。昇圧機や水道ポンプ等の操作や管理、水路を引く土木作業、家屋の建築や修繕等といった仕事である⁵。深夜を中心とした時間帯に働き、技術や経験を身につけていった。多少の英語力があれば、この仕事に就くことが可能だった。ある移民は次のように語っている。「かろうじてコミュニケーションができる程度であったけれど、それだけでも英語ができたから仕事をもらうことができた」⁶。

一度身につけた技術は、徒弟制度のような形でコリア系移民の間に伝わった。砂糖プランテーションで育ったコリアン移民の子供が、その様子を次のように語っている。「私は長い間、大工という仕事はコリアンだけがやるものだと思っていた。なぜなら大工の父の下で、7人から10人くらい働いていたけれど、全員コリアンだったからだ」。移民は、仕事のノウハウもニッチも同じ移民集団の中で伝達した⁷。

また技術職への従事以外にも、移民たちは副収入を得るべく、さまざまな方法を試みた。家族で移民してきた者には、共同住居ではなく一軒家が提供されたため、彼らは敷地に付随する空間を利用して、鶏や羊、豚を飼い、野菜を育てた。収穫した野菜は、キムチ漬けにし、食堂や個人に売った⁸。また余った敷地でサトウキビを育てることができる農場もあった⁹。収穫したサトウキビは農場が買い取ってくれるため、こうして現金収入を得る者もいた。

しかし多くの移民は、生活の質の大幅な向上が望めないことは勿論、将来の見通しも立たない中で、砂糖プランテーションを離れる道を選ぶようになった。かれらはすぐに都市

に向かわずに、砂糖以外のパイナップルやマカデミア・ナッツ、タロ芋、花農園等の農場で働くことを選んだ。新規移民労働者の受け入れを見込むことができた砂糖プランテーションとは異なり、砂糖以外の農場は地元の労働力に依存せざるを得なかったため、砂糖プランテーションよりも高い報酬が支払われたためである。

仕事を求めて都市に流れたコリア系移民は、最初は商業あるいはサービス業の仕事に就いた。中でも男性は工場労働者、用務員、使用人になることが多く、女性は洗濯・仕立屋の作業員、家政婦、使用人になることが多かった¹⁰。つまり高度の知識や専門性が求められない非熟練の仕事に就いたのである(表1参照)。ある移民は非熟練の仕事を渡り歩いた日々を、「庭師になったりレストランのキッチンで働いたり、洗濯屋で働いたりした」と話している¹¹。そしてパイナップルの缶詰工場に近いホノルルのリリハ通り周辺や、洗濯屋が多いワヒアワ地区では、コリア・タウンのようなコリア系移民の集住地区も現れた¹²。

やがて都市に流れたコリア系移民の中から、大工や靴職人、機械の技術者といった職人の道へ進む者が出てきた。中には、社会福祉や年金といった社会保障を受けるために、修理店などの技術職に就く者もいた。当時の様子を、移民は次のように語っている。「知り合いのコリアンのおじさんから、『数時間働いて年金を稼いだらいいよ』と誘われ、父は家具店で働くことにした。しばらくしてから、母もそこで働き始めた。それまで年金をもらえる仕事に就いていな

かったから、僅かだったけれど、ここで退職後の生活を保障することができた」¹³。「父は映画館を経営する会社に入った。映画館には革張りのシートがあったからその修理の仕事に就いた。そこで働いたから年金をもらえるようになった」¹⁴。

一方で、一時的に砂糖プランテーションに戻る者もいた。社会学者のリンドは、移民労働者が都市部においても英語力がなく、地元労働市場の事情に明るくないという事情から、

表1 非熟練労働/専門職の占める割合(抜粋)

	職種	1910年	1930年	1950年
日系	非熟練労働	76.8	35.9	16.3
	専門職	0.5	3.4	5.5
中国系	非熟練労働	48.6	24.4	5.3
	専門職	0.5	3.0	10.7
コリア系	非熟練労働	—	53.4	11.4
	専門職	—	2.7	8.6
フィリピン系	非熟練労働	—	90.1	52.5
	専門職	—	0.6	1.2
ハワイ全体	非熟練労働	65.0	53.6	22.5
	専門職	1.1	3.4	7.3

出典:Lind, *Hawaii: The Last of the Magic Isles*, 61.

当時は砂糖プランテーションに舞い戻る人が多かったと指摘している。砂糖プランテーションに戻れば、安定した収入と無償の住宅が待っていた¹⁵。また年金受給者は、時間を短縮して働くこともできた。ゆえにこの制度を利用した人も多く、1930年には砂糖プランテーションで働く5人に1人は45歳以上となっていた¹⁶。あるコリアン系の2世は、家族の引越しについて、次のように語っている。「ワイルアの農場に移り、そこで小さな商店を始めた。でも客がツケを払ってくれなくて商店は潰れてしまった。だからヒロの砂糖プランテーションで家族皆で働くことにした。でも砂糖プランテーションでの仕事を父が嫌がり、ホノルルにまた引っ越すことにした。ホノルルで父はレストランのバーで働いた」¹⁷。このように職を求めて移動を繰り返した多くの方は、最終的に都市部の仕事に就いていったのだった。

こうしてコリア系移民の都市化が進んだ。1930年代、砂糖プランテーションに残った移民は、1割にも満たなかった¹⁸。逆にコリア系移民の都市部の人口が増えた。1930年時点では、コリア系移民の45%がヒロ市（ハワイ島）およびホノルル市（オアフ島）の都市部で生活し、65%がオアフ島に移住していた（表2参照）。

表2 コリア系移民の居住地と都市部が占める割合(1930年)

1930年 センサス	ハワイ 全体	都市部		非都市部			
		ヒロ市	ホノルル市	オアフ島 ホノルル以外	ハワイ島 ヒロ以外	マウイ島	カウアイ島
コリアン全体	6461	288	2604	1545	843	819	362
男性	3999	167	1442	979	608	565	238
女性	2462	121	1162	566	235	254	124
コリアン全体に占める割合(%)	99.8	4.4	40.3	23.9	13.0	12.6	5.6
都市部が占める割合(%)		44.7%					
オアフ島が占める割合(%)			64.2%				

洗濯屋へ：米軍基地の非日系優遇

コリア系移民の多くは、都市部（あるいはその近郊）で洗濯の仕事に従事するようになった。中でも後にコリア系移民の子供たちが、「親たちが社会上昇できたのは、プランテーションを離れ、ホノルルで洗濯・仕立屋か修理屋になったからだ」¹⁹と語ったように、洗濯（仕立て）屋で働くようになった人や、洗濯（仕立て）屋を開業した人が特に多かった。なぜ洗濯（仕立て）屋だったのだろうか。この背景には、ハワイの4割以上を占める日系人が排除され、非日系人が優遇された米軍の差別的な基地運営方針があった。

ハワイは現在においても米軍の重要な拠点であるが、その歴史はアメリカのハワイ併合とともに始まる。当時のアメリカは、ハワイを「オリエント世界に対する米国の軍事作戦の中心点」と位置づけていた。特に日本に対する防衛の最前線として、ハワイは大きな意義をもつ地であった²⁰。それ故米軍はオアフ島に、「日本軍10万人の攻撃に対して、大西洋の米軍が、パナマ運河を通過して（当時はまだ開通していない）ハワイに到着するまでの1ヶ月間耐えうるだけの戦力」を確保できるような基地を建築することを計画したのだった²¹。

ハワイ指令本部(Home of the Hawaiian Division)が置かれたスコフィールド・バラックス(Schofield Barracks)は、1908年に建設が始まった。スコフィールド・バラックスは、オアフ島の中心部に位置する。パール・ハーバーから内陸に8キロ入ったワヒアワという地区に隣接し、砂糖プランテーションとパイナップル農場に囲まれた土地である。島の中心部に立地していることから島の北側に抜けるにもアクセスが良く、ホノルルの都市部へもパイナップル用の運搬列車が通るなど、交通の便に優れている。

72万平米の広大な土地に建設されたスコフィールド・バラックスは、ハワイにおける米軍最大の基地である。基地は他にもパール・ハーバー付近、ホノルル市、ホノルル市近郊にもあったが、陸軍のハワイ機動部隊本部はスコフィールド・バラックスに置かれた。1910年には1,371人だった軍の人口も、1921年に1万5千人、1939年に2万人に増加し、スコフィールド・バラックスの兵舎も拡張し続けた。兵舎は、1930年代初めまで「砂糖プランテーションの労働者と同じくらい酷い」と言われたが、1935年にコンクリートの兵舎が完成し、第二次大戦中にはエアコンも入った快適な宿舎へと様変わりした²²。

また兵舎の拡充に伴い、娯楽施設も拡充していった。1920年時には27の映画館（4,330人収容）に、3,780人を対象にした270の教育プログラムも運営されていた。敷地には、テニスコート、ゴルフ場、ポロの馬小屋とフィールドもあった。更に1930年になると、

体育館やプール、図書館が併設された娯楽施設が完成し、ビアガーデンなどの交遊施設も整備された²³。また商業地区の開発も、1929年に1億ドルもの資金を投じて進められた。この結果、軍から営業許可を受けた商店は、それまでの雑然とした商業地域から、美容院や宝石店、レストランを収容した巨大な商業施設で営業することになった。

しかし基地の拡大にも関わらず、米軍は、地元の住民を基地の中に受け入れることについては難色を示した。これは軍人として受け入れることは勿論、基地のさまざまな仕事を発注したり、雇い入れたりすることをも含むものである。

この背景には、非白人に対する人種偏見と、非白人が主流となっているハワイ社会に対する不信感があった。1924年、サマーオール司令長官(Charles P. Summerall)は、次のような発言を繰り返した。ハワイの中国系は「人に気を緩めることがなく、秘密主義的で、隠忍自重的で、平和的だけど地味」であり、コリア系は「すぐに興奮し、迷信的、臆病になりがち」である。またフィリピン系は、反米的独立論に毒されていて、「口のうまいペテン師に影響されやすい」とし、ネイティブ・ハワイアンは「楽観的でのんきで音楽と踊りと歌に夢中」な人々で、ポルトガル系は「大人も子供も知能的に足りない」人々と評した²⁴。

このような差別意識が存在する中、日系に対する偏見は特に強かった。周知の通り、米軍の日系移民に対する差別は、第二次大戦の日系移民に対する差別的待遇という形で明確化するが、ハワイではすでにこの頃から顕著に現れていた。1922年、サマーオール司令長官は次のように語っている。「(日系人のように)外国の市民権を保持しようとする集団に対して世界のどの国においても心を開くことはできないだろう。日系人がアメリカナイズした、という証拠はどこにもない。彼らは白人と付き合おうとさえもしない」。ここで当時の日系(コリア系も含まれる)移民の国籍について付記すると、当時の日系人は法的に「帰化不能外国人」に位置づけられていたため、アメリカ生まれの2世はアメリカ国籍を持つことができたが、1世はアメリカの市民権を取得することができなかった²⁵。そのため日系人は「外国の市民権を保持しよう」として日本国籍を保持していたわけではない。さらに米軍の日系移民への差別的待遇は、アメリカ国籍の日系2世にも向けられた。1920年に地元住民の予備兵登録にあたって、当時のハワイのファリングトン知事(Wallace R. Farrington)は、日系2世の従軍はアメリカへの忠誠心を高め、祖国寄りの1世の勢力を排除することができると主張したが、米軍は入隊拒否を決めたのだった。

同様に、米軍は基地のサービス部門の仕事からも日系移民を排斥した。軍勢力増強に伴い基地が拡大化すると、米軍は当初難色を示していたものの、「地元住民は労働者に限定し

て受け入れるべき」という方針を決め、基地のサービス部門の仕事を、地元住民に委託する形で下請けに出すようになった（委託ではなく直接雇用されることもあった）²⁶。だが米軍は、この委託許可も日系人には与えなかった。当時の陸軍少将モートン(Charles G. Morton)は、「日本人の血が流れる者は、アメリカ合衆国の陸軍に入隊することも、軍の組織や部署から業務委託を受けることも禁ずる」²⁷と、市民権を有する2世を含め、日系移民を軍に関わる一切の業務から締め出した。

結果的に、コリア系移民は洗濯（仕立て）屋の業務委託を優先的に受けられるようになった。するとコリア系移民の間で、「基地の洗濯屋の仕事は、コリアンかチャイニーズしか認められないらしい」という噂が立ち、またたく間に広がっていった。さらにこの噂は、コリア系の間で「商売をするなら洗濯屋くらいしかない。人生を前に進む手段であり、唯一残された方法かもしれない」と言われるようになり、コリア系の洗濯屋の仕事への従事に拍車をかけるものとなった。こうして米軍の日系移民に対する差別的待遇の副産物のように生じた非日系移民への優遇的措置によって、多くのコリア系移民は基地周辺の洗濯屋の仕事に従事するようになっていったのだ²⁸。

軍から営業許可をもらった洗濯屋の仕事は、公式的にはシャツやズボン、帽子といった軍服の洗濯を引き受ける仕事であるが、洗濯屋の多くは軍人の靴下や下着、服の洗濯も行った²⁹。当時の洗濯屋は、「洗濯屋」と呼ばれることよりも、「仕立屋(Tailor shop)」と呼ばれることが多かった。洗濯屋の仕事が、単に洗濯だけではなく、ある移民が「木炭鉄のアイロンで軍服にアイロンをかける仕事をして、小銭を稼いだ。軍服にはボタンが20もあるんだぜ。コートやシャツのボタンホールもつくったりして、毎晩十時まで起きていた」と語ったように、アイロンかけをはじめ、ボタンの取り付けや修繕、裾上げまで含まれていたためである³⁰。

またスコフィールド・バラックスでコリア系の洗濯屋が一気に増えたことに伴い、隣接のワヒアワ地区にコリア系の人々が流れこむと、洗濯業以外の仕事にもコリア系の人々が就くようになった。知り合いを頼りにスコフィールドを目指す者もいれば、プランテーションでの仕事に見切りをつけてホノルルに出たが、ホノルルで仕事にありつけなくスコフィールドに引っ越す者もいた。あるコリア系移民は、その経緯を次のように語っている。「父は、プランテーションからホノルルに移り住み、雑貨店の販売員になったけれど、一年後に自分の食料雑貨店を開くことができた。でも借金だらけになってしまい、5トントラックに荷物を積んでワヒアワに引っ越すことになった。(略)ワヒアワでは、エドワー

ド・リーの洗濯屋で働いたけれど、病気になってしまった。だから母がワヒアワホテルのメイドの仕事をするようになった。収入が足りなくて、士官の家で家政婦の仕事もするようになった」³¹。

中には、基地で洗濯屋以外のサービス業の仕事に携わる許可をもらった者もいた。しかし 1932 年の不況のあおりを受け一斉に解雇された時期があり、人々は再び洗濯業へと集中した³²。当時を知る人は、「不況で大変だったけれど、コリア系の間で洗濯の仕事を分け合う形でなんとかしのいだ」と語っている³³。

それでは洗濯屋の仕事によって、コリア系移民はどのくらいの収入を得ることができたのだろうか。基地周辺の洗濯は、1 着（1 式の場合もある）数セントで行われ、洗濯屋の下請けの仕事でも週給 7 ドル以上の報酬を得ることができた³⁴。当時、砂糖プランテーションでの労働者（男性）の最低賃金は、1909 年の「大ストライキ」によって、1 ヶ月 26 日以上働いた場合、月額 22 ドル、日給は 77 セントが約束されていた。また 1920 年の二度目の「大ストライキ」では、日給 1 ドル 25 セント（女性は 93 セント）の賃上げ交渉が行われていた時代である³⁵。つまり洗濯屋は、経営者でなかったとしても、農場よりも少し多く稼ぐことができたのである。故に農場で 1 籠 1 ドル程度の代金で洗濯を引き受けていた女性にとっては、大変魅力的な仕事であった。農場で働く男性よりも高い報酬を得ることができたからである。

洗濯業は、1930 年前半不況の影響によって一時的に低迷するが、その後 1930 年代末頃になると、男性は週給 19.75 ドルを稼ぐまでに所得が向上した³⁶。但し、配達や集金の仕事につく男性に対して、女性は 9.60 ドルとほとんど値上がりしなかった。しかしベテランでも 10 ドルを稼ぐ人が少なく、週給 5 ドルから 8 ドルを稼ぐのがやつの家政婦に比べると、報酬は高かった³⁷。洗濯業の 3 分の 2 は女性だった³⁸。1930 年代まで、コリア系の女性のほとんどは家政婦か洗濯業をして働いていた。また、学校を卒業したばかりの若者でも、月給 45 ドルから 50 ドルの報酬を得ることができた³⁹。

経営者も下請けも、洗濯業を家族総出で行った。1909 年生まれのある子供は、日常の暮らしぶりを次のように語っている。「洗濯の仕事を始めるためにワヒアワに引っ越した。父は朝 4 時に起きて、仕事を始めた。(略) 私は母の家事を手伝いながら、洗濯の仕事も手伝った。5 歳か 6 歳の時は洗濯物を干す手伝いをし、大きくなると洗濯物を畳んだり、アイロンをかけたりするようになった。毎日夜の 8 時か 9 時まで家族皆が働いた」⁴⁰。このように洗濯業は、家族の無償労働によって成立した仕事であった。また当時は特に子供が

多い時代だったので、生活に苦しむ人も少なくなかった。洗濯屋を経営する家の子供は、当時の様子を次のように語っている。「当時、洗濯物の支払いは月 1 回まとめて行われた。兵隊さんたちの給料の日にあわせて行われる。そしてその日の恒例行事があった。母が米を数袋、肉や豚肉のかたまりを買ってきて、それをいくつかのパッケージにわけ、兄のピンキーと私が、食べるのに困っているコリアンたちにそれを配って歩くのだ」⁴¹。こう話した子供は 1924 年生まれである。

洗濯屋の開業にあたって、人々は開業資金を、日本の「頼母子講」にあたる「契（ケ）」という方法で得た⁴²。洗濯屋を開業した経緯について、あるコリアン女性は次のように語っている。「夫と砂糖プランテーションからパイナップルプランテーションに移ったけれど、それでもプランテーションで子供を育てることが難しくて、ホノルルで暮らしていける方法を探した。でもホノルルで働いても不景気だったし、支払われる給料も僅かだった。だから G.I. の洗濯をやることにした。しばらくして 4 つの契に加わり、それぞれ 100 ドル払った。そしてこのコリアン式で調達した資金で、スコーフールド・バラックスで洗濯の店を構えることができた」⁴³。

当時の「契」は、一口 50 ドルから 100 ドル程度であった。当時の人々にとって、「契」は最大の関心事だった。ある女性は、「一番高い金利を払うことを約束した人に競り落とされるから、毎月誰がお金をもらうことになるかがいつも話題になっていた。私たちのお母さんたちもそうやってお金を調達したし、私も洗濯屋を開業する時は『契』に入ったし、知り合いのほとんどは『契』のメンバーだった」と語っている⁴⁴。

「契」のメンバーは、主に女性であった。その理由について、前述の女性が次のように説明している。「男性は、年齢が高く、収入を証明することができないことが多かったから銀行からお金を借りることができなかった。だから私たち女性が『契』に参加して資金を調達した。それと当時のコリアンの女性は、写真花嫁とかで来た人も多く、まだ若かったことも関係していると思う」⁴⁵。こうして小資本で始められる洗濯業がコリア系移民の間で普及していった。

2. 出稼ぎ移民から定住移民へ(2)：写真花嫁と子供の教育問題

砂糖プランテーションにやってきた出稼ぎ労働者の中には、早々に帰国した者もいた。

しかしコリア系移民の帰国率は、他の移民と比べて低かった。1903年から1915年までに渡航した移民の内、コリア系移民は約6分の1が帰国したが、同じ時期にハワイに渡った中国系や日系の移民は、入国者数の2分の1が帰国の途に就いていた。

コリア系移民をハワイに引き止めたのは、移民制度の打ち切りと祖国の植民地化であった。一旦帰国したら二度とハワイに出稼ぎに来ることができないことや、帰国しても無事に生活していけるかわからないという心理的不安が続く中で、滞在が長期化していったのである。

こうした状況下、写真花嫁という制度が成立した。これは、1908年の日米紳士協定によって日系移民にだけ認められていた「写真花嫁」の制度が、1910年の韓国併合によって、「日本人」となった朝鮮人にも適用されるに至ったことに端を発する。すなわち祖国の植民地化は、コリア系移民の帰国の道を遠ざけたが、一方皮肉なことに、彼らに結婚と子供という未来を切り開いたのである。

写真花嫁の制度を、コリア系移民はどのように利用し、写真花嫁としてやってきた女性は、どのような運命を辿ったのだろうか。また写真花嫁によって子供の数が増えたが、親は子供たちにどのような教育をしたのだろうか。帰国を考え朝鮮語教育に励んだのだろうか。あるいはアメリカで生き残る術を身につけさせたのだろうか。ここではまず定住のきっかけとなった写真花嫁について詳述し、次に子供の教育問題を通してコリア系移民の定住意識が浸透していった過程を考察する。

写真花嫁

写真花嫁の制度が始まる前の、ハワイにおけるコリア系の女性の数は非常に少なかった。ハワイ労働局（1915年）のデータによれば、1903年から1905年にハワイに移民してきた7,859のうち、男性は6,717人、女性は677人であった。そのうち465人は未成年者である。さらにハワイにやってきた女性のほとんどは、砂糖プランテーションで働く夫と一緒にやってきた人々であった。

一方、男性の大半は、未婚だった。そして若かった（表3参照）。1910年、男性の大半は25-39歳だった（64%）。しかし1920年になると、男性が最も多い年齢層は35-49歳（50.2%）に移っていた。当時の心境を、ある男性は次のように語っている。「最初はお金を稼いだら朝鮮に帰るつもりだった。でも祖国に帰る意志がなんとなく弱くなった。1912年か1913年頃だったと思う。写真花嫁を呼び寄せて、こっちで結婚しようかな、と考え

るようになったんだ」⁴⁶。この語りが示すように、この頃から徐々にハワイで結婚を考える男性が増えていった。

しかし写真花嫁を呼び寄せることは容易ではなかった。写真花嫁の制度を利用するためには、日本領事館で「日本人」として登録し、朝鮮からハワイまでの片道切符代と仲介斡旋代金を払わなければならなかった。当時、200ドルから300ドルかかった写真花嫁の費用は、いくら「大ストライキ」によって賃金が月額22ドルに上がったとはいえ、高額なものだった。多くの人は日本の「頼母子講」にあたる朝鮮の「契(ケ)」に加わり、そこで競り落としたお金を使って資金を調達した⁴⁷。

同様に写真花嫁としてハワイに渡る決意をした女性も、やはり朝鮮で苦しい経済状況に置かれていた人々であった。ある女性は朝鮮での生活について「いつも母が食べるものに困っているのを見て育った。食事を抜かすこともよくあった」と語っている。それ故、仲介人も写真花嫁を探すときに「(ハワイに行けば)食べ物がなくて途方に暮れることも、くべる蒔がなく凍える心配もないよ」と語りかけて勧誘した⁴⁸。当時の日本でも貧しい暮らしをしていた農民は多かったが、朝鮮でも総督府の土地調査事業などによって土地を失った者が多く、農民は貧困に喘いでいた。

但し、写真花嫁は極貧の中で、当面の生活をしのぐために移住を決意したのではなく、将来の見通しがたない生活を抜け出るために移住を決意するケースが多かった。ある女性は、15歳になったある日、親戚に呼び出された母が、家に帰ってきて自分にこう話したという。「ここにいたら働き詰めの一生で終わるわ。でもアメリカでは、女は男衆と一緒に汗水たらして働くことはない、と言っていたわ。アメリカに行きなさい。アメリカに行ったら幸せになりなさい」⁴⁹。このような女性の心理を利用して、仲介人も写真花嫁を説得するにあたって、次のように話した。「ここで結婚してしまったら死ぬまで夫と舅姑にこき使われて一生終わってしまう。もしハワイに行ったら、こんな奴隷のような人生に縁を切れるのよ」⁵⁰。

やがて写真花嫁の話は、ハワイに行けば金持ちになる、という噂となって人々に伝わっていった。ある仲介人は女性たちにこのように話しかけた。「ハンナム学校の偉大なク先生の話聞いたことがある？先生の妹さんがつい最近ハワイに嫁いだの。向こうのコリアンの人と結婚したのよ。だから今ではク先生の家族は、ハワイから送ってくれるお金や高級な服でいっぱいなのよ」⁵¹。また写真花嫁でやってきた女性は、移民する前に仲介人と、次のような会話を交わしたことを覚えている。少し長くなるが、写真花嫁の手続きやそれ

をめぐる心理的状況がよく表われてので、全文を引用する⁵²。

「(ハワイに行ったら) アメリカ人と結婚するの？」

「いいえ。コリアンの男の人よ」

「どうやってハワイのその人と知り合うの？」

「それが私の仕事。あなたは写真を撮るだけでいいの。写真をみてお互い納得してから」

「でも写真を撮るお金がないの」

「何もかもやってあげるから心配しないで。準備ができれば日本人の写真屋さんを呼ぶからね」

—写真を撮り終え、仲介人は返事を 60 日待つよう、次のように言った—

「写真の裏に名前と年齢を書いてハワイの事務所に送るの。次に私が来るときは、あなたの夫になる人の写真とお金をもってくるからね」

「お金をくれるの？」

「そうよ。その男の人があなたにお金を送ってくれるのよ」

ここでいう「お金」とは、女性本人あるいは家族に送られる結納金や結婚資金のことではない。女性の朝鮮からハワイまでの片道切符代である。

さらに写真花嫁の中には、教育や信仰の自由を求めて渡航した女性がいることを、ジェンダーの視点から移民史を論じたリリ・M・キムは次のように述べている。「見知らぬ土地へ渡る危険を冒してまでもコリアンの写真花嫁がハワイに渡ったのは、教育の機会を得るため、日本の植民地支配から逃れるため、信仰の自由を得るためであった」⁵³。

教育や自由を求めて写真花嫁になった女性は、コリア系だけでなく日系移民にもいたが、朝鮮独特の事情もあった。特に 1910 年代は、植民地政策により言論や集会の自由が認められず、憲兵によって人々の一挙手一投足が監視された武断統治の時代であった。例外的にキリスト教会では、欧米諸国からの批判を逸らすために、言論や集会の自由が認められていたものの、厳しい監視下に置かれていた。当時の様子を、ある人は次のように述べている。「私は 100 世帯くらいの田舎の小さな村に住んでいた。でも人々は出歩くこともできないし、話すこともできなかった。日本の植民地統治の下で自由はなかった。自由に気ままに話すこともできない。とてもつらい時代だった。そんな時に親戚の中でハワイに写真花嫁に行った人がいることを叔母が教えてくれた。それ以来、私はハワイの生活を空想

しながら過ごした。だから写真を送った。ハワイは本当に自由な場所だと思う。皆がそこそこの暮らしをしている。ハワイは自由だから、話したいと思う時に話せるし、働きたいと思うときに働ける」⁵⁴。

また移民した女性の中には、朝鮮でアメリカの宣教師が始めた学校に通い、そこで写真花嫁の仲介人から声をかけられた者もいた。彼女らはハワイに行けば信仰活動を自由に行なうこともできるし、教育ももっと受けることができる、と言われて移民をだった⁵⁵。1920年にハワイにやってきた女性は、荷物の大半は日用品だったけれど、将来のために教会で使っていたノートを大事にしまって持ってきたと当時の心境を語っている⁵⁶。

朝鮮を出発した女性は、日本でハワイ行きの船に乗り換えた。従前の研究では、コリア系の写真花嫁が辿った行程に関して叙述されることが少なかったので、長文になるが、前述の仲介人との会話を覚えていた女性の語りをここで紹介する。

1918年3月、馬山から釜山を経由して横浜に着いた。横浜では、コリアンの宿屋の主人キム・ジョンサムさんが出迎えてくれた。ハワイやアメリカ本土に向かうほとんどのコリアン旅行者は、乗り継ぎの船が出るまでキムさんの宿を利用した(略)。船を待っている間、キリスト教徒のヤンさんがよく話しかけてくれた。彼女は夫と一緒に暮らすためにハワイに行くのだと話してくれた。そして朝鮮では、アメリカ人宣教師の家族の家政婦として何年も働いたことを教えてくれた。よく彼女は、神への強い信仰心だけが結婚生活の幸せと繁栄をもたらしてくれるのだと私たち写真花嫁に語った。そして毎朝6時半から一緒に聖書の勉強をしようと呼びかけてくれたけれど、それを気にとめる人は少なかった。でも聖書の勉強会に参加し、神への信仰を誓うようになった。(略)1918年4月23日に横浜港を出発した。(略)ホノルル港に到着してから、移民局の審査があった。その中には識字テストもあった。母国で読み書きができないと入国が認められないと言われた。でも検査は簡単だった。紙にハングルと英語で「この紙と鉛筆を審査官の右に持って行き、両手で審査官に渡してください」と書いてあった。同行していた通訳の人が見つめる中、なんとかやり終えることができた。⁵⁷

こうして日米紳士協定が廃止される1924年まで、951人の女性が写真花嫁として朝鮮半島からハワイにやってきた⁵⁸。

ハワイの港で結婚相手の顔を始めてみた女性の多くは、後悔の念にかられたといわれる。結婚相手の男性が、手元の写真とは似ても似つかない風貌だったことが、その主な理由だった。日系の写真花嫁も経験したこの衝撃的な対面について、写真花嫁の子供は次のように語っている。「母は、ホノルル港で父とホン牧師に出迎えられた。ホン牧師は父と母の結婚の儀式を行なうために港に来ていた。でも母は父の顔を見て、泣きながら（朝鮮に）帰りたいたいと言いだした。父が送った写真には、父の顔中に残っていた疱疹の痕がまったく写っていなかったからだった」⁵⁹。

当時は写真を撮る機会が限られていたため、昔にとった写真を送った男性も多かった。あるコリアンの写真花嫁は、次のように語っている。「ハワイに到着して結婚相手を見て強いショックを受けた。相手は手元の写真よりもかなり年上で、日焼けをして真っ黒だった。あまりに驚いて（一緒に写真花嫁としてハワイにやってきた友人と）二人で泣きながら、『私たちが一体どんな悪いことをしてこんな運命を背負うことになったのだろう。私たちはこれから一体どうなるのだろう』と悲しみに打ちひしがれた。でも仲介人の人から、男性はハワイへの片道切符しか買っていないから朝鮮に帰ることはできないと告げられ、仲介人の家に二晩お世話になったあと、泣く泣くあきらめた。1913年12月24日に結婚式を挙げた」⁶⁰。当時、写真花嫁としてやってきた女性の多くは、10代後半から20代前半であった。かたや相手となる男性は、自分より一回りも二回りも年上であるケースが殆どだった⁶¹。

また写真花嫁となった女性は、結婚相手の男性と年齢層だけではなく、出身地域も異なることが多かった。1903年から1905年までの出稼ぎ移民は、移民の募集斡旋会社の事務所が全国の都市部に11箇所設置されたため、朝鮮各地からやってきた。しかし写真花嫁は、朝鮮南部の慶尚南道出身者が多かった⁶²。当時は、出身地域が異なると、相手の言葉をまったく聞き取ることができないほどの違いがあった。加えて、味の好みの違いにおいても、簡単に割り切ることができないほどの苦労があった⁶³。

しかし写真花嫁がハワイに来て最も苦労したのは、生活苦であった⁶⁴。高額なハワイまでの切符を用意してくれた夫は、成功者であったわけではない。生活を共にするにつれ、「契（ケ）」によって資金をかるうじて調達した夫の経済事情が見えてくる。ハワイに行ったら豊かな暮らしが待っている、という噂は幻想だった。そのような思いを抱きつつ、砂糖プランテーションで暮らすことになった写真花嫁は、キャンプで男性とともに働いたり、賄いや洗濯の仕事をしたりした。他方、都市部に暮らした女性は、内職に明け暮れる

毎日を送った。

やがて写真花嫁は年上の夫を促し、ホノルルやオアフ島などに移り住み、他の写真花嫁が暮らす地域で住み始めるようになった。彼女達が都市への移住を決断したのは、ある写真花嫁が「プランテーションでの仕事は肉体労働だったから限界があった。何か肉体労働以外の仕事を探すために街にでることにした」と語ったように、全ては生活の豊かさを求めたためであった。そして同じように生活の糧を求めて都市部へ移り住んだ写真花嫁の中には、年上の夫が歳を取り、肉体労働ができなくなったという、止むに止まれぬ事情を抱える者もいた。当時の様子について、次のような報告がある。「写真花嫁は、15歳から20歳も年上の男性と結婚した。だから後年になって女性が家族を養うために働かなければならなくなった。そうしてホノルルでは写真花嫁が運営する下宿屋が多かった。大抵の場合、写真花嫁の夫は死んでいるか、歳をとっていた」⁶⁵。

都市に移住した写真花嫁は、キリスト教会の活動に加わるが多かった。その背景には、コリア系移民の多くが去ったあとのプランテーションでの生活から抜け出るため、同じ様にホノルルへ移住してきた他の写真花嫁も多く通っており、またコリア系移民が集まる場所が正にキリスト教会であったという特殊な事情が存在したが、中には移民以前からキリスト教会に通う写真花嫁もいた。都市で写真花嫁たちは、教会を中心に肩を寄せ合って暮らした。当時の様子について、ある移民は次のように語っている。「日常生活も教会活動も不自由だったから、ホノルルの聖ルーク教会地区に引っ越すことにした⁶⁶。聖ルーク教会には写真花嫁の女性が他にも15,6人いたし、ここでしばらく暮らすことにした」⁶⁷。

写真花嫁は、祖国独立運動にも積極的に参加した。その理由は、彼女たちが移民以前に多少の教育を受けていたことや、祖国朝鮮で植民地経験を直に体験したためであると言われている⁶⁸。しかし当時は、人々特に女性一的生活の中心は教会にあり、教会そのものが祖国独立運動と一体となっていた時代だったため、写真花嫁だけが独立運動に身を投じたわけではなかった。

人口の変化

写真花嫁によって、ハワイのコリア系の人口は大きく変化した。女性と子供の人口が増加したからである（表3参照）。1910年時、帰国および本土への再移住によって、ハワイのコリア系移民の人口は7,800人から4,500人に減少していた。しかし写真花嫁の移住と2世の誕生によって、コリア系移民の人口は増え続け、1920年に4,950人、1930年に6,461

人、1940年に6,851人に増加した。これは20年で人口が約1.5倍に増えたことを意味する⁶⁹。

特に未成年者の占める割合が増えた。15歳以下の人口は、1910年に1割程度であったのが、1920年には3割、1930年には5割近くを占めるようになった⁷⁰。子供が増えたことは、アメリカ国籍者（＝当時は帰化不能外国人に範疇化されていたため、アメリカ生まれの2世のみがアメリカ国籍を取得することができた）が

増えたことを意味する。1930年になると、外国生まれ(46%)よりも、アメリカ生まれ(54%)が過半数を占めるようになった⁷¹。

男女の比率では、女性が占める割合が年々増加した(1910年(87%:13%)、1920年(71%:29%)、1930年(62%:38%))⁷²。この間、主だった構成員の年齢層を見ると、男女で大きな差が存在した(図表3参照)。1910年、男性は25-39歳(64%)、女性は0-9歳(37%)および25-34歳(19%)の層が多くを占めたが、1930年になると、男女とも0-14歳の子供

表3 コリア系移民の年齢構成比(男)

	1910	1920	1930
0-4	3.56	11.38	11.60
5-9	2.31	5.97	13.25
10-14	1.65	3.52	10.03
15-19	2.06	2.23	5.55
20-24	6.49	1.49	3.00
25-29	22.62	1.94	1.90
30-34	25.29	8.61	1.38
35-39	16.18	17.83	1.53
40-44	10.02	20.02	6.65
45-49	5.34	12.35	13.15
50-54	1.98	7.69	14.73
55-59	1.02	4.03	8.65
60-64	1.12	1.52	5.35
65-69	0.23	0.51	2.03
70-74	0.05	0.51	0.75
75-79	0.00	0.11	0.45
80-84	0.00	0.00	0.00
85+	0.03	0.00	0.00
不明	0.05	0.29	0.02

出典:Nordyke, *The Peopling of Hawai'i*, 197.

コリア系移民の年齢構成比(女)

	1910	1920	1930
0-4	20.43	25.83	18.52
5-9	16.45	12.60	20.67
10-14	7.47	8.47	16.53
15-19	5.32	5.78	7.15
20-24	6.98	16.32	4.91
25-29	9.96	6.82	6.17
30-34	9.30	5.30	9.55
35-39	7.14	4.89	3.70
40-44	6.15	4.55	2.84
45-49	3.82	3.17	2.89
50-54	3.32	2.61	2.64
55-59	1.00	1.38	1.63
60-64	1.00	1.24	1.34
65-69	1.00	0.49	0.69
70-74	0.50	0.41	0.57
75-79	0.16	0.14	0.20
80-84	0.00	0.00	0.00
85+	0.00	0.00	0.00
不明	0.00	0.00	0.00

出典:Nordyke, *The Peopling of Hawai'i*, 197.

が占める割合が大幅に増加し、また男性の場合は 45-59 歳、女性は 25-34 歳の層が多数を占めていた。すなわち 1930 年になると、15 歳以下の子供の人口が急激に伸びる一方で、成人男性の多くは 40 代後半から 50 代になり、高年齢化していたのである。

子供の教育問題

このように、子供の数の急増というコリア系移民社会における変化が、人口推移より明らかになったが、これに伴い、子供の教育問題が移民社会の大きな問題となった。移民当初、人々の関心事は子供の朝鮮語教育にあった。それは、当時はまだ、人々が帰国を希望した出稼ぎ移民だったためである。また当時の子供が「いつも姉が母に手紙を読んできかせた」と語ったように、朝鮮で教育を受けることができなかつた親は、せめて子供が朝鮮語の読み書きができるようにと願った⁷³。中には、子供と一緒に朝鮮語の読み書きの練習を始めた親もいた。「父は文字を書くことができ漢字も知っていたけれど、母は読み書きができなかつた。でも母は文字を勉強しはじめ、最初は鉛筆の持ち方もわからなかつたけど、子供っぽい文字だけ書けるようになった」⁷⁴。

こうして子供の朝鮮語教育が問題となる中、メソジスト教会が教会で朝鮮語の読み書きを教える授業を始めた。語学学校に通う様子を、マウイの農場に住んでいた 2 世は、次のように語っている。「午前中に語学学校に通った。語学学校が終わったら、さとうきび畑を抜けて『アメリカンスクール』まで歩いて通った。学校には、カフェテリアがなかつたから米の入った缶の弁当箱をもって通った。でも日中弁当箱を木にかけていたから蟻が混じってしまうことがあって、ご飯を水でゆすいでから食べることも多かつた。2 時半に学校が終わって家に戻った」⁷⁵。この子供のように、公立学校の授業が始まる前に語学学校に通っていた例もあるが、多くの場合、子供たちは公立学校の授業が終わった午後に語学学校に通った。また当時、地元の学校は「アメリカンスクール」や「イングリッシュ・スクール」、語学学校は「コリアンスクール」や「ランゲージスクール」と呼ばれていた。

しかしコリア系児童の数が少なく、語学学校が設置されなかつた地域では、語学教育はほとんど行われなかつた。そのような地域では、親が教育をした。次のように語った移民がいる。「(都市部にいた時に) ヒロでは朝鮮語の先生がいた。先生を前にクラスの男の子たちと朝鮮語を暗唱する場面を懐かしく思い出す。でも田舎に引っ越してからは、父が朝鮮語の先生になった。母は仕事が忙しかつたから、父が『家では朝鮮語を学んで話し、学校では英語を学んで話す』ということを決めた。父は朝鮮の歴史や地理も教えてくれた」⁷⁶。

だが彼女の父はプランテーションに赴任した牧師で、漢文を読み書きできる程の教育を受けていたため高等な教育が可能だったのであり、このようなケースは極めて稀であった。

当時は、子供が貴重な働き手だった時代でもある。ハワイでは、14歳以下の労働は1930年代後半まで禁じられていなかった⁷⁷。ある2世（1915年生まれ）が「クニアプランテーションに引っ越して時、私は10歳で、妹が8歳になっていた。だからパイナップル畑でフルーツを摘む仕事をした」⁷⁸と語っているように、子供が現金収入を得ていた時代である。当時は皆、生活が苦しい時代であった。プランテーションでの子供の頃の様子について、ある2世は次のように語っている。「7年生と高校生になるまで学校に靴を履いたことはなかった。小さい時、靴はパーティや教会といった特別な時にしか履かず、はだして学校にいった」⁷⁹。そのため子供は、働いていなくても、「畑の野菜づくりを手伝い、外から果物をもぎとって、木を集めて切りそろえることが仕事だった」⁸⁰という語りが見える。このようにして親も子供も仕事に明け暮れる日々の中で、語学学校が設置されない限り、子供たちは朝鮮語を習うことなく育った。

こうした中メソジスト教会によって設立されたのが、ホノルルの寄宿学校である。子供たちは、教育のために親許を離れ、寄宿学校で暮らした。当初、コリアン・コンパウンド（Korean Compound）と呼ばれた寄宿学校は、教会に併設された男子学生用の語学学校兼寄宿舎であった。その後、英語で通常の小学校課程も教えられるようになると、寄宿学校は英語と朝鮮語で6学年まで授業を行った。6年生以上の生徒は、近くのメソジスト教団の私立校に通ったが、彼らは寄宿学校で生活を続けた。

この寄宿学校の人気は、一気に高まった時期がある。それは1914年に李承晩がハワイにやってきて、同学校の校長に就任した時である。特に李承晩が、アメリカの大学で博士号を取得していることが人気に拍車をかけた。当時の移民社会の様子について、「李承晩がプリンストン大学から博士の学位を取得していたことがとても具体的なものであって、人々の人気と信頼を集めることになった。李承晩は、知識や教育の代名詞となった」と、当時を知る者は語っている⁸¹。

「李承晩の名声」により学生数も一気に35人から120人に増えた⁸²。そして教育体制も整えられ、アメリカ人の教員4名とコリアンの教員3名が指導にあたるようになると、1907年には私立校として公認を受けることができるようになった。

李承晩が赴任してから、寄宿学校では語学教育だけではなく、民族教育も行われるよう

になった。「韓人中央学院」へと改名された同校では、朝鮮語だけではなく、漢文や朝鮮の歴史、地理も教えるようになった。この学校のプログラムにならって、プランテーションの語学学校でも民族教育が導入されるようになった。また独立運動をめぐる李承晩派と反李承晩派による移民社会の二分化によって、李承晩派の新たな寄宿学校「韓人基督学院」も建設された。

寄宿学校を卒業すると、正規課程の授業を受けるためには、地元の学校に進学しなければならなかった。しかし進学しても、寄宿学校に残ることはできた。そして大抵の子供は、寮で暮らしながら、近くの公立学校に通い、午後はアルバイトに励む生活を送った。寄宿学校で暮らしていたある2世（1905年生まれ）は、次のようにその生活を語っている。「韓人基督学院を卒業して、中央グラマー学校に進学した。放課後は新聞を売ってお金を稼いだ。1日50セントもらえれば幸運な方だった。靴磨きの仕事も時々したよ。あとよく観光客の船の近くにも行った。小銭を頂戴と騒ぐとお金を投げってくれた。1日75セントも稼いだ日もある。8年生になると、新聞配達もした。ダイヤモンドヘッドからカパフルまで配達して1ヵ月5ドル稼いだ」⁸³。

このように李承晩の活動とともに発展した寄宿学校であったため、李承晩や独立運動家らがハワイを去ると、コリア系移民の間で独立運動の熱も冷め、寄宿学校に子供を送る親も減った。そのため李承晩派の寄宿学校は、すぐに経営の危機に直面することになり、規模を縮小せざるを得なくなった。

しかし朝鮮語の語学教育は続いた。1920年代になると、コリア系の人々の都市化が進み、都市部のキリスト教会における語学教育が中心となったため、子供たちは学校が終わると、毎日教会へ向かった。その様子のあるコリア系2世は次のように語っている。「コリアンスクールは、アメリカンスクールが終わってから行く2番目の学校だった。先生は、教会の牧師でもあったミスター・パクだったけれど、とっても厳しかった。授業は、若かったからあまり真面目に受けなかった。コリア語をよく話せたわけでも書けたわけでもなかった。でも基礎だけは習えて、それはなんとなく覚えている。それが語学学校に通って良かった点だと思う」⁸⁴。

また、語学教育に熱心な親も、まだ多く存在した。何度も引越しをしたというある子供は、その理由の一つを次のように述べている。「パラマのメソジスト教会の近くに住むようになった。父と母は、この教会の近所にはコリアンがたくさん住んでいるし、この教会のコリアンの先生がいいという話を聞いていた」⁸⁵

しかしコリア系の語学学校は、日系や中国系に比べるとはるかに学生数が少なく、規模も小さかった。パターソン（2000年）は、「ハワイでコリアンの語学学校はほとんど繁栄しなかった。特に日系移民の語学学校に比べるとその特徴は顕著である」⁸⁶と指摘したように、日系や中国系の語学学校が1920年代から1930年代にかけて大幅に増加したのに対して、コリア系は増加したものの、その増加率は小さかった（表4）。

表4 語学学校の推移と増加率（コリア系・中国系・日系）

		学校数	学生数	増加率
コリア系	1921	8	337	54
	1931	10	520	
中国系	1921	9	1191	108
	1931	14	2483	
日系	1921	126	18612	110
	1931	175	39144	

出典:Administration in Hawaii, *Hearing Before the Committee on Territories and Insular Affairs, United States Senate, Seventy-second Congress Second Session, January 16, 1933* (United States Government Printing Office (Washington: 1933), 114-115.

増加率が伸び悩んだ背景には、学生が語学学校に通わなくなったこと

が考えられる。語学学校に通わなくなった学生にその理由を尋ねると、経済的問題の存在を答に挙げる声が多く聞かれた。尚、ここでいう経済的問題とは、次の二つのケースが含まれる。一つは、生活に困窮し、語学学校に通えなくなったケースである。ある子供は、中学校に通っていたが、父が亡くなって働かないとならなくなったため、兄弟皆が語学学校だけではなく、公立学校にも通えなくなったと語っている⁸⁷。また母親が亡くなり、語学学校を辞めたことについて、ある子供は次のように語っている。「コリアンスクールに通っていた時、若かったから真面目に受けなかった。それにコリア語をよく話せたわけでも書けたわけでもなかった。だから母が死んだ11歳の時にコリアンスクールを辞めた」⁸⁸。また進学するために、家族と離れて、ホノルルで住み込みの仕事をしながら学校に通う子供もいた。「姉が小学校を卒業したけれどエヴァプランテーションに住んでいたら小学校までしか教育を受けることができない。だから姉は住み込みの家政婦をしてホノルルの学校に通った」⁸⁹。「カフルには高校がなかったから、ホノルルに出てハオリ（白人）家族の住み込みの家政婦の仕事をしながら4年間高校に通った。兄弟姉妹も皆、ある年齢に達するとみな街に出て行った。働いて自活するようになった。当時は、カフルからホノルルまでタクシー以外に交通手段がなかったから」⁹⁰。このような子供たちも皆、語学学校に通わなくなった。

中には幼いときから親許を離れ、住み込みの仕事をしながら公立学校に通った者もいる。

「両親が離婚し、兄弟も多く経済的に苦しかったため、9歳の時にホノルルの住み込みで働きながら小学校に通った」⁹¹。公立の学校に通うだけで精一杯の毎日の中で、語学学校に一度も通わなかった子供も都市部にはいた。

もう一つは、生活に困窮するほどではないが、家計を支えるために働かなければならなかったため、語学学校に通わなくなったというケースである。ある子供は家計の苦しさを次のように語っている。「コハラプランテーションで働いていたけれど、父が結核になりホノルルへ引っ越すことになった。母がパラマで看護師の制服を洗濯し、一着10セントもらっていた。姉たちもハオレ（白人）の家でメイドとして働いた。姉たちは学校には行けなかったけれど、自分は学校に通わせてもらった。でも学校が終わって毎日3時間から4時間パイナップル缶詰工場で働いた。夏は8時間働いた」⁹²。「そのうち学校もずる休みするようになって、朝の新聞売りの仕事も始めた。海軍の給料日にあたる毎月15日と20日はホテル通りの靴磨きの仕事もした。その時私は11歳で、稼いだ3ドル50セントを毎日家に帰ってから、母に渡した」⁹³。この子供が自分の稼いだお金を自慢したのは、当時の未成年者の時給は1ドル程度だったからである。ハワイでは、1930年代後半に子供の労働が禁止され、未成年者の最低賃金が決められたが、この時決められた最低賃金は1日8時間労働で1.16ドル、1時間14.5セントであった⁹⁴。語学学校の学費は、週5日の授業で毎月3ドル程度であった⁹⁵。

他方、経済的に苦しいわけではないが、語学学校に通わなくなった学生もいた。語学学校に通わなくなった経緯を、子供たちは次のように語っている。「最初にパンチボール通りのコリアンスクールに通って、次にエписコパル教会のランゲージスクールに通った。僕だけじゃなく、兄弟皆コリアンスクールに通った。当時は漢文が読めるくらいになった。でも不自由するわけではなかったし、行かなくなった。言葉も徐々に忘れて、今は簡単な文字しか読めない」⁹⁶。「教会は両親の生活の中心だったし、私たちも日曜学校に行っていたし、アン牧師が教えてくれた語学学校にも通った。でも年々参加しなくなった。親は朝鮮語の礼拝だけは出席するようにと言った」⁹⁷。すなわち語学学校に通う必然性（あるいは必然だと思ふ気持ち）が、子供にも親にもなくなってしまったのである。

それではこの背景に、どのようなコリア系移民の心理的变化があるのだろうか。それはある2世の大学生が語ったように、社会的成功を実現するためには、語学教育よりも公立学校の教育の方が大切だと感じる心理が生じたためである。「多くの1世たちは自分たちがプランテーション畑で働かないといけない理由はきちんとした教育を受けていないからだ

表 5 学生数の推移(コリア系/1906-1934 年)

年	公立	私立	合計
1906	-	-	161
1907	-	-	210
1908	-	-	224
1909	-	-	180
1910	160	100	260
1911	177	106	283
1912	274	119	393
1913	304	96	400
1914	304	127	431
1915	287	175	462
1916	372	185	512
1917	361	154	515
1918	409	131	540
1919	446	179	620
1920	508	-	508
1921	704	194	898
1922	657	182	837
1923	791	170	961
1924	920	-	920
1925	1032	-	1032
1926	1149	-	1149
1927	1310	-	1310
1928	1444	-	1444
1929	1590	-	1590
1930	1719	-	1719
1931	1859	-	1859
1932	1934	-	1934
1933	2021	-	2021
1934	2028	-	2028

出典: Kim, *Koreans in Hawaii*, 189.

とっていた。だから経済的に上昇するためには教育が必要だということを痛感するようになった。民族的な理由ではなく、社会経済的な理由によって子供の公教育に力をいれた」⁹⁸。また別の2世が「親の中には、高い教育を受けるためにアメリカ本土に行くことを勧める親もいる。本土に行けば、将来はもっと保証される」と語ったように、自分が果たせなかった経済的・社会的成功を子供に託し、それを実現させるためにアメリカ本土での教育を重視した移民もいた⁹⁹。すなわち帰国を前提とした教育から、アメリカ社会での成功を前提とした教育へと、その方針が変わったのである¹⁰⁰。子供が語学学校に通わなくなった理由と、図表5にみられるように、語学学校が併設された私立学校ではなく、英語だけの公立学校に通う子供が増えた背景には、このような親の出稼ぎ移民から定住移民へと転換する中で形成された定住志向があったのである。

この変化について当時の社会学者ロマンゾ・アダムスは次のように述べている。「ハワイの移民の間で、コリアンたちは子供たちの就学率の高さと学校での子供たちの成功で高名である。この証拠がある。1925年に、ハワイの公立学校の精神障害について、出身地別に研究したことがある。コリアンの親の子供たちは、他のどの移民のこどもたちよりも精神遅延が少ないことが判明した。今の大学年の最初の学期には、コリアンを親にもつ学生が81人、18歳から21歳の1000人になると189人が大学に就学していることがわかった。他の移民は、同じ年の1000人をみると71人である。

コリアンにとって教育が心に秘めたものを達成するための手段として非常に大事であることがわかる」。このようなアダムスの発言にも見られるように、コリア系移民の関心は、語学学校ではなく公立学校にあった¹⁰¹。

3. 民族間関係の変化とアイデンティティの再構築

民族間関係の変化

出稼ぎ労働者としてハワイにやってきたコリア系の人々は、移民当初、同じ朝鮮半島を出身とする人々とだけ関わりあいながら暮らした。それは砂糖プランテーションの「コリアン・キャンプ」で寝起きし、同じ面々と現場に赴き、一日をともに働き、休日にはキリスト教会や集会に顔を出す生活であった。

同じ出身地の者がかたまって暮らす生活は、砂糖プランテーションの経営者側の意図－集団間の違いを利用して労働者の競争意識と生産力を高め、ストライキの時には労働者の連帯を防ぐ－に基づくものであり、他の移民も同じような環境の中で暮らしていた。当時の様子について、あるコリア系移民は次のように語っている。「小さな農場に移って、そこでの生活も全員がコリアンのキャンプ生活だった（略）隣近所とは離れていて、コリアン以外の人と接触することはほとんどなかったし、接触があったとしてもそれはハイシーズンの時に限られた」¹⁰²。

ただコリア系移民の場合、数が多い日系や中国系に比べ人口が少なかったため、他の民族集団と接する機会が多い方だった。ポルトガル系やプエルトリコ系移民とキャンプの建物を共有することもあれば、現場で同じ作業班に組み込まれることもあった。また米などの食料品を調達するために、日系や中国系の商店を利用していた。時には移民労働者の間でトラブルも発生したが、移民労働者の主要な関心は砂糖プランテーションで組み込まれた権力関係（特に経営者や現場監督である「白人」との関係）にあり、またかれらの監視下で暮らしていたため、衝突しあうまで発展することは少なかった¹⁰³。

例外だったのは、子供たちである。地元の学校に通っていたため、学校で他の民族集団と日常的に関わりがあった。1916年生まれのコリア系移民の子供は、当時の様子を次のように語っている。「プランテーションの方針で衝突を避けるためにエスニックごとにキャンプがあった。だから大人たちはコリアンだけと付き合ったし、他のエスニック集団もそう

していた。でも子供は違う。皆と交じり合い、その唯一の場所が学校だった」¹⁰⁴。

子供たちが学校で出会うのは、「アメリカ人」の先生と、同じプランテーションで暮らす移民労働者の子供たちだった。中でも日系移民の子供と接することが多かった。ある子供は学校での様子を、次のように語っている。「他の民族と接することはほとんどなかったけれど、私たち兄弟姉妹は日系の子たちと同じ学校に通っていた。先生がいる時は日系の子たちは英語を話したけれど、先生がいなくなると日本語でしゃべっていた。だから私も結構日本語がうまくなったし、かれらからの影響もだいぶ受けた」¹⁰⁵。日系移民はプランテーションで最も人口の多い集団であった。

1910年代になると、砂糖プランテーションの新たな方針により、フィリピンからの新規労働者が、農場に大量に投入されることになったため、フィリピン系児童が学校でも増えていった。当時の様子をコリア系の2世は、次のように語っている。「14歳になると周りの人はほとんどがフィリピーノになった。この頃、コリアンたちはコミュニティを維持できないと感じるようになっていた。だから私の両親も都市に移り住むことにした」¹⁰⁶。「私たちはハカラア・プランテーションの山の上の方に住んでいた。その学校は、ほとんどがフィリピン系かコリア系だった」¹⁰⁷。

子供は学校で英語だけではなく、アメリカ的生活も身につけていった。1世の生活は、ある移民が「キャンプは他の人たちから隔離されたようなところにあった。だから英語も上達しようがなかった」と語ったように、英語を身につける機会すらない生活であった¹⁰⁸。一方、子供たちは学校で英語だけではなく、「アメリカ人」としての教育も受けた。その結果、「(子供たちは) アメリカ的思考をすぐに取り入れるようになったし、同化も早かった」と当時の人が語ったように、子供のアメリカ化が—アメリカ社会に適応するという意味も「アメリカ人」になるというナショナルな意味も含め—早く進んだ¹⁰⁹。

しかし1世の民族間関係も、都市化とともに変化した。人口が少ないコリア系移民にとっては、他の民族集団と接しないで生活することは難しく、大抵の人は、最低限の英語を覚え、多民族的状況の中で暮らした。母が買物をする様子を、あるコリア系の子供は次のように覚えている。「母は写真花嫁で英語がぜんぜん話せなかった。でも買い物に行くと、あれとかこれとか言いながら物を買っていたし、英語もなんとなく通じていた」。この時1世が身につけた英語は、アメリカ本土で話される英語ではなく、ハワイ独特の「ピジン英語」である。

ただ、他の民族集団と接する機会が多くなって民族間関係は増しても、その関係性が深

まるわけではなかった。当時の移民が「街に出て、小さな雑貨店を始めた。でも他の民族と行き来することはほとんどなく、コリアンとだけ付き合った」、「父の友人は皆コリアンだった」と語ったように、多民族に囲まれて生活していても、その付き合いは同じ民族集団の中に限定されていることが多かった¹¹⁰。これはコリア系のみならず、1世が多い日系や中国系にも共通してみられることであった。当時のハワイの状況について、あるコリア系の学生は次のように述べている。「日系の盆踊りや中国系の旧正月が開かれることを知っているし、お互いのこともそれなりに分かっているから、断絶や分断しているわけではない」。つまり民族ごとの「棲み分け」が日常的に行われている生活であった¹¹¹。

変化を求める声

しかしコリア系移民と日系移民の間には、一種の緊張関係もあった。祖国喪失と独立運動を経験したコリア系移民は、「日本」や「日本人」に対して一種独特の感情をもっていた。この感情は日々の生活において、日系移民との関わりを避けるような行動として表れた。あるコリア系移民は、当時の様子を次のように語っている。「日系の人たちが（日本に対する祖国支援運動の一貫として）廃車になった車を買ひ集めていて、私の日系人の友達も鉄くずを集めていた。だから私もその友達にガムを包む銀紙を集めてあげて、それを渡してあげていた。でもそれを聞いた母は激怒し、私に鞭を打った。日本の国を助けるようなことはしてはならない、ときつく叱られた」¹¹²。

また日系移民も、当時はまだ日本との往来があり、「日本人」としての意識を強くもっている人も多かった。日系移民の場合、1924年（アメリカ移民法改正）までハワイ―日本間の移動が物理的には可能であったため、本願寺や浄土宗を中心とする宗教的指導者や、商人、移民の家族などが移動を繰り返していた。また教育のために日本に子供を送る親もいた。1915年当時、ハワイには日本人学校が77校存在し、そこでは日本の教科書を使った国民教育も行われていた¹¹³。日本人学校は、その後の排日運動と反日本語学校運動によって、国民教育よりも語学教育が重視された日本語学校へと転換していくが、日本語学校も1910年代から1930年代にかけて、2倍の勢いで増えていった（図4参照。同時期に中国系移民の語学学校も2倍の勢いで増えた）。また帝国主義と軍国主義を進める祖国日本に対する支援活動も、一部の日系移民の間で活発に行われていた。日系移民が、「日本人」としての意識を他の民族集団の前で強く押し出すことはほとんどなく、当時の日系移民の民族間関係を調査したマスオカ（1931年）も、日系の間でコリア系移民に対して「騒々しく、

考える前に行動し、無責任で、アメリカ的生活に適應するのが遅く、自己中心的で疑い深いという否定的な意見もあり……にんにく臭に対する文句はある」¹¹⁴ものの、「日系移民一世の 코리아系移民に対する態度は全般的には中立的である」¹¹⁵と指摘したように、 코리아系移民に対して偏見や差別、敵意が向けられることはほとんどなかった。だがだからといって、 코리아系移民が日系移民社会の動きに無関心でいたわけではなかった。当時の 코리아系移民が日系移民に対して抱いていた感情について、ある 코리아系移民は次のように語っている。「(日系移民と関係が悪かったわけではない。しかし) 人々は日系移民に接する時に色眼鏡をかけることが多かった。だから 코리아系の中には、日系の人たちとオキナワ系の人たちを区別する人も多かった」¹¹⁶。

코리아系移民社会の中では、祖国独立運動以来、朝鮮的なものを好み、日本的なものを排除する雰囲気が残っていた。日本製の服や玩具を禁じ、「家の中のメイド・イン・ジャパンのものはすぐに捨てさせた」者もいた¹¹⁷。また物だけではなく、日本の文化や生活習慣に関わるものも敬遠されることがあった。ある 코리아系2世は、当時の様子を次のように語っている。「私たち兄弟は、今のビーチサンダルのように、親指のところから紐がでてくるサンダルを履くことが禁止された。日本人が着物と一緒に履く靴と同じ形をしているからダメと言われた。だから私たちは、足の甲が隠れるベルト型のサンダルしか履くことができなかった」¹¹⁸。同じ理由で、大根を口にしない、という人もいた¹¹⁹。

日本との関わりを拒んだ 코리아系移民の中には、子供たちの日系移民との付き合いまで禁じた親もいた。日系移民との関わりがほとんどない1世とは異なり、2世は学校で日常的に日系移民と接していた。親から言われたことを、 코리아系2世は次のように記憶している。「近所の子達と一緒に学校に行ったけれど、放課後にキャンプで日系の子供たちと遊ぶことはできなかった。両親がかれらを敵だと思っていたから遊ぶことが禁じられていた」¹²⁰。「ある日、日系の友達と一緒に学校から帰った。それを見た母は、あの子たちと一緒に帰ってきてはならないし、友達になってはいけない、と言って一日不機嫌になった」¹²¹。「母に、もし私が日本人の男の子と付き合ったら自殺するつもりだ、と言われたことがある」¹²²。

但し、子供の他民族との付き合いに警戒感を示した親は、日系移民との関係だけに警戒感を示したわけではなかった。それは 코리아系2世らが「スプレックレスヴィル・プランテーションでの生活は大嫌いだった。なぜなら、フィリピーノ・キャンプに友達に会いにいったらお尻をぶたれた。日系の女の子たちと遊ぶことも敵だからという理由で禁止され

た」¹²³、「コリアン以外と結婚することは許されなかった」¹²⁴と語ったように、日系移民を含めた他の民族集団すべての付き合いに警戒感をもつ親がいたのである。しかし一方で、2世たちが「両親は強い反日感情をもっていた。母は白人とデートすることは許しても日系人と許さなかった。だから日系の男の子とデートをするときは母に絶対知られないように出かけた」¹²⁵や、「母は僕が中国系とデートすることを不快には思ったけれど許すようになってくれた。でも日系とのデートは最後まで許してくれなかった」¹²⁶と語ったように、日系移民との関係は特に厳しく注意されていた。

しかし日系移民とコリア系移民の間で、敵意や反感が相互に向けられることはほとんどなかった。祖国独立運動家の両親をもつ2世は、次のように両親のことを語っている。「両親は祖国朝鮮に日本人がいることを嫌っていたが、ローカルの日系人に嫌悪感を表したところを見たことがない。両親だけではなく他のコリアンも取引相手は日系人だったし、かれらを最良にしていた。その人たちは礼儀正しいし、偏見も持っていないし、コリアンのお客さんに対しても理解があった」¹²⁷。

だが直接的な対立は殆どなかったと言っても、2世はこのような日系移民に対して拒絶感を示す1世の態度に、疑問を感じるようになっていった。あるコリア系2世は、「私は地元の日系人と普通につきあっていたし、共通のものが多かったから、日本語や日本の習慣を学ぼうとしたこともある。でも母はそれを苦く想っていた。母はその理由について、朝鮮で自分の家族が日本人の残虐な行為を受けて無一文になったから、と言った。母は持ち前の明るさでどの人にも優しく接したけれど、実はそんな嫌悪感もあわせもっていた」と、1世の胸のうちを知った時の衝撃を語っている¹²⁸。

2世の疑問は、コリア系内部の対立にも向けられた。当時のコリア系移民社会は、祖国独立運動時に激しく対立した二つの派閥を引きずる形で二つの教会—韓人基督教会とメソジスト教—が存在していた（詳細は3章参照）¹²⁹。二つの教会が互いに牽制しあっていることについて、2世は次のように語っている。「なぜ二つの教会があるのか、その理由は知らないけれど、一つの教会に行っているということはもう一方の教会出身ではない、ということの意味していた」¹³⁰。「(違う教会のコリアンとは) 話すことはあったけど、仲良くなったことがないから遊んだり、デートしたりしたことはない。だから(違う教会のコリアンよりも学校で会う) 他の民族の子たちの方がよっぽど仲良かったし、デートすることも多かった」¹³¹。このような分裂に対し、新しい世代は次第に矛盾を感じるようになった。その理由について、あるコリア系2世は次のように述べている。「強い民族意識があるのに、

この民族意識は宗教と政治の派閥によって壊されているのである」¹³²。また別の2世は「コリアンには明るい部分もあるけれども、暗い部分もある。明るいのは、若い人たちが共通の利益のために力をあわせようとどんどん集まっていること。でも暗いのは、コリアンの政治の蜘蛛の巣から抜け出すのが難しく、いまだに党派の精神を引きずったまま働かなければならない人がまだいることだ」¹³³とも述べている。また中には、「自分たちコリアンが友好的ではないという非難もある。確かに最悪の敵は自分たちの中にある。コリアン同士の対立はコリアンの代名詞となってしまった」¹³⁴と集団内の分裂を恥じる者もいた。その結果、あるコリア系2世が「(1世は)あまりに遺伝的なものを信じていることに多くの対立や誤解が生じさせた。ハワイとアメリカにおけるコリアンたちの状況は、現在、本当に謎めいている」¹³⁵と語ったように、2世は分裂した状況を生み出した1世に対し、不信感を募らせるようになった。

2世が抱いた不信感の背景には、1世への反発もあった。当時、1世は新しい世代の祖国に対する関心の低さを嘆き、その非を語学学校と距離を置き、民族活動に参加しなくなった2世にぶつけていた。そしてこうした2世への批判は、「最近の政治的集会に地元生まれの若い女性が参加した。でも1世は彼女に対して『あなたはアメリカ市民なのだから、コリアンの政治に混じっていく必要はない』と叱った」というように、「アメリカ人」化してしまったことへの批判として表出することもあった¹³⁶。これに対して、2世は「古い世代は若い世代に落胆して若い人を攻撃するようなことをいうけれど、彼らは若い人が目指したいと思うようなお手本を示してこなかった。かれらは私たちに烙印を押すけれど、彼らは議論好きで反社会的でもある。このまま受け身で烙印を押されたままではいけない」¹³⁷と反発を強めたのである。このような不信感と反発が高まる中、祖国とは違うところで新たな「コリアン」としてのアイデンティティを確立しようとする意識が芽生えていった。あるコリア系2世は、同世代に向けて次のように訴えた。

1世が育った条件は、我々若者が育った条件とはまったく異なる性質のものであるからだ。かれらはネーションとしてのコリアとの近い接点があったし、敗北と抑圧の痛みを感じてきた。彼らの夢はコリアがいつか独立国としてのステータスを回復することにある。押さえ込まれた感情をもった結果としてこのような組織をつくるに至った経緯は自然であろう。しかし我々コリアン・アメリカンの若者たちはアメリカの地で生まれ、育てられた。祖先の環境から遠く話され、先祖の

敗北も抑圧を目撃も経験もしてこなかった。(略)(祖国に)積極的な関心をもてないのはごく自然のことではないだろうか。¹³⁸

新しいアイデンティティの希求

1930年代になると、コリア系移民のアイデンティティを新たに構築していこうとする2世の活動が活発化した。そしてその中で構築されたアイデンティティは、主に次の三つの志向を内包するものだった。第一に、「国がない (country-less)」ということを肯定的に捉えていこうとする志向である¹³⁹。1世の間にも韓国併合以来、「国がない」という意識はあった。しかし1世は、祖国の植民地化を経験したため「国が失われた」という意識が強く、中には「もう一度国を取り戻す」という意識の下で、祖国を実体的に捉える人もいた。これに対し2世は、祖国が存在しないことを事実として受け入れようと考え始めた世代であった。2世たちは次のように語った。「日本を転覆させるには今の日本はあまりに強大な国である。だから朝鮮の独立問題は現在あまりに非現実的な問題である」¹⁴⁰。「犠牲や恥を乗り越えて再生したネーションはない。敗北であるといえば、敗北である。しかし破壊されたものはもう一度破壊されることはないし、破壊されたものはこれ以上破壊されることはないだろう」¹⁴¹。そしてこれまでのように「失われた魂 (lost soul)」¹⁴²を取り戻すことや、「コリアンのネーションのもともとの輝きを取り戻そうと既に亡き残り火を煽る支援者たち」¹⁴³になることは止め、自分たちが「忘れられた一国がない一人々」であることを見つめていこう、という声をあげるようになった¹⁴⁴。

さらにこの「国がない」という考えは、自分たちの故郷 (home) は祖国ではなく、ハワイであるという考え方につながっていった。ある2世はこの考えのもと、「私たちはここで暮らし、ここで死す」と語り、祖国がハワイだと想う気持ちは1世たちにも共通する想いであると、次のように述べた。「(1世たちは)子供たちがアメリカ市民になることを誇りに思っているし、若い人たちがアメリカ本土に行って高等教育を受け、その教育を活かしてハワイのコリアンたちの生活の向上に努めていることも誇りをもっている」¹⁴⁵。そしてハワイを新たに故郷にしていこうという声は次のような形で高まった。「(故郷に想いを馳せても)独断と偏見を増殖させるものでしかなく、平穏と安定はやってこない」¹⁴⁶。「若い世代も、古い世代も、ハワイの地を故郷にしようとしている」¹⁴⁷。

しかし「故郷はハワイである」ことを強調した2世の語りには、「アメリカ人」としての帰属意識も積極的に認めていこうとする志向が混在していた。当時、帰化不能外国人とさ

れた移民1世は、アメリカ国籍を取得することができなかったが、アメリカ生まれの2世は、アメリカ国籍の「アメリカ人」であった。そして公立学校で「アメリカ人」としての教育を受けた2世の多くにとって、自分たちが「アメリカ人」であることは所与のものであった。だがこれまで移民社会では、2世が「アメリカ人」であることについては、ほとんど触れられてこなかった。そのため、次のような発言をするコリア系2世が台頭していったのだった。「我々コリアン・アメリカンの若者たちはアメリカの地で生まれ、育てられた……我々はアメリカ市民としての誓いを立て、私たちが育ててくれたこの国を我々は支援していく」¹⁴⁸。

第二の志向は、「コリアン」と「アメリカ人」のアイデンティティを両方同時に持つという志向である。「コリアン」か「アメリカ人」のいずれかのアイデンティティを選択するのではなく、両方同時にもつていこうとする考えは、次のコリア系2世が語ったように、アメリカ国内におけるコリア系移民の置かれた立場と密接に関わっていた。「二世の大半は、アメリカの大地で生まれ、アメリカ人になった。だけど私はここで強調したい。それはアメリカ人になっても、人からコリアンとして見られ続けている、ということである。私はそれを忘れることができない」¹⁴⁹。すなわち「アメリカ人」であっても、主流社会から「コリアン」として見られ続ける移民の宿命に対して、2世たちは「アメリカ人」と「コリアン」のアイデンティティを両方同時にもつていくことで乗り越えようとしたのである。二つのアイデンティティをもつていくという発想について、あるコリア系2世は次のように述べた¹⁵⁰。

アンドリュー・カーネギーは13歳の時にアメリカにきた貧しいスコットランド移民だった。編集者のジョセフ・ピューリッツァーは、ブダペストで生まれ、17歳の時にアメリカにきた。良きコリアンは、良きコリアンだからこそ良きアメリカ人となる。世界はそうやって価値が置かれる。¹⁵¹

ここで重要なのは、2世たちの語った「コリアン」としてのアイデンティティは、エスニックな次元のもの（ナショナルな下位概念）ではなく、ナショナルな次元のものであったことである。これについてある2世は、「(コリアンとしての誇りをもつために)文化や歴史、理念や文明を含めたコリアンのナショナルなもの知らなければならない」¹⁵²と語り、また別のコリア系2世は「100%のアメリカ市民は、100%のコリアンの愛国主義者になら

なければならない」¹⁵³と語った。

この「コリアン」アイデンティティを、アメリカと同じナショナルな次元のものとして新たに捉えようとする考えが台頭していく中で、2世たちは「コリア」について、もっと知らなければならないということを強調していった。リーダー的存在だったタイソン・リー (Tai Sung Lee) は、若者に「コリア語やコリア文化の良さと美しさを再発見していくこと」を呼びかけ、「これらのものがコリアの明日を形づくるだろう」と述べた¹⁵⁴。また1930年代に若者たちの支持を集めた「コリア系学生同盟 (Korean Student Alliance)」も、学生に向けて「コリアンの歴史や事実について学ぼうとしたり考えようとする学生は少なかった。でもこれからは広い気持ちでものごとを受け入れるために、コリアやコリアンとしての人生について考えよう。私たちににとって一番大事なことである」と呼びかけた¹⁵⁵。さらにコリア系2世たちは、ハワイ大学に朝鮮の言語・文化・歴史を学べるコースを開講するよう要請した。この要求に対して、当時のハワイ大学クロフォード学長は、開講に向けて履修希望者を調べ、客員教授を数年以内に招聘する準備をすることを約束した¹⁵⁶。

第三の志向は、キリスト者としての精神を高めようとする志向である。もともとコリア系移民は、キリスト教会を中心に集団を編成していた。祖国独立運動もキリスト教会で展開し、子供たちの語学教育もキリスト教会で行われた。1920年代からは若い世代の教会離れが問題となったが、英語を話す牧師が現れ、親睦を目的としたレクリエーションやピクニックが恒例行事となるなど、教会は若者たちに交流の場を提供した。そのため日常的に教会に通っていない2世も、何らかの形で教会との接点を維持し続けていることが多かった。また教会同士の交流—韓人基督教会とメソジスト教会に分裂していたため同じ宗派の中の交流になるが—も多く、感謝祭やクリスマス時には合同礼拝がもたれ、コリアン同士は教会で知り合うことが多かった。さらに宗派に関係なく「道徳的トレーニング」が各地で開かれ、あるコリア系移民が「これらの会が集まって合同の集会をよく開いていたからそこで兄弟愛と親睦を深めた」¹⁵⁷と語ったように、キリスト教を媒介にコリア系移民のネットワークが構築されていた。こうしてコリア系移民社会は、1世だけではなく2世もキリスト教会を中心に「コリアンの仲間意識と連帯感が保たれていた」¹⁵⁸。

よって2世の新しい活動も、キリスト教会活動と一体化しながら始まった。中でも当時の若者たちから広く支持を集めた活動が二つある。一つは、YMCAで働くタイソン・リー (Tai Sung Lee) が始めた「コリア系学生キリスト者組織 (The Korean Student Christian

Movement of Hawaii)」の活動である¹⁵⁹。1930年に発足したこの組織は、教会の派閥を超え、コリアン同士の親交と支援を深めることと、「ハワイにコリア系の基督教コミュニティを構築すること」を目的に、活動を展開した。そしてスポーツ大会から聖書研究会まで、さまざまな会合を企画し、YMCAなど外部の資金も投入しながら運営していった¹⁶⁰。

もう一つは、「コリアン学生同盟(Korean Student Alliances)」の活動である。この組織は、1931年に、ハワイで学生数が最も多いマッキンレー高校(ホノルル市)で結成された組織である。当時のハワイでは、学校(中学、高校、専門学校、大学)に民族ごとの学生組織が存在した(例えば日系の Japanese Student Alliances や中国系の Chinese Student Alliances)。コリア系の学生組織も、コリア系移民の数が多きマッキンレー高校で立ち上がり、これにハワイ各地の学校で結成されたコリア系の学生組織が加わる形で、「コリアン学生同盟」は規模を拡大していった。同組織は、学生組織であったものの、各地の学生組織の立ち上げを YMCA のコリア系スタッフが手伝ったことや、顧問に就いた7人の有識者のうち5人が基督教関係者(3人が白人牧師、1人がコリア系牧師、1人が YMCA 役員)だったように、基督教活動と一体となって発展した。

この「コリアン学生同盟」は、多くの2世を取り込みながら活動を展開したが、その活動は多岐に及んだ。「コリアン学生同盟」が結成されてから、各学校でコリア系学生のためのイベント(ダンス大会やミーティング、アイスクリームやクリスマス・カードの販売会)が開かれるようになった。また全体の活動としても、代表者会議や交流会、美人コンテスト、エッセー大会、スピーチ大会を開催し、ハワイ全島のコリア系学生に向けて卒業アルバムを兼ねた年報も発行した。年報には、学生からの意見や投稿作品だけではなく、コリア系以外のハワイの著名な学者や牧師からの投稿文も掲載された。特にコリアン学生同盟が開催した「若者ラリー(Youth Hold Rally)」の人気は高く、開戦前年まで毎年800人から900人の2世をオアフ島に呼び寄せる活動となった(当時のコリア系学生数は小学生を含め約25,000人)¹⁶¹。

このような活動が展開していく中で叫ばれたのは、キリスト者としての信仰を深めようという訴えである。1936年に行われたスピーチコンテストで1位をとったコリア系2世は、これまでコリア系の間で、4つの異なる性質の団体(政治的、語学学校などの文化的、社会的、宗教的団体)が存在してきたが、これからの若者たちの中心となるのは宗教的団体であろうということを述べた上で、次のような考え方を発展させなければならないと語った。

もし若者が教会に積極的な関心をもち、キリスト教の原理を維持するならば、コリアンの教会は間違いなく発展するであろう(略)ただ一つ障害があるとすれば、それはコリアンの教会をキリストの真の原理にのって維持・発展させようとする誠実さと深さ(徹底的な)の欠如がある。これに着手さえすれば、コリアンの若者たちのヒューズは明るさに燃え、これから何年先にも残るキリスト教的精神の基盤をつくっていくだろう¹⁶²。

この点について、別のコリア系2世は次のように述べている。「若い男女は道徳的に清く、宗教的に熱心であるが、そうでない人もいる。(略)特に最近、教会の参加が緩みがちだ。日曜に教会に行く人は少なくなっている。これについて若い世代が無神論者になってしまった、と嘆く人もいる。しかしそれは違う。強く情熱的な指導者の下で正しい道が示されれば、コリアンの卵の黄身とまだ成り得る」¹⁶³。これらの主張はいずれもコリア系の集団としての連帯が、キリスト教の精神を高める中で切り開かれていくだろうと主張するものであった。これについてあるコリア系2世は「この(キリスト教の)高い理念と道徳によって、島のコリアンの若者たちは明るい未来が待っているだろう」と述べた¹⁶⁴。

なぜキリスト教の精神が、新たなアイデンティティを構築する過程で強調されたのだろうか。それはキリスト教が、集団を二分化しかねないさまざまな価値観の違いを超越する力を持っていたためである。ここでいう集団内の違いとは、主に4つの領域にまたがるものである。第1に、世代間の生活や世界観の違いである。2世の誕生とともに世代間の生活習慣や意識の違いは広がる一方であったが、両者に共通していた生活習慣や意識もあった。それがキリスト教会に通うことと、キリスト教を信仰していることであった。第2に、「コリア」と「アメリカ」という二つのナショナルなアイデンティティをめぐる立場の違いである。先述の通り、2世のアイデンティティは、「コリアン」と「アメリカ人」という2つのアイデンティティを、両方同時に持っていく中で形成されようとしていたが、アメリカ寄りの意見と祖国寄りの意見に分かれることも多かった。しかしあるコリアン教会の牧師が、「救世主が必要なネーションがあるとすれば、それはコリアだろう。主の示す真実と道のりが、コリアの希望である」と若い世代に語りかけたように、コリアも世界から等しく救済されるべき国として提示されることによって、「コリア」か「アメリカ」のどちらか一方を優先視するような考えが否定され、祖国寄りになることもアメリカ寄りになるこ

とも避けられたのだった¹⁶⁵。第 3 に、「伝統」と「非伝統」をめぐる価値観の違いである。西洋文明の中で育ち、西洋化された教育を受けた 2 世にとって、1 世の伝統的な価値観は、「若い世代を拘束する」ものとして受け止められた¹⁶⁶。特に 1 世の家父長的家族関係への批判が高まり、若者の多くは「近代的な生活とは対照的な年寄りたちの考えを受け入れることはできない」と感じていた¹⁶⁷。しかしキリスト教の世界では、伝統や文明を超えたより普遍的なキリストの精神に重点が置かれていたため、この普遍性が強調される限り、伝統と非伝統の是非をめぐる対立に陥る危険性を回避できたのである。第 4 に、「平和的」民族間関係に対する考えの違いである。1 世は他の民族集団と深く関わらないことで「平和的」民族間関係を築いていたが、2 世は他の民族集団と日常的に接していただけではなく、他の民族集団とも深く関わりながら「平和的」民族間関係を築きたいと願っていた。こうした 2 世の新たな欲求に対して応えることができたのが、キリスト教会であった。もともと教会が持っていた教団や他の教会とのネットワークを利用し、キリスト教会は新しい世代に、他の民族集団との交流や親睦の場を提供した。あるコリア系移民は、メソジスト教団の合同勉強会に参加した時に感じた高揚感を、次のように語っている。

ハワイ、フィリピン系、日系、コリア系のメソジスト教会の年次大会があった(略)。このイベントの素晴らしいところは、コリアンの政治的社会的問題を解決しようとするだけではなく、若い世代を正しい道に導き、キリストの教えを広げ、非宗教的争いを乗り越えてより高い次元の生活・考え・行動をもたらし、他の人種を兄弟のように平等に考え、良き市民としての強い基盤を構築しようとしていることである¹⁶⁸。

新たに若者を中心に構築されたコリア系移民のアイデンティティは、やがて移民 1 世を動員する形で広がり、最終的にコリア系移民の連帯を求める動きへとつながっていった。そして 1941 年 4 月、それまで独立運動によって生じたさまざまな対立を乗り越えた統一組織が結成された。それが「コリアン連合委員会 (United Korean Committee)」である。折しも真珠湾奇襲攻撃の 8 ヶ月前にあたるこの組織の結成は、戦中のコリア系移民の運命を委ねる重要な役割を担っていくようになっていった。

以上、祖国の状況に左右されない形で、新たなアイデンティティを構築しなければならないという考えが台頭する中、独立運動期に発展した祖国という一つのナショナルな枠組

を前提にしたアイデンティティが、次の三つの志向を内包したアイデンティティへと発展していく過程を考察した。その三つの志向とは、第一に、「国がない (country-less)」ということを肯定的に捉えていこうとする志向である。この「国がない」という考えは、自分たちの故郷 (home) は祖国ではなくハワイであるという考え方につながっていった。ある2世はこれを「私たちはここで暮らし、ここで死す」と語り、祖国がハワイだと想う気持ちは1世たちにも共通する想いであると、次のように述べた。「(1世たちは) 子供たちがアメリカ市民になることを誇りに思っているし、若い人たちがアメリカ本土に行って高等教育を受け、その教育を活かしてハワイのコリアンたちの生活の向上に努めていることも誇りをもっている」¹⁶⁹。

第二に、「コリアン」と「アメリカ人」のアイデンティティを両方同時に持っていこうとする志向である。これについてある2世は「(コリアンとしての誇りをもつために) 文化や歴史、理念や文明を含めたコリアンのナショナルなもの知らなければならない」¹⁷⁰と語り、また別のコリア系2世は、「100%のアメリカ市民は、100%のコリアンの愛国主義者にならなければならない」¹⁷¹と語った。

第三に、キリスト者としての精神を高めようとする志向である。もともとコリア系移民は、キリスト教会を中心に集団を形成していたため、キリスト教の精神は日常生活に密着した考え方ではあった。しかしここであえてキリスト教を強調したのは、キリスト教が移民社会の中で生じていたさまざまな対立や価値観のズレを超越し、再び一つのアイデンティティのもとに終結させることを可能としたためであった。

しかしこれまでの研究は、この時代のコリア系移民のアイデンティティは、「コリア」から「アメリカ」へ転じていったものとして理解されてきた¹⁷²。特に1世が伝統的な価値観を維持し、祖国に対する愛着を持ち続けたのに対して、2世は西洋文化の影響を受け、アメリカ人としての意識をもっていた点を取り上げ、世代間格差を強調してきた¹⁷³。だが本章で考察したように、この時期のコリア系のアイデンティティは、「コリア」から「アメリカ」へ転じたわけではなく、コリアとアメリカという二つのナショナルな枠組を内包するアイデンティティへと発展し、さらにナショナルな枠組を超えたトランスナショナルな様相を呈するようになっていった(「国がない」「キリスト者」)。すなわち、一国の枠組を超えてトランスナショナルな広がりをもったアイデンティティへと変貌を遂げたことが、ここから窺えるのである。

ここで浮き彫りになった重要な点は、なぜコリア系移民は「アメリカ人」というナショ

ナルなアイデンティティのみならず、アメリカの外部に向かったアイデンティティを同時に創り出したのかという点である。これについては、あるコリア系移民が「アメリカ人になっても、人からコリアンとして見られ続けている」¹⁷⁴と語ったように、「アメリカ」ともう一つのアイデンティティを持たなければならないとする移民の意識があることが明白になった。すなわち、移民のトランスナショナル・アイデンティティは、アメリカの外部に向かった志向ではあるが、アメリカの内部に向かった志向と連動しながら形成されているのである。こうして 1920 年代から 1930 年代にかけてコリア系移民のアイデンティティは、「アメリカ」という枠組の中で形成されたナショナル・アイデンティティを内包しながら、トランスナショナルな様相を呈したアイデンティティへと発展していったのだった。

-
- 1 Kim, “The Koreans in Hawaii”, 206-207; Patterson, *The Ilse.*, 149-150.
 - 2 United States Army, Hawaiian Department. Office of the Assistant Chief of Staff for Military Intelligence. “A Survey of the Korea in the Territory of Hawaii, prepared in the Office of the Assistant Chief of Staff for Military Intelligence, Headquarters, Hawaiian Department.” (Fort Shafter, T.H.: The Office, 1930), Microfilm, 3.
 - 3 Romanzo Adams *Interracial Marriage in Hawaii: A Study of the Mutually Conditioned Processes of Acculturation and Amalgamation* (New York: Macmillan, 1937), 41.
 - 4 Eleanor C. Nordyke, *The Peopling of Hawai'i* 2d ed. (Honolulu: University of Hawaii Press, 1989), 188, 224.
 - 5 Soon-Young Hong, Tape, KOHP.
 - 6 Nodi Kim, Tape, KOHP.
 - 7 Harry Kay-Chal Yu, Tape, KOHP.
 - 8 Nam-Yong Chung, Tape, RCVC; Salome Ham Ambrose, Tape, KOHP.
 - 9 Benny Young-Ho Song, Tape, KOHP.
 - 10 Kim, “The Koreans in Hawaii”, 158-161.
 - 11 Kim, Chong Sook, Migrations in my Family, UHSPJ.
 - 12 Ibid.
 - 13 Mary Sook-Hee Hong, Tape, KOHP.
 - 14 John Young-Ahn Kim, Tape, KOHP.
 - 15 Lind, *An Island Community*, 251.
 - 16 Ibid., 250.
 - 17 Lila K. Lee, “The Way Migrations Have Played a Role in My Family”, UHSPJ.
 - 18 1933年のHSPAの記録では、従業員に支払った給料のうちコリアンの数は458人だった(Kim, “The Koreans in Hawaii”, 169)。
 - 19 Irma J. Protheroe, “The Class Structure and Mobility Among the Koreans”, UHSPJ.
 - 20 Brian Mcallister Linn, *Guardians of Empire: The U.S. Army and the Pacific, 1902-1940* (Chapel Hill & Londong: The University of North Carolina Press, 1997), 95.
 - 21 Ibid.
 - 22 Ibid., 71-72.
 - 23 Ibid., 118.
 - 24 Ibid., 152.
 - 25 Ibid., 159.
 - 26 Ibid., 153.
 - 27 Ibid., 154-155. その後知事は、数の制限を設けたものの、日系2世のハワイ州兵への入隊を認めた。その数は1932年に州兵全体の10%を占めるようになった(日系移民の人口は45%)。
 - 28 Skip Soon Young Hong, Video, RCVC.
 - 29 Jonah Lee, Tape, KOHP.
 - 30 Sue Kim Shin, Tape, KOHP.
 - 31 Rachel Sung-Sil, Tape, KOHP.
 - 32 John Myung-Keo, Tape, KOHP.
 - 33 John Myong Won Han, Video, RCVC.
 - 34 Marian Lyu Kim, Video, RCVC; Salome Choi, Tape, KOHP.
 - 35 Takaki, *Pau Hana*, 167-168.
 - 36 U.S. Bureau of Labor Statistics, *Labor in the Territory of Hawaii 1939*, 36
 - 37 U.S. Bureau of Labor Statistics, *Labor in the Territory of Hawaii 1939*, 181.
 - 38 U.S. Bureau of Labor Statistics, *Labor in the Territory of Hawaii 1939*, 179.
 - 39 Sue Kim Shin, Tape, RCVC; Rachel Sung-Sil, Tape, KOHP.
 - 40 Mallie Ok-Yun Lee, Tape, KOHP.

-
- 41 Margaret Ok-Hee Lee, Tape, KOHP.
- 42 時代を経ると、コリア系の「契」は「契(ケ)」と呼ばれず、日系移民が当時使っていた頼母子講の「タノモシ」という言葉で呼ばれるようになった(Morris Pang, “A Korean Immigrant”, UHSPJ.
- 43 Frances Sup Sut Lee, Tape, KOHP.
- 44 Mary Moon Han, Tape, KOHP.
- 45 Ibid.
- 46 Nam-Yong Chung, Tape, KOHP.
- 47 Kim, “The Koreans in Hawaii”, 120-121.
- 48 Won Kil Yoon, *The Passage of a Picture Bride* (Loma Linda/Riverside: Loma Linda University Press, 1989), 21, 23.
- 49 Lebra, Joyce C. *Shaping Hawai'i: The Voices of Women, Oral Histories of the Islands' First Settlers*. (Honolulu: Goodale Publishing, 1999[1991]), 228.
- 50 Won Kil Yoon, *The Passage of a Picture Bride*, 21.
- 51 Ibid.
- 52 Ibid., 21-22.
- 53 Lili M. Kim, “Redefining the Boundaries of Traditional Gender Roles: Korean Picture Brides, Pioneer Korean Immigrant Women and Their Benevolent Nationalism in Hawai'i”, Hune, Shirley and Gail M. Nomura (eds). *Asian/Pacific Islander American Women: A Historical Anthology* (New York and London: New York University Press, 2003), 108.
- 54 Chai, Alice. “A Picture Bride from Korea: The Life History of a Korean American Woman in Hawaii.” *BRIDGE: An Asian American Perspective*. 1978(Winter), 37.
- 55 Rachel Sung-Sil, Tape, KOHP.
- 56 Chong Sook Kim, Migrations in my Family, UHSPJ.
- 57 Won Kil Yoon, *The Passage of a Picture Bride*, 41-46.
- 58 Warren Y. Kim, *Koreans in America* (Seoul: P. Chin Chai Pringting Co., 1971), 22-23.
- 59 John Young-Ahn Kim, Tape, KOHP.
- 60 Rachel Sung-Sil, Tape, KOHP.
- 61 Kim, “The Koreans in Hawaii”, 121.
- 62 Kim, “The Koreans in Hawaii”, 121; Wayne Patterson, *The Ilse*, 81.
- 63 Rachel Sung-Sil, Tape, KOHP.
- 64 Kim, “The Koreans in Hawaii”, 121.
- 65 Irma J. Protheroe, “The Class Structure and Mobility among the Koreans, UHSPJ.
- 66 Chong Sook Kim, “Migrations in my Family, UHSPJ.
- 67 Mary Halm, , Video, RCVC.
- 68 DukHee Lee Murabayashi, “Korean Women’s Activities in Hawaii: 1903-1950”,(Unpublished papers, Hamilton Library, University of Hawai'i at Manoa, Honolulu): 3. (著者の許可を得て引用)。
- 69 Nordyke, *The Peopling of Hawai'i*, 197.
- 70 Nordyke, *The Peopling of Hawai'i*, 196.
- 71 Ibid.
- 72 Ch'oe, *From the Land of Hibiscus*, 26-27.
- 73 Nodi Kim, Tape, KOHP.
- 74 Agnes Rho Chun, Video, RCVC.
- 75 Mary Sook-Hee Hong, Tape, KOHP.
- 76 Daisy Chun Rhodes. *Passages to Paradise: Early Korean Immigrant Narratives from Hawaii*, 223-224.
- 77 U.S. Bureau of Labor Statistics, *Labor in the Territory of Hawaii 1939*, 36.
- 78 Rachel Sung-Sil, Tape, KOHP.

-
- 79 Jonah Lee, Tape, KOHP.
- 80 Daisy Chun Rhodes. *Passages to Paradise: Early Korean Immigrant Narratives from Hawaii*, 265.
- 81 Irma J. Protheroe, “The Class Structure and Mobility Among the Koreans, UHSPJ.
- 82 Ch’oe, *From the Land of Hibiscus*, 62.
- 83 Benny Young-Ho Song, Tape, KOHP.
- 84 Margaret Ok-Hee Lee, Tape, KOHP.
- 85 Eunice Hank-Bong Whang, Tape, KOHP.
- 86 Wayne Patterson, *The Ilse*, 118.
- 87 Agnes Rho Chun, Video, RCVC.
- 88 Margaret Ok-Hee Lee, Tape, KOHP.
- 89 Daisy Chun Rhodes. *Passages to Paradise: Early Korean Immigrant Narratives from Hawaii*, 187.
- 90 Ibid.
- 91 Ibid.
- 92 Nodi Kim, Tape, KOHP.
- 93 John Young-Ahn Kim, Tape, KOHP.
- 94 U.S. Bureau of Labor Statistics, *Labor in the Territory of Hawaii 1939*, 36.
- 95 Barbara Kim Yamashita, *Wahiawa Korean Christian Church: History 1919-1987* (not published, 1987), 1.
- 96 John Young-Ahn Kim, Tape, KOHP.
- 97 John Myung-Keo Han, Tape, KOHP.
- 98 Irma J. Protheroe, “The Class Structure and Mobility Among the Koreans, UHSPJ.
- 99 George Lee, “The Minds of the Korean Youth in Hawaii”, *Korean Student Annual*, XXIII, No.2 (1935) March-April, 8.
- 100 Lind, Hawaii, 60.
- 101 Romanzo Adams, no title, *Korean Student Annual*, VI, 1936-1937 (1937), 6.
- 102 Lila K. Lee, “The Way Migrations Have Played a Role in My Family”, UHSPJ.
- 103 Patterson, *The Ilse*, 16-17.
- 104 Nam-Yong Chung, Tape, KOHP.
- 105 Lila K. Lee, “The Way Migrations Have Played a Role in My Family”, UHSPJ.
- 106 Ibid.
- 107 Benny Young-Ho Song, Tape, KOHP.
- 108 Skip Soon Young Hong, Video, RCVC.
- 109 Lila K. Lee, “The Way Migrations Have Played a Role in My Family”, UHSPJ.
- 110 Salome Ham Ambrose, Tape, KOHP.
- 111 June J. Lee, “A Plantation Community”, UHSPJ.
- 112 Hank-Bong Whang, Tape, KOHP.
- 113 沖田行司『ハワイ日系移民の教育史：日米文化、その出会いと相剋』（ミネルヴァ書房，1997年），111.
- 114 Jitsuichi Masuoka, “Race Attitudes of the Japanese People in Hawaii: A Study in Social Distance” (PhD dissertation, University of Hawaii, 1931), 144.
- 115 Jitsuichi Masuoka, “Race Attitudes of the Japanese People in Hawaii”, 186.
- 116 Jean Higa, “My Hometown and Okinawan -- Naichi Relationships”, UHSPJ.
- 117 Ruht Lee Mack, Video, RCVC.
- 118 Anonymous, interview by author, March 21 2008, Olive United Methodist Church, Wahiawa, Hawaii.
- 119 Hank-Bong Whang, Tape, KOHP.
- 120 Nodi Kim, Tape, KOHP.
- 121 Agnes Rho Chun, Video, RCVC.

-
- 122 Sue Kim Shin, Tape, KOHP.
- 123 Salome Ham Ambrose, Tape, KOHP.
- 124 Hank-Bong Whang, Tape, KOHP.
- 125 Rachel Sung-Sil, Tape, KOHP.
- 126 Agnes Rho Chun, Video, RCVC.
- 127 John Myung-Keo Han, Tape, KOHP.
- 128 Mallie Ok-Yun Lee, Tape, KOHP.
- 129 Eun-Ai, Cho, Tape, KOHP.
- 130 Angeline Lee, Video, RCVC.
- 131 Ruth Lee Mack, Video, RCVC.
- 132 Irma J. Protheroe, "The Class Structure and Mobility Among the Koreans, UHSPJ.
- 133 Young Kang, "Hawaii No Ka Oi (Hawaii is the best)", *Korean Student Annual*, XXIII (1935) January-February, 7.
- 134 Tai Sung Lee, "The Story of Korean Immigration", *Korean Student Annual* (1932), 48.
- 135 Anonymous, "Confessions of an American-born Korean", *Korean Student Annual*, VIII, No.2 (1930) May, 6.
- 136 Young Kang, "Our Second Generation is a Problem", *Korean Student Annual*, VIII, No.2 (1930) May, 1, 5.
- 137 Ellen Yang, "A Challenge to the Young Koreans", *Korean Student Annual* (1933), 41.
- 138 Duke Cho Choy, "Can Youth Improve and Maintain Korean Institutions in Hawaii?", *Korean Student Annual*, VX, No.2, (1936) December-January, 6.
- 139 Frances Sup Sut Lee, Tape, KOHP.
- 140 George Lee, "The Minds of the Korean Youth in Hawaii", *Korean Student Annual*, XXIII, No.2 (1935) March-April, 8.
- 141 Tai Sung Lee, "Korea: Land of Promise", *Korean Student Annual* (1932), 38.
- 142 Anonymous, "Confessions of an American-born Korean", *Korean Student Annual*, VIII, No.2 (1930) May, 6.
- 143 Duke Cho Choy, "Can Youth Improve and Maintain Korean Institutions in Hawaii?", *Korean Student Annual*, VX, No.2, (1936) December-January, 6.
- 144 George Lee, "The Minds of the Korean Youth in Hawaii", *Korean Student Annual*, XXIII, No.2 (1935) March-April, 8.
- 145 Tai Sung Lee, "Hawaii is their Home", *Korean Student Annual* (1932), 49.
- 146 Anonymous, "Confessions of an American-born Korean", *Korean Student Annual*, VIII, No.2 (1930) May, 6.
- 147 George Lee, "The Minds of the Korean Youth in Hawaii", *Korean Student Annual*, XXIII, No.2 (1935) March-April, 8.
- 148 Duke Cho Choy, "Can Youth Improve and Maintain Korean Institutions in Hawaii?", *Korean Student Annual*, VX, No.2, (1936) December-January, 6.
- 149 Y.C. Yang, "Our Younger Generation and Korean Culture", *Korean Student Annual*, VIII, No.2 (1930) May, 18.
- 150 Ibid.
- 151 Ibid.
- 152 Ibid.
- 153 Young Kang, "Our Second Generation is a Problem", *Korean Student Annual*, VIII, No.2 (1930) May, 1, 5.
- 154 Tai Sung Lee, "Korea: Land of Promise", *Korean Student Annual* (1932), 38.
- 155 *Korean Student Annual* (1933), 22.
- 156 *Korean Student Annual*, VII, No.3 (1930) October, 6.
- 157 Young Kang, "Hawaii No Ka Oi (Hawaii is the best)", *Korean Student Annual*, XXIII

-
- (1935) January-February, 7.
- ¹⁵⁸ Robert Won Bae Chang, Video, RCVC.
- ¹⁵⁹ タイソン・リーは YMCA に在籍しながら活動をしていたが、1937年からは YMCA を辞め、同組織のフルタイム職員として働き始めた。
- ¹⁶⁰ *Korean Student Annual* (1932), 7.
- ¹⁶¹ *Korean Student Bulletin*, XVII, No. 1 (1938) November-December, 7-8; *Korean Student Annual* (1937), 5.
- ¹⁶² Duke Cho Choy, “Can Youth Improve and Maintain Korean Institutions in Hawaii?”, *Korean Student Annual*, VX, No.2, (1936) December-January, 6.
- ¹⁶³ Young Kang, “Our Second Generation is a Problem”, *Korean Student Annual*, VIII, No.2 (1930) May, 1.
- ¹⁶⁴ George Lee, “The Minds of the Korean Youth in Hawaii”, *Korean Student Annual*, XXIII, No.2 (1935) March-April, 8.
- ¹⁶⁵ *Korean Student Annual*, (1932), 44.
- ¹⁶⁶ June Lee and Hisoon Chung, “Changing Attitudes of Koreans in Hawaii Toward Old Age Dependency”, UHSPJ.
- ¹⁶⁷ Stanley Kim, “Factors Contributing Towards High Amalgamation of Koreans in Hawaii”, UHSPJ.
- ¹⁶⁸ Emma Shing, “The Korean Methodist Episcopal Church”, UHSPJ.
- ¹⁶⁹ Tai Sung Lee, “Hawaii is their Home”, *Korean Student Annual* (1932), 49.
- ¹⁷⁰ Ibid.
- ¹⁷¹ Young Kang, “Our Second Generation is a Problem”, *Korean Student Annual*, VIII, No.2 (1930) May, 1, 5.
- ¹⁷² Kim, “The Koreans in Hawaii”, 206-207; Patterson, *The Ilse.*, 149-150.
- ¹⁷³ Patterson, *The Ilse.*, 128-150.
- ¹⁷⁴ Y.C. Yang, “Our Younger Generation and Korean Culture”, *Korean Student Annual*, VIII, No.2 (1930) May, 18.

第5章 「アメリカ人」としてのアイデンティティへ：

第二次大戦とアメリカ国民化

1941年12月7日の日本軍による真珠湾奇襲攻撃により、ハワイは戦争最前線と化した。ハワイではその日のうちに戒厳令がしかれ、行政権は軍部に移行し、「日本人」移民は「敵性外国人(enemy alien)」に分類された。しかしここでいう「日本人」移民の中には、朝鮮半島出身者も含まれたことから、コリア系移民も敵性外国人に範疇化されることとなった¹。前章において、コリア系移民のアイデンティティは、「アメリカ」と「コリア」という二つのナショナル・アイデンティティを内包しながら、トランスナショナルな様相を呈したアイデンティティへと発展していった過程を考察したが、それではこの戦争という時代と、戦時下で「日本人」に分類されるという経験は、コリア系移民のアイデンティティを、次にどう変えたのだろうか。本章では、コリア系移民のアイデンティティが「アメリカ人」としてのナショナルなアイデンティティへ収斂されていく過程を明らかにする。

またアメリカの移民が太平洋戦争中に敵性外国人化された歴史は、日系移民の歴史として広く知られるが、コリア系移民も敵性外国人化されたことについては、これまであまり注目されてこなかった²。日系移民の場合、日米開戦によって移民社会の日本的なものアメリカ的なものを「完全に分離しなければならないもの」³とし、移民のアメリカへの国民統合を急速に進める契機となった⁴。これに対してコリア系移民は、「日本人」とは異なる独自で固有な集団であることを主張する必要に迫られた⁵。それではどのような論理でコリア系移民は、自分たちが「日本人ではない」ことを主張したのだろうか。また戦時下の国民統合が急速に進められる中で、その論理はどのように変化したのだろうか。本章では、開戦直後のコリア系移民社会の様子に注目し、コリア系移民が戦争を契機に、どのような社会的位置付けがなされるようになったのかを検討する。その上で、アメリカ国民統合の流れの中で、集団の固有をどう確保したのかに注目し、コリア系移民のアイデンティティがどう転換していったのかを考察する。

尚、本章ではコリア系移民の意識の変化について、戒厳令政府の下で発足した士気高揚委員会(Morale Committee)の報告書や、ハワイのメディアが報じた新聞記事の他、コリア系移民が発行した新聞やユーバンク(Lauriel E. Eubank)の論文を参照する。ユーバンクの論文は、開戦直後にコリア系移民にインタビューしたもので、当時の移民のナラティ

ブを記録したものである。又、本章でいう「アメリカ国民化」とは、「アメリカ」というナショナルな枠組みに構造化されていく国民統合のプロセスを指す⁶。

1. ハワイ戒厳令下で「日本人／敵性外国人」に分類されて

「日本人ではない」ことを主張して

1941年12月7日の日本軍による真珠湾奇襲攻撃は、コリア系移民は勿論、ハワイのすべての人々に突然降りかかった惨事であった。しかし日米開戦に対するコリア系移民の感情は、1世と2世で大きく異なった。特に開戦直後に1世を支配したのは、次のような感情だった。それは移民1世が「日本の飛行機が飛んでいるのを見たとき、これでアメリカがようやく私たちが言ってきたことを聞いてくれるだろうと思った」、「こんなことが起こることを私たちはずっと言ってきた」と語ったように、これまでの自分たちの主張がようやく理解される日がやってきたという感情であった⁷。日米開戦後、唯一、コリア系移民の言論機関として発行が認められた週間新聞「コリアン・ナショナル・ヘラルド・パシフィック・ウィークリー (The Korean National Herald - Pacific Weekly)」(以下、「コリア系新聞」という)においても、戒厳令発令後、最初に発行した紙面(1942年1月21日付紙面)にて、コリア系移民の主張が世界に認められる時がきたことを、次のように述べた。

「もし数年前に太平洋で戦争が勃発する可能性や日本が脅威となることを言ったとしても、社会的立場のある人たちから批判を浴び、反日論者や反逆者、戦争翼賛者、国際秩序の疎外者と言われただろう。それでもコリアンは不幸な経験をしたから声をあげてきたが、真実を話したからこそ、これまで数々の罵詈雑言を浴びせられ惨めな想いをしてきた」⁸。

自分たちのこれまでの主張がようやく認められたという1世たちの想いは、祖国独立運動を復活させた。そして臨時政府の活動を支援する動きを活発化させた。移民の独立運動に対する支援を募るため、コリア系新聞は移民に、次のように語りかけた。「米国とその同盟国は日本と戦争に突入した。今こそコリアの未来が開けた。長い間私たちが切望してきたことでもあるが、今私たちはこの問題で先陣を切っている。この戦争で私たちは自分たちの声をさらにあげていこう。そして臨時政府に物質的な支援をしよう」⁹。また1942年3月1日には、三一運動(1919年3月1日に起きた朝鮮の独立示威運動)を記念した盛大な式典が開催され、「過去に臨時政府に対する信頼を失い支援を怠った。だから皆で臨時政

府を支援しよう」と祖国独立に向けた運動が盛り上がりを見せた¹⁰。

一方、2世は日米開戦とともに、「アメリカ人」としてアメリカを支持する立場をとった。開戦直後に2世にインタビューしたユーバンク（Lauriel E. Eubank）は、開戦後に2世代の間で、次のような発言が相次いだことを報告している。「呆然とした。そしてそれからショックを受けた。日本が攻撃することは想定していなかった。ハワイの日系移民たちも同じように驚いていると思う」、「大学の同級生と入隊を決めた。このような事態を引き起こした日本に対して私たちは皆怒りを感じていた。この想いは日系の友人も同じだった」、「私はアメリカが好きだし、アメリカを故郷だと思っている。コリアに戻ろうと考えたこともない。戦争に勝つためにもアメリカのためになることは何でもしようと思う」¹¹。そして祖国独立運動については冷ややかな態度を示した。ある2世は次のように語った。「それは古い世代がやっていることで、自分たちは全く関わっていないし興味もない」¹²。

こうしたコリア系移民の動きは、戒厳令政府からは「(コリア系移民の間では)『それみたことか(I told you so)』という態度が顕著に現われる傾向にある」¹³と不快な動きとして見られたが、主流社会からは、日本を敵国と思う立場は変わらないという点で好意的に認識された。ハワイのメディアは、開戦直後のコリア系移民の様子を次のように紹介した。「コリアは1919年3月1日に日本の支配から独立を宣言している。それ以来、数千万の朝鮮や満州、シベリアの愛国者や、数千人のハワイやアメリカ本土、メキシコ、キューバの愛国者は不当な日本統治に対して抵抗し続けている」¹⁴。またアメリカ本土で活躍する李承晩の発言を取り上げ、コリア系移民がアメリカと同じ立場から戦争に挑んでいることを、次のように紹介した。「(李承晩の発言) アメリカの愛国的で自己犠牲的な精神を私たちも理解している。だから共通の敵である日本とともに戦おう。アメリカのために戦うことは、コリアンのために戦うことでもある」¹⁵。

しかしコリア系移民は衝撃的な事実と直面する。それは戒厳令政府の下で「日本人」が「敵性外国人」に分類されることとなったが、ここでいう「日本人」の中からコリア系移民が除外されているわけではないという事実が判明したのだ。当時、コリア系移民の一世は「帰化不能外国人」と位置づけられたため、法的には日本籍あるいは無国籍であった。しかし一方で、「コリアン(Korean)」というカテゴリーは、韓国併合(1910年)後も公的な場で使われてきた。ローカルレベルでは、各種登録の国籍欄に「コリアン」と書くことが可能であった。そして連邦レベルでも、1910年以後のセンサスや1940年外国人登録法において、「コリアン」というカテゴリーが存在していた。すなわち朝鮮半島情勢や移民の

国籍とは別に、太平洋戦争前夜まで、アメリカ国内のコリア系移民は、「日本人」移民と区別されていたため、「敵性外国人」と位置づけられる衝撃は大きかった。

さらにハワイのコリア系移民を驚かせる出来事が起きた。それは1942年1月28日、司法省はコリア系移民を「敵性外国人」枠から除外することを発表した。ここで対象となったのは、連邦政府の権限が及ぶアメリカ本土の移民だけであった¹⁶。つまり戒厳令が発令されたハワイでは、連邦政府の方針が適用されないため、コリア系移民は、アメリカ本土では敵性外国人から除外されるが、ハワイでは「日本人」として引き続き敵性外国人に分類されるという対照的な環境に置かれたのだった。

当初コリア系移民たちの中には、強い戸惑いが広がった。司法省の見解が発表される数日前のコリア系移民社会の様子について、戒厳令政府の士気高揚委員会は次のように報告している。

コリアンのリーダーたちは最初この問題の真意がわかりかね、話題にすることさえ恐れていた。しかし今はだいぶ自由に話すようになった。コリア系移民の間には二つの感情が入り混じっているようだ。敵性外国人という立場への集団的不安と日本人に間違えられないかという個人的身体的不安である。またコリア系が特殊な国籍者として認められるのではないかという期待感もあるようだ¹⁷。

しかし敵性外国人に分類されたことに対する反発は、すぐに表面化した。特に1世は、「コリアン」が「日本人」に認識されたことへの反発を強めた。ある移民は次のように語った。「私たちは長い間日本に抵抗してきた。それにも関わらず戦争によって私たちは日本人と名付けられた。これは侮辱としかいいようがない」¹⁸。またコリア系新聞も、コリア系が「敵性外国人」に分類されていることは不当であり、戒厳令政府に対して「敵性外国人」の分類を見直すよう次のように述べた。

もしコリアンが日本の敵国人なら、そしてそれは事実であるが、同盟国の友人として歓迎されるべきだろう。すべての朝鮮生まれの人は、生まれながらにして日本の敵である。それは日本が朝鮮に強力な軍隊を配備していることや日本が朝鮮人のことを日本人嫌いとして信頼を置いていない事実にも見ることができよう…しかし12月7日以来、ハワイのコリアンたちは不当に日本人に分類された

ことによって、悪魔と深海が支配するような暗い世界に包まれた…1903年にハワイに来てから、コリアンはずっと「コリアン」に分類されてきた。センサスにおいても一つの国籍として認められている。私たちは今の国家的危機の中でワシントンやローカルの権威者たちに正しい分類をするよう不満を申し立てているわけではない。ただ私たちの士気高揚が保てるよう早急に私たちのステイタスを確認してほしいと熱望しているのだ。¹⁹

この敵性外国人の分類をめぐる問題について、世代間に反応の違いはなかった。むしろ2世は、開戦後に「日本人」に間違えられ、敵意の目に晒されるという経験をしたことから、主流社会から向けられた「まなざし」を意識せざるを得なくなり、結果、集団として対処しなければならないという事態に追い込まれた。ある2世は、その経験を次のように語っている。「(バスに乗るのが嫌いだ) なぜなら皆に日本人だと思われる。でも自分の顔は変えられないから怒りを感じるし、罪深いような気持ちにもなるけれど、でも自分が日本人とはまったく逆の立場にいる人間だということをいう方法がないのだ」²⁰。

その結果、街中で日系移民と「見間違われる」ことを避けるために、チマ・チョゴリ(民族服)を身にまったり、「私はコリアン (I am Korean)」や、「コリアは米国とともに勝利を願う (Korea for Victory with US)」と謳ったバッジを身につけたりする移民が、多く現われるようになった(写真2参照)²¹。そして自分たちが「日本人ではない」ということを、次のように主張していった。

私たちは国が日本に支配されているという理由から敵性外国人に分類されているが、私たちは友好的外国人である。その理由は、(1)日本人とは人種民族的に異なること、(2)日本政府に忠誠や協力を示したことがないこと、(3)日本政府から一切の恩恵を受けたことがないこと、(4)日本の強制的な支配を受けてから日本から敵だと認識され、ハワイに来るときは1882年の朝米修好通商条約でも認められた独立国としての朝鮮からやってきたこと。(5)アメリカに忠誠であり続けたことである²²。

すなわち「日本人」とは異なる集団であることを主張することによって、コリア系移民の「日本人」、および「敵性外国人」への分類が不当であることを訴えようとしたのだった。そ

して違うことを強調するために、祖国について多く語るようになった。さらに祖国をめぐる語りの中で、祖国を「アメリカと友好的関係にある国」として認め、コリアンを「同盟国 (ally) 側の友好的外国人 (friendly alien) として処遇する」²³ことを求めるようになっていった。

戒厳令政府は、コリア系移民の要望に一部答えた。1942年3月21日、ポインデクスター知事は、次の条件にあたる人々は、敵性外国人に課せられた経済的規制から除外すると発表した。その条件とは、1940年外国人登録令の下で「コリア」に登録した者、そして1942年2月23日時点でハワイに居住した者である。そしてこれらの人々を、新たに「認定外国人(generally licensed national)」と呼んだ。こうしてコリア系移民は、銀行口座凍結の解除など、日常生活や商売に必要な経済活動の規制から免れることになり、コリア系移民社会もこの処遇を「コリアの国家的ステイタスが認められる第一歩となったことを嬉しく思っている」と表明した²⁴。しかしこの行政命令は、コリア系移民を「敵性外国人」から除外するものではなかったため、その他の敵性外国人が受けた規制（例えば集会禁止や一般の人よりも早く設定された夜間外出令など）は引き続き適用された。



写真2 戦中のコリア系移民が「日本人」と間違われまいと着用したバッジ

出典：“During World War II Koreans used this badge to avoid being mistaken for Japanese”, Committee on the 90th Anniversary Celebration of Korean Immigration to Hawaii. *Their Footsteps: A Pictorial History of Koreans in Hawaii Since 1903* (Seoul: Ye Sun Co., Ltd), 208. 【同委員会の許可を得て掲載した】

2. アメリカ国民化とエスニック集団化²⁵

士気高揚委員会への訴えと語り口の問題化

コリア系移民による「日本人ではない」ことを訴えた語りは、開戦後ハワイに設置された士気高揚委員会 (Morale Committee) を通しても展開していった。士気高揚委員会とは、開戦直後の1941年12月18日に、市民防衛局管轄 (Office of Civilian Defense) の下で結成された民間組織であったが、翌年1月26日に軍政府の機関に再編され、2月8日に軍政知事の「士気高揚部 (Morale Section)」の管轄下に置かれた政府機関である。士気高揚委員会の活動の特徴は、民族集団ごとに小委員会を設け、小委員会を通して「集団内の

団結精神を高め、戦時協力を促すための考え方や行動を推進すること」²⁶であった（後に小委員会は「人種別勝利組（Racial Victory Units）」という名の下で再編される）²⁷。

コリア系移民小委員会は、士気高揚委員会の要請により、1942年1月17日に結成された。そしてコリア系移民小委員会が最初に提示した問題は、コリア系移民が敵性外国人に分類されていることであった²⁸。「皆の心配は、コリア系移民の立場が一日も早く（敵性外国人から）除外され、正当に評価されるか否かにある」。そして敵性外国人に範疇化されている限り、市民としての戦時協力が難しいことを次のように述べた。

敵性外国人に分類されていることの問題は、コリア系が国防債券を購入したくてもできないことである。なぜなら自分たちが購入すれば、それは敵性外国人の財産として見なされ押収されてしまうからだ。戦時協力の一貫として国防債権を購入することも同様の支援をすることもできないのである。²⁹

さらに移民社会の内部事情を詳細にまとめた報告書（1942年2月25日）では、コリア系移民が「日本人」ではなく、固有な集団であることを訴えた。そして祖国コリアも紹介し、歴史的に日本と中国の侵略により祖国喪失の危機に幾度も遭いながらも、「コリアンとしてのナショナル・アイデンティティ（national identity）を4000年もの歴史の中で失わずにきた」³⁰と述べた。さらにコリア系移民が、移民後に独自の移民社会を形成し、「日本を敵国として訴える努力を続けてきた」³¹ことを強調した。

さらに軍政府が、コリア系移民を敵性外国人として分類し続け、一部経済活動の制限を解除したものの、公的に何のコメントも発表しないことに対し、コリアン小委員会は軍政府の方針を、次のように批判した。「私たちはあらゆる努力を行ってきた。それは実に不愉快きわまる日本人や敵性外国人と名付けられることに対する努力である。しかし我々の意思に反して、このレッテルが繰返し私たちに貼られている。この世にコリアンほどの日本嫌いがいるであろうか。私たちのことを少しでも知っている人がいれば、その答えは明らかにノーだろう」³²。

しかし士気高揚委員会は、このコリア系移民の訴えを契機に、コリア系移民の言動を危険視するようになっていった。士気高揚委員会の中で、コリア系移民の語る祖国の存在が「日本人」とは違うことを主張するものであっても、アメリカへの忠誠心を示すものではないのではないか、という疑問が持ち上がったのである。祖国朝鮮の臨時政府について、

コリアン小委員会のヒアリングを行った士気高揚委員会は、臨時政府がいくつもの派閥を抱え、その方針も一貫していない点に注目し、「(今後どのように臨時政府が傾くかは)疑問の余地がある」と結論づけた³³。そして士気高揚委員会のボウルズ (Gordon Bowles) は、「コリアンの指導者たちは、コミュニティの他のことや士気高揚という問題について、さほど関心をもっているようにみえない」と述べ、「かれらは、母国が解放されることばかり考え、アメリカに対する関心は二の次になっている³⁴。アメリカへの戦時協力はコリアと関係するものでない限り行われたいほどではないだろうか」と批判した³⁵。

こうした中で、士気高揚委員会の懸念を一層強め、結果としてコリア系移民に沈黙をもたらす事件が 1942 年の 5 月に起こった。それはコリアン小委員会代表のダンが、ハワイの新聞に寄せた記事であった (ダンはコリア系新聞編集委員と代表組織「コリアン連合委員会」広報も担当していた)。ダンは、ハワイのコリア系移民社会が日本帝国軍に対して 30 年以上も闘ってきたこと、そしていかなる戦時協力も惜しまないことを述べた上で、日系移民に対して、戦時協力という立場では同じであっても、過去に「ハワイ領のコリアンたちはここハワイで日本人に対する不信感と敵意を募らせる原因や不満があった」と述べた³⁶。

これに対して士気高揚委員会は「公的なレベルで発言する内容としては極めて不快」だとし、ハワイ社会の調和(unity)を著しく乱す発言として、ダンの発言を問題視した³⁷。ダンと面談後、ダンの発言に対して次のような見解を示し、ダンに二度とおなじような発言を公的な場でしないことを約束させた。

現在の状況において一つの人種的集団が他の集団に向かって、実際であれ想像上であれ遺憾の意を表明することは全体に何の得ももたらさない…またコミュニティの多様な人種集団の調和に何ら貢献するものではない³⁸。

この事件を機に、コリア系移民の語りは祖国「コリア」を強調した語りから、アメリカへの忠誠を謳った語りへと転じていった。ダン事件の後に強調された語り口は、例えば次にみられる移民二世代のアメリカへの忠誠心を示すものであった³⁹。

世界のあらゆる人種と宗教を背景にした人々が、アメリカにやってきて住処を見つけたように、私も外国にルーツをもっている。だが、アメリカの土地で生まれ

たことによって、アメリカ市民としての権利を享受できる喜びを教えてくれた
(略) 私にはもう決して離すことができない国家への忠誠がある。それはアメリカ
に対する忠誠であり、私の故郷に対する忠誠でもある⁴⁰

「コリア系移民は我々の敵なのか?」: 地元新聞からの問いかけ

その後、コリア系移民の敵性外国人化について議論が活発化したのは、翌年 1943 年のことであった。きっかけはソン裁判だった。

ソン裁判とは、コリア系移民一世のソン (Syung Woon Sohn) が、1943 年 3 月 28 日に夜間外出禁止令に違反した罪で逮捕された事件を発端とする裁判である。ソンは一般市民より早く設定された敵性外国人の夜間外出禁止時間 (午後 7 時 45 分) を 30 分過ぎ、逮捕された。

ソンは、次の二つの理由から自分は敵性外国人ではないため、処罰の対象にならないと主張した。その理由は、第一に、1910 年日韓併合前にハワイに移住したためコリアンのパスポートで入国したこと。第二に、移民後は祖国独立運動に関わり、日本への忠誠や好意を示したことがないことであった⁴¹。

軍事裁判所はソンの要求を棄却した。その理由は、「軍政府はコリアンの身分を敵性外国人から友好的外国人へ変更する命令を発していない」ためであった⁴²。ソンとソンの代理人ウィルソン・ムーア (Wilson C. Moore) は、この判決を不服とし再審請求を行ったが、ハワイ軍管区指令官デロス・C・エモンズ (Delos C. Emmons) はこれを却下した⁴³。

しかしハワイのメディアは、ソンの裁判が始まった時からソンの主張を支持した。ソン裁判が起こった際に、地元新聞 Honolulu Star-Bulletin は、コリア系移民一世の多くが「朝鮮が植民地化される 6 年も前にハワイに移住し、友好的外国人としての待遇を求めている」ことを紹介した上で、「今こそ不当な措置を是正するときである」と、次のようにコリア系移民への理解を示した⁴⁴。

コリア生まれの住民が敵性外国人としての法的ステイタスに位置づけられたことは不公正であり悲劇である。不公正である理由は、ハワイのコリアンたちが心と魂をこめて国連の立場と同じにするからである。悲劇である理由は、日本が朝鮮を支配、植民、統治しているという理由から日本の国家的機構の一部とならざるをえなくなり、さらに日本人という敵性外国人に分類されなければならない

たためである。極悪の敵であり、もっとも残酷な搾取者であり、もっとも無慈悲な迫害者である人たちに取り込まれてしまうというスティグマをコリア系移民たちは背負っているのだ⁴⁵。

さらにソン裁判の判決が出ると、ホノルル・スター・ブレティン紙は判決を不当だとし、ソンの主張を次のように紹介した。「コリアンの歴史やこのケースにみられる事実からいえることは、この地球上から日本帝国が消滅することを願い、日本に対して激しい抗議活動をおこなっている人は他にはいないという明白な事実である」⁴⁶。そしてソンの代理人ムーアの発言を取り上げ、アメリカ政府がドイツに侵略され占領されたベルギー、オランダ、チェコ、スロバキア、ギリシャ、ユーゴスラビアの移民一世を、友好的外国人として扱っていないながら、「アメリカに忠実である行動や、言動、態度を示し、日本の植民地支配に抵抗を示している人たちに対して敵性外国人という不名誉な扱いを行うことは、それがどんな扱い方であってもアメリカが望むことではないはずである」⁴⁷とコリア系移民をめぐる処遇問題が、「アメリカ」という国家のあり方に関わる問題であることを人々に訴えた。

ハワイの二大メディアのもう一つの新聞「ホノルル・アドバタイザー(The Honolulu Advertiser)」も、同様の見解を述べた。「コリア系移民が長年にわたって日本に支配され抑圧されてきた人種である、ということを経験したコリアン一世を敵性外国人に分類するのだろうか。もしそうであるならば、理解に苦しむ」⁴⁸。そして「わが社ではソン裁判やその後の出来事に対して、ハワイ市民から多くの手紙を受け取った。そして私たちは『コリアンの人たちの忠誠心を踏み潰す前に、私たちに良識があることを期待したい』という結論に至った」と述べ、コリア系移民をめぐる問題は、「アメリカ人」としての「良識」を問う問題であることを読者に訴えかけた⁴⁹。この一連のプロセスを通して、コリア系移民が「日本人」とは異なる集団であるという認識を広げ、さらに集団の固有性をめぐり、問題が、「アメリカ」という国家のあり方や、「アメリカ人」の良識の問題として位置づけられるようになった。

これを受け、軍政府は敵性外国人を対象とした様々な規制から、コリア系移民への適用を一部除外するようになった。例えば、それは敵性外国人に制限されている医薬品購入について、「ここでいう敵性外国人にコリアンを含むものではない」という形で取り払われていった。しかし一部規制が緩和されただけで、敵性外国人の枠から完全にコリア系移民を除外するものではなかった。

ハワイ戒厳令の解除

コリア系移民の敵性外国人の分類は、1944年10月の戒厳令解除とともに解消された。戒厳令が解除されたハワイでは、安全保障命令1号が発令され、そこでコリア系移民が、「日本人」とは異なる独自で固有なエスニック集団であることが、次のように明示された。

ここでいう敵性外国人とは、ハワイ領土に居住し、アメリカに帰化していない日本あるいはドイツのネイティブ(native)・市民(citizen)・帰化者(denizen)・従属者(subject)およびアメリカ政府に敵意をもつ者をいう。しかしここでいう敵性外国人の中には(略)コリアンもしくはコリアンを祖先に持つ者や人種民族的にコリアンである者を含むものではない⁵⁰。

終戦をむかえる日まで、ハワイのコリア系移民社会では、戦時協力を謳った声があげられるとともに、アメリカと同じ同盟国側の立場にあることを強調した語りが展開した。但し、ここで祖国やコリア、そしてコリアンが具体的に何を示すのかについては曖昧にされた。例えば、1945年3月1日に(朝鮮の1919年3月1日「三・一運動」を記念して)、ハワイの軍事基地でコリア系移民による慰労会が開催された際、イベントの主旨をコリア系移民の団体は次のように説明したものの、イベントを主催するコリア系移民が、どのような人々であるのかについては触れなかった。「この偉大なる国家が私たちにしてくれたことへの感謝を示すために、そして我々の共通の敵に戦いを挑む勇者への親善の気持ちを込めて皆様にお届けします(略)私たちの願いは、今日のイベントを楽しんでもらい、皆様のことを私たちが100%支援していることを伝えることです。このイベントを通して皆様のコリアに対する知識とコリアンという人々へ理解が深まり、新たな原動力となることを祈りながら」⁵¹。

戦後になると、祖国独立活動を続けていたアメリカ本土の運動家たちは、大韓民国の国家建設に関わっていったが、ハワイのコリア系移民は、あるコリア系移民が「日本の敗戦(VJ Day)後、ハワイのコリアンたちは朝鮮が独立国家になったことを非常に喜び、朝鮮に戻りたいと言う人さえでてきた。しかし今は朝鮮の動乱を目の前にして誰も帰国を望まなくなった。政情が安定したら一度は訪問したいと思うけれど、永住するためにコリアに帰ろうとはもう誰も思わないだろう」⁵²と語ったように、祖国とつながりを持つことや祖

国を語ることの意味を失っていくのだった。

以上の考察から、戦中のコリア系移民の集団編成とアイデンティティをめぐる次の二つの変化が明らかになった。一つは、コリア系移民のアメリカ国民化にともなう変化である。コリア系移民の間で「日本人」および「敵性外国人」に分類されたことに対する不当性を主張するために、開戦直後に一時的に展開された祖国コリアを強調した語りは、戦時下のハワイ社会の「調和」に反するものとみなされたことにより、アメリカのナショナルな枠組みを強調する語りへと転じていった。すなわちコリア系のナショナルな次元のアイデンティティが、「アメリカ人」というアイデンティティに収斂されていった変化が、ここから浮き彫りとなったのである。

もう一つは、コリア系のエスニック集団化にともなう変化である。コリア系移民の処遇問題が、「アメリカ人」の良識を問う問題へと発展していく中で、コリア系の集団の固有性をめぐる問題は、祖国とは別次元のアメリカ国内の問題として扱われるようになったが、これによりコリア系移民の集団としての固有性は、アメリカ国内の下位集団（エスニック集団）に関する問題として提示されるようになった。すなわちマクロな次元のアメリカ国民化に構造化される一方で、それと連動する形で、アメリカ国内の下位集団（エスニック集団）に再編されることによって、コリア系移民は「日本人」ではなく「コリアン」という集団の固有性を確保し、「コリアン」というアイデンティティを維持したことが、本章の考察により明白になったのである。

- 1 戦時期の韓国系移民の先行研究について。戦時期の韓国系移民に関する研究は、韓国系移民の処遇問題を戦中にアメリカを支配した排日感情と人種主義の観点から検討されてきた。最初に韓国系移民の敵性外国人問題の全貌を明らかにしたマクミラン (Michael Macmillan) は、軍政府が「軍事上の理由」から韓国系移民を敵性外国人に分類し続けた理由は、韓国系移民をあえて敵性外国人から外す「特別の理由がなかったため」であり、軍政府の方針が人種主義的問題を孕んでいたことを指摘した (“Koreans Under Martial Law in Hawaii 1941-1943” (1979, 7-8). ハワイ大学所蔵、未発表論文。同論文の一部が (“Unwanted Aliens: Koreans as Enemy Aliens in World War II”, *The Hawaiian Journal of History*. (19) 1985) として発表されているが、未発表論文には詳細なデータが提示されているため、著者の許可を得て未発表論文を引用した。引用箇所は、前者の未刊行論文から抜粋した)。さらにこの点を、パターソン (Wayne Patterson) は「(韓国系移民が軍政府から) 不当な扱いを受けたと結論づけることができるであろう」と論じ、その不当な扱いをキム (Lili M. Kim) はアメリカの排日感情の「副産物」と指摘した。Wayne Patterson, *The Ilse*, 205; Lili M. Kim, “How Koreans Repealed Their “Enemy Alien” Status: Korean American’s Identity, Culture, and National Pride in Wartime Hawai’i” Ch’oe, Yōng-Ho (ed.) *From the Land of Hibiscus: Koreans in Hawaii, 1903-1950*. (Honolulu: University of Hawai’i Press, 2007), 213.
- これらの研究は当時の韓国系移民が主流社会から向けられた「まなざし」の問題を明らかにするものとなったが、戦中の韓国系移民が「日本人」および「敵性外国人」に分類されたことによって、どのような論理で集団の独自性を訴え、その結果韓国系移民社会がどう再編されたのかについては深く検討されてこなかった。特にここで韓国系移民社会の再編がマクロな次元のナショナリズムとどう関連したのか、韓国系移民のナショナリズムについての視点が見落とされる傾向にある。
- 2 この点をキム (Lili M. Kim) は、戦中のアジア系移民の歴史は日系移民に集中し「他のアジア系アメリカ人のことはほとんど触れられてこなかった」と指摘している (Lili M. Kim, “Enemy Alien” Status: Korean American’s Identity, Culture, and National Pride in Wartime Hawai’i”, 196)。
- 3 Eiichiro Azuma, *Between Two Empires: Race, History, and Transnationalism in Japanese America* (New York: Oxford University Press, 2005), 208-209.
- 4 ここでいう「アメリカ化」とは移民の同化を意味する「アメリカニゼーション (Americanization)」のことをいう。戦中のハワイの日系移民社会は主に次の文献を参考にした。白水繁彦『エスニック文化の社会学: コミュニティ・リーダー・メディア』(日本評論者、1998年); Yukiko Kimura, *Issei: Japanese Immigrants in Hawaii*. (Honolulu: Univ. of Hawaii Press, 1988); Jonathan Y. Okamura, “Race Relations in Hawaii during World War II: The Non-interment of Japanese Americans,” *amerasia journal* 26:2 (2000) 他。但しここでいうアメリカ化が「外面的なものにとどまった」という指摘もある (島田法子『戦争と移民の社会史: ハワイ日系アメリカ人の太平洋先生』(現代史料出版, 2004年), 7-8)。
- 5 Lauriel E. Eubank, “The Effects of the First Six Months of World War II on the Attitudes of Koreans and Filipinos toward the Japanese in Hawaii” (M.A. thesis, University of Hawaii, 1943), v.
- 6 ここでいう国民統合のプロセスは、ネーションを創造するための営為やそれに方向づけられた様々な現象を含んだナショナリズムのことをいうが、アメリカ特有の移民と国民統合をめぐる社会的文脈を強調する場合は、「ナショナリズム」ではなく「アメリカ国民化」と表記し、使い分ける。
- 7 Eubank, “The Effects of the First Six Months of World War II on the Attitudes of Koreans and Filipinos toward the Japanese in Hawaii”, 56.
- 8 Korean National Herald-Pacific Weekly, January 21, 1942. 同新聞は戦中に英字欄を設け、その紙面を通して「ハワイの市民およびコスモポリタン社会の一部の意見として情報や主張を発信」した (Ibid)。発行部数は1700部 (うち一世は1000部、二世は700部といわれる)。一世の間

-
- ではこの新聞が「ほとんどの人に読まれていた」(Eubank 1943, 18)。
- ⁹ Korean National Herald-Pacific Weekly, January 21, 1942.
 - ¹⁰ University of Hawai'i, Romanzo Adams Social Research Laboratory, Confidential Research File KI, January 28, 1942 40-I (unpublished papers).
 - ¹¹ Eubank, "The Effects of the First Six Months of World War II on the Attitudes of Koreans and Filipinos toward the Japanese in Hawaii", 64-66.
 - ¹² Eubank, "The Effects of the First Six Months of World War II on the Attitudes of Koreans and Filipinos toward the Japanese in Hawaii", 93.
 - ¹³ Third Progress Report on Koreans, Morale Section, Office of Military Governor, March 5, 1942.
 - ¹⁴ Honolulu Star-Bulletin, "Korean Pledge Service to U.S.", December 15, 1941.
 - ¹⁵ The Honolulu Advertiser, January 25, 1942.
 - ¹⁶ 1940年センサスによれば、本土のコリア系移民の人口は1,711人であった。そのうち外国籍(「帰化不能外国人」の第一世代)の数は749人程度であった。
 - ¹⁷ Office of the Military governor, report written January 20, 1942.
 - ¹⁸ Eubank, "The Effects of the First Six Months of World War II on the Attitudes of Koreans and Filipinos toward the Japanese in Hawaii", 73.
 - ¹⁹ The Korean National Herald-Pacific Weekly, February 25, 1942.
 - ²⁰ Eubank, "The Effects of the First Six Months of World War II on the Attitudes of Koreans and Filipinos toward the Japanese in Hawaii", 84.
 - ²¹ MacMillan 1979, 10-11.
 - ²² The Korean National Herald-Pacific Weekly, February 11, 1942.
 - ²³ The Korean National Herald-Pacific Weekly, January 28, 1942.
 - ²⁴ Honolulu Star-Bulletin, March 26, 1942.
 - ²⁵ 「エスニック集団化」は、英語でいう「Ethnicization」を意味するものである。この訳語として「エスニック化」や「民族化」もあるが、本稿では(1)国民統合の過程で移民が一つのエスニックなカテゴリーに集団化していく集団性を強調するために「エスニック化」を使用せず、(2)アメリカ特有のエスニック集団を単位とする国民統合の様式を強調するために「民族化」は使用せず、新たに「エスニック集団化」と訳し、使用した。
 - ²⁶ The Honolulu Advertiser, March 15, 1942.
 - ²⁷ 特に当時の日系移民に果たした役割は大きい。例えばオアフ島の日系小委員会は、ミーティングを200回行うなど日系移民社会の不安を払拭し、戦時協力へと促した。また軍政府はこの活動を通して移民社会の動向を把握した。Gwenfread Allen, *Hawaii's War Years 1941-1945* (Honolulu: University of Hawaii Press, 1950), 144.
 - ²⁸ University of Hawai'i, Romanzo Adams Social Research Laboratory, Confidential Research File K-37-I, January 28, 1942 (unpublished papers).
 - ²⁹ "Minutes of the Meeting of the Korean Executive Committee" January 29, 1942. Ibid., K-38-I.
 - ³⁰ "The Korean Status in the Territory of Hawaii", Ibid., K-42-I.
 - ³¹ Ibid.
 - ³² The Korean National Herald-Pacific Weekly, May 12, 1943.
 - ³³ "Conference with Jacob Dunn by the Morale Section", March 20, 1942. University of Hawai'i, Romanzo Adams Social Research Laboratory, Confidential Research File (Morale Reports), K-41-I.
 - ³⁴ Third Progress Report on Koreans, March 5, 1942. University of Hawai'i, Hawaii War Record Depository (unpublished papers).
 - ³⁵ Ibid.
 - ³⁶ Honolulu Star-Bulletin, May 27, 1941.
 - ³⁷ "Attitude of the Koreans toward the Japanese by Charles Loomis Morale Section", June 10, 1942. University of Hawai'i, Romanzo Adams Social Research Laboratory,

Confidential Research File K-45 (unpublished papers).

³⁸ Ibid.

³⁹ アメリカ生まれの二世は、この時移民社会の半数以上を占めるようになっていたが、そのうちの半分は 20 歳以下の未成年であった。すなわち当時のコリア系移民の年代構成は、1/3 が移民一世、1/3 が 20 歳以上の二世、1/3 が 20 歳以下の二世となる。このコリア系移民社会の構成は、幅広い年齢層によって構成されていた日系社会と異なった。

⁴⁰ The Korean National Herald-Pacific Weekly, August 5, 1942.

⁴¹ The Korean National Herald-Pacific Weekly, May 5, 1943.

⁴² Ibid.

⁴³ ソン裁判を受け、李承晩とハワイ準州選出議員ファリングトン(Joseph R. Farrington) は、当時の陸軍長官補のジョン・J・マックロイ(John J. McCloy)を介して連邦政府にハワイ・コリア系移民を敵性外国人から除外するよう求めた。しかし連邦政府は、ハワイ軍政府が「軍事上の必要性」からコリア系移民を敵性外国人に分類している限り、ハワイ軍政府に介入することはできないと返答した(MacMillan 1979, 25-26)。

⁴⁴ Honolulu Star-Bulletin, May 6, 1943.

⁴⁵ Ibid.

⁴⁶ Honolulu Star-Bulletin, June 2, 1943.

⁴⁷ Ibid.

⁴⁸ The Honolulu Advertiser, July 23, 1943.

⁴⁹ Ibid.

⁵⁰ Anthony J. Garner, *Hawaii Under Army Rule* (Honolulu: The University Press of Hawaii, 1975[1955]) Appendix.

⁵¹ “Program for Korean Day”, March 1, 1945. University of Hawai’i, Romanzo Adams Social Research Laboratory, Hawaii War Record Depository File 56.06.(unpublished papers).

⁵² “Interview with Mrs. A., Korean, August 6, 1947 by Yuki Kimura”, University of Hawai’i, Romanzo Adams Social Research Laboratory, Confidential Research File K-35.

終章 結論

1. ハワイ・コリア系移民のアイデンティティ形成過程〈1903-1945〉

以上、戦前のハワイにおけるコリア系移民の集団編成とアイデンティティ形成について考察した。本論文の展開をまとめたい。

はじめに朝鮮におけるハワイの移民制度の成立／廃止過程を考察し、コリア系移民を条件づけた制度的・国際関係的文脈を検討した（第1章）。ハワイへの移民は、国民国家体制の下で行われた朝鮮で最初の近代移民である。そのため朝鮮で歴史的に行われてきた前近代の出稼ぎ移民と異なり、国境管理や渡航許可制度、渡航証明書携帯といった近代的移民制度の下で行われた。しかしハワイへの移民制度は、日露戦争直前の冷え切った米朝関係の中で、一人の米国公使が秘密裏にハワイの砂糖産業と画策して成立させた制度であるだけでなく、当時のアメリカで違法とされていた制度であった。その移民制度とは、「契約移民」制度—移民渡航費を農場主が負担するかわりに、移民渡航者は渡航前に契約した雇用条件や雇用期間に従い労働することを約束する制度で、アメリカの奴隷貿易を禁じた外国人契約労働者禁止令に触れたため、アメリカのハワイ併合（1900年）時に禁止された制度—と同じ内容の「合意移民」制度である。そしてこの移民制度の成立によってコリア系移民は、一時はハワイで日系移民に次ぐ集団になると目されるほどの勢いでその数を増やしたが、移民制度が日本政府の圧力によって僅か2年半で廃止されたため移民者が激減し、最終的にハワイで1万人にも満たない小規模な集団を形成した。

それでは移民後に、コリア系移民はどのようなアイデンティティを形成したのだろうか。まずは、移民直後（1900年代）に移民が「コリアン」というカテゴリーに自己同一化していく過程を考察した（第2章）。20世紀初頭のハワイの砂糖プランテーションは、出身地を示すカテゴリーが他のどのカテゴリーよりも優先される場所だった。これは集団間の競争意識を芽生えさせ、生産性を高めようとした経営者の意図によってつくられたものであるが、これによって移民労働者は生活も仕事も民族ごとに振り分けられることになった。また賃金も、当時はまだ個人の能力や経験ではなく民族で決められた。この状況の中でコリア系移民も、すぐに自分たちが「コリアン」というカテゴリーに分類される人々であることを自覚するようになって

た。すなわち「コリアン」と呼ばれ、「コリアン」と名乗る毎日の生活の中でコリア系移民は、「自分たちはコリアンである」という認識を持つようになった過程がここで浮き彫りとなったが、これはコリア系移民の「コリアン」としての意識が、移民以前から形成されていたわけではなく、移民後のハワイの社会経済的環境の中で生み出されていったことを意味するものである。

また「コリアン」と分類された人々は、移民当初、洞会組織（伝統的なムラ社会）と擬似的親族関係をもとに同族意識を育み、集団を形成したが、1900 代後半になると、キリスト教会を中心とした集団へと転じていった。この背景には、先行研究で明らかにされてきたように、コリア系移民が移民以前からキリスト教とのつながりがあった一移民以前からキリスト教信者が多く含まれていたことや通訳が牧師だった一等の集団内部の事情もあったが、それ以外に次の二つのコリア系移民をめぐるハワイの経済社会的背景もあった。それは第一に、ある移民が「農場主は私たちがストライキに入らないように教会を立てた」と語ったように、コリア系移民をスト破りとして農場に引き止めておくために、プランテーション経営者がキリスト教会活動を経済的に支援したことである¹。そして第二に、コリア系移民のキリスト教活動を支援するメリットを一コリア系移民の信仰を支えれば、かれらはそれを感謝して他の農場へ移らずに勤勉に働くようになるため経済的見返りも大きいと一プランテーション経営者に説得しながら、教会の建設や牧師の育成に努めるなど、キリスト教団がコリア系移民を対象とした宣教活動に熱心であったことを背景として挙げることができる。すなわちこれらの主流社会からの働きかけが契機となって、コリア系移民の間でキリスト教が普及し、メソジスト教団の記録に「ハワイの島々にいる 6,000 人強のコリアンたちは、キリスト教を歓迎するこの島にやってきてから 8 年間、キリスト教礼讓の心で完全に我々の監護の対象となった」²と残される程、キリスト教会を中心とした集団へとコリア系移民は変貌を遂げるようになったのである。

次に、自らを「コリアン」とであると認識するようになったコリア系移民が、ローカルな次元の「コリアン」という意識を、どのようにしてナショナルな次元の「コリアン」という意識に結びつけていったのか、移民のアイデンティティがナショナル化していく過程を考察した（第 3 章）。「オリエントのアイリッシュ」と言われたハワイのコリア系移民は、祖国ナショナリズムが強い集団として知られた³。そのた

めコリア系移民は、移民直後から祖国独立運動を活発に展開した集団だと思われる傾向がある。しかしハワイでは 1910 年代になるまで祖国独立運動はまったく盛り上がらなかった。但し、これはこの時期のアメリカにおける朝鮮独立運動が活発ではなかったことを意味するものではない。1910 年以前、朝鮮独立運動はハワイではなくサンフランシスコにおいて、「韓民族独立の父」と顕彰される安昌浩を中心とする運動家らが主体となって展開していた。

また 1910 年代になるまで、ハワイのコリア系移民社会では、ナショナリズム（祖国ナショナリズム）も高まることがほとんどなかった。当時、運動家と一般の移民の間には、出身階層という面でもナショナリズムという面でも大きな差があった。独立運動家は朝鮮で教育を受け、「朝鮮人／韓国人」⁴としての意識を強くもっていたのに対し、一般の移民は朝鮮の近代国民国家としての体制が整っていない時代に移民したため、朝鮮で教育を受ける機会に恵まれず、移民以前にナショナリズムに晒されることもなかった。

しかし韓国併合（1910 年）後の移民の祖国喪失という経験と、次の二つの出来事が、ハワイにおける祖国独立運動を急速に発展させた。その出来事とは、ハワイの移民団体がサンフランシスコの運動団体と統合したことと、二人のナショナリストが運動の指導者としてハワイに招聘されたことである。こうした気運が盛り上がりを見せる中、運動家らが一般の移民に愛国の精神を広めていくと、コリア系移民の間で一気にナショナリズム（祖国ナショナリズム）が高まり、コリア系移民のアイデンティティはナショナルな様相を帯びていった。ただし、運動家らが主体となった「上」からの運動であったため、1919 年の三・一運動後に運動家らが上海臨時政府に参加するためにハワイを去ると、ハワイの独立運動や祖国ナショナリズムは 1920 年代初め頃には終息し、人々の関心も祖国や独立運動から離れていったのである。すなわち独立運動を契機に運動家らが啓蒙する形でコリア系移民のアイデンティティはナショナル化していったのであり、これはコリア系移民が、近代的発想—アイデンティティをナショナルな次元で捉える一方法を、移民以前ではなく、移民後の独立運動の中で獲得していったことを意味している。

それでは祖国独立運動が凋落し、滞在が長期化していく中で移民のアイデンティティはどのように変化したのだろうか（第 4 章）。ハワイの砂糖プランテーションでは、民族間の賃金格差が 1909 年に是正され、1910 年代から新規移民労働者がフ

イリピンから大挙押し寄せるようになった。これによりスト破りとして重宝されていたコリア系移民の存在価値は薄まり、砂糖プランテーションを離れる移民が相次いだ。折しもホノルル市近郊では、米軍基地スコーフフィールド・バラックスの建設が始まったところだった。当時の米軍は、軍の一切の業務から日系移民を排除するほど激しい排日的政策を展開していた。この軍の政策はコリア系移民には益するところがあり、優先的に軍指定の洗濯屋を開業する道を開くこととなった。そしてコリア系移民の多くが小規模小資本の洗濯屋の経営や労働に従事するようになった。また、この時期コリア系の結婚も進んだ。1910年の韓国併合により、日米紳士協定（1908～1924年）の下で日系移民に許されていた写真花嫁の制度を、今度はコリア系移民も「日本人」として利用できるようになったため、朝鮮から女性を呼び寄せ、所帯をもつ男性が増えたのである。そして女性と子供の人口が増える中で、例えば子供の教育も朝鮮語教育よりもアメリカの公教育が重視されるなど、コリア系移民の間で定住化志向が広がっていった。

この定住化志向は、移民の民族間関係とアイデンティティに大きな変化をもたらした。ハワイでは、特にアジア系移民の場合、民族ごとの「棲み分け」が行われている中で日常生活を送っていたため、多民族状況の中で暮らしていても、移民1世は他の民族集団と深く関わることなく生活していた。特に日系移民とコリア系移民の間には一種の緊張感があり、一定の距離が保たれていた。日系移民社会では、日本とのつながりが深く、「日本人」教育も一部で進んでいた。一方、コリア系移民社会では、祖国独立運動が低迷したあとも朝鮮的なものを好み、日本的なものを排除する雰囲気が残っていた。しかしこのような背景の中、アメリカで生まれ育ち、広い民族間関係の中で日常生活を送っていた移民第二世代の間から、この旧世代の民族間関係や世界観に反発をもち、祖国の状況に左右されない形で新たなアイデンティティを構築しなければならないと考える者が台頭した。

そして1930年代になると、次の三つの考えを内包したアイデンティティが構築されるようになった。第一に、「国がない」という考えである。この考えは、祖国が実体として存在しないことを積極的に認める発言や、故郷は朝鮮ではなくハワイであるという主張につながっていった。第二に、「コリア」と「アメリカ」というナショナルなアイデンティティを両方同時に持つという考えである。ここでいう「コリア」とは、実体としての「朝鮮」ではないが、「アメリカ」と同列に位置づけられた

ナショナルなものを意味した（そのためコリアン＝下位集団／エスニックという意味ではない）。第三に、キリスト者としての道徳と精神を高めていこうという考えである。キリスト教の精神は、移民社会の世代間格差やそれにともなう価値観のずれを超越するものとして広い層に受け入れられた。

以上の考察は、コリア系移民のアイデンティティが、これまでの研究で指摘されてきたような独立運動に対する関心が失われた1920年代から1930年代にかけて移民の世代交代とアメリカ化とともに「コリアン」から「アメリカ人」へ転じていった、ということを示すものではない⁵。むしろこの時期に発展したアイデンティティは、アメリカという一つのナショナルな枠組に収まらずに、コリアとアメリカという二つのナショナルなアイデンティティ（間国家的トランスナショナル・アイデンティティ）を内包しながら、ナショナルな枠組を超えた超国家的トランスナショナル・アイデンティティの様相も呈するようになったことを意味している。

最後に、第二次大戦中のアメリカ国民化の流れは、コリア系移民のアイデンティティをどう変えたのかを考察し、コリア系のアイデンティティが「アメリカ人」という一つのナショナルなアイデンティティに収斂されていく過程を明らかにした（第5章）。真珠湾攻撃を受けて戒厳令が敷かれたハワイでは、「日本人」移民が「敵性外国人」に分類されたが、ここでいう「日本人」移民の中には、朝鮮半島出身者も含まれたことから、コリア系移民も敵性外国人に範疇化されることとなった。これに対し、コリア系移民は祖国朝鮮のことを語ることによって「日本人」ではないことを主張し、自分たちが「敵性外国人」ではなく「友好的外国人」であると訴えた。しかし祖国を強調した語り口が、戦時下の戦時協力と民族調和に反する語り口だとみなされてしまい、コリア系移民の語りは「アメリカ人」としての誇りと愛国心を強調する語りへと転換せざるを得なくなった。こうしてコリア系移民に更なる逆境が訪れたが、数年後には一転して、コリア系移民が「日本人」に分類されていることに対する批判が主流社会の中で沸き起こった。そしてコリア系移民の分類をめぐる問題が「アメリカ人」の良識を問う問題へすり替わっていく中で、コリア系移民は「日本人」とは異なる固有な集団であるという認識が広がり、戒厳令が解除されたときには「日本人」および「敵性外国人」の分類から外されることになった。この一連のプロセスの中で、コリア系移民のナショナルな次元のアイデンティティは、「アメリカ人」というアイデンティティに収斂していき、「コリアン」としての

アイデンティティは、エスニック（下位集団）な次元のものへと転じていったことが明らかになった。そしてこれは、コリア系移民がマクロな次元のアメリカ国民化に構造化される一方で、それと連動する形でコリア系移民がエスニックな集団へと再編されていったことを意味する。

以上、コリア系のアイデンティティが次の段階を経て変化していったことが明らかになった。まずは、出身地を示すカテゴリーが何よりも優先されるハワイの砂糖プランテーションで、移民の間で「コリアン」という認識が誕生する段階。次に、祖国独立運動の中で「コリアン」としてのアイデンティティがナショナル化していく段階。そして移民が一時的滞在者から定住移民へと転じていく中で、「コリアン」と「アメリカ人」という二つのナショナルなアイデンティティを確立しながら、同時にナショナルな枠組を超えたトランスナショナルなアイデンティティを形成していく段階。最後に第二次大戦のアメリカ国民化とエスニック集団化を通して、ナショナルなアイデンティティが「アメリカ人」としてのアイデンティティに収斂していく過程と、「コリアン」としてのアイデンティティがエスニックなものに転化していく段階である。

2. 移民研究の課題と可能性：

トランスナショナル・アイデンティティ論からの問題提起

本論文の考察から、コリア系移民のアイデンティティがナショナル／トランスナショナル化していく過程が明らかとなったが、これは既存のコリア系移民研究およびアメリカの移民研究に対して、次の問題を提起するものである。第一に、これまで独立運動のインパクトを検証してこなかった問題である。祖国独立運動に関する研究は、移民研究の分野では「例外的なもの」と位置づけられたためほとんど取り上げられてこなかった。しかしコリア系移民の独立運動は、アメリカ史の中では特殊であっても、同時代の世界史から見ると特殊だと言い切れない。19世紀末から20世紀前半にかけて朝鮮の人々は、国難と生活難を逃れ、間島やロシア沿海州、中国、満州、ロシア、日本へと国境を越えていった。そしてこれらの人々に亡命者が加わる形で祖国独立運動が興っていった⁶。そのためデイヴィッド・K・ユー（2010年）が、「アメリカのコリア系移民を見る時、かれらは移民であるけれども、同時に

故郷喪失者でもある、と見るべきであろう」⁷と述べたように、20世紀前半の国外朝鮮人社会が経験した祖国喪失と祖国独立運動の潮流に照らしあわせながら、ハワイの独立運動の普遍性と特殊性を検討し、コリア系移民のアイデンティティと独立運動との関係を改めて問うことが求められる⁸。

しかし同時にこれまでハワイの独立運動を扱ってきた韓国の独立運動史研究も方法論的問題を抱えている。それは独立運動とハワイのコリア系移民社会の関係について先駆的研究を行った金元容（2004 [1959]年）の『在美韓人五十年史（在米韓人五十年史）』に見られるように、政治活動や運動団体—特に後に韓国初代大統領となる李承晩や「韓民族独立の父」と顕彰される安昌浩などの運動家—を中心とした研究となっているため、「コリアン」としてのナショナル・アイデンティティが所与のものとして受け止められる傾向にあることである⁹。そのためナショナリズムやアイデンティティの重層的な側面に言及しながら、祖国独立運動が移民のアイデンティティに与えたインパクトを改めて検討する手続きが求められている。

第二に、コリア系移民の「コリアン」としてのアイデンティティをナショナルなものではなく、エスニックなものとして認識してきたエスニシティ研究の問題が挙げられる。移民に関する研究は、戦前から戦後にかけてアメリカニゼーション研究からエスニシティ研究に移行した。そしてグレイザーとモイニハン(1970年)がそれまでアメリカニゼーション研究の代名詞となってきた「坩堝論」に対して、「坩堝論の重要な点は、それがまったく起こらなかったということだ」¹⁰と述べたように、移民に関する議論は一元的社会に同化していく人々に関する議論から多元社会を構成するエスニック集団に関する議論へと変化し、このパラダイムシフトの中で「移民＝エスニック」という認識が定着していった¹¹。しかし本論文の第4章でコリア系移民の「コリアン」としてのアイデンティティが、エスニックではなくナショナルなアイデンティティとして発展したと結論づけたように、エスニックの枠組では捉えきれないアイデンティティが存在する。さらに原尻英樹（2000年）が、研究者が民族的カテゴリーの恣意性を問わずにそれを自然視した問題を指摘したように、エスニシティ研究では「エスニック」なものが実体的に捉えられる傾向にある¹²。そのためここで求められるのは、エスニシティ研究が前提としてきた「移民＝エスニック」を当然視するのではなく、一旦離れたところから移民の歴史性を記述／分析する研究である。

第三に、ナショナルな分析枠組を当然視してきたために、ナショナルな枠組の外部に広がるアイデンティティ（祖国に向かったナショナル・アイデンティティと国家の枠組を超えたトランスナショナル・アイデンティティの両方を含む）を見落としてきたアメリカの移民研究の問題である。コリア系移民が戦前も戦後も「例外的な集団」とであると認識されたのは、祖国ナショナリズムが強い集団だと認識されたためであるが、この背景にはアメリカ以外のナショナルな枠組を記述／分析の対象から外してきた移民研究の問題がある。アメリカの移民研究は、エスニック・スタディーズと言われる学問分野で行われてきたが、この分野はもともと公民権運動の中で誕生したように、研究そのものが「主流社会に抵抗すること」を目的と化してきた面が強い¹³。そして貴堂嘉之（2002年）が、移民の物語は国家による差別や排斥に対する抗議の意味をもつ一方で、「国民の物語」に回収されてしまった問題を指摘したように、アメリカの移民研究は国家による承認に重点を置いてきた¹⁴。そのためアメリカ外部に向かった営為や志向は、分析に値しない「例外的なもの」と位置づけられてきた。

しかし本論文の第4章において、コリア系移民がアメリカというナショナルな次元でアイデンティティを形成しつつ、同時にそれを超えたトランスナショナルな次元でもアイデンティティを形成していたと論じたように、移民当事者の世界観はアメリカというナショナルな枠組に制約されるものではなかった。尚、ここでいうトランスナショナルな次元とは、本論文の事例でいえば、コリアとアメリカという二つのナショナルな枠組を内包するアイデンティティ（間国家的トランスナショナル・アイデンティティ）と、ナショナルな枠組を超えたトランスナショナルなアイデンティティ（超国家的トランスナショナル・アイデンティティ）の両方を意味するものである。ナショナルな境界線に区切られた枠組からではなく、移民当事者の世界観から移民のアイデンティティを記述／分析する方法が改めて問われているといえよう。

第四に、「移民＝定住移民」という前提に立ってしまったために、移民が移民と化した歴史性の意義をこれまであまり強調してこなかった問題である。アメリカの文脈から「移民」が語られる時、アメリカに向かって一方向的な移動した「入移民（immigrant）」が想定され、アメリカから出ていった「出移民（emigrant）」や双方向的な移動をしている人々は想定されていないことが多い。さらに永住を目的とし

た移民が、移民当初は一時的滞在者(migrant)や出稼ぎ移民であったかどうかはさほど重要視されない傾向がある。この背景には、「移民国家」として定住移民を受け入れることで発展してきたアメリカ独特の歴史や、「グリーンカード(永住権)」や「市民権(国籍)」を俎上に載せてきた移民をめぐる政治性の問題が挙げられる。しかし本論文から明らかになったように、コリア系移民の定住志向は、祖国喪失という経験や社会経済的条件の変化、家族や二世の誕生という時間軸の変化の中で生まれていった。そのためコリア系移民が定住移民と化してきた歴史性がここでは重要となるが、この歴史的変遷は「移民＝定住移民」という前提に立つと見えてこない。すでにグローバル移民研究の分野で、例えば伊豫谷登士翁(2007年)が「移動した人々を特定の場所に結びつけることを、自明のことと考え、アイデンティティと、その変化を問うてきた」¹⁵と述べ、移民をめぐる定住を前提とした認識の問題を指摘しているように、この「移民＝定住移民」という認識をめぐる問題について、移民の歴史性を記述／分析する移民史研究という分野であるからこそ問われ、それを相対化していく方法が求められるのである。

以上の問題群は、本論文のトランスナショナル・アイデンティティというアプローチによって浮き彫りとなったものであるが、本論文から導き出されたトランスナショナル・アイデンティティに関する考察は、コリア系移民やアメリカの移民研究にとどまるものではない。今後の移民と国家をめぐる問題に、次の二つの視点を加えるものである。

一つは、移民と祖国の関わりをどう考えることができるかということである。南川文里(2007年)が戦前の日系移民によるトランスローカルな移民社会の形成を明らかにしたように、移民は祖国とのつながりを一グローバル化によってモノやヒトの移動が頻繁に行われるずっと以前から一維持してきた¹⁶。また東栄一郎(2005年)¹⁷の戦前の日系移民をめぐるトランスナショナリズムの研究や、シラーとフーロン(2001年)¹⁸の現代のハイチ系移民をめぐる遠距離ナショナリズムの研究が明らかにしたように、移民のアイデンティティは、戦前も戦後も、アメリカだけではなく、祖国というもう一つのナショナルな枠組の中でも構築されてきた。本論文の事例は、これらの研究成果に加え、祖国が実体として存在しないところでも一本国との物理的なつながりや実際の移動がないところでも、あるいは本国の思想体系や国民教育が輸入されないところでも一移民が祖国とのつながりを維持し、さらに移民はその

つながりを通して近代の「想像の共同体」を創造する営為に参加し、アイデンティティをナショナル化していることを示すものである。そしてこれは移民のアイデンティティが一たとえアメリカ（移住先）のナショナルな枠組を離れても一ナショナルな次元のアイデンティティから無関係でいることはできない近代という時代が抱えた課題を浮き彫りにするものである。すなわち祖国に向かった間国家的トランスナショナル・アイデンティティ論は、ナショナルなトランスナショナル・アイデンティティをめぐる課題として、今後の移民と国家の関係を解明する方法を提示するのである。

もう一つは、ナショナルな枠組とは別の次元で存在する超国家的トランスナショナル・アイデンティティをどう考えることができるかということである。これを考えるにあたって、まずコリア系移民が、そもそも超国家的トランスナショナル・アイデンティティをなぜ発展させたのだろうか、という点に注目する。

コリア系移民のトランスナショナル・アイデンティティが発展した背景には、祖国喪失という経験があった。しかしコリア系移民と同じ時代に祖国独立運動をアメリカで展開したアイルランド系移民の場合、同じように祖国喪失という経験をしたが、そのアイデンティティが超国家的トランスナショナル・アイデンティティの様相を帯びることはあまりなかった¹⁹。この背景には、アイルランド系移民の独立運動がアメリカの外交政策を取り込みながら盛り上がったのに対し、コリア系移民の独立運動はアメリカ政府の関心を引くことができなかつた事情の違いがある（1920年3月にアイルランド支援法案とともに朝鮮支援法案がアメリカ議会で審議されたが、朝鮮支援法案は承認されなかつた）。さらにコリア系移民の場合、運動家らが次々にハワイを去ってしまうという事態が発生し、独立運動を維持するだけの条件が集団内で整わなかつた事情もあつた。すなわちアイルランド系移民との違いから浮き彫りとなるのは、祖国喪失という経験は、超国家的トランスナショナル・アイデンティティを形づくる契機になるものの、それがトランスナショナル・アイデンティティを発展させる条件になるとは限らない、という点である。そのため祖国喪失は、コリア系移民がトランスナショナル・アイデンティティを発展させた決定的な理由にはならない。

それでは何がコリア系移民のトランスナショナル・アイデンティティを発展させたのだろうか。それは当時のコリア系移民が、「アメリカ人になつても、人からコリ

アンとして見られ続けている」²⁰と語ったように、「アメリカ人」になっても「他者」として見られる移民の主流社会から向けられた「まなざし」の問題がこの背景にあった。言い換えれば、コリア系移民がアメリカ化とともに「アメリカ人」というナショナルなアイデンティティに収斂せず、「アメリカ人」というアイデンティティとアメリカの外部に向かったトランスナショナル・アイデンティティを同時に発展させた理由は、アメリカというナショナルな枠組に内包された排他性の問題があったためである。ここから示される重要な点は、超国家的トランスナショナル・アイデンティティがナショナルなアイデンティティと表裏一体になって形成されている、という点である。すなわち移民のトランスナショナルな位相のみならず、アメリカ国内のナショナルな位相を映し出す方法として、超国家的トランスナショナル・アイデンティティを位置づけることができる、ということである。

現代はグローバル化の時代である。国境を越えた移動が頻繁に行われ、人々のアイデンティティも重複的、流動的、多元的なものとして捉えられるようになった。そしてこうした中で移民のトランスナショナル・アイデンティティにも広く注目が集まるようになった。しかし移民のトランスナショナル・アイデンティティは、ナショナルな枠組をめぐる問題と、ナショナルな枠組に条件づけられてきた近代という時代の課題を、われわれに改めて示している。本論文は、今後の移民と国家の関係を記述／分析するための方法論的基盤としてトランスナショナル・アイデンティティ論を提起し、結論とする。

-
- ¹ Esther Lim Ome, Video, The Roberta W. S. Chang Video Collection at the Center for Korean Studies, University of Hawai'i (RCVC).
 - ² Official Minutes, 7th Session of the Hawaiian Mission of the Methodist Episcopal Church, Honolulu, Territory of Hawaii, March 23-25, 1912.
 - ³ Kim, "The Koreans in Hawaii", 126.
 - ⁴ 「韓国／朝鮮(人)」という呼称については序章の注1と注 50 を参照。
 - ⁵ Kim, "The Koreans in Hawaii", 206-207; Patterson, *The Ilse.*, 149-150.
 - ⁶ 姜萬吉編著(大田修・庵途由香訳)『朝鮮民族解放運動の歴史』(法政大学出版局, 2005年); 趙芝薫(梶村秀樹監訳、加藤晴子訳)『韓国民族運動史』(高麗書林、1975年)。
 - ⁷ David K. Yoo *Contentious Spirits: Religion in Korean American History, 1903-1945.* (Stanford: Stanford University Press, 2010), 4.
 - ⁸ ハワイのコリア系移民の独立運動のトランスナショナルな広がりについては次の研究を参照。Richard S. Kim "Korean Immigrant (Trans)Nationalism: Diaspora, Ethnicity, And State-Making, 1903-1945" (PhD dissertation, University of Michigan, 2002)。
 - ⁹ 韓国では、ハワイのコリア系移民の独立運動について、延世大学校国際学大学院付設現代韓国学研究所や、韓国独立記念館・韓国独立運動史研究所、国史編集委員会が発行した史料集の他、これまで次の研究が発表されている(タイトルの日本語訳については参考文献参照)。金元容『在美韓人五十年史』(図書出版혜안, 2004[1959]); 朴成壽『獨立運動史研究』(創作과批評社, 1980); 方善柱『在美韓人の獨立運動(在米韓人の獨立運動)』(翰林大学校出版部, 1989); 崔鳳潤「在美韓人の 歴史와 民族主義運動(在米韓人の歴史と民族主義運動)」『民族統一』1988; 홍선균「1910년대 후반 하와이 韓人社会의 動向과 大韓人国民会의 活動(1910年代後半ハワイ韓人社会の動向と大韓人国民会の活動)」『한국독립운동사연구(韓国獨立運動史研究)』8, 1994; 延世大学校国学研究所(編)『미주 한인의 민족운동(米国における韓人の民族運動)』(図書出版혜안, 2003); 吳世昌「韓人の米州移民과抗日運動(韓人の米州移民と抗日運動)」『民族文化論叢』6, 1984; 尹炳旭『나라밖에서 나라찾았네: 미주한인독립운동사의 재인식(国外に出て国を探す: 米州韓人獨立運動史の再認識)』(博英社, 2006); 임중은『美州韓人들의 獨立運動과獨立軍養成(米国における韓人の獨立運動と獨立軍養成)』(공군, 1986)等。
 - ¹⁰ Glazer, Nathan and Daniel P. Moynihan. *Beyond the Melting Pot: The Negroes, Puerto Ricans, Puerto Ricans, Jews, Italians and Irish of New York City.* 2nd edition. (Cambridge.: The MIT Press, 1970): 1.
 - ¹¹ この背景には、アメリカのエスニック集団がマイノリティ集団を意味し、エスニシティ研究がマイノリティ研究と化してきたアメリカ独特のエスニシティ研究の文脈もある。Walker Conner, *Ethnonationalism: the Quest for Understanding* (Princeton: Princeton University Press, 1994), 101.
 - ¹² 原尻英樹『コリアンタウンの民族誌: ハワイ・LA・生野』(ちくま新書, 2000年), 214-217.
 - ¹³ Wannii W. Anderson and Robert G. Lee "Diaspora, Transnationalism, and Asian American Studies" Anderson and Lee (eds.) *Displacements and Diasporas.*(New Brunswick, N.J.: Rutgers University Press, 2005), 7.
 - ¹⁴ 貴堂嘉之「アメリカ移民史研究の現在」『歴史評論』625(2002年5月), 26.
 - ¹⁵ 伊豫谷登士翁「方法としての移民: 移動から場をとらえる」伊豫谷登士翁(編)『移動から場所を問う: 現代移民研究の課題』(有信堂、2007年), 8.
 - ¹⁶ 南川文里『<日系アメリカ人>の歴史社会学: エスニシティ、人種、ナショナリズム』(彩流社、2007年)。
 - ¹⁷ Eiichiro Azuma *Between Two Empires: Race, History, and Transnationalism in*

Japanese America (Oxford: Oxford University Press, 2005).

- ¹⁸ Nina Glick Schiller and Georges Eugene Fouron, *Georges Woke Up Laughing: Long-Distance Nationalism and the Search for Home* (Durham/London: Duke University Press, 2001).
- ¹⁹ しかしだからといってアイルランド系移民の間に故郷喪失者やディアスポラとしての意識が形成されなかったわけではない。アイルランド系移民の移民経験と祖国との関係については次を参照。Kerby A. Miller, *Ireland and Irish America: Culture, Class, and Transatlantic Migration* (Dublin: Field Day, 2008).
- ²⁰ Y.C. Yang, “Our Younger Generation and Korean Culture”, *Korean Student Annual*, VIII, No.2 (1930) May, 18.

補論 戦後の移民史をめぐる集合的記憶：

コリアン・ディアスポラの歴史として

移民記念祭とコリア系移民史

戦後、大韓民国からの移民が急増し、コリア系移民は120万人を超える移民集団となった。ロスアンゼルスやニューヨークなどの大都市圏でコリア・タウンが出現し、コリア系移民の姿はアメリカ各地で顕在化していった。しかしアメリカ本土で形成されたコリア系移民社会は、韓国系移民（「新移民」という）によって新たに編成されたのに対し、ハワイのコリア系移民社会は戦前のコリア系移民（「旧移民」という）と新移民が混淆した中、編成されていった（旧移民と新移民の数を正確に述べることはできないが、おそらく旧移民の数は、現在のコリア系移民の人口の三割程度を占めると思われる）。こうしたコリア系移民社会の変化の中で、戦前のコリア系移民の歴史は、どのように記憶されるようになったのだろうか。ハワイの移民記念祭を通して、戦後のハワイのコリア系移民社会がどう変化したか、移民史をめぐる集合的記憶がいかに変遷してきたのかを最後に見てみることにする。

75周年移民記念祭（1978年）

75周年移民記念祭が開催された当時、ハワイでは韓国系移民の数が急速に増加していた。新移民は、1960年代までほとんど見られなかったのに対して、1970年代に入ると、集団の20%を構成するようになった。そしてその数は、毎年1500人から1800人単位で増え続けていった。またロスアンゼルスのコリア・タウンの出現など、これまでハワイ以外のアメリカでは見られなかったコリア系移民社会が、新たに形成されつつあった。

このような中で旧移民が危惧したのは、ハワイ社会におけるコリア系移民に対する眼差しであった。当時ハワイでは、コリア系移民に対して、酒や売春、ギャングといった社会問題と直結した負のイメージを抱く傾向が強まっていた。その背景には、新移民の増加とともにハワイで増えていった「コリアン・バー」の存在があった。

コリアン・バーとは、もともと「ジャパニーズ・バー」と呼ばれ、ホステス形式の飲み屋が、日本から輸入される形でハワイに普及した飲食店である。当初は、「戦争花嫁」と呼ばれる米軍人と結婚してハワイに渡った女性が、離婚などを契機に生活の糧を得るために始めた飲み屋であった。このような飲食店が「コリアン・バー」と称されるに至ったのは、

朝鮮戦争後であった。戦後、多くの韓国系の「戦争花嫁」たちが、ホステス形式の「コリアン・バー」を開いた。すると「コリアン・バー」は、その数においても規模においても、あっという間に「ジャパニーズ・バー」を凌ぐ存在となり、1960年代に入ると、ホステス形式の飲み屋を総称して「コリアン・バー」と言うようになっていたのである。

ハワイの韓国系移民のインタビュー調査を行ったダニコ (Mary Yu Danico) は、「コリアン・バー」の影響により、ハワイのコリアン・アメリカンの中、特に女性たちについて、性的にだらしない、といったイメージが当時のハワイ社会で定着したと報告している¹。さらにホステス・バー以外の商売につく人たちも、コリア系移民である限り、「売春に限りなく近いビジネス」としてみられていた、という²。

このような中で、75周年移民記念祭は開催され、会長のロイド・キム氏 (Lloyd Y.S. Kim) は、次のように記念祭の意義を述べている。

コリアン・ウィークの活動は、(略) ハワイのコリアン・コミュニティの特定のメンバーたちが、過去の害 (ill) を改善するために、共通の問題に取り組むという協力の結果を表すものである。つまりそれとは、わずかな生存しているオリジナルの移民とピクチャー・ブライドたちに名誉を与え、過ぎた日々において享受したコリアンの良いイメージを再構築することである³

そして旧移民たちは自らをコリア系移民と呼ばずに、「もともとの」あるいは「元来の」という意味にあたる「オリジナル移民」と呼ぶことによって新移民と差別化し、移民記念祭の目的も、「ハワイへのオリジナル・コリア系移民に敬意を表」するものとなっていたのだ (写真3参照)。



写真3 「オリジナル移民」という形で旧移民の存在がアピールされた時のパンフレットの一部分
(出典：『75th Anniversary of Korean Immigration to Hawaii 1903-1978』)

90周年移民記念祭（1993年）

しかし1980年代に入ると、韓国からの新移民の数が旧移民を上回るようになるばかりでなく、1981年に韓国の海外渡航規制が解除されると、韓国からの観光客もハワイを訪れるようになった。また韓国からの資本の流れも、ハワイ経済やコリア系移民社会に影響を見せ始め、例えば、韓国からの投資は1991年に、「ハワイ社会に影響を与える潜在的な投資家」として期待される諸外国の一位に挙げられる程、のびていたのだった⁴。このような中で、韓国系移民が新たに移民社会の中心的存在になっていくという移民社会内における主流の移行という現象が生じた。

ハワイの韓国系移民社会が転換期を迎える中、90周年移民記念祭の開催準備が進められていった。当初、90周年移民記念祭は、コリア系移民の代表的組織である「韓人会」が企画・運営をまかされていたのだが、彼らは組織内の対立により、記念行事の開催を辞退した。そこで白羽の矢が立ったのが、当時ハワイ・コリアン商工会議所の会員で、88年から89年まで代表を務めたドゥキ・リー・ムラバヤシ氏（Duk Hee Lee Murabayashi）であった。ムラバヤシ氏は、韓国の大学を卒業後、1960年代に米国本土の大学院に留学するなど、韓国語と英語の両方を不自由なく話す数少ない韓国系移民一世であった。またムラバヤシ氏は、経営する都市計画コンサルタント会社が州政府の都市計画に関わるなどハワイ州政府とのつながりが深いことから、ハワイと韓国を経済的に連結する役割が期待されていた人物であった。

この「韓人会」が開催を辞退するという難局の中、ムラバヤシ氏は、90周年移民記念祭実行委員の副会長の職を引き受け、以降、彼女が実質的な企画・運営を担っていくようになった。また会長には旧移民の第二世代であるが、韓国のソウル大学に留学し、ハワイと韓国の貿易ビジネスを成功させた経験をもつドナルド・キム（Donald Kim／金昌源）氏が就任した。

ハワイと韓国の双方に通じた人物によって企画・運営された90周年祭は、他の多くの韓国系移民たちを取り込み、また旧移民たちの歴史を韓国系移民たちが掘り起こしていくという作業を通し、旧移民たちの功績がその礎にあってこそ、現在の韓国系移民を含めたハワイのコリア系移民たちの成功があるという、次のような旧移民と韓国系移民をつなぐ語りをつくり出していった。

朝鮮(Korea)からのオリジナル移民とは異なり、今日のハワイのコリアンたちは

専門職や事業、その他の職業に就き、成功を収めるようになった。しかし彼らは、勇気ある旧移民たちに感謝をしなければならない義務を負っている。最初に、異国の地にくるために朝鮮（Korea）を離れ、生活改善のために、そして子供たちや、子供の子供たちに多くの機会を提供するために、プランテーションをいち早く抜け、新たな企業家精神にのった事業を始めた人たちなのだ。我々が 1993 年を祝うのはこの理由のためである⁵。（傍点、筆者）

こうして 90 周年祭は、新移民が主体となって旧移民の歴史を祝う、という形で新たな語りを形成していったのであった。

100 周年移民記念祭（2003 年）開催に向けて（1）：ハワイを超えた新たな動き

100 周年移民記念祭が企画された 1990 年代始めのハワイでは、低迷化する観光事業が深刻な問題となっていた。そして新たに打ち出された観光政策の一貫として、民族的記念行事を観光資源としていく方針が示された。このようなハワイ州政府の政策転換の中で、コリア系移民の 100 周年移民記念祭が企画・運営されていった。そして結果的に過去に例をみない 25 万ドルの経済的支援が、ハワイ州政府によって行われたのだった。

このようにハワイで移民記念祭の開催に向けての動きが活発化していくと、その動きはアメリカ本土のコリア系移民社会にも影響を及ぼすようになった。最初の動きはカリフォルニア州の企業家でありコミュニティ活動家のポール・ミン氏とドンス・ソ氏が、ハワイの移民記念祭を米国本土でも開催する可能性について、ハワイの準備委員会に打診してきたところから始まった。この両氏の動きは、やがて彼らが所属するロサンゼルス市・南カリフォルニア韓人会の活動へと波及し、100 周年移民記念祭の準備委員会を、米国本土にも設置する声へとつながっていった。そして韓人会の全米組織である米国韓人会総連合会（The Federation of Korean Association）の働きかけも影響し、各地の韓人会の支部が参加して、2001 年にはハワイとアメリカ本土の八つの支部が合同して全米（national）100 周年祭準備委員会を結成し、2001 年にロサンゼルス市で第一回全国大会を開催するまでに至った。またその翌年には十二支部に増え、さらに韓国支部やカナダ支部などの設立も相次ぎ、100 周年祭準備委員会は、ハワイ本部、全米委員会、韓国委員会から成る国家を越えた組織として、米国本土と韓国において知られるところとなっていったのである。

全米 100 周年祭準備委員会の発足を受け、コリア系移民法律家団体は、第一回大会直後

の 2001 年 11 月 30 日に、アメリカ連邦議会に、「アメリカにおけるコリア系移民の 100 年の歴史を認める宣言書」と題する要求書を提出している。それはハワイの旧移民の歴史をコリア系移民の「最初の移民 (initial immigrants)」として位置づけ、アメリカにおけるコリア系移民の百年の歴史を、アメリカ政府に対して公に認めるよう求める動きであった (正式名称は「Historical Significance of 100th Anniversary of Korean Immigration to United States」)。

ハワイの 100 周年祭準備委員会を中心とするコリア系移民のネットワークがアメリカで発展し、アメリカ連邦議会にその承認を求める動きがでてくると、韓国政府による支援も活発化していった。

韓国では、1990 年代から海外同胞を国内に取り組みべく様々な政策が展開し、その中心的な存在として、アメリカのコリア系移民が注目されていた⁶。韓国国内の特別在留を認める法案や、海外コリアンを招聘する学術・文化・経済的会議など、アメリカのコリア系移民を中心とした海外同胞と本国を結ぶネットワークづくりが、国家政策の一貫として展開されていたのだ。こうした韓国国内の動きを背景に、1995 年のグローバリゼーション促進委員会によって海外同胞政策委員会が設立され、それを母体に翌年には、韓国外交通商部の傘下団体として、在外同胞財団 (Overseas Korean Foundation) が設立された。同財団の主な活動は、海外に居住するコリアンとコリアンをルーツとする人々の活動を支援し、コリアンネットワークを発展させることであった。そして同財団は、100 周年祭準備委員会に対して、経済支援を行う他、同財団が主催する海外同胞の政治経済的指導者会議等で、ハワイ準備委員会の会長や副会長を講演者として呼ぶなど、同財団のハワイの 100 周年移民記念祭との関わりを広く報じ、また韓国のテレビや新聞といったメディアにその活動を広く紹介することで、韓国国内のハワイ・コリア系移民への関心を高めていったのだ。そして 100 周年祭への経済的支援は、2002 年に 64 万 5 千ドル、そして追加援助を申し出た翌年には 16 万 5 千ドルに及んだ。その額は、ハワイ州政府による支援の約 3 倍以上であった。

100 周年移民記念祭の開催

こうした努力が実り、100 周年移民記念祭はアメリカ本土のコリア系移民たちと韓国の両方で広く知られるところとなり、これを示すかのように、コリア系移民の移民記念日にあたる 1 月 13 日 (最初の移民船がハワイ沖に到着したとされる日) に開催された式典と

祝宴では、アメリカ本土のコリアン・アメリカンを含む海外コリア系移民と韓国からの参席者が、全体の7割から8割にも及んだ。

そして100周年移民記念祭の開催を通して、旧移民をめぐる呼称もそれまでの「オリジナル」でも「名誉ある移民」でもなく、「開拓者 (pioneer)」や「祖先(ancestors)」という呼称に変わり、彼らの歴史は世界の海外コリアンに共通する歴史として位置づけられたのだった。

いま、我々の祖先 (our ancestors) を高く評価する100周年記念を記念する。今日、世界中に三百万人の誇り高きコリアンたちが存在する⁷

1903年1月13日は、献身的な新たなコリアンの誕生を刻印する。彼らは世界を受け入れ、グローバル・コミュニティにおいて平等な場所としてこの地を決定したのだ⁸

100周年移民記念祭(2)：二つの国民国家に方向付けられた語りの形成

こうして旧移民を新移民のコリアン・アメリカンの歴史として、さらに海外コリア系移民の歴史として語る新たな語りが形成されたが、旧移民が「開拓者」と表現される場面では、「最初にアメリカの地を踏んだ」開拓者として、アメリカの移民に対して広く用いられているパイオニア精神が強調される一方で、旧移民が「祖先 (ancestors)」と表現される場面では、旧移民たちの祖国の独立と解放のために身を捧げた歴史と、その独立精神が強調される、という二重の意味が含まれるようになったのだった。パレードの先頭に立ったアメリカ合衆国と大韓民国の国旗をもった韓国海軍兵の姿や、パレード参加者や沿道の人々に配られたアメリカと韓国の国旗からもそれは窺えよう(写真4参照)。

このように移民祭は、大韓民国と



いう移民の出身国のナショナルな枠組みが浮上した記念行事となり、旧移民をめぐる二重の語りが形成されるようになった。ここで注意しなければならないのは、祖国の独立と解放に身を捧げた旧移民の精神が強調された語りは、英語で行われず、韓国語で行われた点である。例えば100周年祭を契機に建設されたコリア系移民の歴史資料館は、英語では「コリアン文化センター (Korean Cultural Center)」といった移民社会の文化的拠点としての様相を呈した名称となっているが、韓国語では「韓国独立文化院」と韓国国家への貢献と祖国建国に献身した歴史が強調された名称となっているのも、背景を一にしたケースだと言える(写真5参照)。



英語と韓国語による語り口の使い分けは、移民社会内部の新旧移民と世代によるアイデンティティの差異を反映したものであった。新移民の場合、移民社会は第一世代を中心に形成され、主に日常言語は韓国語であった。そして民族的にコリアンであることと韓国人であることは所与のこととして受け止められている中、祖国を大韓民国と結びつけた語り口は、韓国系移民の「コリアンであること」と「韓国人であること」の公式を強化/最強化する結果をうみだすこととなった。それに対して旧移民(や一部の新移民二世)は、第三世代を中心に形成され、日常言語は英語であった。一部パレードに見られた韓国海軍の存在からは、祖国として大韓民国と結びつける側面がみられたものの、英語による語りはあくまでもアメリカの「開拓者」として移民した集団の歴史を強調したものであり、アメリカのナショナルな枠組みの中で語られた移民の歴史であったことを示している。すなわち韓国語の語りは第一世代を中心とする新移民に向けられる一方、英語の語りは旧移民と一般の「アメリカ人」に向けられたのであり、言語による使い分けによって二つのナショナルに方向付けられた語り口が形成されたことが、ここに顕在化したのである。

以上みてきたように、ハワイのコリア系移民社会における「コリアンであること」が「韓国人であること」へと意味を変化させていった背景には、韓国系移民と韓国という国民国家の存在が、移民社会において顕在化していったというプロセスがあった。

また、ここでみられた「コリアンであること」と「韓国人であること」をつなぐ語りは、社会上昇を果たした韓国系移民の一部が、旧移民の語りを取り込む形で、移民社会に新た

にもたらしたものであり、さらにその語りは韓国政府の海外コリアンを通して展開していくグローバリゼーション政策と一致していくことによって発展していったというプロセスも確認された。これら一連のプロセスから、移民社会に新たな参入した韓国系移民の一部が移民社会の中心的存在となり、さらにそれら人々と移民母国の国家利益が一致した地点で、新たな「コリアンであること」と「韓国人であること」をつなぐ語り形成されたものと考えられる。

以上、移民記念祭を通して移民史をめぐる集合的記憶について考察してきたが、ここでハワイのコリアン移民の歴史が、ハワイというローカルな地域にとどまらず、世界に広がるコリアン・ディアスポラの歴史—コリアンをルーツとする韓国および世界のコリアン移民の「コリアン・アイデンティティ」を高らかに謳った歴史—として新たな息吹が吹き込まれた過程が明らかとなった。ここで語られた歴史物語の蓋を開けてみると、韓国とアメリカの二つのナショナルな論理が、一体化した二つの物語によって構成されていく一連の過程が、眼前に浮かび上がってくるのである。

-
- ¹ Mary Yu Danico, *The 1.5 Generation: Becoming Korean American in Hawai'i* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 2004), 150.
 - ² Ibid., 130.
 - ³ “75th Anniversary of Korean Immigration to Hawaii 1903-1978”, pamphlet, Hamilton Library, University of Hawaii at Manoa, Honolulu, 15.
 - ⁴ Honolulu Star Bulletin, June 23 1991.
 - ⁵ “90th Anniversary of Korean Immigration to Hawaii 1903-1993”, pamphlet, Hamilton Library, University of Hawaii at Manoa, Honolulu, 9.
 - ⁶ 李里花「コリアン・アメリカンをめぐる韓国の移民政策」『移民研究年報』8(2003), 81-101.
 - ⁷ Jong Chan Lee, Korea Chair, “The Centennial of Korean Immigration Banquet Program”, Centennial Committee of Korean Immigrations to the United States, Honolulu, Hawaii, January 13, 2003, 4.
 - ⁸ Donald Kim, Chair, “The Centennial of Korean Immigration Banquet Program”, 1

文献目録

<英語文献>

- Adams, Romanzo. *Interracial Marriage in Hawaii: A Study of the Mutually Conditioned Processes of Acculturation and Amalgamation*. Monclair New Jersey: Patterson Smith, 1937.
- _____. “The Unorthodox Race Doctrine of Hawaii.” E.B. Reuter ed. *Race and Culture Contacts*. New York and London: McGraw-Hill Book Company Inc., 1934:57-85.
- Adams, Romanzo, T.M. Livesay and E.H. Van Winkle. *The People of Hawaii: A Statistical Study*. Honolulu: Institute of Pacific Relations, 1923.
- Allen, Gwenfread. *Hawaii's War Years 1941-1945*. Honolulu: University of Hawaii Press, 1950.
- Anderson, Benedict. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. Revised edition. London and New York: Verso., 1991(白石さや・白石隆訳『想像の共同体: ナショナリズムの起源と流行』NTT 出版, 1998).
- _____. 1992. “The New World Disorder”, *New Left Review* 193 (May/June 1992)(関根政美訳「<遠隔地ナショナリズム>の出現」『世界』(1992.9) 179-190).
- Anderson, Wanni W. and Robert G. Lee “Diaspora, Transnationalism, and Asian American Studies.” Anderson and Lee eds. *Displacements and Diasporas*. New Brunswick, N.J.: Rutgers University Press, 2005.
- Appadurai, Arjun. *Modernity at Large: Cultural dimensions of Globalization*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 1996 (門田健一、吉見俊哉訳『さまよえる近代: グローバル化の文化研究』平凡社、2004年).
- Arinaga, Esther Kwon. “Contributions of Korean Immigrant Women.” Yong, Nancy Foon and Judy R. Parrish eds. *Montage: An Ethnic History of Women in Hawaii*. Honolulu, University of Hawaii, College of Education, General Assistance Center for the Pacific and Hawaii State Commission on the Status of Women, 1977: 72-81.
- _____. “Double Identity: A Korean Experience in Twentieth-Century Hawaii” (unpublished autobiographical paper delivered at the symposium on “Korean Americans in Hawaii: Their Life and Experience, “ Center for Korean Studies, University of Hawaii at Mano, Honolulu, 13-15 January, 2000)
- Azuma, Eiichiro. *Between Two Empires: Race, History, and Transnationalism in Japanese America* New York: Oxford University Press, 2005.
- Basch, Linda, Nina Glick Schiller and Christina Szanton Blanc. *Nations Unbound: Transnational Projects, Postcolonial Predicaments, and Deterritorialized Nation-states*. Amsterdam: Gordon and Breach, 1994.
- Blumer, Herbert. *Critiques of Research in the Social Sciences: An Appraisal of Thomas and Znaniecki's The Polish Peasant in Europe and America (with new introduction)*. New Brunswick, New Jersey: Transaction Books. 1979[1939].

- Bodnar, John E. *Remaking America: Public Memory, Commemoration, and Patriotism in the Twentieth Century*. Princeton: Princeton University Press, 1992 (野村達郎他訳『鎮魂と祝祭のアメリカ: 歴史の記憶と愛国主義』青木書店, 1997).
- Bogardus, Emory S. "The Sociology of William I. Thomas." *Sociology and Social Research* 34, no. 1 (1949)
- Brazier, Jana Evans and Anita Mannur eds. *Theorizing Diaspora*. Oxford: Blackwell Publishing, 2003.
- Brubaker, Rogers. *Nationalism Reframed: Nationhood and the National Question in the New Europe*. New York and Cambridge: Cambridge University Press, 1996.
- Calhoun Craig, *Nations Matter: Culture, History, and the Cosmopolitan Dream*. New York: Routledge, 2007.
- Chai, Alice. "A Picture Bride from Korea: The Life History of a Korean American Woman in Hawaii." *BRIDGE: An Asian American Perspective*. (Winter, 1978).
- Chay, Jong-suk. *Diplomacy of Asymmetry: Korean-American Relations to 1910*. Honolulu: University of Hawaii Press, 1990.
- Chang, Roberta with Wayne Patterson. *The Koreans in Hawai'i: A Pictorial History 1903-2003*. Honolulu: University of Hawai'i Press, 2003.
- Ch'oe, Yŏng-Ho "The Early Korean Immigrants to Hawaii: A Background History." Shin, Myong Sup and Daniel B. Lee eds. *Korean Immigrants in Hawaii: A Symposium on Their Background History, Acculturation and Public Policy Issues*. Korean Immigrant Welfare Association of Hawaii and Operation Manong, College of Education, University of Hawaii, 1978: 1-17.
- _____. "History of the Korean Church: A Case Study of Christ United Methodist Church", Kim, Ipyong J. and Elizabeth *Korean-Americans: Past, Present and Future*. NJ: Hollym International Corporation, 2004. 38-62.
- _____. ed. *From the Land of Hibiscus: Koreans in Hawaii, 1903-1950*. Honolulu: University of Hawai'i Press, 2007.
- Choy, Bong-Youn. *Koreans in America*. Chicago: Nelson-Hall, 1979.
- Chuh, Kandice and Karen Shimakawa eds. *Orientations: Mapping Studies in the Asian Diaspora*. Durham and London: Duke University Press, 2001.
- Chung, Henry *The Oriental Policy of the United States*. New York: Fleming H. Revell Company, 1919.
- Christ United Methodist Church. *Christ United Methodist Church, 1903-2003: A Pictorial History*. Seoul: Qumran Publishing House, 2003.
- Clifford, James. *Routes: Travel and Translation in the Late Twentieth Century*. Cambridge: Harvard University Press, 1997 (毛利他訳『ルーツ: 20世紀後期の旅と翻訳』月曜社、2002年).
- Coman, Katharine. *The History of Contract Labor in the Hawaiian Islands*. Reprint. New York: Arno Press, 1978 [1903].
- Conner, Walker. *Ethnonationalism: The Quest for Understanding*. Princeton: Princeton

- University Press, 1994.
- Danico, Mary Yu. *The 1.5 Generation: Becoming Korean American in Hawai'i*. Honolulu: University of Hawai'i Press, 2004.
- Duara, Prasenjit. "Transnationalism and the Challenge to National Histories." Thomas Bender ed. *Rethinking American History in a Global Age*. Berkeley: University of California Press, 2002: 225-46.
- Du Puy, William Atherton. *Hawaii and its Race Problem (United States Department of the Interior)*. Washington: Government Printing Office, 1932.
- Edles, Laura D. *Cultural Sociology in Practice*. Oxford: Blackwell Publishers, 2002.
- Eubank, Lauriel E. "The Effects of the First Six Months of World War II on the Attitudes of Koreans and Filipinos toward the Japanese in Hawaii" M.A. thesis, University of Hawaii, 1943.
- Fortier, Anne-Marie. *Migrant Belonging: Memory, Space, Identity*. Oxford: Berg., 2002.
- Garner, Anthony J. *Hawaii Under Army Rule*. Reprint. Honolulu: The University Press of Hawaii, 1975[1955].
- Glazer, Nathan and Daniel P. Moynihan. *Beyond the Melting Pot: the Negroes, Puerto Ricans, Puerto Ricans, Jews, Italians and Irish of New York City*. 2nd edition. Cambridge: The MIT Press, 1970 (阿部濟・飯野正子訳『人種のるつぼを越えて—多民族社会アメリカ』南雲堂, 1986).
- _____. *Ethnicity: Theory and Experience*. Cambridge: Harvard University Press, 1975 (内山秀夫訳『民族とアイデンティティ』三嶺書房, 1984).
- Greenfield, Liah. *Nationalism: Five Roads to Modernity*. Cambridge: Harvard University Press, 1992.
- Hall, Stuart. "Cultural Identity and Diaspora" Rutherford ed. *Identity: Community Culture, Difference*. London: Lawrence and Wishart, 1990: 222-37 (小笠原博毅訳「文化的アイデンティティとディアスポラ」『現代思想臨時増刊: スチュアート・ホール』青土社, 2006年).
- Harrington, Fred Harvey. *God, Mammon, and the Japanese: Dr. Horace N. Allen and Korean-American Relations, 1884-1905*. Reprint. Madison, Wisconsin: The University of Wisconsin Press, 1980[1944].
- Harvey, David. *The Condition of Postmodernity* Oxford: Basil Blackwell, 1989 (加藤・水内訳「都市空間形成を通じてのフレキシブルな蓄積: アメリカ都市における「ポスト・モダニズム」に関する省察」『空間・社会・地理思想』2 (1997年)19-35).
- Hing, Bill Ong. *Making and Remaking Asian America Through Immigration Policy, 1850-1990*. Stanford: Stanford University Press, 1993.
- Hormann, Bernhard L. "A Study of Civilian Morale 1933", *Social Forces* Vo. IX, No. X (July, 1945): 17-24.
- _____. "Racial Complexion of Hawaii's Future Population." *Social Forces* Vol. 27, No.1 (October, 1948): 68-72.
- _____. "Hawaii's Mixing People." Noel P. Gist and Anthony G. Dworkin. *The Blending of Races: Marginality and Identity in World Perspective*. John Wiley & Son, Inc. 1972:

213-236.

- Houchins, Lee and Chan-su Houchins. "The Korean Experience in America, 1903-1924." *Pacific Historical Review* 43, no.4 (November 1974): 548-575.
- Hu-Dehart, Evelyn ed. *Across the Pacific: Asian Americans and Globalization*. Philadelphia: Temple University Press, 1999.
- Hyun, John. "A Condensed History of Kungminhoe: The Korean National Association 1903-1945." Unpublished Paper. Seoul: The Korean Cultural Research Center, Korea University, 1985.
- Hyun, Peter. *In The New World: The Making of a Korean American*. Honolulu: University of Hawai'i Press, 1995.
- Igarashi, Yoshikuni. "In-Betweens in a Hybrid Nation: Construction of Japanese American Identity in Postwar Japan." Chuh, Kandice and Karen Shimakawa eds. *Orientations: Mapping Studies in the Asian Diaspora*. Durham and London: Duke University Press, 2001: 228-248.
- Kang, Ellen Soo Sun Song. *Stepping Stones*. Elizabeth N.J. & Seoul: Hollym, 2003.
- Kaneshiro, Kiyoshi. "Assimilation in a Slum Area of Honolulu, 1938." Bernhanrd L. Hormann. *Community Forces in Hawaii*. Honolulu: University of Hawaii, 1968: 64-73.
- Keller, Nora Okja, Brenda Kwon, Sun Namkung, Gary Pak, and Cathy Song ed, *YOBO: Korean American Writing in Hawai'i*". Honolulu: Bamboo Ridge Press, 2003.
- Kim, Bernice Bong Hee. "The Koreans in Hawaii". Master's thesis, University of Hawaii, 1937.
- Kim, Han-Kyo, "The Korean Independence Movement in the United States: Syngman Rhee, Ahn Ch'ang-Ho and Pak Yong-Man." Ipyong J. Kim. *Korean-Americans: Past, Present and Future*. Elizabeth NJ: Hollym International Corp, 2004: 63-100.
- Kim, Hwa Ja. "The Oral Life History of Mrs.Nam Soo Young.". Unpublished Paper. December 1986. Center for Korean Studies, University of Hawaii at Manoa, Honolulu.
- Kim, Hyung-chan ed. *The Korean Diaspora: Historical and Sociological Studies of Korean Immigration and Assimilation in North America*. Santa Barbara; ABC-Clio, Inc., 1977.
- Kim, Lili M. "Redefining the Boundaries of Traditional Gender Roles: Korean Picture Brides, Pioneer Korean Immigrant Women, and Their Benevolent Nationalism in Hawai'i." Hune, Shirley and Gail M. Nomura eds. *Asian/Pacific Islander American Women: A Historical Anthology*. New York and London: New York University Press, 2003: 106-122.
- _____. "How Koreans Repealed Their "Enemy Alien" Status: Korean American's Identity, Culture, and National Pride in Wartime Hawai'i." Ch'oe, Yŏng-Ho ed. *From the Land of Hibiscus: Koreans in Hawaii, 1903-1950*. Honolulu: University of Hawai'i Press, 2007: 195-219.
- Kim, Richard S. "Korean Immigrant (Trans)Nationalism: Diaspora, Ethnicity, And State-Making, 1903-1945". PhD dissertation. University of Michigan. 2002.
- _____. "Local Struggles and Diasporic Politics: The 1931 Court Cases of the Korean National Association of Hawai'i", Ch'oe, Yŏng-Ho ed. *From the Land of Hibiscus: Koreans in Hawaii*,

- 1903-1950. Honolulu: University of Hawai'i Press, 2007: 153-178.
- Kim, Warren Y. (Kim Won-yong). *Koreans in America*. Seoul: Po Chin Chai Printing Company, 1971 (金元容 『在美韓人五十年史(在米韓人五十年史)』 圖書出版혜안, 2004[1959]).
- Kimura, Yukiko. *Issei: Japanese Immigrants in Hawaii*. Honolulu: University of Hawaii Press, 1988.
- Kwon, Brenda L. *Beyond Ke'eaumoku: Koreans, Nationalism, and Local Culture in Hawai'i*. New York & London: Garland Publishing, 1999.
- Kyu, Kingsley K. "Korean Nationalistic Activities in Hawaii and the Continental United States. 1900-1945." *amerasia journal* 4-1 (1977): 23-89.
- Lebra, Joyce C. *Shaping Hawai'i: The Voices of Women (Oral Histories of the Islands' First Settlers)*. 2nd ed. Honolulu: Goodale Publishing, 1999[1991].
- Lee, Kwang-kyu. *Oversea Koreans*. Seoul: Jimoondang Publishing Company, 2000.
- Lee, Houchins and Chan-su Houchins. "The Korean Experience in America, 1903-1924." *Pacific Historical Review*(November 1974): 549-575.
- Lee, Mary Paik (edited with and introduction by Sucheng Chan). *Quiet Odyssey: A Pioneer Korean Woman in America*. Seattle: University of Washington Press, 1990.
- Lee, Samuel O. ed. (Committee on the 90th Anniversary Celebration of Korean Immigration to Hawaii). *Their Footsteps: A Pictorial History of Korean in Hawaii Since 1903*. Seoul: Ye Sun Co., ltd., 1993.
- Lee, Sharon M. "Racial Classification in the US Census: 1890-1990." *Ethnic and Racial Studies* Vol. 16, No. 1 (January, 1993): 75-94.
- Lee, Seoug Hyong. *Koreans in North America: New Perspectives*. Seoul: Kyungnam University Press, 1988.
- Lee, Yur-Bok. "A Korean View of Korean-American Relations, 1882-1910." Lee Yur-Bok and Wayne Patterson eds. *Korean-American Relations 1866-1997*. Albany: State University of New York Press, 1999: 11-34.
- Lee, Yur-Bok Lee and Wayne Patterson. *Korean-American Relations 1866-1997*. Albany: State University of New York Press, 1974.
- _____. eds. *One Hundred Years of Korean-American Relations, 1882-1982*. Alabama: University of Alabama Press, 1986.
- Lew, Young Ick. *Early Korean Encounters with the United States and Japan*. Seoul: The Royal Asiatic Society Korea Branch, 2008.
- Lind, Andrew W. *And Island Community: Ecological Succession in Hawaii*. New York: Greenwood Press Publishers, 1938.
- _____. *Hawaii's Japanese*. Reprint. New York: Arno Press.1978 [1946].
- _____. *Hawaii's People*. 3rd edition. Honolulu: University of Hawaii Press, 1967.
- _____. *Hawaii: Last of the Magic Isles*. London: Oxford University Press, 1969.
- Linn, Brian Mcallister. *Guardians of Empire: The U.S. Army and the Pacific, 1902-1940*. Chapel Hill & London: The University of North Carolina Press, 1997.

- Loo, James Young Wai. "Contributions of Romanzo C. Adams to Sociology." Master's thesis. The University of Southern California, 1952.
- Masuoka, Jitsuichi. "Race Attitudes of the Japanese People in Hawaii: A Study in Social Distance." PhD dissertation. University of Hawaii, 1931.
- Macmillan, Michael. "Koreans Under Martial Law in Hawaii 1941-1943." Unpublished Paper. Hamilton Library, University of Hawaii at Manoa, Honolulu, 1979.
- _____. "Unwanted Aliens: Koreans as Enemy Alien in World War II." *The Hawaiian Journal of History* 19 (1985): 179-203.
- Moon, Hung June. "The Korean Immigrants in America: The Quest for Identity in the Formative Years, 1903-1918." Ph.D. dissertation. University of Nevada Reno, 1976.
- Murabayashi, Duk Hee Lee. "Education of Koreans in Hawaii: 1903-1932." Unpublished Paper, Hamilton Library, University of Hawai'i at Manoa, Honolulu.
- _____. "The Korean Press in Hawai'i: 1904-1970." Unpublished Paper, Hamilton Library, University of Hawai'i at Manoa, Honolulu.
- _____. "Korean Women's Activities in Hawaii: 1903-1950." Unpublished Paper, Hamilton Library, University of Hawai'i at Manoa, Honolulu.
- _____. "Korean contributions to the Hawaii Methodist Mission: 1903-1952." Unpublished Paper, Hamilton Library, University of Hawai'i at Manoa, Honolulu.
- _____. "The Korean Press in Hawaii: 1904-1970" Paper presented at "Korean Immigration to North America" Yonsei University (May 17-19, 2002). Seoul, Korea.
- Nordyke, Eleanor C. *The Peopling of Hawai'i*. Honolulu: University of Hawaii Press, 1989.
- Okamura, Jonathan Y. "Race Relations in Hawaii during World War II: The Non-interment of Japanese Americans," *amerasia journal* 26, no.2 (2000): 117-141.
- _____. "Asian American Studies in the Age of Transnationalism: Diaspora, Race, Community," *amerasia journal* 29, no. 2 (2003): 171-193.
- Ong, Aihwa *Flexible Citizenship: The Cultural Logics of Transnationality*. Durham: Duke University Press, 1999.
- Pai, Margaret K. *The Dreams of Two Yi-min*. Honolulu: University of Hawaii Press, 1989.
- Pak, Gary. *A Ricepaper Airplane*. Honolulu: University of Hawai'i Press, 1998.
- Pang, Morris. "A Korean Immigrant." *Social Process in Hawaii*. Vol.13. (1949), 19-24.
- Park, Robert E. "Our Racial Frontier on the Pacific." *Survey Graphic: East by West-Our Windows on the Pacific* IX, no.2, (May, 1926).
- Patterson, Wayne. *The Korean Frontier in America: Immigration to Hawaii: 1896-1910*. Honolulu: University of Hawaii Press, 1988.
- _____. *The Ilse: First-Generation Korean Immigrants in Hawai'i 1903-1973*. Honolulu: University of Hawaii Press, 2000.
- Portes, Alejandro and Jozsef Böröcz. "Contemporary Immigration: Theoretical Perspectives on its Determinants and Modes of Incorporation." *International Migration Review* 13, no. 3 (1989): 606-630.

- Portes, Alejandro and Rubén G. Rumbaut. *Immigrants America: A Portrait*. Berkeley: University of California Press, 1996.
- Rhodes, Daisy Chun. *Passages to Paradise: Early Korean Immigrant Narratives from Hawaii*. LA: Academia Koreana, 1998.
- Rouse, Roger. "Questions of Identity: Personhood and Collectivity in Transnational Migration to the United States." *Critique of Anthropology* 15, 4 (1995): 351-380.
- Skocpol, Theda ed. *Visions and Method in Historical Sociology*. Paperback. Cambridge: Cambridge University Press, 1984 (小田中直樹訳『歴史社会学の構想と戦略』木鐸社, 1995年).
- Sheffer, Gabriel. *Diaspora Politics: At Home Abroad*. Cambridge: Cambridge University Press, 2003.
- Shin, Gi-Wook. *Ethnic Nationalism in Korea: Genealogy, Politics, and Legacy*. Stanford: Stanford University Press, 2005.
- Shin, Myong Sup and Daniel B. Lee eds. *Korean Immigrants in Hawaii: A Symposium on Their Background History, Acculturation and Public Policy Issues*. Honolulu: Korean Immigrant Welfare Association of Hawaii and Operation Manong, College of Education, University of Hawaii, 1978.
- Schiller, Nina Glick and Georges Eugene Fouron. *Georges Woke Up Laughing: Long-Distance Nationalism and the Search for Home*. Durham/London: Duke University Press, 2001.
- Smith, William. "The Second Generation Oriental in American" Unpublished Paper. Institute of Pacific Relations Preliminary Paper Prepared for Second General Session (July 15-29, 1927), Honolulu: University of Hawaii.
- Son, Yong Ho. "From Plantation Laborers to Ardent Nationalists: Koreans' Experiences in America and Their Search for Ethnic Identity, 1903-1924." PhD dissertation. Louisiana State University and Agricultural and Mechanical College, 1989.
- Smith, William Carlson. "The Second Generation Oriental in America." Unpublished paper, Institute of Pacific Relations preliminary paper, prepared for second general session, July 15-29, 1927.
- _____, *Americans in Process: A Study of Our Citizens of Oriental Ancestry*. New York: Arno Press and The New York Times, 1970.
- Szakolczai, Arpad *Reflexive Historical Sociology*. 2nd edition. London and New York: Routledge, 2009[2000].
- Takaki, Ronald. *Pau hana: Plantation Life and Labor in Hawaii, 1835-1920*. Honolulu: University of Hawaii Press, 1983 (富田虎男・白井洋子訳『パウ・ハナ: ハワイ移民の社会史』刀水書房, 1985).
- _____, *Stranger from a Different Shore: A History of Asian Americans*. Boston: Little Brown, 1989.
- Tamura, Eileen H. *Americanization, Acculturation, and Ethnic Identity: The Nisei Generation in Hawaii*. Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1994.
- Thomas, William I., Robert E. Park and Herbert A. Miller. *Old World Traits Transplanted*

- (*Americanization Studies: The Acculturation of Immigrant Groups into American Society*).
Reprint. Montclair, New Jersey: Patterson Smith Publishing Corporation, 1971[1921].
- Thomas, William I. and Florian Znaniecki. *The Polish Peasant in Europe and America*. Reprint.
Urbana: University of Chicago Press, 1984 [1918] (桜井厚訳『生活史の社会学:ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』御茶ノ水書房, 1983年).
- Underwood, Elizabeth. *Challenged Identities: North American Missionaries in Korea, 1884-1934*. Seoul: Royal Asiatic Society Korea Branch, 2003.
- Warner, W. Lloyd and Leo Srole. *The Social Systems of American Ethnic Groups*. New Haven: Yale University Press, 1945.
- Wimmer, Andreas and Nina Glick Schiller. "Methodological Nationalism, the Social Sciences, and the Study of Migration: An Essay in Historical Epistemology." *International Migration Review* 37, no.3 (Fall 2003): 576-610.
- Yamashita, Barbara Kim. *Wahiawa Korean Christian Church: History 1919-1987*. Unpublished. Wahiawa Korean Christian Church, Wahiawa, 1987.
- Yang, Eun Sik. "Korean Women of America: From Subordination to Partnership, 1903-1930," *amerasia journal* 11, No.2 (1984): 1-28.
- Yang, Sarah Lee. "Koreans in Hawai'i." *Social Process in Hawaii*. Vo.29. (1982): 89-91.
- Yi, Mahn-Yol. "Korean Immigration to Hawai'i and the Korean Protestant Church", Yŏng-Ho Ch'oe ed., *From the Land of Hibiscus: Koreans in Hawai'i*. Honolulu: University of Hawai'i Press, 2007: 41-52.
- Yoo, David K. *Contentious Spirits: Religion in Korean American History, 1903-1945*. Stanford: Stanford University Press, 2010.
- Yoon, Won Kil. *The Passage of a Picture Bride*. Loma Linda/Riverside: Loma Linda University Press, 1989.
- Yu, Henry. *Thinking Orientals: Migration, Contact, and Exoticism in Modern America*. New York: Oxford University Press, 2001.
- Yun, Yŏ-Jun. "Early History of Korean Emigration to America (I)." *Korea Journal* 14, no.6 (June 1974), 21-26.
- _____. "Early History of Korean Emigration to America (II)" *Korea Journal* 14, no.7 (July, 1974), 40-45.
- Zihn, Choi. "Early Korean Immigrants to America: Their Role in the Establishment of the Republic of Korea." *East Asian Review*. Vol.14 No.4 (Winter 2002): 43-71.

<日本語文献>

- 秋元律朗『現代都市とエスニシティ:シカゴ社会学をめぐって』(早稲田大学出版部、2002年)
- 芳賀武『ハワイ移民の証言』(三一書房、1981年)
- 飯野正子『もう一つの日米関係史:紛争と協調のなかの日系アメリカ人』(有斐閣、2000年)
- 伊豫谷登士翁『グローバリゼーションと移民』(有信堂、2001年)
- _____.『移動から場所を問う:現代移民研究の課題』(有信堂、2007年)

- エリック・H・エリクソン(小此木啓吾・小川捷之・岩男寿美子訳)『「自我同一性」:アイデンティティとライフサイクル(誠信書房、1973年)
- 大井由紀『トランスナショナリズムにおける移民と国家』『社会学評論』157(2006年)
- 木下昭『エスニック学生組織にみる<祖国>:フィリピン系アメリカ人のナショナリズムと文化』(不二出版、2009年)
- 小川圭治(編)『日韓キリスト教関係史史料』(新教出版社、1984年)
- 沖田行司『ハワイ日系移民の教育史:日米文化、その出会いと相剋』(ミネルヴァ書房、1997年)
- 韓永愚(吉田光男訳)『韓国社会の歴史』(明石書店、2003年)
- 姜萬吉(編)(大田・庵途他訳)『朝鮮民族解放運動の歴史:平和的統一への模索』(法政大学出版局、2005年)
- 菅(七戸)美弥「人の移動をめぐるトランスナショナル・ヒストリー(越境史):日本における研究動向」『アメリカ史研究』30(2007年)35-47項
- 菊池由紀『日系二世の太平洋戦争』(三一書房、1995年)
- 貴堂嘉之「アメリカ移民史研究の現在」『歴史評論』625(2002年)17-30項
- _____.「<アメリカ人>の境界と「帰化不能外国人」:再建期の国民化と中国人問題」油井大三郎・遠藤泰生編『浸透するアメリカ、拒まれるアメリカー世界史の中のアメリカニゼーション』(東京大学出版会、2003年)52-72項
- 木村幹『朝鮮:韓国ナショナリズムと「小国」意識』(ミネルヴァ書房、2000年)
- 金明美『サッカーからみる日韓のナショナルリティとローカリティ:地域スポーツ実践の場への文化人類学的アプローチ』(御茶の水書房、2009年)
- 今野敏彦・藤崎康夫(編著)『移民史 III:アメリカ・カナダ編』(新泉社、1986年)
- 佐々木春隆『朝鮮戦争前史としての韓国独立運動の研究』(国書刊行会、1984年)
- 島田法子「戦争と移民の社会史:ハワイ日系アメリカ人の太平洋戦争」(現代史料出版、2004年)
- 白水繁之『エスニック文化の社会学:コミュニティ・リーダー・メディア』(日本評論者、1998年)
- シュミット・アンドレ(糟谷憲一訳)『帝国のはざままで:朝鮮近代とナショナリズム』(名古屋大学出版会、2007年)
- 高木眞理子『日系アメリカ人の日本観:多文化社会ハワイから』(淡交社、1992年)
- 中條献(編)『歴史のなかの「アメリカ」:国民化をめぐる語りと創造』(彩流社、2006年)
- 朝鮮歴史研究会(編)『朝鮮近代革命運動史』(三一書房、1954年)
- 趙芝薫(梶村秀樹監訳、加藤春子訳)『韓国民族運動史』(高麗書林、1975年)
- 辻内鏡人「多文化主義の思想史的文脈:現代アメリカの政治文化」『思想』9(1994年)
- _____.『現代アメリカの政治文化:多文化主義とポストコロニアリズムの交錯』(ミネルヴァ書房、2001年)
- 坪江汕二『朝鮮独立運動秘史』(日韓労働通信、1959年)
- 中嶋弓子『ハワイ・さまよえる楽園:民族と国家の衝突』(東京書籍、1993年)
- 長田彰文『セオドア・ルーズベルトと韓国:韓国保護化と米国』(未来社、1992年)
- _____.『日本の朝鮮統治と国際関係:朝鮮独立運動とアメリカ 1910-1922』(平凡社、2005年)
- 中野耕太郎「祖国ナショナリズムとアメリカ愛国:シカゴのポーランド移民」樋口映美・中條献編『歴史のなかの「アメリカ」:国民化をめぐる語りと創造』(彩流社、2006年)247-274項

- 中野聡「植民地からの移民:フィリピン系移民排斥運動と独立問題」本田創造編『アメリカ社会史の世界』(三省堂、1989年)353-380項
- _____。「フィリピーノ・アメリカンの語り方:移民史認識と第二次世界大戦ベテラン支援運動をめぐって」大津留(北川)・大芝編『アメリカのナショナリズムと市民像—グローバル化時代の視点から』(ミネルヴァ書房、2003年)215-247項
- _____『歴史経験としてのアメリカ帝国:米比関係史の群像』(岩波書店、2007年)
- 野崎京子『強制収容とアイデンティティ・シフト:日系二世・三世の<日本>と<アメリカ>』(世界思想社、2007年)
- 原尻英樹『コリアンタウンの民族誌:ハワイ・LA・生野』(ちくま新書、2000年)
- _____。「コリアンタウンの比較研究:新たなエスニシティ論に向けて」五十嵐武士(編)『アメリカの多民族体制:『民族』の創出』(東京大学出版会、2000年)
- _____。「ケンダン・父系・『地縁』『民族』の再構築プロセス」吉原和男・鈴木正崇・末成道男(編)『血縁の再構築:東アジアにおける父系出自と同姓結合』(風響社、2000年)
- _____『マイノリティの教育人類学:日本定住コリアン研究から異文化間教育の理念に向けて』(新幹社、2005年)
- 朴殷(姜徳相訳)『朝鮮独立運動の血史1』(平凡社、1972年)
- 古矢旬『アメリカニズム:「普遍国家」のナショナリズム』(東京大学出版会、2002年)
- 南川文里『<日系アメリカ人>の歴史社会学:エスニシティ・人種・ナショナリズム』(彩流社、2007年)
- 村井忠政『アメリカ合衆国における移民研究の新動向:トランスナショナリズムをめぐる論争を中心に』『トランスナショナル・アイデンティティと多文化共生:グローバル時代の日系人』(明石書店、2007年)17-41項
- 李海燕『戦後の<満州>と朝鮮人社会:越境・周縁・アイデンティティ』(御茶ノ水書房、2009年)
- 李省展『アメリカ人宣教師と朝鮮の近代:ミッションスクールの生成と植民地下の葛藤』(社会評論社、2006年)
- 李羅英『朝鮮民族解放闘争史』(新日本出版社、1960年)
- 李光洙(具末謨訳)『至誠天を動かす大韓民族独立運動の父島山安昌浩の思想と生涯』(現代書林、1991年)
- 李里花『コリアン・アメリカンをめぐる韓国の移民政策:「移民送出国」の移民政策史とその展開』『移民研究年報』8(2003年)81-101項
- _____。「コリアン・アメリカンの『コリアンであること』の意味:現代の国民国家と移民社会』『アジア遊学』92(2006年)96-109項
- _____。「ハワイ戒厳令下のコリアン移民のナショナリズム:『敵性外国人』から『友好的外国人』への語りの形成』『アメリカ研究』42(2008年)137-154項
- _____。「ハワイ・コリアン移民のナショナルな語りの形成:太平洋戦争下で「日本人」に分類されたコリアン移民の処遇問題を中心に』『史潮』64(2008年)6-24項
- ロバート・T・オリバ『米大学教授が見た人間李承晩』(日本観光株式会社出版部、1958年)
- 矢口祐人『ハワイの歴史と文化:悲劇と誇りのモザイクの中で』(中公新書、2002年)
- 油井大三郎、遠藤泰生(編)『多文化主義のアメリカ:揺らぐナショナル・アイデンティティ』(東京大学出版会、1999年)

<코리아語文獻>

- 高承濟 「하와이 移民의 社会史的 分析(하와이移民의 社会的 史分析)」 『학術院論文集』 11, 1972
- 김새뮤얼 「太平洋의 贊歌: 初期韓國人 美州移民史(太平洋의 贊歌: 初期韓國人 米國移民史)」
聖光文化社, 1979.
- 金潤信 「在美韓國人의 移住生態에 關한 研究(在米韓國人의 移住生態에 關する 研究)」 『人間科學』
1(8), 1977.
- 김원동 『이민 100년 그리움 100년(移民 100年、懷かしき 100年)』 리북, 2003
- 金元容 『在美韓人五十年史(在米韓人五十年史)』 圖書出版會安, 2004[1959] (Warren Y. Kim.
Koreans in America. Seoul: Po Chin Chai Printing Company, 1971).
- 민병용 「美州移民 100年: 初期 人脈을 캔다(米國移民 100年: 初期人脈을 明らか히 しながら)」
한국일보출판국, 1986
- 박남수 『사진 신부(写真花嫁)』 미주 한인 이민 100주년 기념사업부(米國韓人移民 100周年記念
事業部), 2003
- 朴成壽 『獨立運動史研究』 創作과 批評社, 1980
- 박용옥 「美州韓人女性團體의 光復運動支援研究: 大韓女子愛國團을 중심으로(米國韓人女性團體의 光
復運動支援研究: 大韓女子愛國團을 中心으로)」 『震檀學報』 78, 1994
- 方善柱 『在美韓人의 獨立運動(在米韓人의 獨立運動)』 翰林大學校出版部, 1989
- 徐光元 「미주 한인 70년사(米國韓人 70年史)」 『僑胞政策資料』 2, 1973
- 신성려 『하와이移民略史: 人脈을 통해 본 삶의 現場記(하와이移民略史: 人脈을 通して 見た 生活의
現場記)』 高麗大出版部, 1988
- 최협·박찬웅 『세계의 한민족: 미국·캐나다(世界의 韓民族: 米國·カナダ)』 통일원, 1996
- 차중환·이봉수·박상원 (編著) 『미주 동포들 민주화 및 통일운동(米國同胞たちの 民主化와 統一運
動)』 나산출판사 2004
- 최창희 「韓國人의 하와이移民(韓國人의 하와이移民)」 『국사관논총』 9, 1989
- _____. 「하와이 한인사회의 민족운동 1903-1908 (하와이韓人社會의 韓人民族運動 1903-1908
年)」 『미주지역의 한인사회와 한인민족운동 (아메리카의 韓人社會와 韓人民族運動)』 하와이大
學코리아연구센터-심포지움報告書, 2003年
- 崔鳳潤 「在美韓人의 歷史와 民族主義運動 (在米韓人의 歷史와 民族主義運動)」 『民族統一』 1988
- 崔永浩 「韓國人 初期 하와이 移民: 始作과 終末의 動機(韓國人 初期 하와이 移民: 始作과 終末의 動
機)」 『全海宗博士華甲記念史學叢』 일조각, 1979.
- 하와이 한인이주 100주년 기념 학술회의(하와이韓人移住 100周年記念學術會議) 『미주지역의
한인사회와 한인민족운동(米國地域의 韓人社會와 韓人民族運動)』 韓國民族運動史學會·하와이
大學韓國學센터, 2003
- 한미동포재단·미주 한인이민 100주년 남가주 기념사업회 『미주 한인이민 100년사: 아메리칸
드림을 찾아서(米國韓人移民 100年史: 아메리칸드림을 探して)』 양현승·윤병욱, 2002
- 玄盾 『布哇遊覽記』 일한인쇄주식회사, 1909
- 玄圭換 『韓國流移民史(下·2)』 未刊行, 1976
- 홍선균 「1910년대 후반 하와이 韓人社會의 動向과 大韓人國民會의 活動(1910年代後半 하와이韓

人社会の動向と大韓人国民会の活動)』『한국독립운동사연구(韓國獨立運動史研究)』 8, 1994
 安炯株 『박용담과 한인소년병학교(朴容萬と韓人少年兵學校)』 지식산업사 2007
 延世大学校社国学研究所 (編) 『미주 한인의 민족운동(米國における韓人の民族運動)』
 図書出版혜안, 2003
 吳世昌 「韓人の美州移民과抗日運動(韓人の米國移民と抗日運動) 『民族文化論叢』 6, 1984.
 吳仁哲 『하와이 한인 이민과 독립 운동:한인 교회와 사진 신부와 관련하여(ハワイ韓人移民と獨立運動:韓人教會と写真花嫁を中心に)上・下』 절일실업 1999
 오인화·공정자 『구한말 한인 하와이 이민(韓末의韓人ハワイ移民)』 인하대학교출판부, 2004
 유동식 『하와이의 한인교회: 그리스도연합감리교회 85년사(ハワイ의韓人教會:キリスト連合監理教會 85周年史)』 그리스도연합감리교회 1988
 尹炳旭 『나라밖에서 나라찾았네: 미주한인독립운동사의 재인식(國外に出て國を探す:米國韓人獨立運動史の再認識)』 博英社, 2006
 윤여준 「미주이민 70년(米國移民 70年)」 『경향신문 연재물』 1-27, 1973.
 이덕희 『하와이 이민 100년: 그들은 어떻게 살았나?(ハワイ移民 100年:彼らはどう生きたのか)』
 중앙M&B 출판, 2003 李求弘 「在美僑胞獨立鬭爭略史」 『僑胞政策資料』 2, 1965
 임중은 『美州韓人들의 獨立運動과 獨立軍養成(米國における韓人の獨立運動と獨立軍養成)』 공군,
 1986
 李元淳編 『人間李承晩』 新太陽社出版局, 1956

<主要一次史料>

Chun, Agnes Eun Soon Rho. *An Era of Change: Oral Histories of Civilians in World War II Hawai'i*. Center for Oral History, Social Science Research Institute, University of Hawai'i at Manoa. April 1994
 Daisy Chun Rhodes. *Korean Oral History Project by Daisy Chun Rhodes* [tape / sound recording]. Interviews by Daisy Chun Rhodes, 1994.
 Chai, Alice. 1989. "A Picture Bride from Korea: The Life History of a Korean American Woman in Hawaii." *BRIDGE: An Asian American Perspective*. 1978(Winter) .37
 Soon, Hyun My Autobiography. Transcript. Honolulu: Center for Korean Studies, University of Hawaii, n.d.
 Registration of Korean Residents: Hawaiian Islands Territory of Hawaii, Compiled by the United Korean Committee in America Printed at the United Printing Co.
 Roberta W. S. Chang. *Descendants of the First Korean Immigrants in Hawaii 1903-1905* [videorecording]. Interviews by Roberta W. S. Chang 1994-2000. The Roberta W. S. Chang Video Collection at the Center for Korean Studies, University of Hawai'i (RCVC).
 Sonia Shinn Sunoo, *Korean Kaleidoscope: Oral Histories*. Vol.1 *Early Korean Pioneers in USA: 1903-1905*. Davis, California: Korean Oral History Projects, 1982.
 University of Hawai'i, Center for Korean Studies, The Tonjihoe Collection.
 University of Hawaii at Manoa. Ethnic Studies Oral History Project. Waialua and Haleiwa: The People Tell Their Story

University of Hawai'i, Hawaiian and Pacific Collection, Special Document on Korean-Hawaiians, Folder 4, 5.

University of Hawai'i, Romanzo Adams Social Research Laboratory (RASRL), Confidential Research File, Koreans.

University of Hawai'i, Romanzo Adams Social Research Laboratory (RASRL), Hawaii War Record Depository

University of Hawai'i, Romanzo Adams Social Research Laboratory (RASRL), Third Progress Report on Koreans, Morale Section, Office of Military Governor,

University of Hawai'i, Romanzo Adams Social Research Laboratory (RASRL), War Brides Interview Project.

University of Hawai'i, Student Papers and Journals (UHSPJ)

United States Army, Hawaiian Department. Office of the Assistant Chief of Staff for Military Intelligence. "A Survey of the Korea in the Territory of Hawaii, prepared in the Office of the Assistant Chief of Staff for Military Intelligence, Headquarters, Hawaiian Department." Microfilm. Fort Shafter, T.H.: The Office, 1930.

United States Bureau of Labor Statistics, *Labor in the Territory of Hawaii 1939*. Washington D.C.: Government Printing Office, 1940.

United States Department of Labor, *Report of the Commissioner of Labor on Hawaii, 1905*. Washington, D.C.: Government Printing Office, 1906.

United States Department of Labor, *Report of the Commissioner of the Labor Statistics on Hawaii 1915*. Washington D.C.: Government Printing Office, 1916.

United States Department of State. *Diplomatic Instructions of the Department of State 1801-1906, Korea*. Microcopies of Records in National Archives, Washington, No. 77, Roll 109.

United States Department of State. *Despatches from United States Ministers in Korea, 1883-1905*. File Microcopies of Records in National Archives, Washington. No.134. Roll 19.

The Institute of Modern Korean Studies ed, *The Syngman Rhee Telegrams*. Joong Ang Ilbo and the Institute for Modern Korean Studies, Yonsei University, Seoul, 2000.Vol. IV.

延世大学校国際学大学院付設現代韓国学研究所雲南李承晩文書篇算委員会 (編)『雲南李承晩文書東文篇 (第12卷:ハワイ・美州僑民団体関係文書)』中央日報社&現代韓国学研究所、1998年

韓國獨立記念館・韓國獨立運動史研究所 (編)『韓國獨立運動史史料集 11』1997年

金正柱 (編)『朝鮮統治史料 8』韓國史料研究所、1999年

国史編集委員会 (編)『韓國獨立運動史:資料 37 海外言論運動篇』2001年

国史編集委員会 (編)『統監府文書 1』1991年

国史編集委員会 (編)『統監府文書 6』1999年

国史編集委員会 (編)『統監府文書 9』1999年

国史編集委員会 (編)『韓國現代史史料集成 45』1999年

國家報勳所 (編)『韓國獨立運動史料:美州編 5』2004年

朝鮮總督府警務局 (編)『不逞鮮人ノ近情』1921年

朝鮮總督府警務局 (編)『在外不逞鮮人ノ概況』1925年

朝鮮総督府警務局（編）『米國及布哇地方ニ於ケル不逞鮮人ノ情況』 1921 年
朝鮮総督府警務局（編）『朝鮮治安狀況（國外）』 1922 年
朝鮮総督府警務局（編）『米國ニ於ケル独立運動ニ関スル調査報告書』 1921 年
朝鮮情報委員会（編）『英米に於ける朝鮮人の不逞運動』 大正 14 年
朴志泰（編）『大韓帝国期政策史資料集』 1999 年
翰林大学亜細亜文化研究所『史料美國務部美國対韓政策 1834-1950(I)』 1987 年
李栄徳（編）『韓國独立運動史論』 韓国精神文化研究院、1996 年
日本外務省記録『布哇國へ韓人出稼ギ一件』 1903 年
日本外務省記録『韓國政府布哇及墨西哥行韓國移民禁止一件：附保護委託勸告ノ件』 1905 年
日本外務省記録『韓國移民關係雜件』 1910 年
日本外務省記録『在外韓國人妻子呼寄其他証明雜件』 1910 年
日本外務省記録『布哇ニ於ケル外國移民關係雜件』 1910 年
日本外務省記録『各國ニ於ケル外國人登録關係雜件』 1931 年

毎日申報

国民報 (Korean National Herald)

太平洋週報 (Korean Pacific Weekly)

Evening Bulletin

Korean Annual

Korean Student Bulletin

Korean National Herald-Pacific Weekly

Korean Review

Honolulu Star-Bulletin

The Honolulu Advertiser

Pacific Commercial Advertiser